

---

# 僕の犯罪者記録

とびる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の犯罪者記録

### 【Nコード】

N4411F

### 【作者名】

とびる

### 【あらすじ】

《危ない世界から足を洗い、心機一転をはかる相原伊吹のもとに一人の少女が現れる。ひょんなことから彼女に日給二万円で雇われることになった伊吹だが、間もなくして殺人現場を目の当たりにする。事態は思いも寄らぬ方向へ動き始めてしまったのだ。殺人、テロ、そして死のゲーム……。》

## プロローグ（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=PP47878715

## プロローグ

「なんだ、密室殺人か」

比佐麗葉に雇われて数日、まるでファンタジー世界にいるみたいだった。夢を有償配布する遊園地のマスコットキャラ全員が頭部の被り物を脱いで堂々と歩き回ってるかのような匂いがいつもつきまとってた。

古臭いアパートへわざわざ来たのは借金返済のお使いを頼まれたからだだった。麗葉はまだ青春を満喫しててもいい歳の少女だ。そんな彼女に金を借りるなんて、きつと家賃を払うのも苦しい貧乏人なんだろう。

親近感が沸いた。僕にも借金がある。

住所氏名の書いてあるメモと真ん中に亀裂の入ったカマボコ板の表札を照らし合わせてインターホンを押した。

鳴らない。

鳴らないどころかボタンが奥へ引っこんでしまった。僕が壊したと思われそうで、爪を掛けてなんとか引っ張る。よし、いいぞ。定位置へ戻ってきた、もう一息。

「あ」

ホコリで詰まって最後に思いつきり引いたのはまずかった。ボタンが外れ、手をこぼれ、うっすら苔の生えたコンクリを転がり、追いかけて、踏んづけ、割ってしまった。

即座に周囲を見回し、残骸から視線を外しながらドア横に設置された二層式洗濯機の下へ蹴り入れた。咳払い一つ、ドアをノックする。

なかなか出てこない。再び叩く。外出中なんだろうか。平日の昼だ、お金を返すために働きに出てるのかもしれない。聞けば、二浪した大学受験生らしい。家賃を払うにも苦しい生活をしてるとも考えられる。

僕も、なりふり構わずお金が必要だった。自分にとっては莫大な三百万円の額。月の返済を守らなければ命はない。じゃなきゃ、雑用係で日給二万の怪しげな誘いなんか受けなかった。

ドアを少し強めに叩く。壊れないよう加減した。耳を澄ます。中で動く気配は一切感じられなかった。案外、鍵が開いてたりするんだよなあ。試しにドアノブを回す。開かなくてがっかりした。

ドアの隙間にメモでも挟んでおこうか。まさか逃げたってことはないよな、と預かった借用書を見下ろしてみる。こんな物まで作成したのは結構な金額だからだろう。封筒に糊付けはされてなかった。中身を取り出す。

金利五十パーセントの文字がでかかと載ってた。返済は利子だけで月に百万円超え。借金が借金を生んだ結果だ。てっきり知り合いに貸したお金を返してもらおう気軽な作業だと思ってた。これじゃ悪徳金融じゃないか。

僕の日給の高さも必然だった。暴力やお金、薬や女からケジメをつけて抜けたと思っても、つくづく望まない縁が巡ってくる。しかし、雇い主はいままで出会ったいかつい男じゃなく、ヤクザ然とした風貌とはかけ離れてる。もう少し様子を見てみたい。たまたまこのお使いが例外なのかもしれない。

日給二万円は捨て難かった。  
雇い主へ電話すると、彼女は間もなく合鍵を響き鳴らして現れた。

「そんなの持つてるなら渡してくれたっていいじゃんか」

「勝手に作ったのだ」

落ち着いた口調でさらりと言い、鍵穴に挿しこんだ。

そしてあの一言が出た。

「なんだ、密室殺人か」

冷蔵庫を開けたら肉の賞味期限が切れてたみたいな呆気ないイントネーションだった。背中に包丁を生やし、四畳半へうつ伏せに倒れてる男の影に全く臆してない。麗葉はスニーカーのまま上がりこ

んでいった。死体の脇をすりと抜け、はめこみのゆるいガラス窓や部屋の隅を調べてる。

とてもじゃないが僕は無視できなかつた。初めて見た本物の死体が信じられなくて、意識が後頭部へ流れていく。バランスが悪くなり、思わずひざまずいてしまった。畳に横になった顔は不精髭を生やした青年。この住人で麗葉に借金をした不幸な二浪生。

部屋の一角を見終わった彼女が一瞥して鼻で笑った。視線の先には広げられた血の気のない左手がある。指が四本。僕の目と頭がおかしくなつたんじゃない。一本、薬指だけが切断されてた。出血してて、そう時間が経つてるようでもない。

どういうことだ。顔を上げると麗葉は押し入れの二段目に膝をかけるところだつた。なにをしようとしてるのか謎のあまり呼びかけるのを忘れた。

遠くからサイレンが聞こえてきて我に返る。パトカーだ。気のせいか、どんどん音量が上がっていく。こっちに向かつてる？ 通報した覚えはない。したとしてもやけに早かつた。

こんな状況を見られたらどうなる。悪徳な金利で借金の取り立てに来て、違法に作られた合鍵で入って、死体見つけたのに通報もせず、土足で上がりこみ、部屋の隅々を荒らす様は物色してるみたいで、いくつの罪がつくか分かつたもんじゃない。

どうしたもんかと考えてる間にパトカーがアパート下に停まつた。ここは二階。逃げるならいましかチャンスはない。住人のふりをしてお辞儀でもしてやり過ぎせばなんとかなる。死体と一緒にいるのを見られでもしたら言い逃れがややこしくなる。

おい麗葉。

呼んだときには遅かつた。

「ついに決定的証拠を掴んだぞ。比佐麗葉、殺人の容疑で逮捕だ」  
黒光りする警察手帳を掲げたのはくたびれたグレーのスーツに茶のネクタイをした大男だつた。バスケット選手を彷彿とさせる身長は体型を細身に見せてる。短髪の先が玄関のドア枠に擦れて揺れた。

終わった、やり直したはずの僕の人生台無しだ。言い訳すら浮かんでこなかった。

「ずいぶんと迅速ではないか、森里刑事」

黒のワンピースをひらめかせ、麗葉が着地する。腰丈はあるパーマがかった黒髪の汚れをマイペースに払い落とした。知り合いなんだろうか、一目瞭然で疑いをかけられてるのに弁明をするつもりはなさそうだ。

「匿名の通報があつたんだ、このアパートに犯罪者がいるってね」

「あの男が日本に帰ってきたのだ。洒落た誕生日プレゼントさ」

首を傾げる相手へ、手に持っていた紙を投げ捨てる。三回ほど宙を往復し、それは森里刑事とやらの足元に落ちた。赤い文字でなにかが書かれてる。文字の端は色濃くなり、ひび割れてた。触れたらぼろぼろ砕けそうだ。殺された者の血だと素人目にも推測できた。

Happy Birthday dear U・H

U・H 雇い主、比佐麗葉のイニシャルだ。

「通報したのもあの男に間違いないだろう」

「あの男って、まさか、立神荘士か」

「そのまさかさ」

二人の間で挟まれる形になった僕はわけの分からないうちに進んでく会話のキャッチボールを左右交互に首を動かして見てるしかなかった。

「信じられないな。第一、電話をしてきたのは女性だった」

「四年ぶりで忘れたのかね。立神は自由に声を変えられるのだよ。」

そうでなくとも女の仲間は多い。もつとも、あのでしゃばりのことだ、自分自身で率先して動いているだろうがね」

刑事が息を呑む。彼女に指摘されたのを悔しげに眉間へ皺を寄せた。

スニーカーで新たな足跡をつけ、麗葉は彼の横に並んだ。身長差が激しくてほとんど顔を真上へ向ける姿勢になる。双眸を覆うほどの前髪がはらりと流れた。黒く揺らぎのない瞳。

「君らしくないな。あまり私に固執しない方がいい、そうやって盲目になるだけさ。女一人を逮捕するのに躍起になってどうする。私が出たのだとしても、偽善者集団に捕まるくらいならば万引きの罪でも死を選ぶさ」

棒立ちになる男の腕を軽く叩き、玄関をくぐった。連れてこられて外で待機してた制服警官が道を開ける。通路へ出た彼女が、ああそうそう、となにかを思い出して顔を出した。

「立神の逃走経路は押し入れの天井裏だよ。古いアパートだからね、天井蓋が外れるようになってるのだ」

彼女が誕生祝いのメッセージを見つけたのは押し入れだ。そこに侵入経路の手掛かりがあったらしい。麗葉は密室トリックを解き、立神荘士という男はトリックが解かれるのを見越してたんだ。想像もつかない高度なやりとりが交わされたとは彼女の態度からは感じられない。

「行くよ、伊吹」

「て、いいのよ。こういうのって普通は事情聴取とかあるんじゃないか。俺らがやったんじゃないけども第一発見者なんだし」

「構わない、立神の起こした事件さ。それに私と森里刑事は古い付き合いなのだ」

そうだろう、という問いかけの間に彼は呻いた。にっと笑って麗葉が姿を消す。私服の部下も制服警官も誰一人として止めなかった。なんだか知らないけど捕まらないで済むようだ。

それじゃ僕も、と緊張しながら大男の横を擦り抜ける。

肩を掴まれて不整脈が起きた。ぎくしゃくと顔を向けると大迫力の図体が威圧してくる。

「伊吹、というのは苗字かい」

「いや、名前です。苗字は相原、相原伊吹ツス」

麗葉と知り合いなら変に隠すのもおかしい、素直に応えた。

相原、と呟いて左上へ黒目を動かす。

「どっかで聞いた苗字だなあ」



「そうツスカー。どこにでもある苗字ツスカー」

アハ、アハハ。

愛想笑いをして丁寧に染めてる頭を掻く内心は冷や汗ものだ。前科こそないものの、補導や危ない橋を渡ったこともある。それはもういまにも切れそうな吊り橋だった。どこで名前が漏れてるとも分からない。上の連中が若い奴に罪を被せるなんてありふれた光景だ。

「じゃあ、相原君」

「はい、なんでしよう」

「あのコにはかかわらない方がいい、きつと君を不幸にする」

聞き捨てならなかった。死体を見る出来事はこれが初めてでも、ヤクザよりはずっとマシに思える。殴り蹴り罵倒され、報酬も幾ばくかで逮捕されかねないんじゃないやわりに合わない。ヤクザより恐ろしいなにかがあの子にあるんだろうか。

「彼女はいつたい……」

森里さんは背を丸めてドア枠を抜け、階下を歩く麗葉を見下ろして言った。

「犯罪者さ」

出会いは冷たい雨の降りしきる日だ。朝だというのに夜みたいな空で僕はパチンコ屋の裏手にあたる路地で寝ていた。下敷きにした生ゴミの匂いがきつなくても動けなかった。全身の節々が痛くてやる気が全然ない筋肉はしぼんでる。生きてるのは肺と心臓、それと頭頂部にある大きな古傷の疼き。

中学卒業後に家を出て、あいつらとは街で知り合った。なにも考えず馬鹿をやるのはそれなりに楽しくて、いつも三人でいた。事情が変わってきたのはヤクザの介人があってからだ。高橋という名の男は組幹部で、初めこそ気前よく振る舞ってくれた。やばい仕事を断りにくくする狙いがあったんだ。しょうがなく、しばらく働いた。堪えられなくて脱退を告げた。口止め料としてあいつらが現れた。二年を一緒に過ごして積み上げた友情めいたもんは呆気なく崩壊した。僕が普段、高橋に可愛がられて優遇されてるのを二人は良く思

つてなかったらしい。鬱憤は拳や爪先に込められて一方的に痛めつけられた。上からもそうするよう命令されたんだろう。僕がなにかまずいことでも警察にしゃべると思ってたのか。しゃべった途端、僕も捕まるっての。

古傷の痛みが酷い、本当に死んじまう。いや、まあ、それもいいかもしれない。薬に女にイカサマギャンブル、反吐が出る。潮時を知らないのだ。本能の欲求で脳に麻酔がかかって食欲に発散しようとしてる。

うんざりだった、僕はあんた達と違う。

近くの小さな駅はなぜか急行が止まる。車輪のブレーキがひとしきり鳴るとまた雨音だけが聞こえてきた。なのに、さっきまで全身へ当たってた雫を感じない。皮膚の神経がとうとう機能しなくなっただのか。頭の高傷はますます熱を持って脳に直接染み渡る。

腫れた瞼をなんとか持ち上げて薄く世界を開いた。スニーカーと紺のハイソックスが見える。ぱんぱんに膨らんだビニール袋には本らしき形がいびつに浮き出た。黒いワンピースにコウモリ傘をさした少女。雨風が緩まったわけだ。

視界の端でもなにかが動いている。パチンコ屋裏の対面側にあたるビルの屋外階段を上がる少女の姿だった。不思議なことに目の前の彼女と服装や背格好が似てる。それどころか傘や荷物も同じだ。二階のドアの前で止まった。

見比べようと首を巡らせる。ビルの少女はもういなかった。混濁する意識じゃ深くは思考が及ばない。

「なにをしているのだ」

「ああ、あんたの家か。不法侵入で訴えないでくれよ、すぐ出てくから」

雨まで吸いこんだ重い腰を上げる。地面がぬかるみ、無様に再びゴミ溜めへダイブしてしまった。頭がぐらぐらする。壁伝いに息も切れ切れ寄りかかり、ようやく立てた。壁の汚れが指にべったりつく。拭う余裕はない。

彼女の前髪は長くて顔の印象は曖昧だ。どことなく幼さの残った雰囲気がある。髪の毛のれんの隙間から上目遣いにじっとこつちを覗いてた。黒くて暗く、動じない。

「二人にやられたな。一人はチビデブ。もう一人は百八十センチ程度のノツポだろう」

行こうとする僕が止まったのはずばり正解だったからだ。二人が帰ったのはだいぶ前だった、見てたとも思えない。

超能力者ってやつか。

少女は壁を指差した。視線ぐらいの高さの汚れが擦れて一部地肌が露わになってる。

「肩の跡だ。ここをわざわざ擦って進む馬鹿はいない。狭い路地のせいで体型的に当たりやすかったと考えられる」

「ノツポは？」

「足跡さ、歩幅から推測できる。あいにく通り道でもないここには誰も来ないのでね」

なるほど、大した推理だ。僕もそれぐらい頭が回ればこんな目に遭わなくて済んだかもしれない。

「君こそなぜここが私の家だと分かったのだ。見ての通り、一見、家があるようには思えないところだ」

言われた通り周りには家らしきものはなかった。パチンコ屋と、三階建ての鉄筋のビル。後者は民家より業務用のビルにうってつけだ。

「さつき、あんたに似たコが入ってくのが見えたんだ。私服だったし、ああそこに住んでんのか、てなんとなく思った。ただそれだけだ、なんの推理もないよ」

翌日、電話がかかってきた。あの少女が携帯を拾ってくれたんだ。僕は帰宅して早々に寝てしまっただけで紛失に気づかなかった。携帯に登録された情報で住所や名前まで知られていた。ケガと疲労で億劫だったが、行かないわけにもいかなかった。

快晴なのに路地へ入ると薄暗い。ビルの一階はパチンコ屋の換金

所になって、警察巡回の看板と防犯カメラがガラス越しに見えた。ビルの入口は知ってる。隣の板塀に付けられた安っぽい木製のドアを開けた。僕がボコボコにされた細長い空き地が伸びる。目指すは赤茶けて錆びた外階段だ。

一歩上がるたびに底抜けそうだった。二階の重い鉄の扉が蝶つがいを軋らせる。左右に通路があり、ドアは三枚。一番左に入るように言われてた。インターホンを押すと、どうぞ、と返ってくる。

「やあ、よく来たね。君の携帯電話はここにあるよ。ここへ来たまえ」

重厚さを際立たせる大きな木の机をまさぐり、ドクロのキャラクターが付いたストラップを摘まんでみせた。

僕は行くに行けなかった。ドアを開けた途端に一つの部屋。そこを埋めてるのは本やガラクタの山だ。本当の意味で、足の踏み場がなかった。壁沿いにもびっしり本棚が並べられて、内容物は溢れ飛び出てる。机へ辿り着くには一苦労だ。

「ところで伊吹、うちで働いてみないかね。日給二万円はどうだ」  
携帯を点検してた僕にそんな提案を持ちかけてくる。半年前に店長とケンカをしてバイトをやめて以来、収入は一切なかった。家賃も光熱費もルームシェアしてる中学時代の後輩に任せっきりだ。組幹部の高橋に借金まである。

二年も危うい環境にいた鼻が敏感に反応した。なにか裏があるんじゃないか、と。

「仕事の内容は？」

「掃除洗濯その他雑用。私の身の回りの世話さ」

「怪しいな。その他雑用つてのに、やばい仕事も含まれてるんじゃないだろうな」

「やばい仕事、とはなんだね」

「だからその、薬売ったり、誰かボコボコにしたり、拉致ったり」  
少女が口を半開きにし、前髪の内側で目を丸くした。ふっと鼻で

笑う。

「そんなことをしたら捕まってしまうのではないか」

「そうか。いや、それならいいんだ、ちょっと前までそんなことにかかわってたから、つい疑り深くなってる。そうだよな、捕まるよ  
うなことなんて普通しないよなあ」

ハッハッハ。ひとしきり笑う。

心配の種はなくなった、一つを除いて。

「OK。そのかわりバイト代は日払いだぞ。一ヶ月分持ち逃げされ  
ても大きいからな」

断るようなら論外。ここは一番押さえておくべきだった。

少女があっさり肯く。

心の中でガッツポーズした。新しい生活が軌道に乗る目処が立つ。  
後輩にも迷惑かけなくて良くなる。年中曇りだった心の空に光明が  
幾筋も射した。

彼女が犯罪者だったなんて知らなかったんだ。これは僕こと相原  
伊吹が比佐麗葉にかかわったことでファンタジー世界へ吞まれてい  
く犯罪者記録である。

日給二万円（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」「や」「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

## 日給二万円

麗葉が冗談混じりに“先生”と呼ぶようになったのは間もなくしてだった。

机のある部屋は毎日大掃除する必要がある。片付けたその傍で読み終えた本は放られ、用済みになったメモ紙は無造作に丸められて空中に放物線を描く。ほとんど嫌がらせだ。高給だからこそできる仕事だった。

部屋に二人きり。ノートパソコンに向かってキーボードを打つ彼女に年相応の色気は感じない。ナンパ術に無駄な磨きをかけた僕のリーダーはご臨終直後の心電図の如く横線を継続してる。ピーー。隅に重なる「積み木百選」の題がついた辞典を本棚に収める。自分の目を疑った。小さいながらも黒光りする拳銃らしき物が出てきたんだ。やっぱり森里さんが言ってたのは本当だったのか。

恐る恐るグリップを握る。ずっしりと手中に馴染んだ。高橋がメンテナンスしてたトカレフを持たせてもらった。というより触ってみるか強引に渡された。重量感と同じだった。首を振って否定する。こんな手のひらサイズの銃があつてたまるか、モデルガンに決まってる。

言い聞かせて試しにトリガーを引いてみる。撃鉄はなかった。

動きそうでも動かない、トカレフはもつと簡単に引けた。安全装置があるようでもない。

「こんなオモチャ、なにに使うんだ。案外子供っぽいよな、麗葉って」

「ああ、そんなところにあつたのかね。その銃はデリンジャーさ、近距離向きの型なのだ。こうやって銃口を押し当てて撃つのが望ましい」

僕の腹に突きつける。思わず横へ避けた。口調に不穏なものを感じたんだ。

「まさか人殺しなんてしてないよな」

「あるさ。これで一発だ」

「ばーん、と撃つ真似をする麗葉。下手な冗談も言うんだな。犯罪者か否かはともかく、一緒にいると飽きなかった。」

室内の一角、カラーボックスに置かれたテレビがニュースを告げる。銀行強盗をして逃走中の男が猟銃を持ってこの練馬区内に潜伏中の可能性があるらしい。警察は指名手配して行方を追ってるようだ。練馬区といっても広かった、鉢合わせる奴は運が悪い。すぐに興味が失せて掃除を再開した。

日が傾く。空が赤く染まる頃にやっと一段落ついた。新たなゴミが早速散乱してるが気にしない。フローリングの床がまだらながら見えてきて感動を覚える。真っ黒になった雑巾を搾って仕上げた。

「よし完成だ。ちよつと来てくれないか。君に読んでほしいのだ」  
いつになく声を弾ませてた。プリンターを出てきた紙の束を机で叩いて整えてる。よっこらせ。疲労の溜まった腰に無理を言わせて立った。

「朝からなに熱心やってんのかと思ったら論文を書いていたのか」

「馬鹿者、それは小説さ」

原稿用紙換算にしたら数百枚はありそうな文章量をばらばらめくり、小説ねえ、と折り畳みイスへ座る。とにかく冒頭を読んでみないとな。文字を目で追う感覚は久しぶりだった。

「俺も中学時代は文芸部だったんだぜ。昔は読書好きでさ」

「それは奇遇だ、小説を書いていたのかね」

「確か、区のコンクールで佳作もらったなあ。新人賞も一次選考は通ったことあったし」

たった三、四年前のことが遠い昔に思えた。いまとなっちゃ僕は別人格だ。本も読まなくなっただし、熱中して原稿用紙にペンを走らせる夜もなくなった。寝ても覚めてもあそこはああしようこつしようこつと胸躍らせてたんだ。生活が安定したら、またそんな日が戻ってくるんだらうか。



一枚目を読み終わり、めくって床へ伏せる。

「先生だ」

「は？」

顔を上げると麗葉が突進してきた。僕の両手を握り締め、君は先生だ君は先生だ、と連呼した。鼻息が荒い。握った手を上下させて長い髪を振り乱してる。

「これも縁というものか、求めるものが寄ってくるとは不可思議だ」「ちよつと待て、先生って俺が小説の先生になるってことかよ」

「不満かね、伊吹先生」

こそばゆかった。腐っても一度は憧れた身。嫌な気持ちはしない。前髪の間に見える彼女の黒目に顔が鮮明に映ってる。ふふん。僕は襟足を撫でつける。

「まあ、あんたがそこまで言うなら先生になってやらないこともないっていうか。でもかなりブランクあるしー、みたいなの。間違っても責任とれないー、みたいなの。みたいなの、みたいなの」

「構わない。実績ある先生にはぜひ助言をお願いしたい、どんなことでもいい」

「ごほん。脚を組み直して伏せてた一枚目の原稿を拾った。相手に見えるように持つ。指差してぺしぺし叩いた。

「じゃあ遠慮なく言わせてもらうけどな、難しい言い回しや漢字を使いすぎだぞ。誰がこんな辞書片手にしてないと読めない小説を好き好むんだ」

「私は難解だとは思わないのだがね」

「読むのは誰だ」

「読者さ」

「正解。大多数の読者の立場になるんだ。小説はサービスマンだと思えよ」

「ふむ」

「次に、この冒頭」

叩いて紙を鳴らす。

「ああ、そこは自信があるのだ。どうだったかね」

「やる気あんのか？ ん？」

麗葉が眉間に皺を寄せてタラコ唇になる。ふう、やれやれ、これだからトーシロは。カーゴパンツのポケットからガムの包みを出す。タバコを出す要領で指先で弾き、一枚を抜いた。包みを握り潰してゴミ箱へストライクさせる。

くちやくちやく。

「いいか、小説は冒頭が勝負なんだ。なんだこの一行目。論文書いてんじゃないんだぞ、小説舐めんよ下手クソ」

調子に乗ってきてデコピンしたのち作者へ指を突きつける。かつてない快感がそこにはあった。年下なのに普段偉そうな態度の雇い主を言いくるめてるのがたまらない。こういう仕事を目指してみるのもいいかもしれない。口を開く少女。

そして勢い良く閉じられた、僕の指を噛む形で。絶叫したのは言うまでもない。なんせ思いつきり噛まれたんだ。腕を振って抜くとしっかりとした歯形が残ってた。入れ歯が作れそうだ。

息を吹きかける僕に対し、彼女はご満悦な様子で薄ら笑いを浮かべてる。

「なんで噛んだー！」

「すまない、私の癖でね。噛めそうな物が目前にあるとつい噛んでしまうのだ」

「嘘だ、俺の批評が癪に障ったんだろ、絶対そうだろ」

「癪に障った？ 私が？ まさか。私の心は世界貿易センタービルよりも大きく広いのだよ」

とても信じられなかった。次に批評するときには迂闊に指を出さないようにしよう、そうしよう。

小説の印刷でコピー用紙が切れたようで、読むのは後回しに買い出しへ行くことになった。ファンタジーの中でも殺人事件は稀らしく、こうした変哲もない日々が続く。いよいよ日給二万円の旨味が

出てくるってもんだ。闇金などの稼ぎから捻出されてると思うと良心に傷がつくが、借りる側も闇金なのを承知して借りてるんだ、自分の生活を守るため背に腹はかえられない。

「比佐麗葉さんのお宅をご存じありませんか。この辺りだと聞いたんですが」

駅傍のスーパーを出ると若い女に声をかけられた。背が平均的な男の僕と同じぐらいでモデル然としてる。冬着の上からでも分かる胸の膨らみと締まったヒップに誘われた。喉の奥から伸ばした腕で首根っこを掴み、引っ張りこみたい欲求を抑える。

「実は俺、麗葉のもとで働いてるんすよ」

「そうなの。素敵な偶然ね」

口元に手をやって上品な笑みをする女。運命を感じずにはいられなかった。ナンパ師の僕が必死に出てこようとする。いかんいかん、もうそんな馬鹿げた行いはやめるんだ。なんでもないふうを装ってパチンコ屋方面へ案内すればいい。

彼女は昔、麗葉に世話になったんだという。道中、いまどうしてるのかとか次々に質問をされた。無意識のうちに僕は麗葉を褒め称えた。

「あいつはちょっと変わってるけどいい奴ツスよねー」

「ええ、とつても」

気に入られるための賞賛だ。入口は共通の話題で攻め、城門を陥落させ、本丸へ入りこめればこつちのもの。あとは煮るなり焼くなりどつとでもできる。

て、違う！ なにがこつちのものだ。

「あ、ここツス、ここ。この路地を行けばすぐ」

薄暗い歩道を振り返る。

彼女はいなくなつてた。一生懸命しゃべってたせいでいつ消えたのか気づけなかった。はぐれたのかと思って大通りへ引き返してみよう。いそうにない。白昼夢に遭遇したみたいだった。記憶を辿って容姿を思い出す。スレンダーで格好いいナイスボディを忘れるわけ

がない。

納得がいかないままに事務所へ戻った。

「女と一緒にいたのか」

開口一番、麗葉が言った。

「なんで知ってたんだ」

「匂いさ。ここを出たときと君の香りが違う、これは女物の香水だね」

チエツクのシャツを嗅ぐ。あの女の匂いがほのかにした。幸せな気分になると同時に麗葉の嗅覚に背筋が寒くなる。将来、こいつと結婚する男は浮気できないな。僕が一番恐れるタイプだ。

「そうなんだ、あんたに世話になったっていう女を道案内」

言葉は容赦のない爆音と震動に掻き消された。せつかく片付けた本が棚を噴き落ちる。地震じゃない。近くで、それもすぐ真下で爆発があつたみたいだった。換金所の人間がガス爆発でも起こしたのか。

遠くなった耳に悲鳴が届く。窓を開けて顔を出した。花火をやつたあとの火薬の匂いがした。駅の利用者が遠目にビルの一階を窺つてる。砂塵と黒煙が景色をぼやけさせていった。

麗葉が溜め息をつく。

「やれやれ、自己主張が激しいのは変わらない男だ」

机をこぼれた電話を拾い、ダイヤルを押す。無事かね、の一言で始まつた会話は彼女の短い相づちで終わった。

「一人住みこみで働いてもらっているからね、ちょうど近くへ外出中で良かった。しかししばらくは使えそうにないな」

「よく冷静でいられるな。なんなんだよ、なにがあつたんだ。一歩間違えれば俺らが死んでたんだぞ」

「安心したまえ。立神は私に対して薬指を消し飛ばしかねない爆発物を使わない、君にも被害は及ばないだろう」

全然応えになつてなかつた。想像外の出来事に脳がこんがらがつてなにをどう問い詰めたらいいかが分からない。声にしようにも唇

が開閉を繰り返すのみだ。

立神、薬指。この二つは先日のアパート殺人事件で得たキーワードだ。立神は男で、殺人を平気でするような人間だと思っただろう。過去に麗葉と面識があり、警察も知ってる有名人。アパートの殺人といい、今回の爆発といい、とても友好的とは思えない。そんな奴に彼女は狙われてるってことか。

OKOK、少しずつ状況が見えてきた。

「薬指、それがその立神っていう奴の目印なんだな。だからあのアパートの死体を見て、帰国した、て推理したんだろ」

「うむ、実に鋭い。彼は異常な収集家だね、薬指を集めるのが趣味なのだよ」

「で、あなたの指も狙ってる」

「それもあるが」

いややめておこう、と口をつぐむ。深追いはしなかった。知ってはいけない領域があるように感じた。第六感があるのなら、きっとそれが激しく隆起して警報を発してる。

せめて簡単な整理をしようと転がった辞典を持つ。雇い主は、あ今日は帰っていいよ、と言った。ありがたかった。心臓がずつとフルアクセルで暴走してる。じつとしてられない、体が常に小刻みで揺れてる。外に出るのが恐ろしい、ヒキコモリになってしまえそうな臆病が僕を制してた。

集まった野次馬を横目に歩を進める。パトカーが到着し、走る制服警官とすれ違った。僕は足を止める。通りへの出入り口にあの女が立ってた。微笑を形作ってる。初対面で見たものと同じはずなのに背筋が鳥肌立った。

パチンコ屋の影へ彼女が消える。追いかけた。仕事帰りのサラリーマンやOL、中高生がちらほら行き交ってる。女はいなかった。

「相原君、だよな」

背後を振り向くとベロを出したゴールデンレトリバーがいた。はっはっ、と吐息のあたる近距離だ。目が合った。大量に鼻水を垂ら

した穴をすびすび言わせてる。ワンテンポ遅れて後退った。犬に知り合いはいない。

「驚かせてしまったかい」

犬が言ったんじゃない。人間が抱っこをしてたんだ。ゴールドレンレトリバーを舗装された真新しい地面に下ろして現れたのは刑事の森里さんだった。綿パンとセーターを着てる、職務中じゃなさそう  
だ。

「なんスか、この馬鹿でかい犬」

「元警察犬のタロさんだよ、いまは僕の唯一の家族」

わん、と吠え、いきなり飛びかかってきた。悪口っぽく言ったのが気に障ったのかと思った。驚きも相まって尻餅つく僕は組み伏され、顔中を舐め回される。

ぶっ、わ、やめ、やめ、鼻水、汚いつ。

「気に入られたみたいだね」

「お断りです！ ぶわっ、口に入った！」

「まあまあそう言わずに、気に入られついでにちょっと待っててくれるかな」

森里さんはリードを勝手に預けて駅前に行ってしまう。拒もうにも大型犬に押さえこまれちゃたまらない。強引に迫られる女のコの気持ちがちよっぴり分かった。やめて、私そんなつもりじゃないのよ、まだ早いわ。

なんてやってる場合か。放って置いたら僕の操が危ない。腹筋に力を入れて上半身を無理矢理起こす。タロさんの首に腕を回し、動きを封じこめた。人間様を舐めるなよ、犬コロめ。

首筋をベロが這った。

もうどうでもいい、舐めたきや舐めやがれコンチクショー。飼い主はどこ行った。

切符売り場の売店横に少女が立ってる。レベルは中の下。小箱を抱えて道行く人へ呼びかけてた。立ちはだかるのは森里さんだ。財布を逆さにし、小箱へ中身を投入した。お札もろとも全部だ。女の

コは一瞬のあと頭を何度も下げた。用意してた赤い羽根を急いでセーターへ付けてる。

戻ってきた森里さんは鳥男だった。奇抜なファッションに見えないこともない。ツッコミを入れる気は起こらなかった。

「ところで、なにかあったのかな。騒がしいみたいだけど」

「ちょっとしたテロですよ。麗葉は立神の仕業だつて言つてました」  
「やっと解放された僕は毛だらけになつてた。羽とは大違い。払つてもへばりついて取れやしない。洗濯して綺麗になるかどうか。気に入つてる服なのに、憂鬱になる。」

「なんだつて？ どうしてそれを早く言つてくれなかつたんだ」

「関係ありそうな女、俺見ましたよ。背が高くてセクシーな。立神の仲間かなんかツスカねー」

こみ上げてくる怒りをなだめつつ情報を提供する。僕は大人だ、服如きでキレイたりしない。タロさんを睨みつける。ベロと鼻水を垂らして首を傾げる姿は挑発か。クソツ、覚えてるよ。

現場へ行きかけた森里さんが薄っぺらくなつた財布から名刺を出した。警視庁捜査一課、森里康平。

「なにかあつたら連絡してほしいんだ」

はぁ、と肯いて大男と大型犬のペアを見送る。なるべく世話にはなりたくないもんだ。捜査するうちにこっちの犯歴まで根掘り葉掘り探られかねない。僕の名前も覚えがあるふうに言つてたし、あまり接しないようにしよう。

不本意ながら心臓は落ち着き始めてた。代わりに疲労感が体を重くしてる。

マンションの郵便ポストには小包が入つてた。ちょっとした重さのある円柱状の物だ。硬さからしてビンだった。宛先はルームシェアしてる後輩になつてる。エレベーターで三階へ上がり、鍵の用意をした。

ロックはされてなかつた。不用心だな。

罵声が聞こえてくる、後輩の部屋からだ。薄く開いてるドアを覗

くと又イグルミ空間が初めに飛びこんでくる。携帯を片手に怒鳴り散らしているのは黒髪をツインテールにした可愛らしい女のコだ。

「うっせ、ババア！ 自分の金でなにしようが勝手だろ！ はっ？ 先輩はそんな人じゃねえよ！ 決めつけんなっ、死ね！」

通話を切って床へ叩きつけた。絨毯を軽く跳ねる。肩で息をしてる綾木麻由はアヒル座りでへたりこんだ。

ドアをノックするところちに気づく。はっとして白を基調にしたセーラー服のスカート裾を正した。近くの太った又イグルミを抱き寄せる。ブルドックの憎たらしい表情が潰れて歪む。

「先輩、帰ってたんですね。麻由びっくりしちゃいましたよぉ〜」  
びっくりするのは僕の方だ。二人で住むようになって一年が経つ。何度目撃しても慣れない豹変ぶりだった。中学時代はちよっぴりぶりっこの過ぎる変わったコだと思ってたけど、親に対してこんなに反抗的だったとは。

なんならちよっと思ってた。ルームシェアが決まったときには下心だっであつた。

一気に萎え萎え。麗葉とは種類の違う異性として見れないタイプだつた。

「綾木宛てになんか届いてたぞ」  
郵便物を渡してリビングへ移動する。ソファへ全身を託して天井を見上げた。家に帰ってきた感覚がない。旅館にでもいるような気分だ、頭の内側が非現実から戻ってきてなかった。昔もこんな感じがあつた。

死は等しく身近にある。

中三の夏休みだった。受験勉強の気分転換にと軽井沢へ二泊三日の家族旅行をした、その帰りだ。車線が無視した暴走車が突っこんできた。横転。親父は下半身不随。僕も頭部に重傷を負った。人生の分岐点だった。

「あれさえなければ、な」

普通に高校へ進学していまごろは大学受験だ。収入源がなくなっ



た、もともと裕福じゃない相原家には遠い希望。高校で七〇万円、私立大学で三〇〇万円以上かかる。世の中は青春も買う時代なのだ、お金のない僕には縁のないものだった。

手術した頭の傷痕に触れる。普段は髪で隠れてる。スキンヘッドにすれば目立つだろう、数センチの長さに渡って肉が盛り上がった。いままでなんでもなかったのに、悪仲間にしこたまやられてからちよくちよく痛みがあった。経た時間が時間だけに傷が開いたんじゃないだろうけど。

綾木の声で身を起こす。

「大丈夫ですか、顔色悪いですよ。新しいお仕事、辛いんじゃないですか」

「いや、問題ないって。ちょっと今日が特別なんだ」

爆発の感覚がよぎる。あんなこと二度とあつてたまるか。

「麻由、いいんですよ、一人で働いても。先輩のこと養っちゃいます」

「んなわけにはいかないだろ。ルームシェアなんだから平等にしないとな。綾木に借りてる分もすぐ返すよ」

「でも先輩には家事も任せたりしてるし、先輩が内で麻由が外って決めてた方がいいと思うんですよ」

「それは利子みたいなもんだ。俺が金用意できるようにしたら、また分担だぞ」

でもお、と尚も食い下がってこようとす綾木の口と鼻を手で覆って塞ぐ。徐々に顔は赤くなり、ふるふる震えた。

「俺も払う、いいな？」

彼女が首を左右へ振る。

五秒を数えて再び尋ねる。

「いいな？」

だが綾木は必死に堪えた。暴れて逃げようと思えば逃げれるのに動こうとしない。このままじゃ僕は人殺しになる。しょうがなく解放してあげた。肺に溜まっていた空気を勢いよく放出させて荒い呼吸

をしてる。

「ところで、さっきからなに持ってんだ、それ」

反対される前に話題転換した。実際、気になってたんだ。おそろくさつき渡した郵便物。ジャムのビンに似てる、ラベルはない。中身は白濁として黄色みがかつてる。

彼女も分からなくて僕のところを持ってきたらしい。

「誰が送ったんだ、こんなもん」

「書いてないんですよ、メッセージも入ってないし」

ビンを受け取り、瞼を細めて点検する。彼女へのプレゼントは少なくなかった。自分のコスプレ写真を載せたウェブサイトを運営してて、イベントにも参加するちよつとした有名人だ。住所を公開してるでもなしにたびたび届くのは正直気味が悪い。

「捨ててもいいか。食べ物だとしても、誰が作ったか分からないもんなんてきついだろ」

「甘い物ならちよつと食べたいですけどお」

嚴重にビニール袋で包み、ゴミバケツへシュートする。綾木は残念そうに眉尻を下げてた。今度シュークリームでも買ってこよう、麗葉のところで働けばいくらでも食わせてやれる。

多少の危険はこの際しようがない。欲は贅沢だ。

日給二万円（後書き）

次話更新予定は明日（11/8）です。

Next:」」野郎

## コシ野郎（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」「や」「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

主な仕事は“先生”へとシフトしていった。

麗葉の作品はどれもこれも小難しく理解できない。タイトルからして首が捻り切れてしまえそうだ。「幽体遊離時における意識と知覚形成、あるいは変容」などと書いてあったらオカルト論文の主題にしか読めない。念のためと渡された六本の長編を仕事と決めこんで読破した感動は忘れるもんか。

作品の束を机へ運び、折り畳みイスへ座りこむ。

「やっぱり過去に書いたもんも似たり寄ったりだわな。もつと難易度を下げてくださいよ」

「比較的レベルなものを選んだのだよ」

うーむ、と麗葉が唸る。根本的に脳の構造が違うんだ。本来、創作をする思考方法じゃないんだろう。なにかを書こうと思うと論文調になってしまう。救いは、書きたいテーマがあることだ。なにを書きたいんだかも分からないんじゃないじゃ話にならない。

ぼんと手を打つ。

「じゃあ、こうしよう。一人の阿呆を想像してくれ」

「伊吹か」

「なんだと」

拳を固めてみせる。麗葉は、冗談さ、と笑った。どうせ僕は阿呆だ。

「まあ俺でもいい。その阿呆が分かるように書くんだ。あんたならできるだろ」

「つまり他人をエミュレーションするということかね」

聞き慣れない単語でよく分からないが、的外れとも思えない。それに、いくつか補足する僕の声が一切聞こえてないようだった。ぶつぶつと一人言をし、待てよそういうことか、とメモ用紙にペンを走らせてる。ちらつと見た限り、意味不明な計算式が雑に埋め尽く

されてた。次も期待できないな。

集中力はかなりのもんだった。同じ部屋にいながらにして追い出された気分だ。部屋の掃除をしたり、他の部屋を巡回したりした。ビル全部が麗葉の所有物だった。使っていない部屋は基本的に綺麗で、結局は元に戻って本の整理をした。

一通り終わってもまだぶつぶつ言ってる。一声かけて僕は事務所を出た。一日ぐらいは日払いにこだわらなくてもいい、明日まとめてもらおう。

風が皮膚に染みる。両手をポケットにねじこみ、肩をすぼめた。そろそろマフラーが必要だ。灰色の空と薄暗さが体感温度を下げる。路地を抜けた真ん前の道路にスモークを貼ったワゴン車が停車してて、外界の光が遮断されてた。

ったく、こんなところに停めんよ。

運転席にはキャップを目深に被った作業服の男がシートを倒して寝てた。前を通り過ぎる。背後でドアが開いたと分かった。振り向く。いや、向こうとしたんだ。

首に腕が巻きつく。喉仏が押しこまれる。車内へ引きずりこまれる。見事なスリーパーホールだった。解こうと腕へ爪を立てるも、意識は瞬きの間に遠退いた。通行人が騒いでる。遅い、ドアが閉められて車は急発進。

暗転する直前、柔らかい心地がした。

僕は夢を見た。正確には過去の記憶だ。公園でカツアゲの現場に遭遇して止めに入った。相手は四人でこっちは一人、勝てるはずがなかった。気がつくと同級生の女のコが膝枕をしてくれてた。文芸部を創設した仲間で、頼りになる副部長だ。いい匂いがした。

彼女が言う。

「暴力を望んでる人なんていないのに、なんでこんなことになるんだろう」

悲痛な訴えだった。

「きつと悪いことだって分かってるよ。でも環境なんかがたまたま

恵まれなくて病んでるんだ」

「じゃあ、治してあげないと」

「僕も手伝うよ、いつつ世話になってるから」

彼女が笑う。

僕が笑う。

そんな青春を満喫してた映像だった。人生のピークっていうやつだ。うぶだった僕は決して手を出さなかった。どうせならキスくらいしておくんだった。人生に他のレールが敷かれてたかもしれない。夢の中、手を伸ばしても触れられなかった。

目が覚める。打って変わってカビ臭さが鼻の奥を刺激した。物のない殺風景な部屋にいた。何枚か無雑作に何枚もポスターが貼られてる。

天井が高く、子供が走り回れるほど広い。床のあちこちに埋め込まれた照明が頑張ってる。窓がなくても視界は良好だ。

左手首に白い輪が付いている。金属製で引っ張っても外れない。ここはどこなんだ、なにが起こってる？

ドアがある。ノブに力を加える。動かない。押しても引いても開く兆しはなかった。出口なし。連れ去られ、監禁されたんだと理解する。焦りと汗が手のひらを滲み出てくる。鉄製のドアを思いつき蹴飛ばす。

大鍋を打ったような響きが木霊した。痛い。鉄製のドアはびくともしなかった。

「おいおい、無茶をするなよ、相原伊吹」

男の声が対面側から発せられる。漫画調で描かれたシヨッキングピンクの鳥が中指を立ててる大きなポスター。「チキン野郎！」と吹き出しがついている。その両側に拳大で網目が張られてた。スピーカーだ。

「あんたは誰だ、なにが目的だ、なんで名前を知ってる。言っておくけど、俺を誘拐しても身代金は出ないぞ」

スピーカーを通してくつくつ喉を鳴らす笑いが聞こえてくる。

「ゲームをしようではないか」

「はあ？」

「お前には拒否する権利はない。ルールは簡単だ、よくあるクイズを行なう。合計六問だ。正解、不正解にかかわらず六問のうちに背後のドアが開く。解答は床のボタンで示せ」

足元にはテレビ番組でありそうな青と赤の丸いボタンと計算機の並びで数字のボタンがあった。液晶画面もあり、ポスターと同じ鳥がお尻を振り振りルンバを踊ってる。装置は床に沈んでて、わざわざしゃがまないと押せない。

「わけが分からねえ、あんたはいつたいなにがしたいんだ。答えるだけで出れるなんて番組としても成立しないぞ」

なにかある、そう思った。

予感的中した。

「短気は損気だ、ゴミ野郎。ハッピーなのは一時間ごとに天井が五十センチ落ちてくるところだ。現在の高さは六メートル。最高だろっ？」

最悪だ。十二時間後にはぺちゃんこになる。

「この部屋は見ての通り密室だ、向こう側のドア以外からは脱出不可。通風口があるが、ボルトで締めて溶接し、格子は外せない。携帯も電波を遮断してる」

脱出も外への連絡も無理。動機も不明なままクイズに付き合うしか選択肢はない。仮に無視をしても潰れるだけだ。相手は不正解でもいいと言ってる。天井が降りてくるのは異常とはいえ早々に答えればいい。

それに、だいたい男の正体は見当がついた。

「本当に六問でこの部屋から出れるんだな」

「俺の言葉に嘘はない、安心してゲームを楽しめばいい」

承諾すると男がゲームスタートを告げた。

画面の鳥が看板を持つ。そこへ表示されたデジタルの数字が一秒ずつ減った。僕の命だ。



「第一問。その部屋にある床のタイル、全部で何枚ある？ 解答はボタンで入力しろ」

足元を見渡す。学校の廊下でよくあるリノリウムのタイルが敷き詰められてた。いい加減に答えるか。いや、間違えたらなにがあるか分からない。

左手首を見る。白の腕輪が光を反射した。

「質問なんだけど」

「受け付けない」

即答だった。ヒントを一切与えない姿勢なんだ。ここは無難に数えておこう、時間稼ぎの罫なのは見え見えでもなにが起こるか分からない。どうせあとあと難問が出るのがお決まりだ、一問目はまともを受けよう。

一、二、三。

数えて止まる。まだ状況に吞まれてるようだ。深呼吸をする。僕はいちいち全部を数えようとした。全部は必要ない。これは算数だ、縦と横の枚数で合計が出せる。気を取り直して壁沿いに歩んだ。油断は禁物だった。白の繋ぎ目はあやふやで錯覚が起きやすい。

どこまで数えたのかをしつかり意識してないと何度も数え直すはめになる。簡単な問題と見せかけてこれが狙いか。気をつけて一角から一角まで進んだ。

百二枚、半端な数だ。敢えてこの枚数にしたんだろう、製作者の底意地の悪さが窺える。次はドアのある壁側に向かって足を向けた。半ばで通風口を通りかかる。肩の位置にあり、余裕で人間の入れる穴の大きさだった。格子さえなければ……。試しにボルトを回す。指先に角張った跡がついた、固定が徹底されてる。格子を掴んで揺らしても緩まなかった。

嘘がないのは真実らしい、文句のつけようのない密室だ。

僕は愕然とする。せっかくの枚数を忘れてた。数え終わった半分を戻すしかなかった。

なんだかねで、縦横合わせて五回もうろちよろする。何度数え

てもどこか抜けてる気がしてならなかった。半端な数なものも判断を鈍らせる。百二枚と百三十一枚。携帯の電卓で計算、一万三千三百六十二枚になった。

ボタンを押しかけて留まる。装置の脇にメモ用紙とペンがあるのを発見した。親切なこった。中学以来のかけ算の式を走り書きする。電卓と答えは同じだった。それでも押せない。根本的に間違ってたらどうする。一辺で三桁にのぼるタイルが整列してるんだ、一枚や二枚数え損なってる場合だつてある。

答えを入力したところで指が言うことを聞かない。看板鳥が「決定ボタンを押してね」と劇画タッチの顔になって言ってる。僕は、決定、と書かれたボタンへ指先を乗せた。腕が震えてくる。押していいものかどうか分からない、絶対なにか裏がある。こうしてる間にも時間は刻々と減っていく。

前方のポスターの「チキン野郎！」が目映った。

「チキンはお前だろ！」  
勢いで押した。

液晶画面の鳥が「審査中」の吹き出しとともに左右へ跳ね回る。

「不正解だ、ゴミ野郎」

体で爆発が起きた。痛みより衝撃でのたうつ。一瞬にして力が抜け、僕は暗闇へ引きずりこまれたのだった。

朦朧とした頭で目が覚める。電撃で気絶したんだ。起きたタイミングに合わせてスピーカーに雑音が混じる。

「俺とすることが言い忘れていた。問題を間違えると遠隔操作でその輪に電流が通る仕掛けになっている。専用の鍵でしか外れない素晴らしい一品だ」

「ふざけんな。あんた、立神荘士だろ。俺になんの恨みがあんだよ、標的は麗葉じゃねえのか」

「口の利き方に気をつける、ゴミ野郎。お前の命は俺の手にあるんだぞ。だが俺は優しい、一つゲームの攻略法を教えてやろう。耳の穴をほじくりかえしてよく聞きやがれ」

憎たらしい鳥のポスターを凝視する。男はもったいぶつてなかなか言わなかった。

「最後まで冷静でいることだ」

待つて損をした。どこが攻略法だ、なんの役にも立たない。ポスターを殴りつける。

くつくつと笑いが発せられた。

「残り時間を見てみる」

苛立たしさを堪えて腰を下ろす。改めて鳥が看板を持っていた。秒表示が等間隔で切り替わる。分表示は三〇分を回ろうとしてた。

九時間三〇分。

嘘だろ。咳かずにはいられなかった。二時間以上も眠ってたなんて信じられるか。数秒、もしくは一〇分かそこらだ。天井を見上げる。民家よりは高さを保ってるものの下がってきてるのは明白だ。

「分かつたぞ、あんたのやり口。十二時間の膨大なタイムリミットを用意するふりして気絶してる間に目減りさせてんだろ」

「みくびるなよ、姑息な真似はしない。イカサマをしては意味がないんだ」

「意味？ 意味なんてあるか、こんなクソゲーム。タイルだって何回も数えた、ハズレてるわけがねえ。気絶させるかどうかはあんたのさじ加減じゃねえのかよ」

「おい、ゴミ野郎。部屋の中央に行ってみろ、そこに答えがある」

ハッターだ、時間稼ぎのつもりだろう。企みに乗ってやるつもりはない、スタートダッシュをきかせて走った。中学時代はリレーの選手に抜擢された実績がある。ゴールが一気に近づいた。

急ブレーキ、真ん中あたりで脚の回転をやめる。靴底が滑って慣性の法則に従った。そこにあるのは床。三六〇度見回しても床、なにも変わらない床ばかり。かに思えた。

「求めさせたのは面積ではなくタイルの枚数だ。納得したか、ゴミ野郎」

サイズが違った。切れ目が見えにくいのが敗因だ。中央数枚が他

より長い。壁際に近づくとつれて隣り合うタイルとの誤差が減っていく。辺を数えて間違えるのも無理なかった。

「横着者は馬鹿を見る。ウルルンなら直感でタイルの大きさを調べろぞ」

「誰だつて？」

「ウルルンだ。俺は比佐麗葉をそう呼んでいる」

ああ、そうかよ。

「一緒にすんな。俺はあんたらと違って一般人なんだよ。麗葉といあんたといい、回線がショートしてんじゃないのか。精密機械は壊れやすいからな」

「案外そうでもないぞ。ウルルンに二発撃たれてもこうして生きている」

事務所の小さな銃とふざけて撃つ真似をする彼女の姿が浮かぶ。

「麗葉が、撃った？」

「大昔だけだな。彼女が十二歳で有名大学の入試問題をやって満点をとった頃だ。十歳から一年に一回の特番シリーズになっていて計三回、テレビ中継で話題になったのを覚えていないか」

なんとなく記憶にあるような感じだった。いつの世にも天才少年だの少女だのは出てくる。どれがどれだか判別は難しい。「まあそこはどうでもいい。注視すべきは小学校の卒業式が終わったあとだ」

もったいぶる話し方だった。

「入院中の母親を病室で撃ち殺した。親殺しは俺もやっている、断然興味が湧いた。我が夢幻倶楽部へ招待しようと考えた」

奴の口調が興奮してくるに反比例して僕は冷めていく。

「拒否をされても執拗に追いかけた。しかし残念ながら失敗した。せめて薬指をもらおうと迫ったら下腹部に二発の弾をぶちこまれた。この立神荘士にだ、最高だろう？　ウルルンこそ俺の右腕に相応しい素質を持っている。運命と言っても過言ではない、彼女こそ俺の求める存在なんだ」

こいつを撃つのは正当防衛として、母親を殺すのは許されない。麗葉は異常な面もあるけど、なんとなく人殺しをするような奴じゃないと思ってた。いいや、実際にやったとは限らない。立神の早とちりや僕の動揺を誘う発言かもしれない。

「ゲームに参加できることを光栄に思えよ。ウルルンは馴れ合わない。お前みたいなゴミ野郎を連日のように傍へ置くのは奇異なんだ。彼女の気まぐれやハウスクリーニング欲しさで近づけるはずがない。お前になにがあるんだ」

大きなお世話だ。なににしてもここを脱出するのが先決だった。真相を訊くのはあとでいい。命あつての物種だ。

第二問目は、円周率を四万桁答えろ、だった。何桁まで自力で解けるか友達と競ったことがある。マチンの公式を思い出し、ボタンに指を置いた。

「ほう、四万桁を暗記しているのか」

三・一四一五九二六五三五六八九七九。次々に押して顔を上げる。そんなわけないだろ。

解答確定。電撃。

歯を食い縛って本日三度目の落ちる感覚を味わった。一桁を一秒で解いても六〇〇分以上を消費する。ボタン操作で更に倍。そもそも無理だ。このゲームのハッピーなところは、六問を無事でいられたら外へ出られるということ。あたかも問題を解くのが目的のための手段だと取り違えてしまえる罠。正解できなくとも、わざと間違えるのが正解なんだ。

「おはよう。気分はどうだ」

はっと息を吸い、カウントを確認する。残り八時間の看板を持った鳥の躍りがサンバに変わった。今度はさつきよりも早く起きた、免疫力がついたんだろうか。だからといってそう何度も受けたくはなかった。

天井がまた下がってる。

「食パンと目玉焼きが欲しいね、ついでに牛乳があるといい」

冷静に対処すべきだ。立神は僕を試験してる。殺すのが目的なら都合三度、煮るなり焼くなり刻むなり好きにできたんだ。弄ぶにしても意識をなくさせちゃ面白くないだろう。

ゲームだと奴は言った。ゲームにはクリアーがつきものだ。必ず生還への道がある。

残り四問を丸々わざと間違えるのは利口とは言えない。二度はたまたま二時間以内に覚醒できた、次がそうとは限らない。起きれる根拠はどこにもないんだ。深い眠気と重なりでもしたらそのまま永眠しかねなかった。運を過信するな。

このクソゲームの攻略法は問題数と平均した制限時間内に解ける問題は解き、明らかに消費の激しいのはパスすること。受ける問題と流す問題があるんだ。無駄に悩むよりも早起きに賭けた方が合理的なときはそのルールを適用しよう。

「さあ目覚ましに次を頼むぜ、こっちは命がかかってんだ」

「そう焦るな。問題は逃げやしない」

三問目、一世紀から三十世紀までで西暦に“一”のつく年号はいくつあるか。

躊躇なくペンを取る。受ける問題だった。

西暦一年から三　年までが三　世紀。一　年から一九九九年は千の桁に“一”が入ってて合計で千個。残るは一年から九九九年、そして二　〇年から三　年。

九九九年までを分解して考えると、一年から一〇〇年は二十個、一　年から一九九九年以外の台は各十九個といえる。

例えば二〇〇年台では、二　一年と二一〇年の二個、次に二一一年から二一九年のように十の桁に“一”がつくのが九個、あとは一の桁が対象になって二九一年までで八個。よって、合計で十九個になる。これは他の台も同じ。唯一、一〇〇年までが一〇〇年それ自体も含むために二十個になるんだ。

とすると「一九×八+二〇」の式でほとんどが導き出せる。百七十二個だ。これに一　年から一九九九年の九十九個を加えて九九九

年までの数が表せる。二百七十一個。

二〇〇〇年台も結局は百の桁と十の桁、それに一の桁の“一”を数えればいい。二百七十一個。

整理する。

一年から九九九年で二百七十一個、一〇〇〇年から一九九九年が千個、二〇〇〇年から三〇〇〇年で二百七十一個。

足し算をして答えを入力する。

「本当にいいのか、その解答で。ニアピン賞はないんだぞ」

液晶画面に表示されてるのは千五百四十二個だった。間違いだと言われれば納得してしまいそうな組み合わせの数字。紙に走り書きした式や数字と比べる。数字ばかりを乱雑に書きこんだせいで、どれがどの個数を示してるのかが分かりにくかった。頭の中で乱舞してる。僕は文系なんだ、意味を持たない記号の混雑具合が嫌になってくる。

これでいい！

決定ボタンを押そうとする。

「おっと、またしても言い忘れていた。電流の強さは二問ごとにしてベルを上げるぞ。二時間やそこらで起きられると思うな」

なんの悪びれもない雰囲気だった。こいつ、そんな大事なことをいまさら言うか。もし気絶もしようがなしと判断して敢えて全問間違える選択に出たら危うかった。

「他に忘れてるルールはないんだな」

「ああ、ないとも。信用するがいい」

僕は告げる。

「それなら問題ない」

決定。鳥が「審査中」の吹き出しとともに跳ねる。数秒の待機が病院の待合室にいるような気分させた。

鳥の羽ばたきがやんだ。尻を向けてブルブル震えてる。無駄なアニメーションだった。

なにかが尻を飛び出た。卵だ。一気にズームアップし、当たって

割れた。中身の黄身がへばりつき、垂れ流れてく。

次には画面が元に戻り、看板を持ち上げてリンポードダンスを踊り出した。時間が減り始める。

「正解だ、よく決断したな」

おい。

「アニメはなんだったんだよ」

「俺が暇潰しで作ったものだ。意味はない」

煮え切らない感じで力が抜ける。冷たい汗がどつと噴き出た。どこまでも舐め腐った奴だ。しかし、だけど、でも、一問正解。猶予が七時間半で、残り三問だ。せめてあと一問は正解しておきたい。

「四問目は道具を使う。目の前の洒落たポスターをめくってみろ」  
中指を立てた鳥のポスターだ。ちよいとつまむと金庫があった。

鍵はかかってない。中には分厚い本が入ってる。背表紙には「広辞苑」の金文字があった。

「広辞苑の文字数を答えろ」

流す問題。

無駄に重い本を投げ捨て、装置にでたらめな数字を打ちこむ。勘で当たるかもしれない。決定ボタンを押して四問目は終わりだ。

「ここに来てその行動原理は正しいのか。展開は一、二問目とは変わってきているぞ」

「俺の前世は電球なんだ」

「切れた電球は光らなくなる」

不吉な言葉を振り切り、指先で押しこむ。

「良い夢を」

痛みよりも先に頭のとっぺんが抜けたようだった。景色が真っ白になって、真っ黒になった。

起きると薄暗い。夜になったのかと思ったが、窓はなかった。頭を転がして床を水平に見つめる。数々の照明も変わりないようだ。

違和感があった。息苦しい圧迫感に包まれる。信じられなくて、試しに半身を起こした。腕を伸ばす。指先に天井が触れそうだった。



這いつくばってカウントに双眸を近づける。三時間を切った。床と天井の間は百五十センチの間隔になったと逆算できる。四時間半近くも夢の中にいたんだ。電気のパワーがアップしたからって極端すぎる。

抗議をしたところで無駄だ。ゲームマスターは立神で、変えられない現実がそこにある。僕はいかに生き延びるかを考えるしかない。答えは単純だ。二問中で一つもミスは許されない。誤りは死を意味する。制限時間内に目覚める可能性が低いのもあるが、不正解時のペナルティーも忘れちゃならない。

左手首を観察する。忌まわしい腕輪をはみ出て赤くなっていた。皮膚がただれてる部分もある。二問ごとに強くなる電流が、次はどうなるか予測つかない。初めは安易に考える節のあった腕輪。黄泉の世界へ運ぶ要素はここにもあったんだ。正解、不正解にかかわらず六問達成で終了なのも肯ける。

突き詰めるとこれは耐え抜くゲームだったんだ。判明しても遅かった。一問目で気づいてもどうしていいか戸惑っただろう。過去はいつだって戻ってこない。要は、それを踏まえていまなにをするべきかだ。

さつさと次の問題を言ってくれ。

呼びかけに立神は無言で返した。というより、ちゃんと聞いているのかこっちは分からない。再度の催促にも反応はなかった。

「おいおい、ここに来て時間稼ぎするつもりかよ」

静寂。スピーカーのノイズもない。

カウントがどんどん減っていく。魂が削られてくみみたいだった。画面に触れてこすっても表示は無情に変化していく。クソッ、あと二問だったのに、本当にこれで終わりか。わざと生かしておいたのは、やっぱり弄びながら殺したかったからなのか。

「試験だなんだって気取ってたくせしてゲームクリアされそうで逃げたんだろ！ ゴミ野郎はどっちだ、ゴミ野郎！」

もしくは試験の解答内容に失望して放置したのかもしれない。思

い当たるのは一問目だ。タイルの数を間違えたのは痛かった。的中すれば多少は時間に余裕が生まれる。

狭く暗くなつた密室は酸素濃度を薄れさせてるようだった。肺一杯に吸つても吸収できてない感じがする。

「勝手に見限つてんじゃねえ！俺はまだやれる、二問とも正解してやる！男なら最後までやりやがれ！途中で投げ出すなんて姑息な人間のすることだ！この姑息マン！」

喉がはち切れんばかりに怒鳴つても応答なし。

これまでか。そう思ったときだった。マイクの通る音がする。

「立神様は姑息なんかじゃない。あの方は食事に行つてるの、そろそろ戻つてくると思うわ」

聞き覚えのない女の声だった。てつきり事務所案内をしてやった女が立神の仲間で、僕を車に引きずりこんだのも彼女だと思つた。あの人よりも色気がやや少ない口調だ。立神つてのは何人の女を従えてるんだ。ますます腹が立つてくる。

「共犯者のお出ましか、あんたも異常者の仲間つてわけだ。変人男に変人女、お似合いだな」

「口を慎みなさい。私のことはなにを言つても構わない。だけど立神様を悪く言つのはやめて」

しめしめ。ありきたりな挑発に乗つてきてくれる。

「犯罪者をどう言おうと勝手だろ。犯罪者は全員死刑にでもした方がいい。その方が世界は平和になる」

今度はすぐには返事がなかった。ワンテンポ置いて考えてるふうだ。

「犯罪者が、みんな悪とは限らないわ」

「なに言つてんだ。悪いから犯罪者なんだろ。立神もあんたも犯罪者だ」

「黙りなさい。それ以上言つとただじゃおかないんだから」

「なんだ、どうするんだ。立神に言われるがままのあんたになにができる？」

「天井はこっちで操作できるのよ」

「やれるもんならやってみるよ、どうせできないくせに」

「本当よ、本当にこっちでコントロールできるの」

「だんだん余裕のない声質になってきた。僕の強気な姿勢に困惑してるんだ。」

天井を操作できる。まあそうだろう、彼女がその気になった途端に僕はサンドイッチの具になる。アニメキャラみたいにぺちゃんこになって空を舞ったりしない。

「そうじゃないんだ、俺が言いたいのは」

え、と疑問符をつけて発した彼女。

「立神は俺を試験するって言ったんだ。あんたが勝手に殺しちゃまずいだろ」

「席を立ってる時間、私に権利を託してたらどうするの」

「ただじゃ納得しないか。でもこの程度の食い下がりなら捌けなくもない。」

「そつだとしてもそれは死刑執行の任じゃない、あんたが残りを出題するはず。俺が挽き肉になるのはその結果だ、違うか？」

吐息がスピーカーに流れる。

「当たり前よ。私はただの監視係で殺す権利はない。でもね、私にだって感情はある、お願いだから怒らせないで」

悲痛な訴えだった。どこか懐かしい雰囲気があるのは気のせいだろうか。

「なあ、あんた。俺とどこかで会ったことないか」

物音がした。向こうでドアを開閉したんだ。肉を弾く響きと短い悲鳴、なにかが倒れる音。僕としゃべってた女がひたすらに謝罪してる。相手は言わずと知れた立神だ。

「勝手なことをするなとあれほど言っただろう。いいか、お前は渋谷を歩いているアバズレ共よりはいくらか賢いが、それを差し引いても愚かだ。そこがお前とウルルンの違いだ。もう一度言うぞ、勝手なことするな」

いいな？

問いに消え入る返事がされる。

「いいコだ。さあ車に戻れ、食料を調達してきた。好きなだけ食べて休むがいい」

静かに閉じられたドアの震動を僅かにマイクが拾った。続けて立神の溜め息だ。

「やれやれ、子守はこれだから疲れる」

「レディーには優しくしないと駄目だぜ」

「俺ほど優しい人間はいないと自負してるつもりだがな」

「あんたの辞書に“勘違い”って言葉はないらしいな」

「そしてお前の辞書には“恐怖”という言葉がないんだろう。調子に乗るな、ゴミ野郎」

もう何度目か分からないフレーズは妙に安心させてくれる。奴はそこにいる。生き延びる道が途絶えてない証拠だった。

「俺を殺すか？ 手元の機械で」

「いいや、最後までゲームを進行させるさ。言っただろう、俺はルールを守る」

そうこなくっちゃ。少なくとも気まぐれでルール変更するような性格じゃないみたいだ。プライドの高さがそうさせるんだろう。問題を滞りなく答える、または電気ショックを耐える。それが僕の脱出トンネル。

第五問目。待ちに待った言葉に心臓が高鳴る。無茶な問いが出ないのを祈った。

「俺は赤と青のどちらが好きか。専用のボタンで答える」

口が半開きになった。確かに解答装置にはクイズ番組で使いそうな赤と青の大きなボタンが備わってる。

僕は唇を噛んだ。乾いて荒れた皮を歯で挟み、千切り食べた。鉄の味が滲んで舌に触れる。

「色んな意味であんたらしくない問題だな」

「俺は運を信じている人間だ。運も実力のうち、とはよく言ったも

のだな、全く同感だ。運のない奴はなにをやっても失敗する。練習でできていた大事な試験や面接で不幸に見舞われる人間がいるだろう、現実に」

一理あるのが反論をさせてくれない。僕もそんな人間を見てきた。学校では新しく配られる教科書が一人分だけ足らなかつたり、日常では自転車を盗まれたり、裏社会ではたまたま職務質問にあつて薬を見つかったり、不自然なほど貧乏くじを引くんだ。

「それに文句を言うならなぜ時間を残しておかなかつた。俺は十分に選択の余地を与えていただろう」

おっしゃる通りだ。無駄に反抗するエネルギーは残ってなかつた。もはやぎゃーぎゃー騒いだってどうにもならない。馬鹿らしい問題に対して真摯に取り組むのが僕の使命だつた。

「赤か青か、答えをどうやって証明するんだ。あんたの気分ですらどうでも変えられるんじゃないのか」

「心配は無用だ。解答はお前の正面の壁、左下隅のポスター裏に塗つてある。おかしい真似はするなよ、カンニングは重罪だ。どの角度でも監視できるマイクロカメラがお前を捉えているぞ」

そんなことはとつくに承知してる。

左隅のポスターは「チキン野郎！」よりも小さいサイズだ。「K ILL YOU!」と血文字風に書いてある。赤か青か。季節とは裏腹にシャツの中が汗ばんできた。目眩と吐き気がして寝転がる。

天井をじつと見つめるといまにも落ちてきそうだ。一点を凝視したのは良くなかつた、視界が激しく揺れて膨らんで回り始める。

瞼を下ろした。

二分の一の確率で僕は死ぬ。なんでこんな目に遭つてんだ。

比佐麗葉。彼女に雇われなければ立神の意味不明なクソゲームに付き合わされることもなかつた。

だけど、日給二万円は大きい。雑用係でそれは破格だ。後輩の綾木に一人で家賃や光熱費を払わせるのは自身が許さない。収入はなくても僕という人間の根元は腐らせたくない。だから二万円が毎日

入ってくれば救われる、悠々と借金返済も終えられる。

考えが甘かった。うまい話には裏がある。辞めてやる、こんなクソゲームに参加しなくちゃならないなら願い下げた。

それもこれも生きてたらの話だった。

生き死に。死には赤のイメージがある。赤は血だ。ポスターの文字も血文字。立神は殺人だつて簡単にやる、血の赤がお似合いだ。

赤か？ 答えは赤。赤が嫌いで、どうして出血を伴う殺人ができる。そうだ、それは言ってる。赤だ、赤に違いない。

急かす僕の首根っこを掴む。第五問目は、どちらが好きか、だ。答えじゃない方が嫌いな色とは誰も言つてない。青はどうだ、どんなイメージがある。真っ先に連想するのは水だ。それに空。立神には合わない癒しの色だった。奴が青を好きだと言うのは成人した男がすね毛丸出しで半ズボンとサスペンダーでいるぐらい変だ。

やっぱり赤か。どうせ考えたつて無駄な運試しなんだ。理論を組み立てても自己満足にしかならない。そうなると時間消費を狙う罠でしかなかった。二問目の円周率や四問目の広辞苑と部類が一緒に合つてようが間違つてようが即断するのが正解だ。当たれば儲け、賭けるしかない。

「時間がどんどんなくなっていくぞ。どちらにするんだ、優柔不断なゴミ野郎」

「俺は、あ」

言いかけてやめた。

「あ”？ それがお前の答えか？ しかし残念ながら赤も青も一声目は“あ”だ」

「いや待ってくれ、もう少し考えたい」

「いいとも、こちらは一向に構わない」

赤。果たして本当にそれでいいんだろうか。問題が不条理である限り、解答するに越したことはない。ただし、二問目や四問目とは状況が違う。意図して間違えた場合、気絶したまま目覚めないで天井に潰される。つまり、死ぬんだ。

死ぬ？ 死ぬのか？

吐き気が酷い。頭の高傷が内部で痛む。立神がなにか言ってるが聞こえない。脳に心臓を埋めこまれたみたい痛みだった。耳朶を特急列車が走り回ってる。

視界がぼやける。自分の体から意識がずれた。視界が勝手に移動してる。僕はなにをしてる？ 正解の書いてあるポスターへ歩んでる。腕が伸ばされた。

やめろ、そんなことをすれば立神に殺される。止まれ、持ち主の言うことを聞け！

警告も虚しくポスターをめくる。色が見えた。

「おい！」

怒気を含んだ声がした。

ああ、なにもかも終わった。自分がこんなに馬鹿だとは自覚してなかった。

「どうしたゴミ野郎、プレッシャーに頭がやられたか。無視は良くないだろう？」

鮮明な音声と視界が戻る。

僕は答えのあるポスターの前にはいなかった。ボタンの前で寝転がってる。一步として動いてなかったんだ。いつの間にか戻ったとも考えられない。幻覚だったのか。

今回ばかりは立神の言う通りかもしれないなかった、僕はどうかしてる。次第に笑えてきた。なにもおかしくないのに腹の底で笑いが生まれて口が出る。気でも違ったか、と奴が言った。

「こんなことならボンキュッポンツの姉ちゃんを飽きるほど抱いておくんだっと思ったてさ」

青のボタンを押す。鳥がムンクの叫びよろしく青ざめて体をくねらせた。

「青でいいのか？ 理由はなんだ？」

「直感だよ。根拠もなにもない、真正正銘の勘。しかも二択だろ、適当にやれば半分は当たる。どっち押したって同じだ」

「そんなことでいいのか。問題にトリックが隠されているかもしれないぞ」

「やめてくれ、俺にそんな推理する頭はねえよ。それにもういいんだ、いまなら借金を苦に自殺する中年男の心境が分かる」

まんざら嘘でもなかった。ヤクザに借金して、あとさきは暗い。望んで借りたお金じゃなかった。無免許で高橋の車を運転してぶつけたのは僕だ。強要された感があった。拒む選択があったはずだ。なのに僕はしなかった。以前にも運転したことがあって大丈夫だと思っただ。言われるままにアクセルを踏み、ガードレールで車体を擦った。

悪いのは僕だ、ヤクザと一般人の区別は関係ない。後腐れなしにお金は返す。返せないときは死ぬしかない。それがいまか高橋の手によるものかの違いだ。

「決心してるなら答えを見てみる。ちなみに、お前が確かめるまでは決着しない。認知した時点で電流か次の出題をする」

「カウン트가止まるわけじゃないんだろ」

中腰で移動する。地底人の心境になった。

「まあな。人生にタイムやりセットがないのと同じだ」

「そうかい。じゃあ決まりだ、生き延びるなら時間を節約したいんでね」

呆気なくポスターを剥がし、床へ放った。勢いだった。試験も当日より前日に緊張するタイプだ。やるならやれ、生殺しは勘弁だ。

ポスターがぐるりと旋回して柔らかく着地する。

「どうやらボンキュッボンツの姉ちゃんが俺を欲してるみたいだな」  
裏は青く塗り潰された。

「驚いた、どうやら運は強いようだな。どことなく根拠があるようにも思えたが」

ない。幻覚内で見えた色をそのまま答えたんだ。確率が変わらなく、立神の思惑やトリックも見当がつかなかった。指標になるのは幻覚しかない。



とうとう六問目に達した。二時間半が余ってる。最悪は気絶をしても根性で起きて脱出する希望もあった。

「次はサービス問題だ。お前はただ数えればいい。幼稚園児にもできる難易度だぞ、ありがたく思えよ」

「そりゃ感謝しないとな。自分の毛根の数とかそういうのはやめてくれよ」

「ああ、それも面白いな、それでもいい」  
「言わなきゃ良かった。」

「そう心配そうな顔をしなくても変えはしない。対象はポスターだ」  
「ポスターって、この部屋のか」

「Yes。全部で何枚あるか答える。トリックは一切ない。重ねて貼っていたり、ミクロな物、壁そのものがポスターだったというオチもない、素直でいい。簡単だろう？」

かなりの優しさだった。

でもそれは僕が部屋に連れてこられた当初の状況だ。大部分のポスターは降りてきた天井に隠れてしまってる。

「外道が」

「なんだ、数えてなかったのか。ウルルンであれば即座に記憶するぞ。お前と会話した部下 トスミにだって可能だ。洞察力は落第点のようだな」

そりゃ悪うございましたね、あいにくこんな異常事態に慣れてないんすよ。

髪を掻き乱してあぐらをかく。覚えてるのは大した枚数はなかったことだ。大きい壁に、本当にちらほらあった。四方合わせても十枚そこそこだろう。

で？

曖昧な答えは許されなかった。一枚差で惜しくても、百枚と答えるのと差異なし。ポスターの枚数ぐらい、なんで見ておかなかったんだ。せめて一問目をやったときに、ポスターが怪しいと思っても良かった。

五問目で剥がしたのと「チキン野郎！」のポスターは明確だ。

思い出せ、最低一回は一通り見てるんだ。なんなんだここは、てなふうに見回しただろ、自分。おぼろげな光景を脳裏に浮き立たせる。

正面は他にも数枚あった。あまり密集はしてない、上の方に貼られてた。二枚か、三枚。そうだ、三枚だ。「チキン野郎！」と五問目のポスター、そして三枚で合計五枚。正面は五枚だ。

いけるかもしれない、案外覚えてるものだ。

次は左の壁。こっちは少なかったと思う。一枚か二枚、大きいグラビア写真だった。通風口の横に一枚あって、もう一枚は一股分離れて貼ってあった。二枚だ。他にもあっただろうか。いいや、ない。大丈夫、自信を持って。

右。天井ぎりぎりのところにポスターの最下部が出てる。あの一枚だけじゃなかった。それぞれの壁にジャンルが分類されてて、左がグラビア、前がアメリカ風ので、右がアニメだった。二枚じゃなかっただろうか。一枚は見覚えのあるアニメで印象が強かった。それは見えてる方のポスターじゃなかった。そんな気はなかったが、他にも知ってるアニメがあるかと思ってざっと壁を見たら。二枚。いいぞ、冴えてる。僕もやればできるんだ。

後ろ。真っ暗だった。記憶の中で、だ。実際に振り返ってみる。一枚も端っこすら出てない。半ば這いつくばって壁へ密着する。天井と壁との間に隙間がないかと思って見上げた。首が痛くなった。アリも通り抜けられなさそうだ。

鼓動が早くなる。手の脂汗がぬるぬるして気持ち悪い。記憶が欠片もなかった。ドアがある、としか認識してない。たったの一面がどうしても思い出せない。呼吸を落ち着ける。

情報を整理しよう。正面が五枚、左側が二枚、右側が二枚。平均して三枚だ。後ろも三枚だとすると答えは十二枚になる。あり得なくはなかった。

唾を飲む。

赤か青の二択とはわけが違う。勘を頼りにしてどうする。明らか  
に駄目だろ、そんなんじゃ。けど、どうするっていうんだ。後ろの  
壁も僕は見てたはずなのに、どうして覚えてない？ ドアに気を取  
られすぎたのか？

貧乏揺すりをする。

「時間だ」

心臓出發で全身が跳ねる。鳥肌が各末端へ向かって津波の如く伝  
達した。タイムリミットになったのかと思った。

一つのリミットではあった。

頭上がゆっくり落ちてくる。滑車や歯車が回転してるんだろっ、  
化物の呻きみたいな音がしてる。びびる僕を嘲笑ってるようにも聞  
こえた。

残り二時間、天井の高さ一メートル。辛うじて出てたアニメのポ  
スターも隠れた。中腰になるのもきつくて腰を下ろす。もはや誤答  
は死へ直結する。

色当ての問題で頭痛がしてからずっと気分が悪かった。朝食を食  
べずに出発した遠足バス以来の不快感だ。常にもぞおちや食道がむ  
かむかしてる。頭痛も酷い。古傷が蠢いて頭蓋骨に浸食し、脳を直  
に揉んでるようだった。

たまらず仰向けになる。リノリウムの床がひんやりしてて気持ち  
いい。電気の睡眠剤で死ぬよりも自然睡眠の方がいいかもしれな  
い。目覚ましもセットしないで存分に眠る幸せはなにもも代え難い。  
染みがあつた。灰色の天井に三つの大きめな跡。人の顔に見えた。  
他にもないかと探るも、顔っぱいのはない。睨めっこする。こうい  
うのをなんて言ったっけ。なんとかタルトっていうスイーツみたい  
な名前の法則をどっかで覚えた。人間は点や線の集合を一つのまと  
まりとして認識しようとするんだ。

それにしてもなんでこんな跡があるんだろっ。掃除ぐらいしろよ、  
なんなら僕が日給二万円で雇われてやるぞ。

自分の状況と照らし合わせてはっとする。

気分を悪くし、寝転がる誰か。時間が迫り、天井が降りる。最後の抵抗で床へへばりつく誰か。潰れゆく誰か。残った染み。洒落に  
ならない映像が生々しく想像できた。

待てよ？

僕はいはいをして解答装置へ帰る。答えが、少なくとも根拠のある仮説として判明した。正しいかは分からない、頼れるのはこれ  
しかなかった。

一桁の数字を入力する。

「それでいいんだな。特別に押し直しの権利をやってもいいぞ」

「あんたはまるで悪魔そのものだな、いちいち心を掻き乱してきやがる。大層嫌な子供だったんだろうな」

「どうか、案外お前のような生活を送っていたかもしれない」

「冗談はよしてくれ、平凡な生き方をした人間がこんなでたらめなゲームを考えつくかよ」

なるほど、と立神の肯く声。

「それで、答えは変えなくていいのか」

「今度は根拠があるんだ。もったいぶらないで早く結果を示してくれ。合ってるのか、合ってるのか」

奴が笑う。

「天井の上下で示してやろう。生か死か、極上のスリルを味わえ」

スイッチを押しこむ気配がした。

天井が動く。どっち、どっちだ、どっちに動いてる。亀の歩行並に遅くて見分けがつかなかった。目を凝らしてみてもいまいち分  
りにくい。なにか基準になる点はないか。視線を巡らせて一方を睨  
んだ。

徐々に「チキン野郎！」の鳥が露わになっていく。

上がってる。憎らしい顔も愛嬌に感じた。正解だったんだ、異常  
犯罪者とのゲームに僕は勝利したんだ。

背後を見つめる。ドア全体が表出し、壁の面積は広くなっていく。  
簡素で味気ない打ちっ放しのコンクリートだった。ポスターは一枚

もない。

「どうして分かった。すっかり記憶してたのか」

「前と左右の枚数は分かってた、あとは後ろだけだった。ただどうしても一枚も記憶に残ってなかったんだ」

「だからゼロとするのは安易過ぎないか」

「天井の染みがヒントになった」

「染みだと？」

「ああ。俺も気づきたてほやほやだけど、人間はなにか目印となる物に視線が行きやすいらしい。もし真っ白の壁があったら、どこに視線を持っていけばいいか分からないはずだ。つまりポスターが一枚でも貼ってあれば俺はそこへ目をやっただろうと思った」

「言いたいことは分かる。だが“はず”だの“だろう”だの、決断するに足る言葉とは思えないな」

「正直、こうして結果が出るまで半信半疑だった。だけど“ポスターが貼ってあることすら気づかない”わけがないんだ。ゆえに答えは――」

天井が昇りきって地響きを上げる。

正面に五枚、左に二枚、右にも二枚、後ろはなし。

「九枚だ」

立神が拍手した。

「どうやらお前を侮っていたようだ。ロックは外しておいた、部屋を出るがいい」

ありがたい許しの言葉に膝が笑った。震えがやまない。自分の体を抱き締める。頼りない足取りはほとんど赤ん坊だ。早く出口へ近づきたいのになかなか距離が縮まらない。おまけに脚がほつれて転んでしまった。一人笑った。靴が滑る。ここはいつからアイスリンクになったんだ。

何度か転びながら到着した。ノブにしがみつく。握り、力を込めた。

回る。特に力を入れなくてもドアが奥へ開いていく。頑なに閉塞

を保つてたのが信じられない。僕は生きてる、外へ出れる、なんでもできるんだ。

喜びを一気に開放させる。

三歩のあと、僕は膝をついた。後ろでドアが閉まる。ポスター、通風口、解答装置、それぞれが前の部屋と対象的に位置づけられた空間になってた。

「さあ、ゲームを続けよう。ルールは同じだ。第一問  
ふ。」

「ふざけんな！ 六問堪えたら外に出してくれるって、そう言ったじゃねえか！」

「ふざけてるのはお前の方だ。俺は『六問のちに背後のドアが開く』と言ったんだぞ、誰が外へ出すと言った。聞き間違いはお前の責任だ」

言われてみれば、そう言ってた気がする。普通はそう聞いたら外に出れると思うだろ。いままでの苦労は、さっきの歓喜はなんだっただ。信じられない、信じたくない。

「こんなのは嘘だ」

「ガキみたいなことを言うな」

「だけど！」

言葉を呑みこむ。なにか引っかけりがあった。

「あんた、問題を始めようとしたのか」

「ゲームは続くと教えてやったばかりだぞ」

「ゲームスタートする前に聞かせてくれ。初めにこう言ったよな、

『俺の言葉に嘘はない』って。それは信じていいんだろ」

「なんだ、いまさら」

「カウントは始めてもらって構わない。教えてくれ、どうなんだ」  
立神は一拍して、いいだろう、と応じた。

「もちろん。俺はルールをご都合主義に変えるほど小物ではない」

「こつも言ったな。『この部屋は見ての通り密室だ』」

「それがどうした」

狙いを定めた僕は一直線に歩いた。

「この部屋は」だ。これについては“ルール”じゃない」  
通風口の前に立つ。

「一目見てあつちの部屋と全く同じだと無意識に知覚した。しかしこつちの部屋に関しては『密室だ』とは言わずに問題を始めようとした。それが意味するところは」

鉄格子に手をかける。

「これが出口だ！」

一見ボルトで溶接されてるふうな通風口への障壁がずれた。力任せに引くと丸ごと外れた。投げ捨てる。

立神は大笑いしてた、声を高らかに腹の底で。

「そう恐い顔をするな、ほんのジョークじゃないか。だいたいプレイヤーをその部屋に入れるには必ずどこかしらの出入り口が必要になる。それが意外な盲点になるんだな、少し考えれば分かることだ。もつとも、気づかなければ永遠にゲームはループしていたがな。最高だろう？」

「最悪だ」

うーん、とわざとらしくしょぼくれた声でリアクションする男。  
「お気に召さなかったか。まあいい、合格だ。ウルルンの傍にいいことを俺が許そう。お前は思ったよりもできそうだ。大抵の愚かな人間はせっかく与えてやった『最後まで冷静でいる』というヒントを無下に扱う。過去には六回往復した奴もいたぐらいだ。半端に頭の切れるがちがち人間は使えない。おっと、末路を聞くのは野暮つてもんだぞ」

聞きたくもなかった。

「もう帰っていいんだろ。まだ仕掛けがあるって言うんじゃないだろうな」

「まさか、俺は愉快なんだ。正真正銘のゲームオーバー。お前には得体の知れない可能性を感じるしな、今後じっくり楽しませてもらう。また会うこともあるだろう、その時はよろしく頼むぞ」

ノイズが途切れる。

安堵はしなかった。真つ先に通風口へ入り、全速前進をした。途中で腕輪の鍵が置いてあるのを見つけてちよつと気が緩んだ。曲がりくねつた狭き道を行くと灯りが目に入った。青に黄色、赤は信号の色だ。道路がある。

外は意外にも都会だった。廃材置き場に出て振り返る。なんの変哲もない白いビルだ。周りにも建造物はある、少し離れて見てみれば特異な雰囲気もなく溶けこむ。夜の暗さが相乗効果で瞬く間に平凡な街並みへ変えていった。

大通りに行き着くと知つてる景色があつた。駅で切符を買つて、電車を乗り継いだ。

駅前には悪仲間二人がいた。にやにやと手を差し出してくる。

「もう忘れたのかよ、お前が運転した高橋さんのベントツぶつけたの。今月分払え」

間に割りこんで突破した。

肩を掴まれる。

「おい、こら。仲間抜けたからつてこれは関係ねえぞ。高橋さんの恐さ知つてんだろ。幹部だぞ、マジ殺されるぞ」

幼稚に思えた。ベントツ？ 高橋？ 幹部？ よしてくれ、笑えてくる。

怖いものはなかった。僕は腕を払い除け、背を向けた。



コノ野郎（後書き）

次話更新予定は明後日（11/10）です。

Next: 「立神荘士という男」

## 立神荘士という男（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなく、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」「や」「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしています。

よろしくお願いします。

## 立神荘士という男

ソファで寝苦しい朝を迎えた。体には毛布がかけられてた。昨日は帰宅後に倒れこんだんだ。

腹が鳴る。

テーブルには綾木の書き置きと朝食があった。トースターにパンを投入する。

目玉焼きとウィンナーを乗せてできあがり。一嚙りし、むせた。

牛乳をパックのまま飲む。口を拭くとカス二人に殴られた傷がちくちくした。

テレビを点ける。お天気キャスターが番組キャラクターと並んで厚着をすべしと警告してた。お次は指名手配中の銀行強盗のニュース。そんなのはどうだっていい。立神が僕にやった非常識な事件はどこいったんだ。

番組はニュースを終えて田舎の企画コーナーを映す。あんなに危険な目に遭ってなんの騒ぎにもなっていない。考えてみたら誰にも言っていない。痕跡を残すか、被害者が訴えない限り誰も気づかないのが至極当然だ。

警察？ 電話？

目が覚め始める。僕は携帯と名刺を探してダイヤルした。受話器に出たのは刑事の森里さんだ。体験したゲームのあらましと場所を話す。彼は熱心に聞いてくれた。

「捕まえてくれるんすよね」

期待を込めた問いに、濁った言葉が返ってくる。

「全力は尽くすよ。相原君も知ってるの通り、立神は普通じゃないんだ」

「それって、逮捕できないってことですか」

「いや、その、困ったな、一般には公開してない情報なんだよね」

「俺は殺されてもおかしくなかったんですよ」

語気を強めに腹立たしさを含めてやった。なんのための警察だ、しょうもない事件で小物ばかり相手にして喜ぶのが警察なのか、と。

折れたのは相手だった。

「分かった、話すよ」

森里さんは、声を変えられるだけでなく立神が変装の名人であることを教えてくれた。鼻や唇、額や頬骨といった特徴となる突起部位を切り落としてるらしい。グロテスクでのっぺりとした表情、それが現在の立神の素顔なのだという。

「いままでの目撃例を総合すると、そうとしか考えられないんだ」

「じゃあ俺が道案内した女も立神だって言うんすか」

「可能性はあるね。姿形が変わるから発見するのも大変なんだよ」  
「なんだ、警察って大したことないんだ。」

「え？」

口に出してたと気づいて僕は慌てて謝った。

「立神の目的ってなんなんすか。麗葉は指収集家って言ってたけど、それだけとは思えないし。人殺しを目的にしているようにも思えない」  
「ごめん、それも分からない。僕ももともと比佐麗葉を追って知った口だから。世界各国を縦横無尽に巡り、事件を起こしては行方をくまらず国際犯罪者として、ね。各国の最重要注意人物と繋がってるって噂だよ。なににしる自由奔放に出入国しているのを考えると巨大なネットワークを持ってると考えていいだろうね」

映画や小説、漫画、フィクションでしか聞かない内容に脳が浮遊感を得た。

「警護をつけようか」

一瞬考え、断った。自分の過去の汚点を知られるとは思わないけど、あまり身近に置きたくはない。それと先日のように意識を落とされ、電波の届かないところに連れていかれば終わりだ。あれは見事なスリーパーホールだった。

麗葉と離れるのが一番の安全だ。

昼前、僕は事務所横の空き地にいた。金銭面で多少は世話になった事実がある、直接に辞める意思を伝えたかった。彼女のことだ、「ああそうかね、お疲れ様」とでも言うか。はたまた最近の小説の件もあつて残念がり、引き留めてくれるか。

立神がこの世に存在しなければ悪くない仕事だった。日給二万円は捨て難くても、あり得ない条件なんだ。危険な目に遭うのも含めてその高給が成り立つ。昨日はたまたまの生存だ、そう何度も困窮を脱せるとは限らない。

ビルを見上げる。短い期間でも中身は濃かった。

「その君」

階段に足を乗せたところで男に声をかけられる。初老は超えてるだろうに髪はふさふさで、白くなったそれを整髪料でオールバックにしている。眼鏡の奥の瞳に射抜かれて硬直してしまった。背筋も歩みも真つ直ぐで見惚れ、不用意にも近づかれた。立神が変装の名人だと聞いたばかりだ、ましてや組織がバックにあるんならその仲間とも考えられる。知らない人間は警戒しなくちゃいけない。

「相原伊吹君、だな」

「なんで俺の名前を」

「私は草加部将義だ、麗葉の秘書をしている。しばし出張していてね、すっかり自己紹介が遅れてしまったな」

秘書がいるとは一度も聞いてなかった。十代そこそこの少女のもとで働いてるのも不自然だ。あたかも身内になりすまし、いきなり刺してきたりして。

階段を後ろ向きに三段上がる。格闘になったとき、下は不利になる。

「悪いツスけど、手に持つてる荷物はなんスか」

ああこれかね、と紙袋を掲げた。尻の部分を支えて中身を覗かせてくれる。

「小説だよ。麗葉とちよつと神保町にな。彼女はまだ物色したいというから私だけ先に車で帰ってきたんだ」

「いいんすか、一人で帰ってきちゃって」

「見ての通り人間性に乏しいだろう？ 前はもっと酷くて、それで読書を勧めたんだがね、いまや私よりも熱中してるよ。なにを言っても、先に行ってくれたまえ、だ」

なるほど、彼女を知ってるのは間違いないようだ。

信用には至らなかった。

二人になるのを避けたくて、駅前の喫茶店に誘う。店内はガラス張りになってて、麗葉が改札口を抜ければすぐに分かる。

草加部さんはなんの勘繰りもなく肯いた。

石寺公園駅の北口正面にあたる席へ座ってコーヒーを注文する。

運ばれてくる前にトイレへ立ち、携帯で事務所へかけた。発信音が永遠と続く。少なくとも麗葉はなんらかの理由で外出中らしい。あいつが携帯を持ってれば余計な心配をしなくて済むのに。

テーブルにはコーヒーカーップが置かれてる。ミルクを入れて草加部さんは掻き混ぜてた。

「苦労するだろう、麗葉の傍にいるのは」

「ええ、まあ」

苦労どころの騒ぎじゃないのを敢えて言わなかった。

「どんなはずばらな十六歳でもあそこまで部屋を散らかすコはいないだろうな」

よくぞ言ってくれました。一人作業のせいで共感してくれる人はいない。熱烈に握手をしたくなった。

「そうなんすよ、足の踏み場もないって言うけど、本当じゃないのは始めてでした。いくら仕事だからって一通り片付けるのに三日かかりましたからね」

「自分の脳内を映像化したらこうなるのだ、とは以前に言ってたけどね」

「そんなこと言ってたんですか。俺から言わせてもらえば、そんなの言い訳っすけどね」

低い周波数で草加部さんが笑う。

気がつくとも疑うのも忘れて意気投合してしまつてた。主に資金調達や調べ物、経理をやつてるそうだ。実質、麗葉の右腕なんだろう。こんな大人を小間使い扱いする彼女は何者なんだ。

「安心したよ、あのコと上手くやつているみたいで」

口をつけようとしたカップを止めて、飲まずに受け皿へ置く。本来の目的をすっかり忘れてた。

「俺、辞めようと思つてんすよ」

「立神かね」

伏せてた視線を向ける。和やかな表情はそこにはなかった。立神の言葉を思い出す。奴は麗葉の近くにいる人間を自ら品定めする傾向がある。草加部さんも例外じゃないんだ。

「恐くないんですか」

「恐いさ。だが麗葉から離れてどうなるんだね。我々は既に彼のターゲットになつてているんだ」

「ターゲット?」

「指収集家なのは知つているかな。日本滞在中の立神荘士は彼女に関わりのある人物の指集めを楽しんでいるんだよ。心理的に追い詰めようとしているんだろう、もちろん趣味も兼ねてね」

草加部さんが左手を上げる。別にウェイトレスを呼んだわけじゃない。

おもむろに薬指を握つて引き抜いた。出血はない、精巧に作られた義指だ。

「私は、なんとか指一本で済んでいる」

「そんな仕打ちまで受けて、なんで辞めないんですか。離れて、麗葉とは関係ないって言えばいいじゃないっすか」

「果たして聞く耳を持つかね、あの男は」

少し考え、左右へ首を振る。プライドの高い人間だ、ふらふらと立ち位置を変える者には厳しく当たつてきそうだった。

「例え通じたとしても無駄だよ。麗葉に精神的ダメージを与え、救いの手を差し伸べて仲間にするのが方法の一つにある。辞めるにし

る続けるにしろ、君が殺されれば少なからず責任を感じる。君の存在は意味を持つてる」

「麗葉のもとですつと働けてことですか」

「立神の狙いは麗葉を殺すことではない、仲間にしたんだ。脅迫や拷問では折れないとあの男も知ってる。知能でいかに納得させるかなのさ。殺すつもりなら自分の組織を動かして力尽くで簡単に済ませられるからね」

「つまり麗葉の傍にいるのは危ないけど一番安全ってことツスカ」

「コーヒーをすすった草加部さんがあごを引く。」

「ドアを開けたらプラスチック爆弾がボンツとなることはなくなる。仕掛けてくるときは必ず向こうからアクションがあるはずさ」

殺すのが目的じゃないのは体験済みだった。スリーパーホールドという名のアクションもあった。悔いを残す暇なく暗殺されてもおかしくないのを考えると良心的に思えてきた。

「でもずつと一緒にいるわけにはいかないしなあ」

「定期的に行動をともしれば大丈夫。立神は興味の度合いによって生死の判断をするらしいからな。特に一度気に入った対象が実は大した者ではないと知った時にはプライドを傷つけられたと思って容赦がなくなるようだ」

マジツスカ。ゲームクリアしてしまったのは迂闊だった。終了後の奴の愉快そうな笑いが耳にこびりついてる。望んでないのに気に入られたばかりだった。

クリアーしないわけにもいかなかったんだ。脱出が一番の前提で、ゲームオーバーは死亡だ。それを言うなら、麗葉に雇われたのが大元の失敗だった。

時間巻き戻しのリモコンが借金してでも欲しくなった。

「麗葉と知り合って四年が経つ。非現実的な日々もあったが、こうして無事だ。君も大丈夫さ」

だといいんスけど、と落ちこんでるとガラスが叩かれた。両手に紙袋を提げた麗葉がおでこと鼻を密着させてる。



「男二人でなにをしている。荷物が重いのだ、こちらへ出て手伝いたまえ」

僕と草加部さんは目を合わせて苦笑いをした。

決して彼女と離れたくないじゃない。雇い主と雇われ人の関係とはまた違ってきてる。悪い奴じゃないし、仕事を辞めたとしても年に何回か会ってもいい。一緒にいるのが安全ならとことんそうしよう。というより、選択肢はなかった。

「そつだ、新作が完成したのだよ。読んでくれないか、先生」

事務所に戻って早々に印刷された束を渡される。誰のせいで悩んでたかなど露知らずだ。あーはいはい家で読むよ、と机へ置いて片付けを始める。一夜にして部屋は乱れに乱れてた。今日、本を買ってきたとなるとまたそこら辺に読み捨てられるんだらう。雑用も楽じゃない。しゃがんで、ずっしり重い「ニホンオオカミ大全集」を腕へ乗せる。

後ろに気配がした。振り向きより早く首筋を噛み付かれた。

「分かった、読む読む、いま読むっての！」

吸血鬼かお前は。キスマークならまだしも、歯形じゃ格好悪い。さすりながら麗葉の小説を手にする。折り畳みイスへ腰を下ろして準備完了。彼女は満足げに歯をかち鳴らした。いつか仕返ししてやるらう。

初めの一枚目には大きく「刃中の羽虫」とあった。いままでのとはニュアンスの違うタイトルだ。俄然、興味が湧いてきた。ページをめくる。文体もぱつと見で改善された。冒頭は同窓会で一〇年ぶりに再会した旧友とのシーンで始まる。

麗葉は机で文庫本を、草加部さんは安楽イスでハードカバーの本を広げてる。

やれやれ。とても片付けをする雰囲気じゃない。頭のスイッチを切り替えて僕はイスに深く座り直した。

立神荘士という男(後書き)

次話更新予定は明日(11/11)です。

Next:「刃中の羽虫・再会シーン」

## 「刃中の羽虫」再会シーン（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなく、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」「や」「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

## 「刃中の羽虫」再会シーン

俺を含めた三人は秀才トリオとして知られていた。表面は友達面をしていても胸の内ではライバル心を燃やしている、そんな仲だった。試験の点数で勝てばそんなこともあるさと慰めつつ優越感を得て、負ければお前には負けるよと感服しつつ嫉妬する。

俺にとって一番充実していた時代だった。

「貫井、お前どこで働いてんだよ」

「ああ、俺か？俺はちよつとIT関係の部長をさせてもらってるよ」

「二十代なのに部長かよ。さすが秀才トリオの一人だなあ、俺なんか手取り二十万のサラリーマンだぜー」

名前も顔も覚えていない男に肩を組まれる。二次会の席でだいぶ酔っているようだった。いったい何人に同じ質問を受けたか分からない。

全部嘘だった。IT関係の部長？現実にはフリーターだ。おまけにかつての自意識が邪魔をして転々としている。必死に時給で働いて得たお金は今日着るための高級ブランド服へ注いだ。おかげで明日からはメシ代を一日五〇円にしなくてはいけなかった。

離れたテーブルへ目をやる。意識してかせずか、かつての秀才トリオは一言も言葉を交わしていなかった。俺と同様に人気者で、彼らを中心に人が集まっている。

「岩辺は国立大教授、田中は内科医だとよ。やっぱりエリートは違うよなあ、俺ももつと頑張りや良かったぜー」

訊いてもいないことを男が話してくれた。正直、助かった。話しかけるタイミングがなくて二次会に来てしまったのだ。本当は一次会で早々に帰りたかった。朝早くにはバイト先に向かわないとならない。

しかし聞かない方が良かったかもしれなかった。身なりや立ち振

る舞いからして他と逸している。順調な人生を歩んでいるのは一目瞭然だ。脱落したのは俺一人。

明日仕事だからと席を立つ。二人と目が合った。お疲れ。短い言葉を交わし、もう二度と会うことはないだろうと思った。襖を閉めると俺をネタに話すのが聞こえてきた。あいつ部長だってよーすげーよなーあははは。

再会は早かった。食費も顧みずにやけ酒をし、目を覚ましたのは公園のベンチだ。慣れない街だった、どこをどう来たのか分からずに道行く新聞配達員に駅を訊いた。知っている顔だった。内科医の田中だ。

なんでお前が新聞配達を？ 発した声は工事現場のドリルに掻き消される。合間に、おーい岩辺ーこっちも頼むー、という男の呼びかけが聞こえた。まさかと思って二人して見る。

国立大教授をしているはずの岩辺だ。

近づいた俺と田中に気づいて混乱と焦燥をミックスした複雑そうな表情をする。おそらく俺もそんな顔をしているのだろう。

「俺、フリーターなんだ。今日もこれからスーパーの店頭販売する予定」

「僕は見ての通り新聞を配達してる、住みこみでね」

「俺は日雇いの現場作業員だ。毎日あちこち引つ張り回されてる」  
それぞれがそれぞれを指差し、ほとんど同時に吹き出した。笑いはやがて溜め息へ変貌する。あの時代、あんなに頑張ってきた秀才トリオ全員がくだらない立場にいる事実を認めたくなかった。ぶつけようのない怒りがやがて互いを奮い立たせようと叱咤する。

「なにかどでかいことをやってやろう。馬鹿で低能にはできないことだ。俺らが三人集まればで、なんでもできる！ そうだろ！」

俺の四畳半アパートに集まった。ワンカップ酒を飲み交わしながら岩辺が、やっぱり金だ、と言った。同感だった、お金はなによりも分かりやすい。田中も安い眼鏡の位置を直して肯いている。

それが銀行強盗を企てる発端だった。

「刃中の羽虫」再会シーン（後書き）

次話更新予定は明日（11/12）です。

Next: 「季節外れに鳴る風鈴」

## 季節外れに鳴る風鈴（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなく、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」「や」「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

## 季節外れに鳴る風鈴

読み終わった原稿を閉じる。興奮がなかなか冷めてくれなかった。小説を読んでこんなに胸躍ったのは久しぶりだ。麗葉の作品以外を讀んでなかった最近だったが、それにしたって面白いと言えた。

気になる点もある。一つは後味の悪い終わり方になってる点。もう一つは犯罪を許容するような印象である点。一般には受け入れられないだろう。だけど、安易に自分が評価を下していいものなんだろうか。文章もストーリーも格段にレベルアップしてる。本になって書店へ並べられててもプロが書いたと知れば納得してしまえる内容だ。

「良ければ感想を聞かせてくれないかね」

「ああ、うん。面白かったよ。終始どきどきしっ放しでさ。でも、なあ」

僕は気になるところを指摘する。麗葉の無表情に変化はなかった。近頃は分かってきた、いまは落ちこんでる、気にしてないふりをしてる。

「そうかね、ありがと。少々検討してみるよ」

彼女は原稿を片手に座り、読み直しを始めた。いじめたような罪悪感が芽生える。自分より小説の上手い知り合いがいればなあ、と頭の後ろで手を組み、折り畳みイスへ体重をかけた。

「あ」

思い出した途端に後ろへ傾き、積み重ねられた本の山を崩してしまった。麗葉が冷ややかな双眸を向ける。

「あまり散らかさないでくれたまえ」

へいへい悪うございましたね。既に限界ライン超えて散らかってるように見えるんですけどそれはきつと気のせいですネチクシヨ！。「じゃなくて、一人いたんだよ。俺よりも小説上手い人、知り合いで」



「伊吹よりも？」

「中学時代に新人賞の二次通過はしてたよ。いまごろプロだったりしてなあ」

「大先生なのか！」

「いや分かんけど、きつとちゃんとした批評をしてくれると思うぜ」

うちの中学に文芸部はなかった。力を貸してくれたのが同級生の上戸澄恵さんだ。中一にして僕は部長、彼女が副部長だった。実力はずつと上で、部長を譲ろうとしてもやんわり受け流された。二次選考通過を聞きつけて入部希望者が増えた二年の夏まで二人っきりの部活動だった。

「どこだね、どこにいるのだね」

「そんな息荒げるなよ。確か私立の西王義塾大学付属高等学校に進学したって聞いたから、いまごろ学校にいるんじゃないか」

「よし行こう」

「はあ？ ちょ、ちょっと待て、行くって学校かよ」

「なにを寝ぼけているのだ、当然だろう。善は急げさ」

「急がば回れを無視しちゃいけないと思う人ー、はーい」

卒業後、進学してない僕は会いにくくて、年賀状にも返事をしてなかった。部活の後半は任せっきりだったのもある。どの面を下げて再会しろってんだ。面識のない人間の小説を批評してくれなんて頼む凶々しさも持ち合わせてない。

「俺にもな、色々事情がな」

「知らん、行こう」

あつさり却下ですか、そうですか。

「だいたい電車で行くには遠いぞ。退勤ラッシュにあたったら最悪だ」

「先日修理で戻ってきたマイカーがある、運転は私に任せるのだ」

「あんた一六歳だろ、捕まるっての。俺も無免許だし、ぶつけた前科あるし」

「細かい男だな、モテないぞ」

「俺は警察にはモテたくないの」

麗葉が大きく息を吐いた。アメリカンな動作で肩を竦め、首を振る。駄々っ子を世話する大人を演じてるようだ。年上の面子が丸潰れだった。間違ってるのは自分なんだろうか。

自然の成り行きで運転は草加部さんがすることになった。日給減額をネタに嫌がる僕は車に押し詰められた。容赦なく景色は後方へ流れていく。車中、麗葉の母親殺しについて訊こうとしてやめた。聞いたってどうにもならない、変わらず彼女に雇われ続けるだろう。校門の近くに車を止める。駐車場が見当たらずに草加部さんには待つてもらった。

生徒が楽しげにしゃべって下校している。どいつもこいつも高校生生活を満喫してますって言う顔だった。僕だってお金さえあれば一段ランク下の高校ぐらいは通えた。お前らが偉いんじゃないぞ、お金のある家が偉いんだ。経済の要を失った相原家には無理が利かない。事故さえ起きなかったら、それなりの高校ライフがあったんだ。校門をまたぐと通り過ぎる生徒がこっちをちらちら見ながら小声でなにかを言ってる。馬鹿にしているのか。歳はほとんど同じなんだぞ、制服着ればそれなりに見えるんだ。

どうしたのだ、という麗葉の問いかけになんでもないと返す。肯いた彼女が頭を指差した。

「ところで、そのニット帽は似合っていないね」

「うっさいなあ、いいのがなかったんだからしょうがないだろ。豊浜トンネルより深い事情があるんだよ」

途中の店で買った物だった。デフォルメされたサメの目が前方に接着されてて、後頭部にかけては尾びれがよつきり突き出てる。茶に染めた髪をすっぽり隠すには都合がいい。デザインを除いて気に入った。

職員玄関の窓口へ尋ねた。三年の上戸澄恵さんいらっしやいますか。あ、俺、中学の同級生で、彼女に用事があった。疑わしい顔つ

きだったおじさんが上戸さんの名で変貌し、愛想良く呼び出しの放送をかけてくれた。約二千人の生徒を抱える有名校で有名な彼女は超有名ってことだ。自分のことじゃないのに嬉しくなった。

スリッパに履き替えて応接室へ促される。黒皮のソファーに大理石風のテーブル、高そうなでかい壺。VIP待遇に気後れする。彼女が帰宅してるのを祈った。一〇分しても来なければ帰ろう。

「優秀な大先生のような、ますます会うのが楽しみになった」

「俺の同級生で同じ部活だったからな」

胸を張ってみせる。二人並んで部員の前に立ってたのが嘘みたいだ。片やエリートコースで、片やチンピラかぶれのフリーター。差が激しいってもんじゃない。

恥ずかしさがネズミ講式に増えていく。たったの数分が堪えられなくて起立する。

「俺、やっぱり草加部さんところで待ってるや。ここまで来れば大丈夫だろ、俺の名前出せば分かるからさ。てことで、それじゃっ」

健闘を祈り、敬礼をした。

麗葉の目はなぜかこっちに焦点が合ってなかった。僕の肩越しになにかを見てる。

「退却するには、やや遅かったようだね」

ドアに立つ気配を感知する。僕はニット帽をずり下げて目元を隠した。

「俺は怪人ジョーズマン！ それじゃ麗葉、失礼のないようにな！」

「相原君、でしょう？」

横を抜けたときにはばれてた。なんなら振り向いたときに「あ」の音が出た。そうです、僕が相原伊吹です。強引に押し通すのも変な奴になったと思われそうで観念した。染めた髪が見えないよう気を遣って目元を出す。

彼女は中学時代には結ってた髪を下ろし、大人っぽくなった。

前髪を留めた赤のヘアピンはキュートさを演出してる。自分が子供に思えた。

上戸さんが微笑する、再び怪人ジョーズマンへ変身したくなった。双方の紹介はそこそこに早速用件を切り出す。いまなにやってるの？ そんな質問をされなくなかった。厚かましく麗葉が作品を渡す。ごめんなーこいつ変な奴でー、と言いつつ本をオゴってあげたくなった。僕の顔をどうか立ててくれますように。

「受験もある忙しい時期だろうから、無理なら無理でいいんだ」

「いいの、大丈夫。私、留学が決定してるのよ」

「へえ、留学かあ。さすが上戸さんだなあ」

遠い、すごい。経歴も物理的にも離れていくのを感じた。

「比佐さんの小説も読んでみたいもの」

それを受けて、麗葉が勝ち誇った表情をした。

「伊吹と違って大先生は太っ腹なのだよ」

むかつく。

「けれど委員会の仕事があつて。他のみんなは勉強してるでしょう、私がしつかりしないといけないの」

「ああ、いいんだ。読んでくれるってだけでもありがたいんだし。

暇なときに読めばいいよ、どうせド素人の小説だし」

ドの音を強調する。麗葉は唇をへの字にした。

「日給二千元」

「生意気でしたごめんなさい」

彼女のもとにいなきやいけないなら賃金は多い方がいい。立神に狙われて辞められないことを知ってて弱みにつけこまれてる気がするのは考えすぎだろうか。

ふと気づく。上戸さんも麗葉に関係する人物と見なされるんじゃないか、と。短期間なら大丈夫か？ いやいや、偶然にも立神が監視してたらどうする。奴の組織員が何人いるか見当もついてないんだ、あり得る話だった。

突如カーテンを閉める僕は変態じみてたかもしれない。それもこれも上戸さんを守るためだ。例えば変人に思われようと大義名分を背負ったいまだんな奇行もお手のもの。

「現代の若者の行動は理解に苦しむ」

「誰のせいだと思ってるんだ、二歳年下の若者よ！」

麗葉は首を傾げるとぼけてる。どっと降りかかる疲労感を打ち消してくれるのは上戸さんの声だと良かった。希望は叶わない。

廊下で少女の悲鳴がしたんだ。違う意味で怠さが抜ける。胸に住まう予感の虫が騒いだ。クソゲームの空気が漂い始めてる。悲鳴の度合いはゴキブリ出たとかネズミ出たとかのレベルじゃない。震えを振り切って率先してドアを出る。なにがあっても上戸さんは無傷にさせないといけない。

いくつか離れた教室らしき前で女生徒が壁に背をつけてなおも後退ってる。容易に近づくべきじゃなさそうだ。一歩ずつ辺りを窺う僕をさつさと麗葉が追い抜いた。あんたが行ったら上戸さんが一人になるじゃんか。

一人にさせるのは危険だ、嫌というほど味わった。真つ当に生きる彼女を放つては置けない。顔を出して心配そうにする上戸さんを先導し、麗葉についていった。

女生徒は上戸さんが話しかけるとしがみついて泣き、教室の中へ指先を向ける。

黒板がある。机やイスはない。壁際にはダンボールやポスター、文化祭で使ったらしい看板なんかがあった。主に教材置き場の役割をしてるんだ。

空いたスペースに人間が浮遊してた。窓が開けられてカーテンを大きく波打たせてる。強い風が人間を揺らし、影になった床に雫をこぼす。水溜まりはアンモニア臭を風に乘せて鼻を刺してくる。

蛍光灯で縛られたロープが軋んで人間をゆっくり回転させた。スーツ姿の男が顔を見せる。異様なほど長く垂らされた舌がグロテスクだ。一際激しい暴風が吹き、男に振り子運動をさせた。倒れたイスを見るに、自殺だろうか。

「名取先生」

女生徒をあやし終わった上戸さんが口元を押さえて悲痛な表情を

した。文芸部の顧問なのだという。

「自殺か。死んでから間もないな、尿も温かい」

ハンカチで手を拭い、麗葉が室内を調べる。

「他殺の可能性はないのか」

立神の影がちらつく。

「考えにくいね、見る限り極自然さ。丁寧に遺書まで用意してある、筆跡が合えば確定だね」

黒板のチョーク置きに立てかけられてた封筒をはためかせる。

「私、先生の字は分かるわ。ワープロを使わない人だったの」

遺書をバトンタッチして上戸さんが中身を開く。内容は仕事の苦と妻への謝罪だった。達筆で、特徴のある字だ。

「先生の字よ」

上戸さんが瞼を閉じると一筋の涙が流れた。近くの僕に顔を寄せてくる。反射で抱き留め、不本意にもどきりとした。男の幸せを噛み締めて繊細で柔らかな髪を撫でさせてもらった。

なるべく現場は荒らさぬが吉だ。警察に知り合いがいるのをアピールしたくて森里さんへ電話した。宅配ピザ屋に見習ってほしい早さで彼は来た、ゴールデンレトリバーのタロさんを連れて。

「比佐麗葉、まさかやったのは君じゃないだろうね」

「馬鹿者、自殺だ。私にはアリバイもある」

「鵜呑みにはしないぞ。こんなこともあるつかと強い味方、タロさんを連れてきたんだ」

森里さんが下ろした遺体の匂いを嗅がせる。ほくそ笑み、タロさんを放った。麗葉の前へ来て止まる。

「お手」

素直に従った。

森里さんが絶叫する。

「よしよし、偶然持ち合わせたタマネギをあげよう」

「なんでそんな物を!? いやそんなことより、タロさんになにか恨みでもあるのか! 犬に食べさせたら中毒症状を起こすんだよ!」

「私は犬が嫌いでね」

くつと呻いてリードを引き、タロさんを抱き締める。

「さすが犯罪者、犬殺しなんて雑作もないってことか。いつか絶対逮捕してやる」

「何度も言わせないでくれるかね。私は警察に捕まるぐらいならば死を選ぶさ」

第一発見者の女生徒を初めに事情聴取が行われた。次が上戸さんで、残った応接室の僕達に言葉はなかった。制服警官が一人見張りで立ってて麗葉もおとなしい。なにかを考えてる様子で行ったり来たりしてる。教師の自殺は他殺なんだろうか。

上戸さんが戻ってきて僕と交代する。隣の空き教室の戸を開けた。簡易取調室が学校の机とイスで作られてる。森里さんの背丈に合わなくて小さく見えた。横ではタロさんが鼻水を垂らしてお座りをしてる。

「なんでタロさん連れてきたんすか、鼻炎なのに」

「署の警察犬は他の事件で駆り出されててね、汚名返上にいい機会だと思っただ。タロさんは引退するにはおしい警察犬だよ」

鼻の利かなくなった犬にどんな利用価値があるんだろう。そうっすか、と適当に相づちを打った。事情聴取はありのままに告げた。

目新しい情報はなかったようで、森里さんは冴えない顔だ。

「麗葉なら違う点に気づいてるかもしれないツスよ」

「犯罪者の言うことに信憑性はないよ、念のため訊くけどね」

「母親殺しだからですか」

どこでそれを、と彼が驚く。かまかけ成功、どうやら本当のことだったらしい。

「麗葉から離れるよう警告したいなら、詳しく教えてくれないツスカ」

考え、肯いてペンを置く森里さん。タロさんの頭を撫でて伏せをさせた。

「あれは僕が刑事課に配属された三、四年前のことだね。あのコは

自らの手で母親の比佐香葉子さんを殺害してるんだ。幼少時代からのスパルタ教育は虐待めいてたつていうから動機はそんなところだろうね。肉親であろうと動機が揃いさえすれば誰であつても牙を向けるような人間なんだよ」

「犯罪者つて断定してるわりに罰したりしてないツスよね」

「年齢の問題もあるけど、なによりも物的証拠が一切ないんだよ。殺人に始まり、あらゆる法律違反行為に証拠なし。刑事責任の問える年齢になつていてもお構いなしだ、彼女のためにも早いうちに捕まえないだけどね」

短髪の頭を掻き、

「相原君、手がかりはないかな。身近にいる君なら知る機会があるだろう」

高利貸しを思い出す。

「知らない、知らないです。至つて普通の奴ですよ」

告げ口で麗葉が逮捕されちゃまずい。警察に売つたと思われて立神に殺されかねなかつた。

「でも他にも殺人を犯してるなんてことはないツスよね」

「どうか。疑わしい殺人事件はいくつかあるんだよ、最近でね。」

その冷酷さは立神と肩を並べるほどだと思つてる。他にも世間に知られてないものがどれだけあるか怪しいよ」

「いやー、でも麗葉にこだわるとより他の犯人追つた方がいいんじゃないツスかね。ほら、指名手配されてる銀行強盗とか」

「もちろんだよ。でもね、刑事になつて初めての事件だつたんだ、こだわらずにいられないよ。若い年齢で殺人を犯すのもそれなりの理由があるだろうし、更正させてあげたいんだ」

深刻な物言いと麗葉の人物像がいまいち噛み合わなかつた。立神と同列に扱つほどのサイコ人間とは到底思えない。なにかの間違いで麗葉は疑われてるんじゃないのか。きっと高利貸しやら細かい法律破りをちよこちよこやつてるせいだ。

応接室に戻ると、そつだ、と麗葉が手を叩いた。



「やはり気になる。上戸、死んだ教師の住所を知っているかね」

「どうしたの。先生の自殺に関係することかなにか？」

「ん？ ああ、そのことはどうでもいいのだよ。他殺だろうと自殺だろうと知ったことではない」

「ぞんざいな言い様に上戸さんの気分を害したんじゃないかと不安になった。」

彼女は気にしたふうでもなく、じゃあなんで、と訊き返す。

「文芸部の担任をしていたのなら相応の腕前なのではないかと思っ  
てね」

「そんなことずっと悩んでたのかよ」

「確かに先生は過去に文芸誌で賞を獲った経験があるけれど」

麗葉の唇がにんまり弧を描く。

「私の勘は素晴らしいな。そうだろうそうだろう、よし案内してく  
れたまえ」

「て、まだ事情聴取受けてないだろが。今日は立神の仕業じゃない  
んだからな、とんずらってわけにもいかないんだぞ」

「いつから真面目になったのだね。きつと創作に重要な秘密がわん  
さか見つかるよ」

「だからって事情聴取もしないで亡くなった人の物を漁るのはどう  
かしてるだろ」

「心配無用、上戸が貸していた本を返しにもらいにきた、とでも言  
えばいい」

「そういう問題じゃなくて、奥さんだって心の整理ついてないだろ  
うし、駄目だろ、そういうの」

「そうかね、と甚だ疑問のように口を尖らせる。

「警察のすることなどたかが知れているのだよ、無駄な時間だと思  
う」

「たかが知れてて悪かったね」

森里さんだ。麗葉の頭に大きな手のひらが置かれる。背丈の低い  
彼女を丸ごと掴みかねないイメージがあった。

「なかなか来ないと思ったら警察の悪口とはね。いったいどこへ行くつもりかな」

麗葉が舌打ちをする。これで良かった、亡くなった当日に訪問するのは非常識が過ぎる。

上戸さんとは事情聴取が終わる間、少し話した。なんと小説家デビューをして既に何作も出版しているという。校内で名が知られているのはそのおかげもあったんだ。小説を離れてた僕は疎くて申し訳なくなつた。帰りがけ、学校にあつた著作物を僕と麗葉に一冊ずつ貸してくれた。

花壇沿いにあるベンチに女子生徒が二人座つてる。花も恥じらう乙女が大口を開けて笑つてた。六十五点と七十三点。無意識で点数をつける。中身はそこらを歩くコと差異なくとも身だしなみをしっかりしてる分で割り増しだ。

前を通りがかり、会話の断片が聞こえた。自殺についての噂話だ。上戸さんの名が混ざつてた。校門近くまで歩き、麗葉の肩を叩く。「悪い、あのコ達に訊きたいことがあるんだ。車で待っててくれるか」

「君も好き者だね。早く済ませたまえ」

盛大な勘違いをされる。背を向け様の眼差しは軽蔑の色を含んでいた。弁解の余地はなかった、どう取り繕つても言い訳めいてる。

小走りにベンチの後ろへ回つた。

「てか、上戸が自殺すれば良くない？」

「言えてるー。ちよつと綺麗で頭いいからってさ、何人の男餌食にするつもりなんだか」

「もしかして先生つて上戸と付き合つてたんじゃないの、文芸部の担任でしょ」

「絶対そうだよ。それで酷いふられ方してー、自殺、みたいな」

「上戸のことだから奥さんにバラすとか言つて脅迫してたんじゃないの」

「それ超悪女じゃん。生徒と付き合つてるつてなつたら百パーセン

ト懲戒免職だもんねえ。お金一杯もらっただらうなあ」

「あたしもやってみようかな」

「あんたじゃ無理無理」

「なんでよ！ こいつ！」

キヤハハハハハ。

会話を聞いてなければ青春を謳歌するじゃれ合いに見えただろう。内容といいしゃべり方といい、すぐにでも殴ってやりたい気持ちになった。いや、女のコじゃなければ殴ってる。こういう心のねじくれた人間はろくな生き方をしない。不自由なく学校生活送ってるくせしてなにがそんなに不満なんだ。

ぐつと堪える。

女生徒の間へ入って肩を組んだ。

「君達可愛いね。ちょっと話さない？」

かつて練習に練習を重ねたスマイルに、二人は頬を染めた。よくうに見えた。まあナンパで鳴らした僕にかかれば平均点の女の口を落とすのは朝飯前さ。

「いいですけど、一つ言ってもいいですか」

「ん？ なに？ 彼女は大募集中だよ」

一人が指差す。

「ニット帽、ださい」

やっぱり殴ってやろうと思った。

**季節外れに鳴る風鈴（後書き）**

次話更新予定は明日（11/13）です。

Next: 「従順な持ち主不在物」

## 従順な持ち主不在物（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしています。

よろしくお願いします。

## 従順な持ち主不在物

「待った？」

「うっん、私もいま来たところ」

待ち合わせの公園でベタな言葉を交わす。上戸さんは休日なのに制服だった。私服姿を見れなくて残念だ。CDレンタルショップの袋で包んだ本を返す。彼女の書いた物がつまらないわけがない、僕は絶賛した。褒め殺しの刑を浴びせると照れて頬を緩め、首を小刻みに振った。思わず追い打ちをかけたくなる。

適当なベンチに並んだ。彼女の視線は僕の頭上にある。グレーのニット帽を新調したんだ。オシャレで恥ずかしくないし、染めた髪も隠せる。

「そっいえば相原君、髪を染めたのね」

ベンチをずり落ちそうになる。買い換えた意味が泡となって消えた。しかも染めることについて気にしてないようだった。そうだよな、上戸さんだもんな、そんな小さい部分で嫌ったりしないよな。「サメのはどうしたの」

「ああ、あれ。あれは不評でクローゼットに詰めこんだよ」

本当はゴミ箱にダンクシュートしたのを綾木が拾って、いまごろは又イグルミワールドへ仲間入りしてるだろう。グッバイ怪人ジョーズマン。ありがとう、怪人ジョーズマン。君の勇姿は忘れない。また会う日まで、さようなら。

「私は似合ってると思ったのになあ」

お帰り、怪人ジョーズマン。僕は君とともに歩もう、世間の非難をぶっ飛ばせ。どういう意味で似合ってるかはともかくとして、又イグルミワールド脱退は決定した。なかなか個性的でチャーミングな一品だ、捨てるなんてでもないじゃないか。ああそうともさ。

小鳥がさえずる。日向がぼかぼかしてて気持ちいい。特になにをするでもないのに二人でいるのが心地良かった。古くからの知り合

いというか、中学の三年間しか近くにいなかったけど、間を埋めるよう気を遣わなくてもいい人間はそういない。

「昔は相原君って『僕』って言ってたよね」

あ、ああ、うん。

しまった、一人称には配慮が行き届いてなかった。外見ばかり整えて、僕は馬鹿か。

悪い仲間に舐められたくないという幼稚な発想で強制的に変えたんだ。初めて「俺」を口にしたとき、白々しく響いて自信を失い欠けた。特に問題はなかった。僕が「僕」と言うのを知ってる者はそこにいなかった。いつしか口に出すときは「俺」が定着してた。

指摘され、またもあのときの感じが甦る。

「変、かな」

「そんなことない。男らしいなって。相原君、大人っぽくなったものの。背も伸びてるし」

「上戸さんこそ、女らしくなってるよ」

「昔は女らしくなかったってこと？」

上戸さんがほんのり頬を膨らませてすねてみせた。僕は慌てて、いやいやそうじゃなくて前よりずっと女らしくなったってことだよ、と早口に付け加える。彼女が吹き出す。ごめんなさいからかっただけよ、と言つて僕の腕を軽く二度叩いた。すっかり振り回されてる僕は彼女を前にすると駄目になるようだ。もっと駄目になりたかった。

すぐ横で深い溜め息がされる。上戸さんの反対側でだ。

「遅いぞ、麗葉。待ち合わせ時間と場所決めたのはあんただろ」

「ああ、そうだったかね。すまなかった」

猫背気味で声も沈み、剥き出しの本を上戸さんへ渡した。じゃあ行こうか、と歩こうとするのを止めて感想ぐらい言ったらどうだと問う。面白かった、と一言だけ返ってきた。上戸さんに僕は謝った。「私はまだ比佐さんの小説、まだ読み終わってないの。少し待ってもらえるかな」

「ああ、そうかね。まあ適当にしてくれたまえ」

頼んだのは自分なのにその態度はないだろう。ここで怒るのは大人げないと思われるかもしれない、事務所に帰ったら往復ビンタをする勢いで注意してやる。

気分を損ないながら公園近くにある教師の家へ向かった。住所を教えてもらっても良かったんだけど、上戸さんというワンクツションは必要だった。彼女の貴重な休みに合わせて訪れることにしたんだ。なのに、こいつは……。

ドアを開けたのは物腰の柔らかい奥さんだった。上戸さんは通夜で会ってみたいで、先日はどうも、と挨拶をする。

丁寧にスリッパを用意してくれて階段へ案内された。

「あの人、私に一言も相談してくれなかったのよ」

遺書には、教師の多忙さや風当たりなどの強さを苦にしたと書いてあった。奥さんは日々の生活で気づけなかったんだ、余計に辛いだろう。思い出したのか、目元で輝くものを腰のエプロンで拭い、部屋を開ける。

「主人が借りてた本を取りに来たんだったわね。といっても見えての通りなの、悪いけど探してくれるかしら」

事務所に負けず劣らずの本が棚へ綺麗に並べられてる。小説が圧倒的に多かった。

「良かったら好きな本を持って行って。私も読書するけど、あの人との思い出が多すぎて逆に負担なの。上戸さんやそのお友達に持っていってもらうならあの人も喜ぶと思うわ」

麗葉の前髪の前で瞳が光った。早まるな。

唐突に奥さんが笑う。

「ごめんなさい、思い出しちゃって。あの人いたらおかしいのよ。興奮して帰ってきたと思ったら『すごい生徒がいる、将来きつと文芸界を支える』って子供みたいにはしゃいでたの。上戸さん、あなたのことよ」

彼女は俯いて奥さんの言葉に肯いた。



ドアが閉められる。早速、麗葉が本棚を漁り始めた。

「思う壺とはこのことを言うのだ」

「いつか罰当たるぞ。むしろ当たれ」

僕もなにかもらっておこうと思っただものの、麗葉のようにには割り切れなかった。死人の所有物をもらうのは躊躇われる。彼女は既に五冊をチョイスしてた。長丁場になりそうだ。

「先生の本。比佐さん、読む？」

「ふむ、一応もらっておこう」

二人はそんなやりとりをしてた。完全に本来の目的を見失ってる。暇だ。プラズマテレビがあり、僕はその前に陣取って電源を点ける。時間が時間で、主婦向けのワイドショーぐらいしかやってない。なにかないかとテレビラックを探る。番組を録画したらしいDVDがずらりと並んでた。一枚を抜いてタイトルを見る。僕が生まれる前からやってる時代劇だった。

ドアが開く。奥さんがお盆にジュースとクッキーを載せてる。勝手に関係ない物をいじってたのが目撃されて、すみません、と元に戻す。彼女は、いいのよ、と言ってジュースを渡してくれた。

「あの人が好きだったのよ、その時代劇。毎日のように録画しててね」

「時代劇は私もたまに観る。あれはいいものだ」

クッキーへ飛びついたのは麗葉だ。三枚を一度に頬張ってハムスターみたいになってる。金持ちのくせにいやしい奴だ。

「腹が減っては戦はできぬ」

DVDプレイヤーの取り出しボタンを押すと中には既にDVDが入ってた。再生をする麗葉。やりたい放題だ。

お決まりのオープニングテーマ曲が流れる。彼女はそれをじっと見つめた。ワンパターンな内容のどこが面白いんだろう。

「毎日？」

質問に、奥さんが戸惑う。なにを訊かれたのか分からなかったんだ。

「毎日録っていたと？」

「ええ、確か平日の夕方には毎日やってたはずよ」

「旦那さんが亡くなった日もかい」

「ちよつと待ってて、当日の新聞を持ってくるわ。何話目か書いてあると思う」

画面は曲が終わり、右下に二十六話と表示された。

「そんなもん知ってどうすんだ」

麗葉はクツキーを重ねて威勢良く噛み締めてる。

「分からないかね。夕方という教師は学校にいる時間さ、録画予約を設定しているだろう。もし当日もそうしていたとしたら珍妙だと思わないかね」

ジューズを飲む間も時代劇からは目を離さない。

「これから死のうとする人間が録画予約をするのはおかしい」

「でも学校で感情が爆発したのかもしれないじゃんか」

「それも有り得る。だが可能性も出てくる。私は現場を見て完全に自殺だと思いきんでいたのだよ。疑いが出たのなら、それ相応の見方をしなくてはならないさ」

奥さんが新聞を持ってきた。何話だね、と麗葉が訊く。

「二十六話と書いてあるわ」

「他殺、か」

彼女の呟きに新聞が落下した。

あの日、時代劇は予約設定されていた。これから死のうという人間がだ。幽霊になっても観ようと思っただんじやないだろう。確かに自殺濃厚だとしても疑問は残る。

「行くぞ、伊吹」

行くつてどこに。訊くまでもなかった。

麗葉が名刺を奥さんへ渡す。

「本はその住所に送ってくれたまえ。着払いで構わない」

部屋の一部でピラミッドを築いてるそれを示した。これは持っていく、と教師作の一冊をワンピースのポケットへ入れる。

奥さんは、はあ、と返事するだけだった。

従順な持ち主不在物（後書き）

次話更新予定は明日（11/14）です。

Next: 「完全犯罪は告白する」

## 完全犯罪は告白する(前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

(感想などを公開したくない場合はメールフォームでも受け付けています。

<http://www.formzu.net/fgen.e>  
x?IID#P47878715)

## 完全犯罪は告白する

空いた電車で麗葉はずっと教師の本を読んでいた。しおりを唇で挟み、あごを動かしている。先端には歯のあとがしこたまついているだろう。だんだん紙がふやけてきてる。駅を降りても読書しながら歩く彼女は現代の二宮金次郎だ。横断歩道を赤で渡るうとする。危なかしくてしょうがなかった。

読むのが早く、西王義塾高校に着いた頃にはページが薄くなっていた。休日だというのに上戸さんと同じく制服の生徒がちらほら行き来している。周りと不揃いの服装でいると目立った。背丈のある人は余計にだ。

森里さんが清掃員の男を相手にメモをとってる。近づくと気づき丸めてた背を伸ばした。麗葉が口のしおりをページに挿す。

「なにをしているのだ。警察は自殺と断定したのだろう、一課の仕事ではないよ」

「こつちが訊きたいね。ここの生徒ならまだしも」

ちらつと横目で上戸さんを見下ろした。

「第二発見者を部外者扱いされては困る」

「興味本位で現場を荒らされる方がもつと困るよ。発見者を疑うのは定石だし、まさか証拠隠滅にでも来たのかな」

森里さんだつて今回のことを本気で麗葉の仕業だとは思ってないだろう。ただし発見者だの証拠隠滅だの言い回し自体が自殺のそれとは異なってる。

「警察は他殺の方向でも捜査してるんスカ」

あ、と口を押さえてる。そんなリアクションをすれば肯定してるようなもんだ。

「疑ってるんですね、あれが殺人だつて」

「いや、少し違うんだ。現場状況は疑う余地なし、どっから見ても自殺だよ。遺書も本人の筆跡と断定してる」

じゃあどうして。

森里さんが唸って考えこむ。

「勘かな。奥さんや彼の同僚の話聞いてると釈然としないんだ。他殺なら、きつと成仏できないと思う。人を殺しておいて悠々と生活を続けてる人間がいるのは許せないよ」

暗にほのめかしてるんだろう、麗葉へ向けられた眼光は鋭かった。彼女は鼻で笑って払い除ける。

「いつも言っているだろう、君の行動は自惚れだ。たかが一人の人間が正義を貫いたところで世界全ての弱者は救えない。一部のみを助ける差別は正義の許容範囲だと言つつもりはないのだろう。できないしないことを公言する君は偽善者でしかないのだよ」

「分かってる、僕はちっぽけな人間だ。だけど僕は、僕にできることがあるなら全力でやっていきたい。死にそうな人や自失してる人、悲しい被害者を生む犯罪者も放つてはおけない。一人でも多く捕まえて、一人でも多く助けていきたいと考えてる」

私は捕まらないよ、と忠告をして麗葉は校舎へ歩いていく。僕も会釈してついていこうとするのを呼び止められた。不安げな顔をする上戸さんには先に行かせる。

「比佐麗葉とは関係が続いてるようだね」

「命がかかってますからね。奴が消えてくれない限りは傍にいないと」

「立神荘士か。彼もどうにかしないとね」

口を引き締めて難しい顔をしてる。ところで、と森里さんは紡いだ。

「上戸さんとはどういう関係なんだい」

どきつとした。ここは恋人ですと言っておきたいけど、そうもいかない。中学時代の友達だと素直に応える。

「それがどうかしたんですか」

「被害者について訊くと、みんな彼女の名前を出すんだ。良くも悪くも縁が強かったんだろうね」

悪くも？

「異性関係も活発だって聞いている。最近では死んだ教師との仲も噂されてたほどだ」

話の方向性に不穏な空気が漂い始める。なにを言おうとしているのかはだいたい見当がついた。

「上戸さんが殺したって言うんですか」

「怒らないでくれ、悪気はないんだ。警察はこうやって一つ一つしらみ潰しにやっていくのが仕事だからね」

それはそれは嫌な商売ですね。僕は踵を返す。

「ごめん、気にしないでほしい。それと、いま話したことは」

「言いませんよ。というより、言えないツスよ、そんなこと」

いくら捜査の方法でもあの上戸さんを疑うのは筋違いだ。噂に振り回されるのが警察の仕事なのか。麗葉の気持ちさが微かに分かった。現場だった教室は立ち入り禁止されてなかった。通常の教材置き場として機能を再開してる。つい先日にも首吊りがあったとは思えない。麗葉と知り合って、死体を見たのは二度目だ。彼女には疫病神が二桁はついてるに違いない。

そこには上戸さんしかいなかった。イスに座って読んでいるのは麗葉の原稿だ。読書時に眼鏡を掛けるのが彼女の特徴だった。いつもと雰囲気が変わって新鮮だ。

あいつは、と訊くと文芸部の部室へ行ったきり戻ってこないらしい。向かい側に僕も座った。

「刑事さんとなにを話してたの」

「別にこれといった用件じゃなかったよ」

そう、と静かに背いてページをめくる上戸さん。垂れ落ちてくる髪を耳へ掛ける仕草が色っぽかった。おかしい、女のコと二人つきりになるのは空気の存在みたいに慣れたのに、緊張の糸がはち切れんばかりになってる。顔の表面がどんどん熱くなってく。手が震える。目のやり場に困る。喉が渇く。これじゃ拳動不審者じゃなか。

「懐かしいね」



たった一言の呟きに身が跳ねてイスを鳴らしてしまった。

上戸さんが目を丸くし、優しく微笑した。凝り固まった胸の奥が暖かみにほぐされる。

「文芸部作りたての頃も二人でこうしてたでしょ。なにするでもなくずつと座って、小説読んだり書いたり」

「ああ、そうだったなあ。それで、二年になって部員が入ってきて嬉しかった」

窓際の席を陣取って、よくこうしてた。日が射してて、僕なんかはたまに居眠りをした。そして彼女に起こされるんだ。相原君帰る時間よ、て。か細く揺り動かされるのが気持ち良くて寝たふりを続行したこともあった。

「私は少し残念だった」

え？ 上戸さんを見ると原稿を閉じて顔を上げてた。眼鏡を外してる。澄んだ瞳に吸いこまれそうになる。心臓の収縮が耳朶を打った。

「憧れてたんだよ、相原君のこと」

「俺なんかどうして、もつたいたい。小説も才能ないし、もうやめちゃったし」

急展開に錯乱して腕と首をばたばたさせる。みつともないことこの上ない反応だった。どうしていいか判断つかなくて神経を辿る電気信号がためめに発信されてるんだ。

上戸さんが僕のおぼつかない手に手を重ねる。柔らかくて吸いついた。異性関係がどうのつていう噂があつたとしても、これは例外に決まってる。僕達は古くの絆で繋がってるんだ、昨日今日知り合つたどこの馬の骨とも分からない男と自分は違う。

「心に芯が一本、垂直に立ってたもん。損得関係なく進んでなんでもやって、カツアゲにだつて不利覚悟で向かつていつて、すごかつた。そんな相原君見ると、私もすっかりしよう、て。頑張つていこう、て思えた。いまの私があるのは相原君のおかげよ」

それはかつての自身像だった。申し訳ない気持ちで一杯になる。

急速に心が冷えていった。人は変わって、取り返しがつかないほどに。この澄み渡った双眸はいまの僕に向けられてるんじゃない。

過去の僕。

うん、あいつはいい奴だった、同感だ。くだらない裏社会に染まって汚れてしまうなんて予想だにしなかっただろう。いまや心の芯は捻れ腐り、吹けばばらばらと朽ち果てる。

「ねえ。もう一度、あの頃みたいに一緒にいない？」

一瞬考えた。

「無理だよ、俺は変わった」

彼女はこうして有名私立校に進学してるのに、自分は年金保険料も払ってないゴミフリーターだ。一番なりたくなかった人間になる。バーベル並の文鎮がないと吊り合わない。

それもこれも事故が悪い。西王義塾レベルは無理とはいえ、少なくとも彼女と遜色なく話せるランクの学校には行けた。僕には圧倒的にお金が足りない。

「上戸さんが羨ましいよ」

「相原君は贅沢だよ」

なにか変な言動をしてしまったのか、彼女が俯く。いったいなにが贅沢なんだ。上戸さんはお金も経歴も平均よりずっと高い水準なのに、僕の方が贅沢なんてことがあるんだろうか。

引き戸が開く。麗葉だ。

上戸さんが勢い良く立ち、イスが背後へ倒れた。机の原稿を持って、めちやくちやに破り始める。紙吹雪の舞う中で二人の少女が睨み合うのを僕は呆気にとられながら眺めてた。

「こんな半端な作品、いちいち読ませないでよね。時間の無駄にもほどがあるわ、下手クソ！」

思考が追いつかない。上戸さんが鋭利な目つきで麗葉を罵倒してる、それは分かる。問題は怒る理由だ。僕が教室に来る前に一悶着あったのか、はたまた小説のつまらなさが逆鱗に触れたのか。どちらも理由としては弱い、そんなしょうもない原因でキレたりはしな

い。

「他殺の証拠は見つかった？」

「いいや、なに一つ」

麗葉は戸口に寄りかかり、腕を組んだ。

「それはそうよ、私の計画は完璧なもの。あなた如きに見つけられるわけがない。あの方がなぜあんなにも推すのか理解に苦しむわ」

「立神かね」

「軽々しく口にするな！」

袖口から警棒が滑り出た。金属質な音をさせて伸びる。

僕は夢を見てるのかもしれない。脳がひん曲がってぐるぐる巻きになってしまいそうだ。だってそうだろ、上戸さんが立神を知ってるのは変だ。鬼みたいな形相や声で武器を携えた彼女は彼女じゃない。

たぶん窓際の席に座って寝てしまったんだ。上戸さんが麗葉の小説を読む前で机に突っ伏して眠ってる僕。そして言うんだ、相原君帰る時間よ、て。そうだろ？ そうだと言ってくれ。

「力だつて、私の方が上」

上戸さんが絶叫して突進する。距離は瞬きの間に縮まり、麗葉へ警棒が振りかざされた。腕をクロスしてガードするも、構わずに叩かれる。鈍い響き。両腕を痛みで下ろした彼女。背中が追い打ちで叩かれた。小さな体が折り曲がって転がる。上戸さんはまた容赦なく警棒を上げた。

それを掴んだのは僕だ。足元の麗葉は呻いて起き上がろうともしない。背骨をやられてたらずい、すぐに病院へ行く必要がある。

その前に

睥睨してくる上戸さんは真っ赤にした顔で歯を剥き出しにしている。ほとんど別人だった。

「なんでこんな酷いことするんだよ。こいつがなにかしたのか、気に障ることも言ったか。もしそうなら俺が代わりに謝る。殴られたっていい。上戸さんのこんな姿、見せないでくれよ」

頭を下げると警棒に伝わってた力が抜けた、彼女が離れたんだ。分かってくれた、そう思った。

「相原君もこいつがいいのね」

「なに言ってるんだよ、いいとか悪いとかじゃないって。俺は、別に

」

「比佐麗葉比佐麗葉って、なんなのよ」

麗葉を思いつきり踏みつける。もう一度同じようにしようとするのを間に滑りこんで庇った。ひざまずく僕のみぞおちに足の裏が命中する。

「なんなのよ。そんな女より私の方が優れてるのに、なんで！」

悲鳴めいた叫びを上げて教室を出ていく。気になりはするが、いまは麗葉を病院へつれていくのが先決だ。肩を掴んで抱き起こす。

「私としたことが、油断した」

「無理すんな、どこが痛い？」

腕に触れると彼女は喘いだ。折れてはなさそうだ。ひびぐらいは入ってもおかしくない。肩を貸して立たせようとする。

いきなり指へ噛みついてきた。反射的に手放し、麗葉を落下させてしまう。

「こんなときにふざけてる場合かよ」

「奴が教師殺人の犯人さ。君は追うのだ、私もあとから行く。上戸は許しておけない人間なのだよ」

「はいはい、あとでな」

「私の言うことが信じられないのかね」

「信じるよ、こんな状況なら。自白だっしてしてるし」  
「信じたくないけど。」

「物事には優先順位があるだろ」

「行くのだ。これも仕事なのだよ、雇い主には従いたまえ」

真剣な眼差しだった。行かないと殺すとも言つかのような迫力があつた。

「なんで、そんな」

「つべこべ言わずに行くのだ！」

どこに余力があつたのやら、激しく突き飛ばされる。反動で腕に痛みが走つたんだらう、苦渋の表情をしてる。双眸の力強さは変わらなかつた。

「分かつたよ、行けばいいんだろ行けば」

ちくしょう。教室を出て廊下を走る。今日が休日で良かった、廊下を走るな、と平日だったら教師に怒られかねない。体を倒し気味にし、靴を滑らせながらドリフトをきかせて角を曲がりきる。

上戸さんはどこに行つたんだ。窓を開けて顔を出す。正面には西校舎がある。その屋上に人影があつた。フェンスの金網を握り、遠くを見てる。制服だ。黒髪とスカートが風でなびいてる。

渡り廊下を駆け抜け、階段を上がった。嘘だろ、死んだりしないよな。どうか早まらないでくれ、上戸さん。二段飛ばしで行き、屋上へ出る重いドアを押す。

上戸さん！

呼ぶと彼女が振り返り、微笑んだ。良かった、生きてる。安堵して息が切れてるのを思い出す。膝に手を置き、荒い呼吸をし、唾を飲んだ。

「私のこと心配してくれるのね、殺人者なのに」

「なにが、あつたんだよ。上戸さんが人を殺したなんて、信じられないよ」

横殴りの突風が吹いた。

彼女は顔にかかつた髪を指ですくつて肩へかける。

「知ってる？ 犯罪つて認知されないと犯罪じゃないのよ。指名手配されたり逮捕されたりしてるのは氷山の一角。いまこうしてる一秒間にも表に出てこない犯罪が無数に発生してるの」

覚えがあつた。自分も片棒を担いでたんだ、忘れられない。合法をうたつた薬の売買だった。単に法律で定められてないだけで、いたつて効果は有害だ。中毒性は下手な麻薬よりあつて、廃人化した人間を何人も見てきた。

「世界つて腐ってるよね。世界つていうより、人間かな。この世界の人間は腐敗臭に満ちてる。何人かと恋人ごっこしてみたけど、どいつもこいつも空っぽでつまんなかった」

「だから殺したって言うのか。あの教師が罪を犯してたから？」

「当たらずとも遠からず。今回は、価値のない人間で比佐麗葉との勝負の材料になれば誰でも良かったの」

ファンタジーだ。きっと絶対パラレルワールド。麗葉に会ったあの時、僕は時空の彼方へ飛ばされたんだ。成績優秀で小説も上手い彼女の発言とは思えなかった。オリジナルの世界じゃ上戸さんはエリートコースを歩み、作家として活躍していくつもの賞を総なめにしてる。

僕もそっちに戻りたい戻れない、戻そう。

「自首しなよ。両親だってこんな望んでないだろ。せつかくいい学校に入ったのにもつたいないじゃんか。上戸さんならやり直せる、俺が保証する」

「私のこと気遣ってくれるんだね、嬉しいな。でも」  
満面の笑みをする。街行く男がいちころになる笑顔だった。

「パパとママなら殺したから安心して」  
金縛りにあってしまった。表情が強張るのを自覚する。

彼女が口元に手をやり、こつちを指差して笑い声を上げる。

「おかしいんだ、相原君。そんなに驚くことじゃないでしょ、比佐麗葉だつて母親を殺してるんだもの」

「嘘だろ」

「なにが？」

「もしそうなら、どうして上戸さんはここにいられるんだよ」

「嫌だなあ、いま言ったでしょ、犯罪は認知されなきゃ犯罪じゃないって。あいつらには樹海の中で眠ってもらったの、楽しい楽しい家族旅行だったなあ」

感情が沸々と昇り立ち、爆発する。

「なんで！俺の家よりはずっと幸せだっただろ。学費もあって、

いい学校に進学して、楽しい高校生活を送る。なんの問題があつて、そんなことすんだよ！ それも教師と同じで誰でも良かったのか！ 親だぞ、肉親だぞ、血が繋がってんだぞ！」

対する彼女は冷静だった。息をつき、遠くを見る。

「私は少しも幸せじゃなかったのよ。パパはずっと仕事、ママはブログで知り合った男と浮気。いい子を演じるのは疲れちゃった。実際は醜いのに、形ばかり綺麗に見せてて、この世界と同じ。丸ごと大掃除しなきゃ、あの方と一緒に」

あの方……立神荘士。  
はつとする。

「そうか、上戸さんがこんなことする理由が分かった。俺と同じで立神に狙われてるんだろ。著名人で頭も良くて目を付けられた。試験としてクソゲームをやり、命からがら助かった。それでもなお狙われ、敢えて配下になつて服従するふりして両親や教師を殺した。全ては恐怖を回避するために。立神に追い詰められちゃ誰だつてそうなる、しょうがない。悪いのは立神だ。そうなんだろ？」

「名推理」

じゃあ俺が助ける。

口を出かかった直前に「て言いたいところだけんど」と続いた。

「残念ながら不正解。私は自ら望んでこの道を選んだのよ」

「その言葉も脅されてのものじゃないのか」

「相原君つていつからそんなに疑り深くなったの。全部私の意思よ。今回の自殺騒動も独断で仕組んだの。比佐が来たつて知つて以前から仕掛けてたトリックを使つてね」

閃いた希望は脆くも崩れ落ちていった。教師殺害が立神の命令ですらなかつたなんて、彼女を救う突破口が見当たらなくなる。

「来るつて予測してたつてことか」

「比佐は立神様のお気に入りだもの、いつも監視されてると思つた方がいいわ。食事や服装、嚙り癖、いま熱中してる小説創作。部下がなんでも報告してくれる」

麗葉は小説書きにハマッてる。僕が傍にいる。たまに読んでアドバイスをする。僕は上戸さんの知り合い。上戸さんは小説が上手い。情報が手元に揃ってたんなら、学校を訪問するのは時間の問題だと先読みするのはそう難しくない。仮に直接自宅へ行ってたとしても、後日に学校へ誘えばいい。

「相原君、私と一緒にいよう?」

下の教室で言われたのとは意味合いが違ってくる。この場合、立神の仲間になれっていうろくでもない提案だ。いや、初めから彼女はそのつもりだったんだろう。

「私ね、相原君に運命感じてるの」

「運命?」

「そう。立神様に命じられて拉致したのが相原君だったの。覚えてる?」

忘れるはずがない見事なスリーパーホールド。あれが上戸さんだったとは。

「昔、膝枕してもらった夢を見たよ」

「車停めるまでは実際にしてたのよ。気持良さそうに寝てた」

「上戸さんにあんな腕力があるなんてな。もう一人の女がしたのかと思った」

「もう一人? 誰のことを言ってるの。あの日は立神様と私しかないわ」

「おいおい、恐いこと言わないでくれよ。俺は口ゲンカまでしたんだぜ」

くすつと上戸さんが笑う。

「あれも私」

「声が全然違うじゃんか。もっと大人っぽかっただろ」

咳払いをした彼女は改めて僕を見つめる。名前を呼ばれた。あのときに聞いた艶めかしさを含む声だった。背筋に鳥肌が立つ。目の前にいるのは本人なのに、違う人間が立ってるみたいだ。

「愚かで不毛な人間を一掃しよう。あの方の言う通りにすれば必ず



できる。相原君なら分かってくれるよね、あなたはこの世界を変えたがってた。カツアゲが一件も起こらない世界は素敵でしょう？

ゲームをクリアしたあなたにはその資格があるわ。中学時代、相原君だつて手伝ってくれるつて言ったでしょ、病んでる人を、世界を治すのを」

もし不条理な出来事に遭遇しない世の中になるなら、それに越したことはない。誰もが不安のない日々を過ごせるだろう。暴力や脅迫、殺人、そして事故の発生ゼロ。正に理想的だ。

だけど

「やり方が違う。こんなの望んでない」

そうだそうだ、と乗ってきたのは麗葉だ。いつの間になっていたのか、出入り口の壁に寄りかかり、本のページを開いている。しおりを口角に挟んでた。殺された教師の小説を、そろそろ読み終わりそうだ。

「たかが人間が思い上がるな。所詮、地球にしてみたら害虫ではないのだよ。いつそのこと全滅した方がいい」

「麗葉は黙っててくれ、話がややこしくなる」

目まぐるしく変化した現況に頭は過熱気味だ。水を顔面にぶっかけてさっぱりしたい。

僕は罪悪感に苛まれてた。余計なお節介かもしれない、彼女が助けてほしいと思つてんじゃないのも分かる。でも、中学生だった上戸さんは真つ当だった。学校は離れてても、僕と交流があつたらどうだ。立神にそそのかされるのはたぶん避けられた。違うか？ これは自惚れか？

無駄な考えだ、時間は戻らない。いまを受け入れて最良の選択をする、それが全てだ。

「世界を変えるつて、ちょっとやそこらの人間が集まつてできると思つてんのか」

「せつかちさん。そんなに小さな組織だと思つてるの。立神様には世界中の者が配下についてるのよ」

世界。日本に留まらず、上戸さんみたいな不幸な人間がいる。言

い振りからして企業より大きなネットワークがありそうだ。

「夢幻倶楽部。それが私達の組織よ」

立神もちらつと言つてた名称だった。

「全員が優秀な能力者なの。裏で国を操るボスから表で政治にかかわつてる人間もいるわ。立神様はその気になつて一声かければ、地球がビツクリするでしょうね」

「麗葉にこだわつてたんじゃないんだな」

「当然。その女にばっか構つてられるほど立神様は暇じゃないの。各国を巡つて拡大していったのよ。夢幻倶楽部はイラストリアスを幹部にした天才集団なの。配下の構成員をエミネントと呼んでる。幹部は約二千人。構成員は無数で、日本にも一万近くいるかな。といつても、日常に溶けこんでるからわざわざ教える人はいないわ」

「そんなこと話して平気なのか。俺が森里刑事に話さない保証はないよ」

「心配性だなあ、相原君は。たかが警察に捕まるわけないでしょ。別に逃げも隠れもしてないのよ。みんな家族や友達がいて平穩に暮らしてる、表向きはね」

捕まらない絶大な自信を持つてるんだ。僕は実際に白昼堂々さらわれた。誰かが通報しても良さそうなのに、騒ぎにもならなかった。歩道を行き来してた人間全員がメンバーだったとしたら波風立たないのも分かる。まさか、いくら数が多かつたってそれはないだろう。

「それにね、あの方が目をつけた人間は常に監視されてると思つていいわ。万が一、夢幻倶楽部にとって重大な不利益をもたらすことがあつたら他のイラストリアスが黙つてないかも」

不敵に不似合いな笑みをする。既に上戸さんであつて上戸さんじゃない誰かになつてた。

「覗きかね、嫌な趣味だ」

小説のページをめくる麗葉。残りはほとんどなく、読み終え間近だ。

上戸さんが眉間に皺を寄せて怒気を露わにする。

「あの方に気に入られてるからって調子に乗らないですよ。命令されてなきゃ、あなたなんかすぐにも殺してやるんだから」

「やれるものならばやってみたまえ、負け犬め」

「負けたのはあなたでしょ、一度は自殺と断定したくせして」

また一ページをめくったあと、ワンピースのポケットをまさぐって僕に紙切れを渡した。文章が書いてある、どうやら小説の断片らしかった。

「文芸部の部室で見かけたのだ、作品置き場に自然体で挿入されていた。自殺者の描写が書いてある」

「自殺者の？ それって、もしかして教師の遺書と関係あんのか」

「おそらくは自殺者の心理を表す手本を頼んだのだろう。その一部がああ遺書さ」

真実へ近づく物証が見つかったんだ。

上戸さんは焦りも強張りもせず無表情でいた。

「だからなに。そんな物、なんの証拠にもならない」

「上戸さん、諦めるんだ。もうやめよう、こんなこと。これを辿れば犯人が誰か辿り着く、警察だって馬鹿じゃないんだぞ」

「無理さ」

割って入ったのは麗葉だ。

「これ以上を探してもなにも出てこないだろう。あらかじめ想定していたでも決行できるような計画を練っていたとしても、私がここへ来てからの急な殺害を完璧にこなしてみせた。緻密さと運はお見事としか言いようがない」

「お褒めの言葉ありがとう。立派な推理通りよ、前もって書かせたの。それをストックしておいた。だけど推理止まりね、私が殺したと決定づけられない。なのに、なぜ負け犬なのか説明してくれないかしら」

麗葉は最後のページへ目を落としてる。

「君が早々に真相を明かしたのはなぜか。そのままにしていれば疑

いはすれども特定は無理だっただろう？ そう考えれば必然さ」

「もつたいぶらないで、なにが言いたいのか」

ここでようやく本を閉じ、しおれたしおりを適当に挟んだ。

「私に解かれるのが恐かったのだ。不完全犯罪だと証明されるのではないかと内心は焦燥感に満ちていた。私に破られるぐらいならば自分で明かしてしまおうと思った。つまり心が負けていたのだよ、君は逃げたのだ」

僕が本を受け取ると彼女は歩みを進めた。

「君は重罪を犯した、ただではおかない」

きよとんとした上戸さんは破顔し、

「笑わせないで、あなたも殺人者のくせに。母親殺しの比佐麗葉さん？ 他に何人も殺してるんでしょ。知ってるのよ、警察に嗅ぎ回られてるのを」

「警察も法も関係ない、私の意思だ。君は殺してはいけない人を殺したのだよ」

「あのへボ教師のこと？ そうね、下手クソな小説書くあなたにはお似合いね」

「私は未熟だ。しかしな、君よりも教師の書いた本の方が面白かった。正直なところ、君の作品はつまらなかった」

だから教師の家に行こうとして言い出しつpeg落ちこんでたのか。上戸さんの小説が期待通りじゃなかったんだとすると、その教師にあたる人物の作品にも興味がなくなる。読んでみて全ては覆されたんだ。

僕はまじまじと読了された小説を見つめた。

上戸さんが鼻で笑う。

「その全然売れなかった小説が面白い？ 気の利かない冗談はやめてよ」

「確かに君の本は計算し尽くされていて飽きさせないような内容になってるが、魂を一切感じなかった。あんな物が小説だということなら、私は小説に惹かれはしない」

ゆつくり迫る麗葉を齒軋りしながら睨みつけた。

「根暗女がほざくな！」

風を切って警棒を一振り、突撃してくる。棒立ちの麗葉が構えたのは小さな銃。事務所でゴミに紛れてたデリンジャーだ。オモチャを持ち出したってハツタリにはならない。

彼女が照準する。

本物？

止めに入ろうと地を蹴つても間に合わなかった。発砲。破裂音が木霊し、上戸さんが身を低くする。

無傷。ほっとしたのも束の間だった。

「そんな短い銃身で当たるわけないでしょ」

肉薄した麗葉へ警棒を叩きつけてくる。片腕で庇い、苦痛に顔をしかめる彼女は空いた手ですかさず相手の手首を掴んだ。

ぎゃ、と叫んで武器が落ちた。上戸さんは飛び退き、袖に隠した二本目の警棒を出す。よほど痛かったんだらう、腕をさすってる。小さい手でいて麗葉は握力があるらしい。

再び二人がそれぞれの得物を構える。

状況が動きだそうとした。

僕の横を青い影が疾風となって駆け抜ける。上戸さんのもとへ距離を詰め、勢いそのまま蹴り飛ばした。唾液を撒き散らし、彼女の体がくの字に曲がった。腹を押さえて転がる。

立ってたのは清掃員だった。森里さんが聞きこみをしてた男だ。

黒髪を中分けにし、目が細い。薄く開かれた瞼の奥には黒々とした眼球が光ってた。映るのは咳きこんでる上戸さん。

「勝手なことをするなと何度言ったら分かる。これだからメスは使えないんだ、いちいち余計な感情を持ち出しやがる。俺の片腕になりたくばウルルンを見習え」

彼女は無理矢理に起き上がって深々と頭を下げた。

言い回し、声に覚えがある。こいつは

「立神。私を珍妙なあだ名で呼ばないでくれたまえ、虫酸が走る」

こいつが、立神。森里さんどころか上戸さんまでも気づかなかつたのはやっぱり顔そのものを自在に操る変装のためだろう。身をもつて手強さを感じる。

「久しぶりの再会だっていうのにつれないな。トスミが無礼を働いたせいかな。あとでしつかり教育しておくから機嫌を損ねないでくれ」  
一変して優しい表情と声だった。視線は麗葉へ固定し、膝を上げたかと思うと上戸さんを蹴った。腹の空気を強制で放出し、うずくまる。

「やめる！」

僕は叫んだ。

「ん〜？ 相原伊吹か。伊吹、か」

空中へ視線を彷徨わせた立神が、よし決めた、とこっちを向く。

「今日からイヴと呼ばせてもらおう」

「くらだねえこと言ってるじゃねえよ！ 彼女に謝れ！」

「今回は悪かったな、つまらないことに巻きこんで。また近いうちに楽しいゲームをしようではないか」

改めて分厚い靴底の爪先が上戸さんを捉えた。重く呻き、四つん這いになる。

「クソツ！ やめろって言うてるのが聞こえねえのかよ！」

駆ける。

制止をかけたのは意外にも彼女本人だった。

「いいの、自業自得だから」

当然だ、と言う立神がドアへ向かってあごをしゃくった。黙って一礼し、上戸さんは腹部を押さえつつ力なく歩いてくる。横を素通りした。

「待てよ。あんなことされて、まだあいつに従うのかよ」

「私にはあの方しかいないもの」

僕がいるじゃないか。

出かかった言葉を呑みこむ。自分にいったいなにができる。この落ちぶれた自分に、彼女を救えるのか。不可能だ、なんもできやし

ない。金も権力も地位も、なに一つない。おまけに汚いヤクザ仕事に手を出したプライドのない人間だ。もはや胸を張って言えるセリフじゃなかった。

「ありがとう、相原君。さようなら」  
「だけど！」

上戸さんの背中を追いかけた。彼女が振り向き、急ブレーキさせる。頭上には細長き凶器。額へ向かって振り下ろされる。堪えきれぬ鈍痛が襲った。膝の力が抜けて倒れてしまう。

腕を伸ばす。ドアを開けた彼女の足が校舎へ消えた。すぐ様に暴風が繋がりを遮断する。閉じたそれを前に手を落とした。届かない。麗葉が舌打ちして追いかけようとする。

「おっと、無闇に動かない方がいい。あのメス犬が不審な行動をしているというから潜入ついでに暇潰しで爆弾を仕掛けておいた」

最高だろう、と言わんばかりに両腕を広げる立神を憎々しげに彼女が睨む。

「大層な組織を作ったわりに、ほとんど無差別なテロ屋だね」

「子供の頃、差別はいけません、て教わらなかったか」

反対の校舎で爆発が起きた。遠くで悲鳴がする。一つじゃ終わらない、二つ三つと爆音が連続して響き渡る。階下でも起き、小刻みに足元が揺れ始める。

「深く考えるな、ちょっとした戯れさ。また会おう」

この程度を生き残れないなら僕達は不用なんだろう。

縄梯子が傍らに垂れ落ちてきた。上空にはヘリコプターが待機してる。騒動に隠れて密かに近づいてきてたんだ。奴が足をかけると大空へ急上昇していった。薄ぼんやりした煙に埋まり、やがて消えていく。麗葉が銃を構えるも、屋上にも亀裂が伸びた。立神どころじゃない、命優先だ。

ドアノブを掴む。動かない。ノブは回っても、ドアそのものをおさめる枠がひしゃげて固定されてるんだ。壁に足をつっぱねてみてもびくともしなかった。

麗葉は周囲を見回す。一方へ注目した。

「こつちだ、伊吹！ 雨どいだ！」

なるほど、伝っていけないこともない。屋上は実質で五階の高さだ、危険だが他に逃げ場はなかった。賭けだ。上戸さんがここに来るとは知らなかったはずの立神に思惑はない、爆弾はランダムで仕掛けられてるだろう。雨どい付近で爆発が発生すれば終わり。建物自体がもたなくても生存率は下がる。

運か。クソゲームで語られた忌々しい言葉を思い出す。

爆発はやまなかった。学校を全壊させるつもりかよ。だとしたら雨どいのリスクは大きい。それならどうする、待ってたってジリ貧だ。ここもいつ崩れるか分からない。足元には無数のひび割れが雷柱みたいな模様を描いてる。

古傷が痛んだ。じくじくした疼きで視界がぼやける。脳の局部が圧迫されたようだった。吐き気がこみあげてくる。

麗葉が呼んでる。霞む目を向けた。なんでこんなときに体調不良なんだ。声を発せない。ふらつく足取りで金網を越えた彼女へ近づいていく。急げ伊吹、そう言ってる。早く、早く行かなきゃ。

爆発。麗葉が宙を舞った。金網越しに落ちてく姿が見えた。

「麗葉っ！」

喉が擦り切れんばかりに叫んだ。

「どうしたのだ、突如大声を上げて。とにかく急ぎたまえ」

彼女は金網にいまから指を掛けるところだった。

なんだったんだ、いまのは。考えてる猶予はなかった。向こう側へ行かせちゃいけない、不吉な予感が僕を動かす。

腕を引っ張って降ろし、その場を離れる。

「なにをする、他に雨どいはないのだよ、ぼやぼやしている暇はどこにも」

ほぼ同時だった、見た映像通りに屋上の一部が崩壊する。一際に大きな爆発だ。金網が傾き、連結した部分を巻き添えに地上へ落下していく。



二人して唾然としてた。僕は予感の的中に。麗葉はたぶん僕に対して。

金属の擦れる音がしてドアが開いた。いままで枠が緩んだんだろ。麗葉と肯き合った。

パトカーや救急車、消防車が校内へ集まってる。特殊車両のオンパレードだ。半壊した校舎は地層の断面を見てるようだった。無傷で脱出できたのは奇跡だ。

森里さんが通報したおかげで被害は最小限に済んでる。休日で負傷者が少数出るに留まった。

「上戸澄恵は逃げ遅れた可能性あり。立神は爆弾を設置してヘリコプターで逃走、と」

警察手帳を閉じて落胆する。

幸いにも麗葉の拳銃については言及されなかった。爆発騒ぎに紛れて一発の破裂音は印象が薄れたんだ。僕にもあれが本物か判断が難しい、火薬を使ったモデルガンだってある。なにより彼女が捕まるのは避けなくちゃならない。

「立神荘士が傍にいなから捕まえないとはねえ」

「すみませんでした、色々あってなんもできなくて」

「相原君が謝ることじゃないよ、僕も爆発に気を取られてまんまと逃げられたし。悪いのは、大元の原因さ」

ベンチに座ってアスファルトのアリの足を足でおちよくる麗葉へ目をやる。

「そもそもいまの話聞く限り、比佐への妬みが動機らしいじゃないか。おまけに立神まで出てきてケガ人続出だ。余計な被害を増やさないでもらいたいね、そろそろそれ相応の施設に入った方がいいんじゃないか」

彼女が立ち上がる。無言の圧力に森里さんが一步下がった。

麗葉は丸めた背で校門へ行ってしまう。

「なんだ、いつもなら死んだ方がマシって言い返してくるのに」  
そんな気分じゃないのは察せた。森里さんはあれこれ言うけど、

あいつにはあいつなりの良心がある。悪いのは麗葉じゃない、立神率いる夢幻倶楽部だ。

「どうにかしてくださいよ。こんな好き放題やられて、警察はなんの手がかりも掴んでないんすか」

森里さんは崩れた校舎を見たあと、ベンチへ座った。途端に目線が低くなる。彼は手帳をぱらぱらめくり、口を開いた。

「立神荘士、二四歳、証券会社勤めのサラリーマンと上司の娘のもと東京都にて誕生。いわゆる中流階級の生まれで、誕生日には戦隊物の合体ロボがもらえ、クリスマスには大人の腰丈はあるツリーを買って飾れる家だった」

僕は息を呑んだ。やけに具体的な表現だ。

言葉が続く。

「小・中・高・大といったって目立たず、同級生による印象は“極普通”で成績も中の下、大学卒業後に姿をくらまして現在に至る。父親に教わった為替取引のノウハウを身につけて資金を密かに作り、日常は平凡に、裏では現組織の土台を組み立てながら活動。各国の警察が感づいた頃には夢幻倶楽部の蜘蛛の糸が至るところに張り巡らされていた」

以上、と締めくくった。

予想に反する詳細さだ。素性や生い立ち、過去の行動が丸分かり。「そんな細かい経歴まで分かっているのに捕まえられないなんて」

「見損なわないでほしい、追いつめた例は何度もあるよ。僕も一度立ち会わせた」

じゃあ、なんで。

「邪魔が入るんだ。どこからともなくね。あいつにとっては警察なんていないも同然。幸か不幸か、僕が狙われない理由さ、相手にされてないんだ。いつかチャンスが巡ってくるって信じてる。犯罪者を野放しにして、平和に生きたい国民が被害に遭うなんて見過ごせないからね」

遠くを見つめてる。

当て逃げ犯すら捕まえられないくせに。

「へ？」

「いや、なんでもないツス」

そう、もはやなんでもない。森里さんに当たってもしょうがないんだ。起こってしまった取り返しつかない出来事、全てにおいて後手。

僕はもう一度地層化した学校を見て踵を返した。

**完全犯罪は告白する(後書き)**

次話更新予定は明日(11/15)です。

Next:「超フリーター」

## 超フリーター（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

（感想などを公開したくない場合はメールフォームでも受け付けています

<http://www.formzu.net/fgen.exe?ID=47878715>）

## 超フリーター

大理石で彫り込まれた明朝体には「上戸」の文字。坂の途中に建てられた一軒家は都会に似つかわしくない庭がある。芝に池、松の木も植えられてた。

道路を挟んだ向かい側の芝生が生えた土地も上戸家の所有だ。夏には小学校に貸し出してドジョウ掴み大会をした。一面にばら撒かれたのを親子で捕るんだ。うなぎも何匹か混ざって、あっちへ滑りこつちへ滑り大賑わいだった。

インターホンを押す。

実名報道はなかったものの、新聞には売れっ子若手作家を殺人容疑で捜査中と書いてあった。見出しが細く小さく、流し読みしてたら誰も気づかない記事。話題にもならずだ。彼女の実力があってもこのご時世じゃ小説家の知名度は低い。案外それも凶行に至らせた原因なのかもしれない。

夢か幻であるのを願った。お母さんが「あら相原君、お久しぶりねえ。大きくなって、まあ」なんて出てくるんじゃないかと期待してた。

二度目のインターホンが虚しく響く。来年のドジョウ掴みを楽しみにしてた小学生は残念がるかな。最近の子供はドライだ、ないならないで大丈夫だろう。少年よ遅しく育て。

さてと。

ストレッチする。今日も大掃除だ、頑張ろう。

「あのお、失礼ですが上戸さんの知人の方ですか」

髪を乱れなく七三にした男だった。革靴を提げてて背筋が良く、サラリーマンの模範を形作ったような印象がある。

僕は中学時代の同級生なのを説明した。ああ娘さんがいらっしやうたんですか、と家族構成を知らなそうな彼が名刺を差し出す。

「私は会社の部下なんです、ここ数ヶ月は連絡がつかなくてです

ね。今日も不在のようですねえ」

そうツスねえ。閑散とした家を見る。

上戸さんの遺体は校舎になかった。無事に逃げられたようだ。両親殺害については遺体が発見されてないために非公表だった。無関係な一般人が知らないのもしょうがない。いまのところの罪状は教師の殺人。逮捕されれば余罪がいくつ付くか未知数だ。

サラリーマンは、それではこれで、と坂道を上がっていった。僕は会釈して反対へ下りていく。脇道に空き缶が直立してる。なんとなくスニーカーの先で突く。軽快なバウンドをして転がった。

彼女の凶行を止める人間がいたって良かった。父親も母親もどっかで気づいたっていい。家で顔を合わせるなら、些細な異変を感じ取ったっていい。ましてや血の繋がった仲だ、他人には察知できないもんだってあっただろう。友達、教師、近所の人、よく行く店、誰でもいい、ストップパー役になれる人間が何人もいたはず。

どうして彼女が人殺しをしなくちゃならなかったんだ。

転がる空き缶を前に止まる。

自分も気づけなかった一人。

「ちくしょう！」

蹴飛ばした。

石寺公園駅の改札へは朝も早く人々が呑みこまれてく。彼らには満員電車という名の拷問が待ってる。堂々と駅前を通り過ぎるのは優越感に浸らせてくれる。近頃のマイブームだった。

満員電車の囚人を横目にしてると映えた服色の少女が駅を出てくる。純白のセーラー服にエナメルの黒い靴、おまけに今日は左手首に包帯を巻いてる。趣味の悪いそれもファッションの一部だという。彼女を見やる人が多いのはそれだけの理由じゃない。

「いちいちうるせえんだよクソババア！ こっちはちゃんと自立してんだから人の勝手だろ！ はあ？ 先輩悪く言うなっつての、ウザインだよ早く死ねクソババア！」

一番はこれ、携帯への罵詈雑言だった。長めのツインを振

り回して汚い言葉を吐く姿は圧巻だ。通話を切り、勢いで舗装された歩道に叩きつけるんじゃないかと思った。どうやらそこまではしないようだ。

見て見ぬふりするのもなんなので、意気消沈した様子の彼女の後ろ頭へチヨップする。

「せんぱい、いまからお仕事ですかぁ」

満面の笑みと猫撫で声が迎えてくれる。いつも新鮮さをありがとう。

「事務所がすぐ近くだからな。綾木こそどうしたんだ、こんなところで」

僕より早く出勤してる彼女は、既に働いてる時間だ。

「え、麻由ですか。えっと、麻由はですねえ、どうしても聞きたいですかぁ」

髪の毛を指でくるくる視線を逸らしてる。

僕は肯いた。

「みんなじろじろ見るし、あと尾けてくるから帰ってきちゃったんです」

「それってストーカー？」

「そうなんですかねえ。麻由怖い」

怯えて身を縮めてみせた。袖に手をほとんど隠し、腕を抱く。

よく考えるとこの服で出歩けばみんな見る。誰かしら興味本位でついてきてもおかしくない。

例外として、たまに変な贈り物してくる奴がいるのは事実だった。

「でもいいのか、勝手に帰ってきちゃって」

「のーぷるぶれむですっ。店長さんにはあ、風邪ひいちゃったあ、て電話しておきましたから」

けほつけほっ。可愛らしく嘘の咳をする綾木。次にはけけららと笑ってる。店長さん、騙されてますよー。

「だから今日はあ、伊吹先輩の職場見学しますですよ」

「駄目」



「あう、即断なんて酷いです」

「風邪なんだから。バイト友達に見つかってチクられたらどうすんだ」

「ここは断固拒否だ。綾木と同じ年齢の少女にこき使われてるなんて先輩としての立場では許されない。僕にだって意地がある、最終防衛ラインだ。なりふり構ってられない姿は知り合いには見られない。くない。」

「一階は工事中だった。別のボロビルを買ってパチンコ換金所は臨時営業してる。」

事務所のドアを開けて仰け反りそうになった。汚し方に拍車がかかっている。膝を埋めんばかりの書籍類とゴミをモーゼの十戒よろしく掻き分けて道を作った。

「わざとだな、麗葉。日給分の仕事ないからって意図的に汚してるんだろ、そうだから」

「先日の事件で譲り受けた本が届いたのだよ。電話をもらって、やはり全て欲しいと頼んだのだ。なにか不満かね」

「滅相もございませんよ、雇い主様」

「うむよろしいとパソコン作業へ戻る。新作にとりかかっているようだった。」

キーボードを打ちながら、

「ところで、君の後ろの奇異な格好をしているちんちくりんは何者なのだ」

物珍しそうに部屋を眺めてた綾木がむっとへの字口になる。僕を押し退けて机を叩いた。

「誰がちんちくりんよ！ あんたこそ前髪お化けじゃん！」

麗葉は言い返さず、ちらっと見上げる。ふんっ。鼻で笑った。淡々と物書きを続行する。掴みかかる威勢の綾木を僕はなんとか羽交い締めにした。力が緩むのを確認して離すと胸に飛びこんですすり泣く。よしよし勝ち目ないよな！僕も勝てないんだ！ごめんよ！。

こうなる予感がしてたんだ。連れてきたんじゃない、ついてきて

しまったんだ。覗くだけっていう約束だった。

「伊吹はそういうのが趣味なのかね」

「ルームシェアリングしてるコだよ」

「そうだそうだ、参ったか前髪お化け」。麻由と先輩は運命の糸で結ばれてるんだもん」

泣いてたんじゃないんすか、綾木さん。

麗葉は、そうかおめでとう、と受け流す。

「あ、信じてないんですよ。本当に本当なんだから。中学の時に麻由がいじめられてたら先輩が助けてくれたの。でもね、先輩には上戸先輩がいて、上戸先輩は綺麗でいい人だし、それならしょうがなかなあつて譲ってあげたんだあ」

つぶつた瞼の裏でしみじみ過去を思い返してるんだらう、しきりに肯いてる。

「上戸？ あの殺し」

僕は水泳の飛びこみの要領でヘッドスライディングをかまし、机の上を滑走、麗葉の口を塞いだ。あんたはなにをしゃべるつもりだ。綾木は上戸さんが殺人者だとは思ってもない。知らないなら知らないまがいい。

彼女がもごもごと唇を動かして後ろを指差す。今度は本気で泣きそうな綾木がいた。咄嗟に離れて弁解しようとする。

「いつもに増して大胆なのだね」

「こら、余計なこと言うな、誤解するだろ」

綾木の瞳に光るものがあつた。鼻を短くすすってる。

「そしたらしばらくして先輩と再会して、上戸先輩とも付き合つてなくて、これは運命だつて思ったんだもん、結ばれてるんだもん」

「そうかい」

素っ気ない返事に彼女は拳を固く握りしめて震えた。

駄目だ限界だ、相性が最悪だ。二人はハブとマングース並に気が合いそうにない。精神年齢からして同等じゃなかった。歳が一緒でも無理なもんは無理。ハブの毒にやられて息絶えるのが結末だ。

「悪い、すぐ帰すから」

ブーイングをする綾木を玄関へ押しやる。

「ああ、今日は伊吹も帰っていい。私はこれからデートなのだ」  
時が止まった。綾木もだった。

動かしてた指を止めて麗葉が訝しげにする。

「なんなのだね、その反応は」

「いや、意外でフリーズしたんだよ」

「失敬な、男がいるからこそ女は成立するのだよ。ボーイフレンド  
ぐらいいくらでもいるさ」

「またも時が止まる。綾木もだった。」

「何人もいるのか」

「外科医と国際弁護士、政治家、ヤクザ屋の組長、それに薬品会社  
の会長と」

指を折りこんで数えていく。両手の指じゃ足りない様子だ。

再起動の完了した綾木が僕を盾に顔を出す。

「そんなにすごい彼氏さんいるなら先輩には手え出さないって指切  
りげんまんしてよ」

「さあてね、伊吹は不思議な魅力のある男だから約束できないね。」

「なによりも、頼りになる小説の先生なのだ、当分は離さないさ」

喚く彼女のバリケードになる。

「そろそろ勘弁してくれ、俺になんの恨みがあんだ」

麗葉が珍しく声を上げて笑った。事件以来、ずっと落ちこんでた  
んだ。

安堵する僕に封筒を渡してくる。毎日の終わりにもらう物だった。  
本を整理しておこうか告げると明日でいいと応じられる。追い出す  
ようにされ、麗葉も外に出て鍵を閉めた。こうなっちゃなにもでき  
ない。万が一を想定して渡されてるスペアキーを使う場面でもなか  
った。

朝に顔を見せたのみで二万円。

フリーターの最高峰をいってる。封筒の中身を出し、はつきりし

ない空へかざした。透かしの偉い人が気取ってる。

「分かったあ、先輩はそれに釣られたんですね。お金の心配ならしくていいのに」

どこの世界に後輩のヒモやって暮らす男がいるんだ。否、いるところにはいるけど、僕は嫌だった。なのに綾木は、僕が無職でふらふらしてた間に借りてたお金を受け取ってくれない。机に置いたり引き出しに入れたり又イグルミに持たせたりしても翌日には戻ってくる。これはこれで困ったもんだった。

「てか、どういいうお仕事してるんですかあ、あいつ。怪しい雰囲気ぶんぶんです」

「それはだなー」

どう表現したらいいのか分からない。正直、一概には言えなくて全然詳しくなかった。闇金まがいの金貸しの他に資産運用は草加部さんが担当してる。いままでは彼が工面してるんだと思ってた。しかしボーイフレンドの面子を見るに、資金援助もあり得る。草加部さんも秘書の肩書きでいるものの、ただ者とは思えない。

僕が場違いな感じもしてくる。

凡人が日給二万円をもらえてるのは現実だった。ほんの一、二年前にはくだらない豪遊で湯水の如く使ってたのに使い道がない。綾木が受け取ってくれないおかげでどんどん貯まってく。

途中ファーストフード店に寄った。彼女が支払おうとするのを強引にオゴツた。持ち帰りだ。家へ着く時間には小腹も空いてるだろう。

十字路の一角にあるゲームセンターを通りかかる。店先に出されたクレインゲームに綾木が貼りついた。デフォルメされた犬や猫、とにかくふさふさした又イグルミが山積みになってる。ふさふさしすぎてなんの動物か判別不能なものもあった。彼女の部屋も似たり寄ったりだ。

財布を出した。気配を察知した綾木に押さえられる。

「せっかくおごってもらったハンバーガー冷めちゃいますもん」

「そっか、そうだな」

「ふっふっふっ、先輩もだんだん分かってきましたねえ。一緒にいるだけで幸せなんですからね、麻由にお金使っちゃ駄目ですっ」

「りょかい、と言っておいた。このコはときどき子供なんだか大人なんだか分からない態度をする。想像するよりもいいお嫁さんになりそうだった。」

エレベーターを待つてる間、郵便ポストをチェックする。柔らかい包みが入ってた、綾木宛だ。差出人は書いてなかった。感触に危険なムードはない。

先にエレベータへ乗って待つ彼女へ渡す。その場で躊躇いなく開けられた。

「あんまり不用意に開けない方がいいんじゃないか、変なファンはなにするか分かんないぞ」

「だってなに入ってるか気になるじゃないですかあ」

不気味だとは一切思っていない、好奇心を抑制できない姿は子供そのものだった。瞳を輝かせ、包みを破っていく。その顔が固まった。

「どうした、髪の毛とか爪とかスズメの死骸でも入ってたか」

「チュー太！」

手乗りサイズの又イグルミだ、キーホルダー付き。やたら胸の長いネズミだった。なんでもありだな。

「バッグに付けてたんですけど、どっか落としちゃったんですよお。きつと親切な誰かが届けてくれたんですねえ。おかえり、チュー太」

「ちゅっ、とキスをする。住所が書いてあるわけでもないのにどうやって届けたんだろう。異様さはあるが、落とし物を届けてくれたってことは悪意がないのかもしれない。」

「熱烈な一人と一匹がこっちを向く。」

「チュー太アタック！」

又イグルミの顔面が押し当てられた。パンチに近い。びっくりして背が反り、後頭部をぶつけた。

彼女がチュー太に頬擦りしてにやけてる。

「先輩の唇は麻由のもの」

阿呆、と小突いて到着したエレベーターを降りる。怪しい奴リストの一番目は綾木で決まりだ。

とりあえず今回は考え過ぎだったようだ。最近は特に周囲が疑わしくて過敏になってる。少くくは警戒を緩めよう、日常に支障が出る。

家の電話が鳴ってた。ハンバーガーをテーブルへ置き、受話器を取る。久しぶりのおふくろだった。会話は近況報告だ。仕事も見つかって心配無用なのを伝える。立神に狙われて危険な目に遭ってるとは言えない、実家をまきこんでしまおう。

なにやら学校へ行くお金の用意をしてくれたらしい。僕は断った。日給二万円のおかげで行こうと思えば行ける。

「ごめんねえ、迷惑かけっぱなしで」

「いいって、別に」

おふくろに、ごめんって言われるのは腹が立つ。謝るのは免罪符じゃない。取り返しのつかない問題に代替はきかないんだ。

自分が意思を通せば無理にでも入学はできた。おふくろが慣れないパートと親父の看護の過労で倒れさえしなければ躊躇いなく。誰かの負担になるのが許せなかった。家にいるのが辛かった。当てもなく家を出た。知り合ったのがろくでもない奴らだった。嫌気がさしてきた頃、綾木とばったり会った。しばらく迷惑かけたけど、彼女のおかげで真つ当な暮らしをしてる。

綾木を話題のネタにすると彼女と話したいと言った。ハンバーガーの準備をしてた彼女を手招きする。

「お電話代わりました、綾木です、お久しぶりです。いいえ、そんなとんでもないです。むしろ私の方が助かってますから、はい、はい、そんなことはありませんよ、いえ本当に、こちらこそよろしくお願いします」

普段とは違う一面だった。

受話器を返され、適当に相づち打って通話を切った。綾木はソフ

アーにへたりこんでる。

「緊張しちゃって疲れましたあ。先輩、急に代わられて言うんですもん。麻由にも心の準備ってものが」

「そういうもんか、と言ったら、そういうもんですよあ、と頬を膨らました。」

「そうやっていつも麻由を女の口として見てくれない」

「どっからどう見ても女の口だぞ。色々と気遣ってるつもりだし」

「もう、そうじゃなくて、違うんです。麻由は、もっと、こうううう、と唸り、

「やっぱいいです。どうせ先輩は、どうせなんだもん」

起きて自分のハンバーガーを鷲掴みにし、大股で自分の部屋へ入っていった。

おい綾木ー。

呼びかけても無視された。彼女がなにを言おうとしてるのかに気づかないほど鈍感じゃない。全て察してる、どんな言葉を望んでるかも。

テーブルについてハンバーガーの包みを外す。大口を開けて一かじり。

ケチャップがちょっぴり酸っぱかった。

## 超フリーター（後書き）

次話更新予定は明日（11/16）です。

Next: 「秘事に囲まれる独り」



## 秘事に囲まれる独り（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

（感想などを公開したくない場合はメールフォームでも受け付けています

<http://www.formzu.net/fgen.exe?ID=47878715>）

## 秘事に囲まれる独り

印刷用紙OK、インクOK、新刊推理小説OK、他ハードカバー本五冊OK、醤油OK、米五キログラムOK、買い忘れなし、出発進行！。両腕にぐつと力を入れる。肩ごとアスファルトに落ちてしまいそうだった。皮膚がぱんぱんに張って千切れる一歩手前だ。膝にも負担がかかって一歩を出すのに苦労する。地球の重力よ、弱まってくれ。

方向が定まらなくて何度も道行く人にぶつかりそうになる。関節がぎしぎし言ってた。無理だ、いくらお使いだつて限度がある。指にビニールが食いこんで千切れ落ちてしまえる重さだ。

休もうとした途端、左腕の米が宙に浮いた。バランスの針が振り切れて反対の肩が下がる。

草加部さんだった。

「麗葉に頼まれたんだ、非力な先生はそろそろ手の感覚を失いかけている頃だからとね」

「分かっているなら一遍に頼まなきゃいいのに、クツソー。今日という今日は控え目に文句言つてやるぞ」

道路脇に止められた車へ荷物を載せる。重い物は免許のある草加部さんがいる時間に注文してほしいもんだ。まあそうすると僕の仕事はほとんどなくなるようなもんだけど。

助手席へ乗りこむ。後方確認し、アクセルが踏みこまれた。

「彼女はデートに出かけたよ、今日はもう帰っていい、とも言つてたな」

「またツスカ。発情した猫でもあるまいし」

「そう言わんでやってくれ、あれでも色々あるのさ。立神という枷があるゆえ、必要以上の知人も増やせんしな。奴に狙われても生存し得る信用と信頼が必要だ」

「信頼？ ないない、俺に限ってはそんなのない。いつ殺されても

いいから傍に置いてんよ」

じゃなきゃ、こんなにぞんざいな扱いはされない。両手が塞がってる不自由な僕が狙われたらどうするつもりだ。スリーパーホールで落とされるのは勘弁だった。

ウィンカーを出して左折する。

「彼女のことは嫌いかね」

僕は、うん、と首を傾げる。

「草加部さんはどうなんスカ。例えば立神が存在しないとしたら、秘書続けますか」

「ああ、続けるさ。彼女のもとで働くのが私の仕事だからね」  
即答だった。

「草加部さんなら他のなにしてもやっていけそうツスけどね。あいつにこだわる理由があるんですか」

「そうだな、理由か」

運転する横顔がにと笑む。口元の皺が深くなった。

「秘密にしておこう」

「分かった、草加部さんもボーイフレンドの一人なんですよ」

そんなところだね、と青に変わろうとする信号機を見つめてる。

ハズレたかな。他になにがあるんだ。彼の過去も麗葉との関係性もほとんど知らなかった。訊いちやいけないムードがあった。

事務所の机に封筒が置かれてる。中には二万円。日が昇りきったばかりで、帰るには雇い主が許しても良心が痛む。部屋を見回し、軽く掃除していくことにする。

本にハンドグリップが埋もれてた。何気なく数度握る。握力鍛錬？

「私も片付けるのは苦手だから助かるよ」

草加部さんは麗葉のように追い返したりしなかった。普段、彼女が座ってる席でノートパソコンを広げる。デイトレードという株の売買をしてるんだ。一日の間でも株価は動くから、その差額で儲ける。知ったかぶり、僕にはよく分からなかった。

「高利貸しはやめたんですか」

「立神が帰国して麗葉にもガードがかかってね、しばらくはお休みさ」

話しながら、凄まじい速さでマウスとテンキーを操作してる。

彼の携帯に電話が入る。当然のように通話の間も操作は止まらない。

「そうか、上方修正は確定か。分かった、ありがとう。情報料はいつもの口座に振り込んでおく」

即座にマウスが高速のスピードで動き、液晶画面へ次々に新しいウィンドウが現れた。注文が実行される。みんなが知ってる有名な会社の株を大量に買ったんだと感覚的に理解した。電話で言ってた会社の株だ。

「いまのつてもしかして、違法じゃないんすか。確か、ジュースみたいな名前の」

「インサイダーさ。違法だよ」

さっきの電話といい、この人は本当に何者なんだろう。立神のネットワークよりも草加部さんの方が気になってしょうがない。

「大丈夫なんすか、その、バレたり」

「下手を打てばね。高利貸しの担保に証券口座を作らせてるんだ。名義はどこの誰とも繋がってない一般人。使うのも大きい取引毎に換えてる。ネット取引でならまず疑われすらない」

お金を借りてる弱味で名義者本人からこっちの情報が漏れる心配もほとんどなさそうだ。それぐらいでいいなら喜んで口座を作つて受け渡すだろう。

トランプの大富豪を連想した。大富豪はいいカードが手札になる。逆に悪いカードが集まる大貧民はなかなか下等な地位を抜け出せない。抜け出せるわけがない。特に現実では、革命の奇跡は起こらないんだ。借りる側は永遠に地を這いつくばる芋虫。そんな彼ら自身にも致命的な原因がある。僕は断言に足る現実を知つた。

空がオレンジ色に染まり始める。本の整理が終わつてようやくフロアリングの面積が増えた。黒光りする拳銃が夕日を鈍く反射する。

埋もれてたデリンジャーを手にする。上戸さんに向けて発砲した物だ。

頬杖をついた草加部さんは昼間よりリラックスしてた。株相場はほとんど午後三時に終わるんだという。

「それは、比佐香葉子　麗葉の母親の形見だよ」  
初耳だ。

「本物なんスカね」  
「確かめてみればいい」

言われ、銃口を向けてみる。彼は机に平行になるよう上半身を倒して隠れた。ゆっくり顔を出す。再び向けるとイスを下りて頭も隠した。

今度は壁へ向けた。麗葉の撃ち方にならってみる。人差し指を銃身に沿わせ、中指でトリガーを引くんだ。小さい型のため、普通の拳銃にはない構え。安定感が増した。恐る恐る引く。

動かない。どんなに踏ん張ってもなにかが引つかかっているみたいだった。

「おつかしいな、麗葉はこうやってたのに。安全装置があるっていうオチだったりして」

「いいや、そのタイプのデリンジャーには付いてないよ」

スーツについたホコリを払ってイスに座り直す草加部さん。

「じゃあやっぱリオモチャってことじゃないツスカー。妙なりアクションするから俺はてつきり」

「俳優でも目指すかね」

「豪快に笑い声を上げる。僕も一緒になった。」

きつと上戸さんへの脅しだったんだ。火薬を詰めて撃つモデルガン。しかも壊れてる。そうなると立神の言ってた、母親を撃ち殺した、てのは信憑性が薄くなる。少なくともこのオモチャの銃じゃないようだ。そして森里さんの言ってた、スパルタ教育を恨んでの殺害、てのも気になる。大事にしないとはいえ、恨みの対象者になる相手の物を持つてるのは不自然だ。

「銃が本物だったらどうするつもりだったんだい」

「そりゃ関わりたくないツスよ。銃持つてるってことは、誰かを殺してるか、これから殺すってことに等しいじゃないですか」

「そうだね、と草加部さんが静かに肯いた。

呼び鈴が鳴る。ドアを開けると綾木がいた。僕の顔を見た途端、いきなり抱きついてくる。仕事はどうしたのかと訊けば、今日も早退したようだ。つくづく甘い店長だった。だけど先日の機嫌が直つてくれて良かった。

「それで家に帰ったらこんなのが届いてたんです。麻由恐くて紙製の小箱だ。蓋を外す。黒い塊が渦を巻いて入ってた。髪の毛だ。」

草加部さんもまじまじ見つめ、  
「詳しくは知らんが、ある種の人間は自分の物を持っていてほしい心理があるらしい」

差出人の名前は今回もなかった。いよいよストーカーの色が濃くなってくる。綾木を標的にしてるのは間違いない。警察に通報すべきか。普通はこの程度の迷惑行為で動きはしない。

僕には知り合いがいた。

「ダメ元で連絡してみるかな、森里さんに」

「え、誰ですかあ」

「刑事だよ、最近よく会う人なんだ」

「それって警察に電話するってことですか。駄目ですよ、きつときつとなにもしてくれませんかよあ」

携帯を出す腕へすがりつく綾木。

「心配すんなって、なんかしてくれるかもしれないし。襲われてからじゃ手遅れになるだろ」

「大丈夫ですよ、手を出されたわけじゃないんで様子見てみます」

ダイヤルする手を掴まれた。彼女がそう言うんなら、それに従ってみよう。確かに、ただの嫌がらせかもしれない。

綾木が来たのをきっかけに帰宅することになった。絡みついた腕はまだ離してもらえない。胸の柔らかな感触が歩くたびに当たっている。今回の送り主がストーカーだとして、これを目撃したら逆上して襲いかかってくるだろう。

「先輩がいれば大丈夫ですよ」

守ってやる、なんて言葉は返せなかった。僕には守りたくても守れなかった人がいる。いつだって傍にいられるわけじゃないんだ。

「ケガしたのか」

腕を掴む指に絆創膏が貼られてる。可愛いパンダのキャラクターがプリントされてた。スポンジ部分に血が滲んでる。

綾木は隠すよう手で覆った。

「お料理でミスっちゃって」

珍しかった。彼女の包丁捌きは極上なんだ。キャベツの千切りは糸の均一さでふんわか仕上がる。シヨウガ焼きの味付け肉汁をかけると草食動物になっても構わなくなる美味さだ。

「やあやあ伊吹、見せつけてくれるなあ」

二人の男が立ちほだかる。チビデブとガリノツポだった。綾木を下から上まで舐め回すように見てる。彼女が巻きつけた腕をきつくした。しまったな、いままで会わせたことなんかなかったのに。

僕は先に帰るよう言った。非常事態を考える。彼女を庇いながら二人を相手にするのは難しい。なかなか離れないのを力尽くで解いた。人を呼んできます、と綾木。僕は大丈夫と言って見送った。

ガリノツポが高い塀のある敷地へ、立てた親指で促す。少子化の影響で潰れた小学校だ。施錠された校門を乗り越える。体育館らしき建物の横で止まった。

チビデブがガムをくちやくちや噛みながら手のひらを上向きに出す。ポケットにしまった封筒を僕は渡した。変に反抗して面倒にしたくない、こっちはただでさえ大変なんだ。

「そうそう、素直が一番だ。高橋さんも筋通す奴には優しいからよ」

「消える」

「まあまあ、そう言うなって。友達じゃんかよ」

お金をくしゃくしゃにしてGパンに詰めこむ。ぱんぱんに脂肪の張ったそれは全く似合ってた。膝もまともに曲げられないんだ。

賛同するガリノツポが圧力をかけて迫り、後ろの壁へ手を付いた。チビデブは横について逃がすまいとする。

「さっきの女、紹介しろ」

「てか、追いかければ捕まえられるんじゃないか」

チビデブの顔面を殴りつけた。鼻血を垂らす局部を押さえてよるめく男。すかさず翻って僕はガリノツポへ回し蹴りをお見舞いする。ふくらはぎを掴まれた。持ち上げられて転倒、背中を打つ。下が土で助かった。

高々に上げられる足が見えた。十六文踏みつけてか。瞬時に回転して躲す。起き上がって突進。腹に頭部を押しつけて壁に叩きつける。上で空気の漏れるがした。二度と下卑た口が利けないようにしてやる。ボディブローを打ちこむ。

右側で圧迫感。チビデブの短い足で蹴られる。攻撃直後で体勢が崩れやすかった。軽々と吹っ飛んで転がる。続けてガリノツポが突っこんでくる。助走をつけた蹴りがあご先に直撃。脳が揺れて容赦なく倒れ伏す。

腹にチビデブが乗った。ガムを吐き捨て僕を睨む。鼻の下には血を擦ったあとがあった。

「俺のクリーミーフェイスをよくも傷つけやがったな」

「ブタ顔の間違いじゃねえの」

野太い拳が頬にめりこむ。二発、三発。

「もち肌がぶにぶにして可愛いつて女にモテるの、おめえも知ってるんだろ！」

そりゃからかわれてるんだ、まだ気づいてないのかブタ男。

意識が消えかかるのを堪えて低い鼻を二指で挟んでやる。油で滑



りそうになった。爪を立てる。痛がる奴を横転させた隙に立つ。リ  
ーチのある蹴りが振り下ろされた。肩で受け、膝をクッションにや  
や屈む止まり。足を持って上空へ跳ねる。無防備にガリノツポがこ  
けた。足はまだ離さない。それを軸に周りこんで、腹部を蹴りつけ  
ようとした。チビデブに体当たりされる。転びはしなかったが、パ  
ンチを繰り出すにはもってこいの隙だ。奴の四発目の拳が顔面を弾  
いた。

ぶれる視界の中、打たれながら横面を殴りつける。脂肪のある腹  
には効かない。ひたすらに顔面へ狙いを集中させる。後退するチビ  
デブ。パワーで負けても手数でこつちだ。

いきなり体が宙に浮く。ガリノツポに抱えられたんだ。足が地面  
を離れて上手く力が出せない。暴れても解けなかった。にやりとす  
るチビデブが拳をばきばき鳴らす。もともと腫れたような顔が赤く  
醜くなってるのは笑えた。金髪のオールバックも乱れてほうき頭に  
なってる。

「馬鹿じゃねえの、あんなブスは初めから相手にしねえよ。普通  
にバイバイしてりゃ無傷で帰れたのによお。もう遅いけどなあ、  
このことは高橋さんに報告しとくよ」

「言つとくけど、俺には近づかない方がいいぜ。怖い奴らに監視さ  
れてんだ」

「はあ？ おめえらしくねえなあ、ハッターなんてよお」

「忠告だ。死にたくなきゃ消えろ」

チビデブが背後のガリノツポと目を合わせ、怪訝そうな表情をす  
る。僕は肘打ちをかまして緩んだ腕を肩に担ぐ。思いつきり投げた。  
たまたまそこにチビデブがいて巻き添えで倒れる。あとは蹴って蹴  
って蹴りまくった。

覚えてやがれとはさすがに残しはしなかったけど、僕を睨みつけ  
て二人は退散していった。興奮状態が冷めて痛みと疲労でしゃがみ  
こむ。汚れるのも構わず地べたに座り、体育館へ寄りかかった。奴  
ら仕返しに来るんだろうな、面倒臭い。

沢山の葉のない木が並んでる。プレートには桜と書いてあった。何本かは葉っぱどころか中心の幹から折れてる。中身はすかさずかだ、誰も管理せず虫か病気にやられて腐ったんだろ。花を咲かせる日はもはやなさそうだった。

帰ると綾木が暗かった。殴られた顔をしきりに心配するのをいなし、なにかあったのか訊く。彼女はテーブルの封筒を指差した。差出人名はない。中身には便箋が一枚。赤ペンの汚い手書きで「麻由たん好き好き」「とびっしり書かれてた。鳥肌立つ。

イタズラにしては不気味だ。男の仕業なものほぼ間違いない。切手を貼つてないのは直接郵便受けへ届けてる証拠。いつ襲ってきても不思議じゃない。

「ファンとかに心当たりないのか」  
ファンですか、と考えてほんと手を打つ。

「一人だけ。撮影会にいつも来る人で握手したんですけどお、ずっと手を離してくれなくて少し恐かったです」

相手の住所は知らないらしかった。ネット上での名前はイカロス。手がかりには乏しい。立神と比べちゃスケール小さい相手だけど、早急に対応策を考えた方が良かった。

ソファーに座って話し合う。

テレビを点けるといまだに捕まらない銀行強盗のニュースがやってる。認知されない犯罪は犯罪じゃない。上戸さんの言葉が思い出される。銀行強盗は認知されても、このストーカー騒ぎは僕と綾木、そして犯人しか知らない。いまのところ犯罪扱いになつてなくても、認知されてからじゃ遅いんだ。

彼女は警察沙汰はやめてほしいと懇願してくる。変に騒ぎになつて両親に出てこられるのが嫌だという。

話し合わずして僕の考えは決まっていた。

それから毎日送り迎えをした。ストーカー対策グッズも大量に買いこんだ。最近の大手デパートにはなんでも揃ってる。催涙スプレーやアラームキーホルダー、女のこも扱える可愛い小型のスタ

ンガン。備えあれば憂いなしだ。

「ストーリーだって？」

身を乗り出したのは麗葉だった。草加部さんに相談したのを又聞きしたようだ。手荷物を事務所の隅に置いて腕まくり。一夜で汚れた部屋の掃除にとりかかる。

「麗葉が出る幕じゃないって。密室殺人でもないし、被害らしい被害もない」

「奴らの心理はファンタジーなのだよ、どんなに拒絶してもそれを好意の裏返しだと思いきむ。小説の参考になりそうだ」

「あんな、人の不幸を楽しむんじゃないよ。なんかあったあとじゃ取り返しつかないかもしれなんだぞ」

印刷用紙をセットした麗葉がイスへ座り直す。

「要するに捕獲すればいいのだから」

「できるのか？」

「ストーリーの一匹や二匹は朝飯前さ。こそこそとつけ狙う輩など、どうせ軟弱者だ」

マウスを操作してる。間もなくプリンターが動きだした、ボディを揺らして一枚ずつ紙が吞まれてく。

そんなに簡単に片付くなら麗葉に頼むのは名案だ。どうするか綾木と話してみよう。

「そういえば、忙しくていまさらになってしまったのだが一つ訊かせてくれないかね」

肩肘に体重を預けた彼女の目がこつちを向いてる。

「屋上を脱出するとき、どうして君は雨どい近辺で爆発が起ると分かったのだ」

そのことか。数日、麗葉は落ちこんでて訊く気分じゃなかったようだ。そのあとはよくデートへ外出してたし、正気の状態に僕に会うのは久しぶりかもしれない。麗葉のことだ、その間に自力で色んな可能性を考えてたと推測できる。

「俺にもよく分からない、なんとなく見えただ」

「見えた、とは？」

「崩れて、あんたが落ちる光景がさ」

結構真剣な態度で聞いてくれた。非科学的なものは信じないと一蹴されるかと思ってた。

「予知能力かね」

「そんな大それたものじゃないだろ。たまたま偶然でしか見えないし」

立神のクソゲームでもそうだった。意識して起こるんじゃない、自分でも不明な現象だ。彼女が期待するような便利な力じゃないだろう。勘や予感が幻覚として現れてるだけ。自由自在に使えたら競馬や競輪で大儲けだ。実際はそんなことない、役立たずな欠陥品。

「そう否定したものでもないさ。人間の脳は七十パーセントが使われていないのだよ。不必要な部位がなぜ退化の一途を辿らず保たれているのか不自然ではないかね。それがなにを意味するのか。人間は無自覚に超越的な能力を発揮しているのかもしれない。もしくは無意識の強い幼少期に使用しているとも考えられる」

おもむろに立って麗葉の傍へ。前髪をめぐり、おでこへ触れる。

「熱はないみたいだな」

「なんの真似だね」

瞼を細めてる。

「最近小説の読みすぎだろ。考えは大人びてても、そこらは年相応だなあ」

頭を撫でてやった。鬱陶しそうに払われる。

「馬鹿にしないでくれたまえ、私は本気なのだ。人間が想像するあらゆるファンタジーは現実になるのだよ」

はいはいそうでちゅねー。もう一度撫でようとすると手を前に口が開けられる。剥かれた白い歯が食いついてきた。間一髪で引っ込める。寸前がちつと噛み合う響き。

プリンターが静かになった、印刷が終わったらしい。文字の並びからして見慣れた感じだった。

「なんだこれ、この前書いたのを改稿したのか」

「触るな、トップシークレットだ」

歯をがちがちさせて僕を牽制する。

クリアーケースに入れ、黒のコートを羽織った。

「どっか行くのか」

「デートだ、悪いか。君には関係ない」

ドアが荒々しく閉められる。少々機嫌を損ねてしまったらしい。

なにをむきになってんだ。小説見せる相手は僕が一番じゃないのか。

今日は草加部さんも来てない。外を吹きすさぶ風が窓を揺らす。

事務所に一人ぼっちなのは肌寒さを増させた。話し相手がいないと心細い。本の整理整頓だってコツを掴んで早くなってる。盛大に時間が余りそうだ。

携帯が着メロを鳴らす。デイズニーのパレード曲は綾木だ。携帯を買ったときに無理矢理設定させられたやつだった。

「どうした、なんかあったか」

「特になにもないですけど、先輩どうしてるかなあって。忙しかったら切ります」

「いや、暇でどうしようか考えてたところ。いいよなあ、綾木は。

気の合う友達いるんだろ、そういう職場だとさ」

「そうでもないですよ」

「あ、そうだ、相談してみたらどうだ。同じ体験してるコもいるかもしれないし」

無言が返ってくる。

呼ぶ。

「ごめんなさい、一瞬ブーツとして聞いてませんでした。なんですかあ」

質問を繰り返す。

そうですねえ、としか彼女は言わなかった。気乗りしないんだろ  
うか。

「麗葉に解決してもらって方法もあるぞ」

「ええ？ 麻由、あいつ嫌いです」

「好き嫌い言ってるらないだろ。ああ見えてすごいんだぜ。ぱぱっと手掛かり見つけて捕まえてくれるって。な？」

はい、とは応じない。僕は渋る彼女をしつこく説得した。了承をもらったのは同じようなやりとりを何度もしてからだ。

「あ、先輩」

電話を切る直前。

「いえ、なんでもないです」

「なんだよ、言えよ」

「いいんですっ、内緒なんですっ」

変な綾木だった。改めて、じゃっまたバイト終わりに駅に着いたらな、と切る。

好きです、とかそういう言葉を続けるつもりだったんだろうか。

それは日常の接し方で言ってるも同然だ。すると、他になにがあるんだ。

しばし携帯と睨めっこした。

## 秘事に囲まれる独り（後書き）

次話更新予定は明日（11/17）です。

Next：「刃中の羽虫」作戦決行シーン」

|||||

毎度アクセスありがとうございます^^

正直なところ反応がないので小説としてどうなのか半信半疑でしたが、

今回で10部分目とはいえ結構な長さになっているのにアクセスがあるということは少しは楽しんでもらえているのだと思っています。

尚、感想などは前書きの通り、いつでも受け付けています。

手段・方法は問いません。

遠慮なくコメントを送ってやってください。

完結まで頑張っていくしますので、どうかよろしくお願いしますm)

— ) m

## 「刃中の羽虫」作戦決行シーン（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでもなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

（感想などを公開したくない場合はメールフォームでも受け付けています

<http://www.formzu.net/fgen.e>  
x?ID#P47878715)



## 「刃中の羽虫」作戦決行シーン

布の袋に詰めこんだ札束を背負って走る。間抜けな銀行員どもは呆気にとられたろう。正面玄関を出るではなくて職員通路へ入りこんだのだ。ここへの抜け道は他にない、ドア一枚を適当な柵で塞いでしまえばかなりの時間稼ぎができる。銀行内の見取り図は事前の調べで既に頭に入っていた。

台車を押す清掃員が歩いてくる。俺は慌てなかった。すれ違い様に台車のかごに入っている物と札束袋を交換する。外見は同じ袋。清掃員として雇われ、潜入したのは田中だった。眼鏡を押し上げている。

彼の肩を叩いて奥へ行つた。突き当たりを曲がる。そこにはトイレがある。窓を開けた。田中の云う通りだった。路地に面していて、建物と建物の間は二人並ぶのがやっとの幅だ。通路として使う者が滅多にいないのは事前に観察していた。

袋の中身を引っ繰り返す。出てきたのはスーツとアタッシユケースと伊達眼鏡、ムース、それと借金して買ったロレックスの腕時計に革靴などエリート風サラリーマン変装セット一式。人間は人間を見るときに印象で判断する。分かりやすいぐらいが良かった。

ジャージを脱ぎ捨て、付け髭と眉間の付けボクロを外し、ぼさぼさのカツラをアタッシユケースに入れる。改造して実弾が撃てるモデルガンも奥へしまった。

痕跡は一切残さない。仕上げにムースで髪型をオールバックにしないでできあがり。荷物を表へ出し、窓枠を飛び降りる。完璧だ。あとは裏通りへ抜けて、騒ぎを知らない男を演じればいい。

汚れを念入りにはたき落とす。後ろに気配があつた。腰を折り曲げ、巾着を垂らした婆さんだ。額の深い皺を更に深くさせている。

「あんたあ、そんなところでなにしとんね」

見られた。

取り乱すな。外に出たときにはいなかった。婆さんは狭い場所で立ち塞がっている俺に声をかけたのだ。それは極自然、心配ない。無難にやり過ごして終わり。

パトカーが数台駆けつけている。なるべく近づきたくない。「犯人は現場に戻ってくる法則」に従う人間は無能だ。姿を見せない限りは手掛かりの要素にはならないのだ。

「おんや、なんの騒ぎだあ」

頼りなげな足取りで横を行く婆さん。よし、そのまま立ち去れ。

俺はその間に退散　と、アタツシユケースを忘れてどうする。胸中で苦笑して腕を伸ばす。

指には寸前で触れなかった。婆さんがつかかかってこけたのだ。倒れた拍子にケースが口を開けた。中身が散乱する。

「なにしゃがんだクソババア！」

頭に血が昇ってしまった。理性がコントロールを失う。ジャージを踏んづける婆さんを蹴りつけてどかし、荷物を掻き集めた。アタツシユケースのロックをチェックする。

婆さんが酷く呻いた。苦しみようが尋常ではない。きつと蹴ったのが原因ではないだろう。転んでどこかを打ったに違いない、おそらくそうだ。

声をかけようとしてやめた。

知ったことではなかった。自分でこけて自分でケガをする阿呆。

どうせ老い先の短い出涸らしだ、いつそのこと死んでしまえ。

踵を返す。

「誰かあそこで倒れてるぞ。おい、そのの」

男の声。

俺はアスファルトを蹴って裏通りを目指した。少し離れたところで岩辺を運転手にした車が待機しているのだ。アタツシユケースを抱えて落とさぬようにする。捨ててもいい中身だが、これの発見は足が付くのを早める。大丈夫、顔は見られていない。俺を犯人と仮

定されたとしても札束を持って逃げたと思われる。最悪は、大金の  
ありかさえ隠し通せばいい。

問題はあの婆さんだ。顔をもろに見られている。下手をしたら荷  
物の内容も。しかし年老いた人間の目撃情報は信憑性に欠ける。計  
画には誤差がつきもの、これは許容範囲だ。

夜、黒いゴミ袋を持った田中がアパートに現れた。そこに表情は  
ない。待機していた俺と岩辺が唾を飲みこむ。

ゴミ袋が開放された。

一万円札がピラミッド状に築かれていった。俺達は喜びの絶叫を  
上げた。たかがフリーターが一日にして億万長者になったのだ。し  
かも警察は手口に一切気づいていなかった。目撃証言も報道されて  
いない。

俺の真の人生はここから始まるのだ。

「刃中の羽虫」作戦決行シーン（後書き）

次話更新予定は本日（11/17）の18時頃です。

Next: 「犯罪者のいる世界」

## 犯罪者のいる世界(前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか気づいた点などがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでなくとも、些細なことで構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

素直で率直な意見、お待ちしております。

よろしくお願いします。

(感想などを公開したくない場合はメールフォームでも受け付けています)

<http://www.formzu.net/fgen.exe?ID=P47878715>

## 犯罪者のいる世界

道行く人が犬を連れ大男に視線を浴びせてる。背が高いせいだけじゃなかった。セーターのあらゆるところに赤い羽根がついてるんだ。ファッションにしては前衛的過ぎる。僕は回れ右をして知らない人のふりをしようとした。

「おや、相原君。銀行に用事かい。実は僕もなんだよ」

「あ、奇遇ツスね。俺は預け入れしようと思って」

あたかもいま気づいたふうに着う。しまった、目的地が一緒じゃ逃げようがない。カーゴパンツのポケットに入れた厚みを叩く。生まれてこの方、お目にかかれなかった金額が入ってた。

「貯金かあ、いいなあ」

森里さんが羨望の眼差しで見下ろしてくる。タロさんも切なげに鳴いた。飼い主がある種の浪費家だと苦労しそうだ。ドッグフードが、食べもしない羽に化けたのだから落胆も甚だしいだろう。

人目が集まってきた。写メを撮る者までいた。このままだと街の有名人の仲間入りをしかねない。入りませんか、と断って自動ドアをくぐる。

タロさんもすんなり入ってきた。入口に立った女銀行員が慣れた手つきで額を撫でる。元警察犬なだけはある、森里さんがリードを離してもお座りをしてちゃんとしていた。

ATMが一つ空く。森里さんへ先に譲った。ありがとう、とでかい体を狭いしきりの中におさめてる。暗証番号を覗けるやからは一人もいない。

「なんてこった！」

頭を抱える森里さん。

「残高が三円しかない」

現代の消費税にもならない。本当に公務員なのか疑わしい。彼が大きな溜め息をする。体を小さくし、タロさんを抱き締めた。

タロさんはチワワみたいにふるふる震えてる。心なしか涙目だ。ごめんよー給料日まで我慢だよー、と死刑宣告めいたことを言う飼主。タロさん、怒ってもいいんだぞ。まだ月初め、振込日は遠い。盛大な腹の虫が彼らの空腹をアピールしてた。昼食も食べてないんだ。

肩を叩く。

「これ、使ってください」

「え、いいのかい」

彼の瞳が一際に輝いた。黒目に映るのは一万円札。

すぐにかぶりを振る。

「駄目だ、ひもじくても僕は刑事。人々の安全を守るのが使命。お金を借りるなんて許されるものか、いいや許されない」  
ぐるぐるるるびい。

今度はタロさんの腹も同時で、腹減り二重奏が銀行内に広がる。

客も職員もくすくす笑った。

「いつか返してくれればいいですから。タロさんと美味しい物でも食べてください」

「相原君、君はなんていい人なんだ！」

無骨な手で一万円札ともども握られる。

「この恩は一生忘れないよ。なにかあつたらなんでも言ってくれ、お金以外のことならなんでも聞くよ」

「そんな大袈裟な。普通に返してくればいいツス、よ」

脳内を一つの事柄が浮かんだ。綾木のストーリーカーについてだ。警察に頼んで犯人を特定できれば、なにかと先回りが可能だった。

彼らが暇じゃないのは承知してる。僕は駄目元で事情を説明した。  
「いいよ、調査するよ」

まさかの回答だった。やっぱり無理ツスよね、と喉を出かかった。本当にいいのか訊くとあっさり肯いた。

「立神に関して役に立ててないのもあるし、比佐もそうだ。それと極めつけに、このお金の借りもある」

重点はそこなのか。なにとはもあれ心強い味方だった。立神の前じゃ見劣りするものの、一般の犯罪者には十分有効だ。犯人と対峙したって森里さんは素手でぶっ飛ばしそうな凶体の持ち主。刑事と知り合ってラッキーに思う日が来るなんて一年前は考えてもなかった。

差出人不明で届いた物品は帰りがけに自宅に寄ってもらって渡すことにした。幸いにも彼には鑑識課の通称シバさんと呼ばれてる親しい友人がいるようだ。早く綾木に知らせてやりたかった。

女の耳をつんざく悲鳴。

場が静然とした。よれよれのコートを脱いだ男が猟銃を手にボストンバッグを受付へ乗っける。女の客を人質にした。頭頂部にかけて禿げていて、目の下はくまで黒ずんでる。団子っ鼻が特徴的だった。どこかで見た顔だ。

「指名手配してる銀行強盗の逃亡犯だ」

ニュースで何度も流れてた顔。強盗の録画映像にも出てた。森里さんも人質がいては迂闊に近づけない。

犯人の指示で入口と窓のシャッターが閉められる。札束で膨れたバッグが戻ってきた。チャックがしっかり閉まってないせいで一束がこぼれる。おっと、と拾おうとする。

男の銀行員が見逃さなかった。すかさず飛びかかったんだ。よせ、と森里さんが言ったのは聞こえなかっただろう。揉み合いになり、更に客のサラリーマンと青年が向かった。

破裂音。絶叫。呻き。

タイルに赤い斑点が飛散する。肉薄してた職員の脚に散った弾が当たった。応戦した二人は両手を上げて退く。残った被害者は片脚を抱いて左右へ転がった。出血が酷い、長く保たないのは素人目にも分かる。

誰が通報したのか、パトカーのサイレンが近づいてきた。次々に表で停車してる。シャッターを閉めたら逃走経路を自分で断つことになるんじゃないかと思っただが、なるほど、中の様子が分からない



限り簡単には突入できない。

全員がカウンター前に座らされた。給料日の遠い平日なのもあって職員含めて二十人に満たない。相手は一人だ、一斉にかかれば勝てる。

誰も勇敢に立ち向かおうとはしなかった。必ず犠牲者は出る、いまだ苦しむ職員のように。あの一発で刃向かう意思はすっかり削がれてた。

森里さんが腕を上げる。

「警視庁捜査一課刑事の森里という者だ」

銃口が向けられた。

「刑事だと？ 俺がこの銀行襲うのを知ってやがったのか」

「いいや。たまたま休みでここに用事があつたんだ」

胡散臭そうに森里さんを睨む。

「まあいい。それでおめえは自己紹介がしたかったのか」

「人質を僕と交代してほしい。女性には酷な役割だ」

申し出に、うなだれてた女も顔を上げた。

犯人は彼女と森里さんを交互に見て却下した。

「おめえ、訓練を受けてんだろ。しかもでけー。なにされるか分かったもんじゃねえやな。だが、役には立ちそうだ」

痰の絡んだ声で命じたのは外の警察との連絡だった。三億と車の用意、お札は使用済みの物。

森里さんは警部に電話をしたようだ。犯人へ再び視線を向ける。

「三億はすぐには用意できない」

「なんだと、と険しい表情で携帯を引つたくる。

「皆殺しにするぞ、無理でもしろ。三十分やる、用意できたら連絡を入れるんだ。もしできなきゃ分かつてるな」

一方的に早口でまくしたてて通話を切った。携帯を投げ返される。「こんなことをしてどうするつもりだ。二度も強盗が成功すると思つてるのか」

「知るか。やるしかねえんだ、俺はよお」

イスを引つ張り出してきて深々と座る。人質の後頭部には銃口があてがわれた。女子大生ぐらいの若さであろう女は諦めた様子で暗い面持ちで老けこんでる。

「だいたいおめえらが悪いんだぞ、闇金業者を取り締まらねえから借金まみれになっちまったじゃねえか。たった五十万借りただけなのに一年で五千万だぞ、信じられるか。闇金さえなけりゃ、こんなことにはなんなかつたんだ。怠慢な警察が全部わりいんだよ」

このくそじじい。借りたのはお前の勝手だ。正規の金融機関が貸してくれるほど信用がないから承知して闇金に行つたんじゃないのか。貸す方もカスなら借りる方もカスだ。言うに事欠いて警察が悪いだど？ ふざけんのもいい加減にしる。

殴つてやりたい衝動に駆られた。

僕の動きを察知した森里さんに止められる。少し冷静になれた。特攻しても三步目で撃たれる。勇気と無謀は区別しなくちゃいけない、ここはチャンスを待つしかなかった。相手は一人、それも猟銃だ、一発か二発をやり過ぎせばなんとかなる。

状況は最悪なのに恐怖心はなかった。つい立神と比べてしまう。なにもかも幼稚に見えてくるんだ。クソゲームや爆破される学校からの生還で変な度胸がついた。気まぐれに撃たれる展開もなくはないが、ほとんどの出来事にはルールがある。

注意すべきは猟銃と人質の命だ。監視下に置かれてるいまは少しの動作で怪しまれる。いつでも突撃できるように心の準備をした。初めの行員のした行動は間違いない、ちょっと運が悪かったんだ。僕はああいう人間に憧れる、なんとしても助けたかった。

外の騒々しさが増してる。犯人が人質を連れて小窓のブラインド越しに覗いた。

「森里さん、拳銃はないんすか」

「残念ながら持ってきてないよ。でも心配しないでいい、犯罪者が幸せになる仕組みはいつの世にもない」

小声でやりとりした。森里さんが言ったのは全部の犯罪者に当て

はまるんだらうか。

犯人が戻ってくる。ぼくは、あ、と思わず声を出した。野太い銃身が方向転換する。引き金一発で死亡。これはこれで迫力がある。

「なんだ、なにか企んでやがんのか」

「いや、足を引きずってるから。俺の親父も両足が不自由になつて、それで」

右が悪いらしい。さつきから変だと思ってたんだ。銃にばかり気を取られて見えてなかった。

なんだそんなことかとパイプイスに腰を下ろす犯人。

「事の初めはこいつだ。もともと土木やってただけどよ、これでも着実に出世してたんだぜ。そこへ馬鹿な若造が鉄骨落としゃがって、あつさりクビだ。再就職するにもこの歳とこの足じゃどうにもなんねえ。女房と子供にや愛想尽かされ、金は尽きた。足さえ無事なら家庭は壊れなかつたのによ」

喉を鳴らし、痰を吐き捨てる。

「それ、本当に足のせいだよ」

つい口を出てた。

「うちのおふくろは安いパート稼ぎで家を支えてるぜ」

「俺に説教垂れようつての、ガキ」

犯人が立った。僕も膝立ちになる。体を引つ張る森里さんを振り払った。

「親父だつて内職してる。確かに金はないけど、それでもそれぞれできることをやってる。事故から数年経つたいまもまだ仲は壊れちゃいない」

少なくとも自分と以外は。

犯人が馬鹿にした笑いをする。

「よつぽどお人好しな女なんだろうぜ、お前のおふくろは。俺の方はクソババアだ、貧乏クジを引いちまった。ガキができちまったからしょうがなく結婚してみたが、若さゆえの過ちつてのはしたくねえもんだな」

「過ちに若さもクソもあるかよ」

途端、こめかみに鈍痛が走った。猟銃の尻でぶっ叩かれたんだ。軽く切れ、押さえる指に血がこびりついた。見下ろしてくる犯人を睥睨する。

「撃てないと思ってるのか？ 勘違いすんじゃないやねえ、俺は若い奴見るとぶっ殺してやりたくなるんだ。次は撃つぞ、一人撃つのも二人撃つのも変わらねえからな」

びっこを引いて戻っていく。

体を起こすのを手伝われながら僕は小声で言った。

「やっぱり甘い」

小首を傾げる森里さん。

「立神なら有無も言わず殺す迫力がある。森里さんの言う通り、安心して良さそうだ」

「相原君……？」

撃たれた男の血色が急速に悪くなって。同僚がタオルで縛ってみても効果はあまりなく、短時間で真っ赤に染まる。森里さんが負傷者の解放を頼むも、容赦なく跳ね除けられた。

「知ったこつちゃねえ、おとなしくしてりゃいいものを、刃向かう奴が悪いんだ」

貧乏揺すりをしてちらちらと自分が撃った相手を見てる。俺の責任じゃねえからな、と何度も言った。

森里さんの携帯電話が鳴った。犯人が、出る、と合図する。お金と車の用意ができた、その連絡だった。

「良かったじゃねえか、これで治療なりなんなりできるぜ」  
「ろくでもねえ。」

別に負傷者を気遣う優しさがあつたんじゃない。一番ほつとしてるのはあんただろうに。殺人犯にならずに済んだ、などと考えてんだ。無駄に歳を重ねた典型例。器の小さい男の思考は簡単に読める。

犯人は機嫌良くブラインドの一行を開いて外へ視線を巡らせてる。「相原君。僕はね、似たような目に一回遭ったことがあるんだ、子

供の頃にね」

「銀行強盗ツスカ」

「誘拐だよ。助けに来た刑事は人質にとられた僕を前に自身の銃で殺された」

刑事は父だった。

森里さんが、そう言った。

「あの頃の自分はなにもできなかったけど、いまならできる。君は手出ししないでくれないか。僕が絶対に捕まえてみせる」

決意の込められた瞳で犯人の背中を見据えている。僕の思考も読まれやすいらしかった。先に釘を刺されちゃ動けない。行動が重複して迷惑になる場合もある。黙って肯くしかなかった。

一つ気になつてたことがある。犯人は足が悪い。なのに、車を用意させたところで運転が不自由なくできるんだらうか。オートマはまだしも、マニュアルは無理だ。要求のときにそんな指定はしなかった。運転手役が他に必要になつてくる。

外で待つてるとは考えられない。奴は連絡してないんだ、内部の状況を伝えてないんじゃない。都合が起きる。イレギュラーな事態に対応できない。計画が稚拙でそこまで計画が及んでないってことはないだらう、一度は銀行強盗を成功させた人間だ。

この中に犯人の仲間がいる？

初っ端に立ち向かっていった数人は違う、弾は誰に当たってもおかしくなかった。他、逃げ走るのすら満足にいかない年寄りや致命的なほど強盗仲間としては相応しくない。残るは八人。男行員が三人、男が二人、女行員が二人、女が一人。皆、強張った表情で皆目見当がつかない。

こんなときに麗葉なら解決法を冷静に瞬時に判断するだらう。

予知も出なかった。使い物にならない力だ。

無難は男。自分なら仲間を男を選ぶ。この強盗計画に限って女を共犯者にするか？ しない、きつとしない。五人に的を絞る。若さ、体力もあつた方がいい、頼りになる。そうなると残るは二人。二択

なら行動方針も定められる。どちらかが不審な動きをしたら迅速に対応すればいい。

なんだそれ。

話にならない、これは屁理屈だ。

森里さんに共犯者について意見を求める。なるほど、と肯いてくれた。ただし彼にも分からないようだった。その代わりに動かしたのはタロさんだ。森里さんの言葉通りに犯人の死角になる背後、それも観葉植物の後ろへ伏せた。

犯人を無事に確保しても共犯者に反撃される懸念がある。取り押さえた途端に後頭部へ一発食らわされたんじゃないやコントだ。タロさんは切り札になる。

機械式のシャッターが自動で上がっていく。出口が開き、一人ずつ順番に出るよう言った。森里さんが仕切って年寄りと女を先に行かせる。続いて男。あとは僕と森里さんにタロさん、それと

「私も」

後を追おうとしたのは銃口をつきつけられた人質の女だ。二の腕をがっしり掴まれる。

「おめえは俺が金と車を手に入れてからに決まってるんだろが」  
脳裏に閃きがあった。

「あの女だ！」

僕が叫ぶ。発言自体は言葉が欠如してて意味が通らない。

言わんとしたことは森里さんに伝わった。タロさんに指示をかける。背に飛びかかられた犯人はあっさり女を解放した。八割の確信が一〇割になった。人質を模した共犯者だったんだ。逃亡を図る彼女を捕らえる僕。

銃声。床のタイルに穴が空く。タロさんが唸りを上げて噛みついた。振り解こうと暴れる犯人。遠心力を利用してタロさんが離れて着地。

銃口が向けられる。

森里さんがタツクル、犯人を弾く。

銃声。

タロさんの果敢に挑んだ二度目の噛みつきは体が浮いた地点で散った。胴体を床に激突させて蠢く。

発砲があつたのを合図に盾を持った警官隊が突入してくる。森里さんの荒い息、犯人の罵声、そしてタロさんの悲痛な鳴き声が静寂に落ちようとしていた。

手錠のかけられた犯人は任せて銀行に残る。森里さんは呼吸の弱々しくなつたタロさんの傍であぐらをかいていた。

救急隊に診てもらつた。彼らは、なにも言わずにただ顔を伏せた。弾丸の一部が急所に当たつてたんだ。おびたらしい出血量だつた。毛布で包んであげるのが精一杯。

意外に森里さんは冷静だつた。タロさんを撫でてる。虫の息だつた呼吸が次第に激しく短くなつていく。舌はだらしなく垂れて焦点も合つてない。

「頑張つたね、偉かつた、タロさんは最高の警察犬だよ。疲れたるう」

優しく語りかける。

「もういいんだ、犯人は逮捕した。あの有名な指名手配犯をタロさんが捕まえたんだ、大手柄だよ。だから」

「おやすみ。」

言語が通じたようだつた。いや、通じたんだ。瞳をつぶり、最後に大きく一呼吸をした。膨らんだ肺がスローモーションでしぼんでく。

森里さんは血で汚れるのを構わず片腕で抱えた。もう片方の拳で床を殴りつける。表情は苦渋に満ちてた。犯人に対しての悔しさじやない、おそらく自分に対しての不甲斐なさだ。

犯人がパトカーに乗せられてる。どうせ何年後かには出所するんだらう。

「いいんスカ、このまま行かせて。きつと好きなだけ殴つても誰も文句言いませんよ。なんなら俺がやりましょうか」

僕は自分の手のひらを殴りつけた。森里さんの代わりにというよ  
り、本心からそんな気分になつてゐる。

「いいんだ。犯人確保、それで十分」

「タロさん殺されたんですよ。やられっぱなしで、それで気が済む  
んすか」

「僕は仏様じゃないんだ、殺意だつてある」

僕が言葉を返す前に、だけど、と言う。

「それじゃ駄目なんだ。奪われてばかりの人生でも、同じことをし  
たら犯人と変わらない。僕にできるのは、一人でも多くの犯罪者を  
捕まえて、更正させること。そうやって全員が更正すれば、この世  
は誰もが安心して暮らせるようになる」

「なに生温いこと言つてんすか。ああいう根っからひん曲がつた奴  
は出所したつて反省なんかしないツスよ。犯罪に至らなかつたとし  
ても、色んな場面で小汚い真似をするに決まつてる」

「分かつてる、綺麗事だつて言いたいんだらう」

凶星だ。口をつくむ。

森里さんがタロさんを胸に抱いたまま立つた。

「僕がしたいのは綺麗事なんだ」

パトカーが野次馬を掻き分けて走り去っていく。

「生まれながらにして犯罪者だつたら、人間という生き物ほど哀し  
いものはないじゃないか」

上戸さんを連想する。中学時代の彼女は間違いなく犯罪者じゃな  
かつた。どこかで脱線してしまつたんだ。銀行強盗のおっさんも、  
どこかでレールを落ちてしまったのかもしれない。

「立神もツスカ」

彼がこつちへ向いて応える。

「そう信じてる」

嘘偽りを感じさせない一直線な瞳だつた。

この人には敵わない。綺麗事だとは思ふ。でも彼の言う人間が世  
界人口を占めれば、等しく平穏が訪れるだらう。強盗も、殺人も、



暴行も、事故も、なにも惨事が起きない毎日を望むのは自分も同じだった。

タロさんの葬儀は人間と同様に行なわれた。霊柩車を見送る敬礼は排気の匂いが消えても尚続けられたという。それからというもの、僕は仕事を休んだ。事務所の番号で電話が何度かあったが、出る気になれなかった。

犯罪者のいない世界で底なしに沈んでいたかった。

**犯罪者のいる世界（後書き）**

次話更新予定は明日（11/18）です。

Next:「スーパーベビー」

## スーパーベビー（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=P47878715

## スーパーヒーロー

普通のバイトは無断欠勤でクビになる。叱咤されないのは気持ち悪かった。

休んだ理由を求めてきてもいいのに、三日ぶりの麗葉はなにも訊いてこない。僕は切り出すタイミングを失って一日の仕事を終えた。日給ももらう。

ストーカー騒動も忘れてなかった。駅前で仕事終わりの綾木と落ち合い、三人で家への道程を辿る。

ここでいい、と麗葉は玄関より先には入らなかった。森里さんにも一部預けた髪の毛と麻由たん好きを連呼した手紙を渡す。

紙を明かりに透かした。裏と表を見て返却される。小箱の毛髪を一本取ってぴんと張り、網膜に触れそうなくらい近づいて見てる。次に爪で挟みこみ、引っ搔いた。ちぢれ毛になる。しばし見つめ、箱へ戻した。

ちらつと顔を上げる。綾木がたじろいで僕の後ろに隠れた。なによ、と反撃する。変わらず相性は良くない。

「無駄足だ、つまらない時間を過ごしてしまった」

「待てよ。大して調べてないじゃんか」

猫背を向ける彼女へ投げかける。

「やっぱり怒ってんだろ、黙って休んだの」

「調査する価値がないと言っているのだ。君も、くだらない付き合いはほどほどにしておきたまえ」

にべもなく去っていった。なんだ、あいつ。憤怒する反面、寂しくもあった。なんだかんだで力を貸してくれると思ってたんだ。そこそ分かるり合える仲になってたし、だいたいストーカー退治に乗り気だったのは麗葉だ。

綾木と玄関に立ち尽くす。

「きつと嫉妬ですよお、先輩が私につきっきりだから」

それはない、と断固否定。あいつは世界が反転したって妙な感情で行動しないだろう。

「なににしても、ろくに調べないで帰るなんて冷たい奴だよな」

心のどっかで見損なつた。手伝う義務はないけど、もう少しちゃんとした対応のしようがある。あいつは僕をその程度の人間として位置づけてるんだ。草加部さんが言うような奴じゃなくて、森里さんの言う通り所詮は犯罪者なのか。

自己中心の機械女。母親殺害の説も真実味があるような気がしてきた。他人は当てにならない。

綾木の頭に手を置く。

「心配すんな、俺がストーカーを捕まえてやる」

そうと決まれば一刻も早く手掛かり探しをしたくなつた。受け身ばかりじゃしょうがない、こつちが攻めに回る番だ。追い詰めて捕まえて警察に突き出してやる。

そういえば今日は郵便受けを見てなかつた。またなにか入ってるかもしれない。居ても立ってもいられず、サンダルをつっかけた。緊張しつつ蓋を開ける。ピンクチラシが一枚。他にはなにも入ってなかつた。ひとまずはほっとする。

自転車のベルが鳴らされた。郵便配達員だ。こちらのお宅ですか、と訊いてくる。うち宛てに郵便物があるんだ。ご苦労様ですを告げて受け取つたのは髪が入つてたのと似た箱だつた。

玄関を上がると僕の持つてる物に気づいた綾木が眉をひそめる。

「差出人は誰ですか」

「なんも書いてない、真つ白だ」

包装紙を破く。セロハンテープで留まつた口を引っ張つた。出てきたのはビン。重みのあるそれを摘まみ上げる。

綾木は又イグルミのチュー太を握り締めた。

爪が目一杯に入つてる。小ビンといえど、何ヶ月溜めこめばこんなになるんだ。気味が悪いが、重要な証拠だ。これも保管しておこう。

包装紙をどうするか考える。さすがにこんな紙つきれにはなにもないか。くしゃくしゃに丸め、ゴミ箱へ振りかぶる。なにかがおかしい。

改めてテーブルに広げ、皺を伸ばす。

「どうしたんですか」

「これさ、郵便屋がちょうど来て渡されたんだけどさ」

表、なし。

裏、なし。

「やっぱりだ。ない」

「なにがですかあ」

彼女に広げて見せた。

「差出人どころか宛先もないんだ」

「えっと、それって」

郵便屋はなにを頼りに届けたんだ。隠れた推理の天才で、あるときは郵便屋、あるときは謎の運転手、そしてその正体は名探偵！

あり得なかった。

「あいつがストーカー野郎だったんだ」

サンダルも履かないで階段を駆け下りる。

跡形もない。特徴を思い出そうとする。おぼろげな輪郭しか出てこない、薄くぼかした水彩画だ。こんなとき、麗葉なら雑作もなくモニタージュ写真を作るだろう。意地でも引き留めておくんだった。いや、あんなのに頼ってたまるか。自分なりに調査して捕まえる。相手は立神じゃなく、ただのへなちょこ野郎だ。綾木になにかするには接近が必要になってくる。それはそれでチャンスだ。来ないなら来ないで気持ち悪い嫌がらせ程度で終わり。深刻に考えなくてもいいんだ。

翌日の仕事はまた休んだ。ただし、電話連絡はした。ストーカー調査のため、と皮肉たっぷりと言ってやった。

「私も連絡しようとしていたのだ。しばらく君は来ないでくれたまえ」

絶句する。これは実質のクビ宣告？ こいつは遠回しに伝えるタ  
イプじゃない、クビはクビと言う。印象は、半端な制裁。無断欠勤  
の罪を泣いて反省するまでは干すってことかもしれない。上等だ、  
そっちがその気なら徹底対抗してやる。泣きついてくるのがどっち  
か我慢比べだ。幸い、貯めこんだ日給で働かなくても生活には困ら  
ない。麗葉は敵に塩を送ってたようなもんだ。

意気込んで朝っぱらからストーカーの搜索を始めた。いきなり出  
鼻をくじかせたのは二人の男だった。例によって悪仲間ペア。いつ  
も二人で仲の良いことで。

わりと近所にストーカーが潜伏してると考えてうろついてたのが  
いけなかった。またもや廃校付近で出くわした。ろくに働きもしな  
い暇人はこれだから嫌だ。

門にされてたチエーンがなくなってる、無断で切ったんだ。重々  
しい音を響かせてスライドさせてく慣れた様子だった。こいつら、  
ここで生活してるんじゃないよな。

校内へ入るなり腐った桜の木にぶつけられた。木が軋んで破片が  
降りかかる。

ガリノツポは僕の襟首を掴んで押さえつけてる。チビデブはおも  
むろに携帯を出して格好つけて回転させた。ダイヤルするのは平凡  
だった。電話は、あつもしもし高橋さんツスか、で始まる。嫌な予  
感メーターが急上昇した。

「ええ、潰れた学校の体育館裏です。いまどこツスか。パチンコ？  
近くツスね。じゃあ待つてます、はい、はい」

「ぱちん、と携帯を閉じて回転させ、ポケットにしまった。不敵な  
笑みをしてる。

高橋が来る？ なんでそういうことするんだ、事態が面倒になる。  
こっちはさつさとストーカーを捕獲したいんだよ。僕は融通がきか  
ない、二つ同時に対処するには脳を分割しないと無理だ。丸ごと細  
胞分裂したくなる、できないけど。

あいつは真正銘のヤクザだ。出てくるとなにをしかすか分か

らない。組の中で特に血の気が多いらしく、付き添いの舎弟をよく殴り飛ばしてた。たまにいつも見てた人がいなくなる。深くは言及しなかったし、したくなかった。

そんな高橋が来る？ ああ面倒臭い。

「面白いことになってるな」

いつの間にか男が立ってた。奴が来たのかと思えば、別人だった。警察でもない。あるいは高橋の何倍も面倒になる人物。

立神荘士。

「あんた、あのとときのまんまなんだな」

「ん？ ああ、顔か。凝りだすと三日はかかるからな、必要がなければ変えるつもりはない」

高校の屋上で見たのと同じ、中分けの黒髪に細い目だ。服装は作業着じゃなく、スタイリッシュなスーツだった。片手をポケットに入れて立つ様はモデルみたいだ。仕事のできる男、て感じ。

困惑する悪仲間を横目で見る。

「手を貸そうか、イヴ」

「やめてくれ、面倒の二乗の倍率ドン、更に倍になる」

死人が出かねない。嫌な奴らではあっても殺すほどのもんじゃないんだ。物事には分相応がある。殺人現場を目撃して警察に事情説明して立神との関係なんか訊かれちゃったりして僕は知らない僕は無関係だなんて訴えても聞いてくれなかった日にはストーカーどころじゃなくなってくる。過去の汚点を暴かれるのも遠慮したかった。警察は遠ざけたい、犯罪者も遠ざけたい。

いつそ誰も寄ってこないでほしかった。

「なんだてめえは！」

「やーめーてー」

チビデブが威勢良く向かっていく。止めようにもガリノツポに捕まってる単純な腕力には負ける。とうとう殴りかかるのを見過ごすしかなかった。

カウンターで予備動作のないパンチがブタ顔にめりこむ。低い鼻



がますます低くなった。白目を剥いてただの物体が倒れるように俯せになった。ぴくりともしない。

行つてほしくない方向に展開は進む。

ブタ君を見下し、足が上げられた。追い打ちで踏みつけようとしてる。

「やめろ！ それ以上はいい、あんたはどっか行つてくれ」

寸前で止まった。革靴の足跡が頬についてる。顔面粉砕もあり得た。僕に感謝しろよ。証拠VTRがないのは悔やまれる。

立神が、そうだ、となにかを思いついたようだ。

「お望みとあらば、この醜いハム野郎の戸籍を抹消してやるぞ」

「望んでません、帰ってください、お願いですから」

残念そうに見えるのは気のせいじゃない。東京湾に沈めるヤクザの方がまだ良心的だ。立神の思考には価値のない人間は人間じゃないとする傾向があると感じられた。

「冗談だ、本気にするな」

愉快を言葉に乗せて発する立神。

ごめん、笑えない。チビデブがこの世に存在してないことにされる。現実にそれだけの力がありそうだから恐ろしい。

ガリノツポが僕を解放する。拳を握つてやる気満々だ。やめておけて、死ぬつて、リアルに死ねるつて。待て待て待て。

「なんだこりゃ。一匹ぶつ倒れてんじゃねえか」

懐かしくも聞きたくない声だった。一人で来たらしい高橋だ。

頭が痛い。予知の前兆じゃないのは間違いない。

僕＋立神＋高橋＋他二名（一名ハム野郎）。

こんな計算式、答えを出したくない。混ぜるな危険、警報ランプが百個は回ってる。どうにでもしてくれつていう気分になった。あとは野となれ山となれ、死人が出ないのを祈るのみだ。

赤いシャツのボタン三つをざっくり開けた高橋がオールバックの髪を撫で上げる。知らない人間である立神へガンをつけた。いつ爆発が起きてもおかしくない。

「なんだこいつ、相原の知り合いか」

「知り合いつていうかなんていうか、まあ、はい」

ふーん冴えない顔してんな、と半笑いになつて、んなことはどうでもいい、と話題を切った。よしよしその調子だ、立神には触れるな、エサを与えないでください。

「うちに戻つてくるつもりはないんか」

「そう言ってもらえるのはありがたいッスけどね、いまは他のことやってるんで」

戻るわけないだろバーカ。

高橋がタバコを出し、ジッポライターで火を点ける。吸いこみ、顔面に向けて煙が吐き出された。染みるのを防ごうと薄目になる。

「ただとは言わねえよ。借金半分にしてやってもいいぜ」

「それはきつちり返します、大丈夫ッス」

戻る意思なんかこれっぽっちもないんだよ、察しろおっさん。三百万ぼっち、いつか一括払いしてやる。だからさっさとこの場を去ってくれ、なにがどうなつても責任持てない。

背後からくすくす笑いが聞こえてくる。敢えて耳に入れないようにした。

高橋が続ける。

「どうしてもか。腹割つて話すとよ、使える若い奴がいねえんだよ。俺を助けると思って手え貸してくれや。報酬だつて弾むし、組長に幹部候補として推薦してやつたつていいんだぜ」

「勘弁してくださいよ、ホントすんません」

無理です、無理無理です。ヤクザの幹部？ いいように使つて捨て駒にされるのが目に見えてる。あんたらのやり口は知ってたんだ。これでやる気ないつて分かっただろ、さあ帰ってくれ。

くすくす笑いが継続してる。

「そこをなんとかよ」

くすくすくすくす。

こめかみに血管が浮き出るのを確認する。苛立たしげにタバコを

捨てた。

「さつきつからなんだてめえは、へらへらしやがって！」

相手は立神だ。

終わった、なにもかも。

高橋を前に、線にさせた目は弧を描いている。会話がツボだったようだ。おそらく僕の回答と、その裏の心理とのギャップを読み取ってたんだろう。それぐらいはしてのける男だ、人生楽しそうだなにより。

僕はなんて不幸なんだ。

高橋が寝続けるチビデブを一目見る。

「こいつやったのおめえだろ。うちの舎弟をたつぷり可愛がってくれたみてえじゃねえか、あ？」

首を縦に振って大股歩きした。

笑みを絶やさない立神は無視をする。

高橋の頭に血が昇ったのは顔色で分かった。襟首を掴んで、聞いてんのかこらっ、と脅しを入れる。直後、相手は無表情になった。瞼の隙間にはドライアイスみたいに冷たい眼球。

「ヤニ臭い手で俺に触れるな」

薬指が握られて曲がっちゃいけない方に曲がってる。おかまめいた女々しいポーズになって喚く高橋。

ぼきん。

スナック菓子を折ったような軽さだった。絶叫。腰を屈めて苦しんでる。ヤクザの面影はそこにはない。

立神は尚も握りっぱなしで離さなかった。ひねくり回し、執拗に観察してる。指はどんどん赤黒く変色していった。念入りな鑑定が続く。

「E級未満、駄菓子も買えない廃棄物だな」

弾き飛ばす。なにをもつて良しなのかは不明だ。

ひーひー喘ぐ高橋は患部を押さえてうずくまる。立神の脚が動いた。爪先があごを跳ね上げ、無様に転がる男が一人。鼻血を噴いた

彼は地面を逆ハイハイした。

更なる危害を加えてこない立神を見て、ようやく立ち上がる。

「てめえ、どこの組のもんだ」

いまさら凄んでも迫力はゼロだ。僕どころか、無傷のガリノツポも白けてる。内心を代弁すると、こんな奴に従ってた俺ってもしやカスなのか、だ。ようやく気づいたな青年よ、それは小さな一歩だが人生においては大きな一歩だ。

「組織の名前か。夢幻倶楽部だ」

「聞いたことねえな。さては新手の組だな」

でっかい勘違いをした高橋は後退りながら声を張る。

「芽の出ねえうちにぶっ潰してやる。逃げたって無駄だぞ、きつちり型にはめてやるからよ」

傍観してた僕の近くに差し掛かった。血走った目が向けられる。

「相原、てめえもだ！ ふざけた真似しやがって、ただじゃ済まさねえぞ」

あはは。もうどうにでもしてくれ。

ヤクザのおっさんは片手を庇って小走りにいなくなった。呆然としてたガリノツポが我に返り、立神を警戒しつつチビデブを起こすとあとに続く。

時間的には大して経ってないのにゾウガメの甲羅を装着したような疲労感だ。

立神はというと情けない三人を嘲笑ってる。こっちの身にもなってもらいたい。

「俺は知らないぜ。あいつらだつてしつこさじゃ負けてないし」

「なあ、イヴ。薬指を見せてくれないか」

拒んで逆上されちゃ阿呆らしい。へし折られないか恐々と左手を掲げた。見つめ、いい指だ、と彼がうつとりした。顔面が近づいてくる。熱い息がかかった。無防備に開けられる口。

既視感があつて引っこめる。ぱくつと危うく唾えられるところだった。僕の手は変人共の釣りエサじゃない。

距離をとる僕に肩を落とした彼が自身の指を口内へ含む。

「指は薬指に限る」

舌を絡ませ、丹念に舐め上げた。唾液でてらてらと光ってる。

「長すぎ短すぎ、細すぎ太すぎ、均整のとれた指だ。実に美しい」

「それなら人差し指でもいいじゃんか」

なにか言わないと呑みこまれそうだった。

コレクターの考えることは分からない。傍目に、薬指と人差し指は似てる。長さも太さも同じだ。薬指が美しいと仮定したら人差し指もそうだと考えた。

ちつつちつ、と舌打ちされる。分かってないなあお前は、てな具合だ。指なんてどうでもいいけど、ちょっとむかつく。

「人差し指は使いすぎる」

一本、その指を立てる。

「なにかと力を加えて酷使するだろう？ おまけに鼻をほじるときも耳を掻くときも大抵が人差し指だ。太さも長さも似ていながら力入れにくい薬指の出番はほとんどない」

ああそういえば。なんとなく納得してしまった。わざわざ薬指で鼻をほじる人間は見た経験がない。耳もだいたい人差し指か小指が使われてる。

「人差し指は見てくれだけがいい淫売だな。その点、薬指は純潔を頑なに守る生娘のようではないか。この差は大きい」

さあ今日から君も薬指収集家にならないか。なつてたまるか！。背筋が寒くなってきた。いつの間にか取り込まれてしまいそうな錯覚がある。すぐに逃げ出してしまいたいのに足が地面を離れない。本当にコレクター仲間になれそうだ。

「それにしてもお前がああいう連中と親交があるとはな」

話題転換される。

僕は胸を撫で下ろした。

「俺には人生のスランプ時代があるんだよ、いまも変わらないけど。

そろそろ帰っていいツスか」

「こんな話を知っているか」

延長戦突入。

運がない、こういう日もある。今日ストーカー調査するとなにか厄災があるんだ、だから神様が邪魔を入れるんだ、きっとそうだ。自棄気味になつて、腹の中であぐらをかく。

立神は高橋の捨てたタバコの火を踏み消し、土をかけて埋めた。

「十九世紀に興味深い実験がされたんだ。ラットを優秀群と劣等群に分けて繁殖を何代も繰り返し、その能力は子孫へ遺伝されるか否か。どう思う？」

「そんなの、環境だつてあるだろうし、遺伝したつて些細なもんだろ」

聞いたふりして受け流そうとしてたのに、少し興味があつてつい応えてしまつた。

そうだな環境は大事だ、と立神が肯く。

「しかしそれぞれには個人限界がある。定められた限界、それは遺伝によつて決まる。結果、優秀と劣等の双方の子孫には明確な能力差が出た。理論的には遺伝の起こるどんな生物にも応用が利くつてわけだ」

「まさか、人間でもやってみようとか考えてんのか」

彼がほくそ笑んだ。

僕は踵を返す。

「馬鹿らしい、ラットと人間が同じかよ。悪いけど、俺は帰らせてもらうぜ」

「なにを言っている、極身近にいないではないか」

一瞬、奴自身かと思ひ、口振りからして違つたと推測した。

他となると？ 一人の姿がフラッシュバックする。

「ご名答。立神が言った。」

「彼女は優秀群の配合により誕生したスーパーベビーだ。母親がなかなか素晴らしい思想の持ち主で、自分の血を補い活かす優れた血

統種を個人で調べた。相手が見つかったからは三年もかけて狂気じみたプロポーズを続けたらしい。惚れるだろう？ もっとも、実の娘に殺されるようでは、だいぶ甘さがあつたようだが」

「それ」

「ん？」

「ああ、いや、本当に麗葉が殺したのか。実の母親を」

「スーパーベビーについても知りたくはあつた。でも殺人をしたのかそうじゃないのかの方が僕にとっては重要だ。」

「気になるのか、の言葉に首肯する。」

「まあそうか、人生の分岐点になつた事故を起こした張本人が彼女ではな」

「なにを言つてるのが脳で噛み合わなかつた。事故つてのは相原家の家計を大幅に崩したあの事故だろう。麗葉とは水と油の関係だ。混ぜようとしても混ざらない、融合不能な物質同士。」

「珍しく立神が意外そうな反応をする。」

「なんだ、聞かされていなかったのか。乗用車で逃走していたウルルンにぶつけられて横転したのは当時中学生のお前が乗っていた車だ。ちなみにあの刑事、森里とか言つたか。そのときパトカーで追いかけていたのがあいつだ。てつきり俺はその関係で親しい仲にあるんだと思つていたが、そうなるのと完全な偶然なのか。素晴らしい巡り合わせだな」

「脳内スクリーンに当時の映像が再生される。対向車線を突っ切つて暴走する車。僕は後部座席であの瞬間を見てた。パトカーを振り切るために白線を越えてきたんだ。そして横転。」

「違う。巻き戻し。窓際に座つた僕はどうしてた。」

「横転の間際、運転手を見る。うん、見えた。衝撃が酷くてすっかり忘れてた。どんな人間だ？ あれは、そう、少女。背が低くて顔の半分がハンドルに隠れてた。」

「その顔は」

「麗葉。似てる。いまより幼いけど、あれは麗葉だ」

いまにして思えば日給二万円というのもおかしい。おかしいのは初めから感じてた。雑用係でその高給はできすぎだ。ただそれから立神の件もあって、危険さが考慮されてるんだと納得した。一度答えを発見したらそれ以上は深く考えようとしなのが人間の心理だ。ずれたのはどこだ。出会いは偶然、これは確信できる。悪仲間二人に追いこまれて事務所前の路地で袋にされたんだ。意図されてるのは次。そもそも普通は出会って間もない奴を雇おうと思わない。小説家を目指してたのを明かしたのは後日だし、僕に不思議な力を見出したからだけじゃ信用して雇うに値しない。もつと根本的な理由があつたはずだ。

僕への償い。

彼女に拾われた携帯には簡単なプロフィールを登録してた、あの相原家の息子だと分かる。ちよつと電話番号や住所、経歴を辿ればそんなに難しくくない。僕がお金を望んでることを知ってたんだ。

いきなり大金を渡したんじゃ気持ち悪がつて受け取らない。特に僕はどんなお金が分からずに手をつけると酷い目に遭うことを裏社会で見えてきてる。

だから「雇う」形で償いを始めた、日給二万の不当な額で。

辻褄が合ってしまった。麗葉が僕の真つ当な人生を奪つた人間。理由はどうあれ親殺しをし、自分勝手に事故を起こして逃走した最低な人間。交通事故さえなければ上戸さんとも縁が続いて早いうちに留められた。こんなにもほころびだらけの人生になることもなかった。

なにもかも手遅れ。

体が震えた。どんな感情の震えかは自分でも分からない。どうしていいか分からない。無人島で身の丈の何倍もある穴に落ちてしまったみたいないな感覚だ。助けを呼んだつて無駄だと分かっている。声も出せない。どうしようもない現実に震えてる。

「憎いか？ 殺してやりたいって顔に描いてあるぞ」  
勢いで襟首を掴んでた。



恐怖する。高橋の二の舞になるんじゃないかと思った。

立神は、ジヨークだ、と笑って離すようやんわりと腕に触れてくる。

乱れたスーツを直し、

「殺すにしても少々待ってくれよ。ウルルンとの遊びは気に入っていたが、そろそろおしまいにしたい。入部させたい人材は世界中にまだまだ多いからな。どうにか次で彼女を俺側につけたい」

「あいつが仲間にならなかつたときはどうするんだ」

そうだな、と考えるポーズをした彼は肩を竦め、その答えも次で出そう、と言って校舎の裏へ行ってしまった。

体育館に寄りかかる。頭の後ろで手を組んで抱えるようにした。なにかする意欲が湧いてきそうにない。

僕は細った桜の木を気温が急激に落ちこむ時間までずっと見上げてた。

## スーパーヘビー（後書き）

次話更新予定は明日（11/19）です。

Next:「エキセントリックワールド（1）」

メールフォームでコメントをくれたYさん

ありがとうございます！

丁寧でいて率直な言葉に感謝します！

おかげで新たな意識の目が開きました！それも複数。

上手くなるにはこの意識の目を増やしていくことが大事だと思うので、大変ありがたいです！

今作はキャラや展開がガチガチに固まってしまっているゆえ

アドバイスを活かすのは次作からになってしまいますが、

指標を見出せずがんじがらめになった現状を打開するための大きな

一歩になりそうです^^

思い切って連載をしてみても良かったと心より思いました。

結構な年月の間、小説を書いてきました。

しかし、そういえばラブコメらしいラブコメを書いた記憶がありません。

チャレンジしたいと思うと同時に、しばらく忘れていた活力が湧いてきました。

色々な意味で、ありがとうございます！m（）（）m

## エキセントリックワールド(1) (前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価/感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

X?ID= P47878715

## エキセントリックワールド(1)

「ええ、はい、分かりました、本人にそう伝えておきます」  
失礼しますをして受話器を置く。

玄関で鍵の開閉する気配がした。綾木が帰ってきたんだ。以前よりずっと早い時間だった。最近のストーカー騒ぎでシフトが夕方前に終わるよう代わってもらったと彼女は言ってる。僕に氣遣って送り迎えをさせない意図もあるんだろうと理由付けた。日の沈みきらないうちであれば確かに安心感がある。彼女に押し切られて駅での待ち合わせは渋々やめた。

「今日も客は沢山来たか」

「来ましたよ、平日なのに、いい〜っばい。ああいう人達っていつもお仕事してるんですかねえ」

コップにウーロン茶を注ぎ、一口飲んで綾木はふうと息を吐いた。嘘をついてる。

さっきの電話はメイド喫茶の店長だった。綾木のバイト先だ。いつもちよくちよく休んではいたが、ここ数日は来てないんだという。店長調べによると、バイト仲間と折りが合わないのが原因。既に彼女をいじめた何人かを叱って、そういうことのないように注意済みらしい。人気のある綾木は店にとって重要なんだ。

彼女をソファアに座らせた。僅かに緊張しながらも小首を傾げる。

「いまのバイト、嫌なら辞めたらどうだ」

「なんですかあ、いきなり。それより麻由、ケーキ買って来たんですよ〜」

「店長から電話があった」

立ちかけた綾木が再び腰を下ろす。何日かしたら行くって言ったのに、といじけ気味に呟いた。膝を寄せ、体を小さくさせてる。向こうの状況を教えてあげた。

「働くところなら他にもあるだろ。なんなら次の仕事を見つければ俺が稼いでも」

言い切れる根拠がなかった。もはや麗葉の雑用係じゃいられない。立神にも狙われ、仕事選びも慎重になる。まともに稼ぐ自信はどこにもなかった。

「とにかく、俺が頑張るからさ。続けてるふりするようなもんでもないし、ストーカーのことだってあるだろ。ちよつどいい機会じゃんか。綾木は休んでろよ、今度は俺が助ける番」

でも、とあんまり納得してない雰囲気と言う綾木。

「こつなりやとつておきを披露するしかない。」

「知ってるか？ 愛つてのは与え合うことを言うんだぜ。一方的にもらつてばつかじゃ愛とは言えないのさ」

ふつ、決まった。

「愛、ですか」

リアクションは薄かった。我ながら頬が紅潮してきてしまう。そつうだぞ愛だぞ、なんて挽回を狙つても白々しかった。本心のこもらない言葉は儂く脆い。

伏し目がちにした彼女はツインテールを左右へ揺らした。

「いまのお仕事、続けます。明日はちゃんと出勤します」

「それだと俺だけが」

「もらつてます」

上げられた表情はいつもの綾木だった。ぶつくらとした唇の間に白い歯を見せる。

「麻由は先輩にいつぱいもらつてます。だから麻由も先輩にお返しするんです。愛は与え合うんですよね？ 前言撤回はなしですよ」

「ふつふつふつ、と小悪魔の如しにやけ。僕はとつともない墓穴を掘つてしまつたんじゃなかるうか。」

「いやいやこつから逆転だ。ホームランを目標に説得を試みようとする。」

先攻は綾木だった。

「先輩、爪伸びてますよ。切らないと危ないですよ」  
あ、本当だ。

爪切りを渡され、ぱちんと切る。近頃はあれこれあって爪に意識が行き届いてなかった。長いと自分だけじゃなく他人にも迷惑をかける。しつかり切っておこう。爪といえばストーカーも送ってきた物。あと得体の知れない液体に髪の毛と手紙。変態のすることは分からない。

鼻歌混じりに綾木はケーキを用意してる。キッチンで淹れられる紅茶の香りに誘惑された。

ショートケーキのイチゴを頬張って気づく。説得の機会を失った。食べ終わって言い出そうとした。携帯の着信メロディーに邪魔された。断念する。

液晶には「森里さん」の表示。

頼んでた鑑定の結果が出たようだ。

「髪の毛からも分かるんスね」

「違うよ、血液が微量ながら付着してたんだ。たぶん切るときどこか傷つけたんじゃないかな」

ああ、なるほど。髪は黒い。血の赤は目立たないし、固まれば黒っぽくもなる。しかもこんなことで本格的な分析をしてるとは送り主も考えない。細かく念入りに注意してなくて当たり前だ。

その結果だけどね、と森里さんが言う。

「犯人は女性だね」

情報がいきなり食い違った。

「なにかの間違いじゃないんスか」

「シバさんの鑑識に狂いはないよ」

彼は強気な口調だった。相当に信用してるようだ。  
すんなりは譲れない。

「おかしいですって。俺、この前に犯人らしき奴を見たんスよ。郵便屋に扮して、爪を届けにきたんです」

「それが男性だった確証はある？」

「どんな間抜けだったって性別は間違えない。」

「背も俺ぐらいあって胸もなくて声も男でしたよ」

「現代女性は身長が高くなってきてる。胸はさらしを巻けばいい。」

声はハスキーボイスなのかもしれない。男だと決めつけるのは早いよ」

「ちょっとこじつけすぎてませんか。仮にそうだととして、手紙はどう説明するんすか。麻由たん好きっていう」

「同性に恋心を抱くのもあり得ない話じゃないよね」

「なんとしても犯人を女としたいんだ。それはそうだ、森里さんにはDNA鑑定という物的証拠がある。そんなころころ変わるものでもない。対する僕にはおぼろげな記憶がある程度。どう見積もっても分が悪かった。」

「そういえば、爪にもDNAってあるんすかね」

「多少含まれてるけど、血液には勝らないだろうね」

「僕は新たに届いた証拠品について話した。」

「まあ、シバさんに回せばなにか分かるかもしれない。一応調べておくかい」

「お願いして通話を終える。」

皿とコップを洗ってた綾木がタオルで水気を拭いて、警察の人ですか、と訊いてきた。

「犯人、女かもしれないってさ」

「なんでですか」

「血が付いてたのを説明する。」

「違いますよ絶対！ ストーカーなんてするの、男の人に決まっています！」

意外なほどはつきりした否定に僕は驚いた。ああ実は俺もそう思ってたんだ、とソファアールへ乗り上げてくる彼女から退き気味に伝える。への字口になる綾木をなだめた。

「じゃあ例えばだ、例えばの話。女に熱烈なファンがいるとかはな

いか」

回答は小動物みたいな唸り声だった。

分かるわけがない。ファンは熱烈なもんだ。もしくは、男も女も正解だとは考えられないか？ 二人のストーカー。それなら森里さんと食い違うのが必然だ。仮に髪の毛は女の物であっても、爪は男とおぼしき奴に受け取った。

まずは二つを比較だ。

近所で落ち合って、森里さんへ渡した。犯人へは着実に近づいてる手応えがある。麗葉がいなくても大丈夫。警察と組めば立神だって易々とは近づけない。初めのクソツタれたゲームだって独力で突破したんだ。麗葉を助けてやったこともある。一つ一つ解決していく、なんとかなる。片付いたら新しい仕事を探し、のどかに綾木とルームシェアリングを続ける。

ファンタジー世界はうんざりだ。

三日ほど独自に足跡を追ってみるも、成果は皆無だった。ストーカー側のアクションはなく、探し出す手段がない。そんなとき、森里さんから連絡が入った。ずいぶん仕事が早いと思いきや、違った。「相原君と一緒に住んでる被害者のコ、綾木さんと言ったね。良ければ彼女のDNAも採取させてもらえないかな」

返答に遅れる。趣味で集めるわけがない、捜査で必要としてのほもちろんだろう。

なにが目的なのか分からなかった。

彼の一言で回路が直結する。

「先日のDNAと照らし合わせてみたいんだよ」

「綾木が自分で被害を装ってるってことツスカ」

思ってもないことだった。いままでの彼女の怯えは本物だ。あれが演技だったら名女優になれる。

「僕の直感に過ぎないよ。でもね、ちょっと気になるんだ。前にも言ったよね、警察はこうやって一つ一つの可能性を捜査するのが仕事。疑いが晴れればそれでいいじゃないか」



正直なところ、親しい人間が疑われるのはいい気分がなかった。きつと綾木本人はもつと嫌な想いをする。我慢してもらうしかない、彼の言い分にも一理あった。自分らじゃ前進は難しい。

了承した。森里さんが礼を言う。

「先に一つ訊いておきたいんだけど、毛髪が送られてきた頃に彼女は出血を伴うケガをしてなかったかな」

「そんなの覚えてるわけ」

ない、と続けられなかった。あの日、料理で指を切ったとかで絆創膏を巻いてた。ベテランの彼女にしては珍しいこともあるもんだと印象に残ってる。髪に血液が付着してるとは考えてなくて違和感なかったんだ。知ってれば少しは森里さんと同じ考えがよぎってた。一つ解決したとして、新たな疑問が芽生える。

「いったいなんのために」

「ジエラシーじゃないかな」

「なんすか、それ」

「嫉妬さ。彼女は君が比佐のもとで働いてるのを知ってるんだろ？心配させて気をおかせようとする女性も世の中にはいるからね。」

僕なんかこの壺を買わないと世界が滅びるなんて心配させられたことがあるよ」

僕は思考の渦へ飛びこんだ。

綾木ならあり得る話だ。ただでさえ彼女は好意を抱いてくれてる。日頃の接し方やルームシェアリングからしてそうだ。プロポーズをすれば百パーセントOKしてくれる。これに限っては自信過剰とは思わないし、まんざら悪くないかもしれない。思わなかった。

彼女と麗葉の仲が悪いのも一つの要因になる。二人は同年代だ、それぞれの形で僕と距離が近いとなると綾木は心穏やかじゃない。僕は迷惑かけられないと思って仕事を頑張ってたけど、彼女にしてみたらそれはどうなんだ。麗葉に熱中していると怪しむのが普通だ。

「てことは郵便屋の男も綾木の友達で、演技を頼んでたとも考えられますね」

「壺の話は冗談だけど面白くなかったかな。まあアリバイ工作した可能性も十分あり得るよね」

共犯者や犯人が二人ってのは考慮してた。身内が首謀者とは考えにくい。全部が綾木の差し金とするのは盲点だった。

送られてきた爪の結果はあと少しかかるようだ。早ければ今日中。もし綾木が自演をしてるなら待つまでもなかった。

麗葉のいい加減な調査はこれを見抜いてたからなんじゃないか。そういえば髪を引っ掻く動作をした。血液の付着、そして綾木の絆創膏。それら二つをパズルのピースにして、あっさり推理したと思えてくる。

とつくに先を越されてたのが胸の内を弱酸性の液に焼かれる気持ちにさせた。それにしたってしばらく来るなっただけのことだ。僕だって人間だ、色々ある。そんな冷たくしなくてもいいだろ。心の狭い年相応のガキなんて、こっちから願い下げだ。

「ストーカーの件、演技はもうやめよう」

昼休み時間にあたりをつけて綾木にメールした。いわゆるかまかけだ。真相を知ってるふうを装うのが効果ある。鑑識でどの程度の情報が判明するか、一般人は知らない。彼女だって例に漏れずDNA鑑定が万能と思ってるだろう。

間もなくして返事が来た。件名は、ごめんなさい、だった。決まったも同然だ。

メールを開く。

「早くに言おうと思ったんですけど、真剣に心配してくれて言うに言えなくて。嫌いにならないでください。でも麻由だけ麻由じゃないんです」

自白にしては妙な言い回しだった。最後の一文がネックになっている。認めたのに認めてない。

「どういうこと？」

昼の休憩が終わったようで返事は来なかった。帰ってきたら説教だ。こめかみぐりぐりの刑は覚悟しておいてもらおう。

なにはともあれ一つの事件が解決して肩の荷が下りた。問題は僕だ。立神にどう対処すればいいのか案もない。神出鬼没ゆえ、後手に回らざるを得ないのもハンデになってる。なにかいい方法はないものか。

ソファーに寝転がって考えてるうちに寝てしまった。階下を下校する小学生の声がある。

携帯がメール着信の点滅を繰り返してた。綾木だ、仕事が終わって寄り道してなければ石寺公園駅に着く時間だった。

件名は空白。

「たすけて」

働きにくい頭とはつきりしない眼でそれを読む。いまさら平仮名で被害を演出してるんだらうか。漢字変換する余裕がない状況だよー、みたいな。

バイトが終わったんなら電話でもいい。メモリー登録を操作する。コール音が淡々と鳴った。

出ない。これも演出なのか？ しょうがなくメールで問う。

返事はすぐに来た。件名なし、本文なし。演出にしては過剰だ。

画像が添付されてた。

一気に目が覚める。スニーカーのかかとを踏んづけて外へ飛び出す。駐輪場に封印してたスクーターのシートを放り、エンジンをかけた。大丈夫、腐ってなかった。神様仏様、検問に捕まりませんように。

ハーフメットを被り、アクセルを絞る。愛車が無免許な僕を乗せて走り出した。

写メには腐った木が映ってた。最近なにかと縁のある物だ、見間違うはずがない。

廃学校の桜の木。

校内で撮られてる。自演をするとしても校門が封鎖されると世間に思われてる学校に入ろうとする人間はいない。僕が悪仲間に関連こまれるのを一度目撃してた綾木は嫌なイメージを抱いて、特に

わざわざ選んだりしないだろう。

写真がなにを意味するかは判然としてる。

踏切で止まる。森里さんに電話しようとしてやめた。横に運悪く白バイが停まったんだ。変に目をつけられて免許証の提示を求められたくない。焦るな、自分が駆けつければ済む。僕の考えが間違つて取り越し苦労になるかもしれない。急がば回れ、回れば分かるさ。

声をかけられる。背筋がぴんと伸びた。白バイ隊員がサングラス越しにこつちを見てる。勘弁してくれ、なんで踏切はこんなに長いんだ。足止め食ったら綾木がピンチになるんだぞ。

はいなんですか、と平然とする僕。彼の口が開閉するが、電車が通過して聞こえなかった。改めて聞き返す。心臓は高鳴りっぱなしだ。

「そんな薄着で寒くないか」

ええまあと応える。言われてみれば急いで出てきたせいで上は長袖のシャツ一枚だった。周りはコートやジャンパー、マフラーを身に着けてる。不思議と寒くはなかった。風邪ひかないようにな、と心配してくれた。遮断機が上がり、白バイが排気音とともに走ってく。

クラクションが鳴らされた。フルスロットルで発進する。前輪が浮いてウィリー気味になるのを強引に体重をかけて押さえこんだ。目を丸くする行人の前を疾風になって過ぎる。

廃学校前に到着。ブレーキが利くのがもどかしく、完全な停車を前に乗り捨てた。転倒する愛車。どうせ免許なしじゃおおっぴらには走れない。壊れようが盗まれようが知ったこっちゃなかった。

メールの画像と実際の景色を比べる。よくよく見ると、建物の中でシャッターを切ってた。端に窓枠の一部が写ってる。腐った桜の木が見える建物といえは一つしか心当たりがない。

体育館を一直線に目指す。

カンヌキが外されてた。鉄製で錆びてる扉は必要以上に重々しい。

力任せに開けていく。

綾木がいた。

奥の壁際、手摺りへビニール紐で何重にもして繋がれてる。足元には携帯が転がってた。

二階の窓から射しこむ夕日が床を照らす。厚く積もったホコリは靴底型にくり抜かれてた。一つは彼女の。もう一つは大きさからして男だ。館内にはいなさそうだった。

「せんぱあ〜い」

僕が来た直後にはそうでもなかったのに、ほとんど泣きそうな表情をした。外傷はなさそうだ。僕は紐の結び目を解こうととりかかると、固結びがされてた。ハサミかなんかがあつたら一発だ。たぶん凶工室かなにかにある。

袖を掴まれた。行かないで、と双眸が訴えてる。一人にするのは危険か。

しょうがない、どうにか自力で断とう。思いつきり引つ張る。綾木も腕を動かした。白い肌は赤く滲んでる。

「麻由、もう駄目だと思いましたあ。駅降りたら先輩が倒れてるって言われて、悪い人にやられちゃったのかと思って。知らない人だったけど、心配で」

悪い人……チビデブとガリノツポのことか。絡まれた光景を見せなければ良かった。あいつらとつるんだ過去ごと消し去りたいくらいだ。そうすれば綾木もこんな危ない目に遭わなかった。百害あって一利なし、真っ当に生きるのが一番だ。

「ついて行ったらいきなり繋がれて。あいつが来るかもしれないから大声も出せないし、携帯もメールのあと落としちゃって、麻由どうなっちゃうんだらうって恐くて」

急に震えだした。目頭に涙を溜め、頬を伝う。僕の脚に顔を寄せちゃつくりをした。その頭を軽く二度叩いて撫でた。顔が上げられる。

「事情はあとで聞く。まずは縛りをどうにかしないと」

肩を上手く使って雫を拭き、鼻をすすった綾木は元気良く返事した。被害らしい被害がなくてほっとする。場合によっては最悪の状況だってあった。こうなったら圧倒的に有利なのはこっちだ。

「あいつ、てのはストーカーだろ。どこ行っただ」

「分かんないです、お腹さすってどっか行っちゃいました」

「どうせ腹でも下したんだろ。ゴロゴロピーって」

彼女が吹き出す。少しは和んだか。

肝心の拘束は千切れなかった。彼女を残して役立つ物を探しには行けない。すぐに男が戻ってきてもおかしくない。僕がここにいなから救う方法は……。

現代に生まれて良かった。携帯を出す。途端に着信があつて手をこぼれた。相手はいまかけようと思つてた森里さん。もしもしと出る。ちよつと連絡しようとしてたんすよー、などと気楽な会話をひとしきり。

「実は爪から新たなDNAが検出されたんだ。男性のね」

「爪からは無理じゃなかったんですか」

「爪の先に細胞が付着してたんだ。おそらく体のどこかに引っ搔けたんじゃないかな。これで綾木さん一人の犯行じゃないのは確定したね」

「ああ、それならもう解決しそうなんすよ。それで電話しようとしてたところで」

事情を説明する。一部は綾木本人の自演だったこと。残りは本物のストーカーで拉致監禁されたこと。ビニール紐を切る道具が身近になくて困つてること。いつ犯人が帰つてくるとも分からないこと。「場所は石寺公園駅最寄りの廃校で、枯れた桜の木があるんすけどー。て、それじゃ分からないですよねー」

近辺には廃校の小学校がいくつかあつたと記憶してる。

受話口を離して綾木に、ここの学校名なんだっけ、と問う。えーつと、と考える彼女の目が見開かれた。

「先輩、後ろ！」



来るか。

大口が開けられ、盛大なゲップが放出された。自分のこめかみに血管が浮くのを知覚する。殺人を犯す人間の気持ちがいさし理解できた。

「先輩、冷静に。なにをするかわかりませんよ。あいつ、金属バットで先輩の頭を思いっきり叩きましたし」

ストーカーの足元には確かにバットが立てかけられてた。どうりで利くわけだ。こぶで頭の形が変わったらどうしてくれるんだ。凶器を使う奴は素手のケンカに自信のない場合が多い。相手としてはなんてことはない。立神に比べれば尚更だ。

圧倒的な不利に変わりはなかった。横に落ちた携帯も液晶が割られて機能してない。例え使えても綾木と違って完全に腕の自由が奪われてる、助けを呼ぶのは無理だ。森里さんが上手い具合に見つけてくれるのを祈るしかない。

男を睨む。

夕飯を食べ終わったらしく、弁当付属の楊枝で目立つ前歯をほじってた。次は奥歯へ。食べカスが取りにくいようだ。舌打ちして人差し指を口内へ突っこんだ。何度か引つ掻き、満足げに出した指を見てる。ぱくつと啜えた。綾木が、汚あい、と顔をしかめる。

あ、と心の中で手を打った。DNA鑑定で検出された細胞は頬の内側を削って付着したものだっただんだ。

既に役に立たない情報だった。

ようやくステージを降りて近づいてくる。殺意を込めて見る僕の前をあっさり通り過ぎて綾木の前に立った。脚を折り畳んで、できる限り離れる彼女。嫌悪ありありだ。それを知ってか知らずかになにやしてて気味が悪い。歯茎もろとも出っ歯を剥き出しにした。

「お待たせ、麻由たん。もう少し待っててね、引越センターのグズのせいでこんな時間になっちゃったけど。ようやく一緒に暮らせるよ、愛しの麻由たん。愛し合う二人は物理的にも近くないとね」  
どこかに部屋を借りてそこにつれていくつもりだったのか。



頬を引きつらせたのは綾木だ。ドン引きして言葉もない。なんといつても奴の笑顔が気持ち悪い。果たして鏡を見たことがあるんだろうか。親はなんで教えてやらなかったんだ、あんたは笑うと友達減るわよ、て。

「紐で繋いでおいて、愛しの麻由たんもないもんだぜ。本当に両思いなら繋ぐ必要なんてねえし。お前だつて逃げられるって分かっているから監禁したんだろ。矛盾してんだよ、ボケナス」

表情が一変する。瞼が半ばまで下ろされ、冷酷さを演出してる。

わざとらしくて全然恐くない。本当にキレてる奴は近づくのさえ嫌なオーラを持つてる。こいつはただのストーカーだ。

「どうした、変態野郎。目からビームでも出すのか」

相手の右脚が動いた。蹴られると予測。ふくらはぎのあたりに力を入れて準備した。間もなく爪先による衝撃がやってくる。問題なし。

ストーカーが鼻で笑った。

「これだから単細胞は嫌だ。ここは仮巣だ、いま愛の巣を準備してるところなんだよ。それまで悪い男にさらわれないよう苦肉の策として繋いだんだ。分かったか、単細胞」

「単細胞だから分かんない」

かっと思開かれる瞳。二撃目が来る。いや、三撃、四撃も続けてだ。がむしゃらに蹴られて踏まれた。さすがに防御は不可能。脚に飽きたらず腹や胸、顔面にも暴力を受けた。僕は俯いてひたすらに堪える。

これでいい、時間稼ぎになる。森里さんが来るまでは綾木に近づかせない。

「どうした、軟弱男。そんな蹴り全然利かないぞ。こんなんじゃ、そりゃ女にもモテないわ、無理矢理さらいたくもなるわ、うん」

男は蹴り疲れて荒い息をしている。いまだ無駄口を吐く僕に苛立ちを覚えてるんだ。

利かないわけがない。無防備なところを滅多打ちにすればプロの

格闘家をノックダウンさせるのだって簡単だ。本能は、もうやめてーいじめないでー、と訴えてる。

他に彼女を守る方法は思いつかなかった。僕はこいつの言う通り、単細胞なのかもしれない。

「おい、もう終わりか。自分がごんだけ情けないか認めたんならさっさと拘束を解いてくれよ」

なにかを探して辺りを見回してる。ステージの方へ体を向けた。小走りに行って持ったのは金属バットだった。

耳の裏で血の気がざつと退くのを聞いた。

前歯を見せながら素振りをして歩いてくる。冗談にならない風切り音。つい黙りこんでしまった僕を愉快そうに見下ろしてる。

「金属バットは痛いぞお？」

振られるバットが何度も目の前を往復する。風圧に額を撫でられた。あのお、痛いじゃ済まないと思うんですけど。

凶器の先端を頬へ乱暴に押しつけられた。無骨で冷たい。

「なんか言ったよなあー。俺が情けないって？ ん？ 軟弱男だって？ ん？」

「ふざけただけツスよー。勘弁してくださいよー、そんなので殴られたら死んじゃいますよー」

ぷっ、と吹き出すストーカー。引き笑いをして僕を指差す。

「さっきの威勢はどうしたんだよ、情けないのはお前だる単細胞。謝れ、もう言いませんって謝れ！」

なにがそんなに嬉しいんだ。絶対に友達にはなりたくない性格だ。ストーカー行為をするようになったのも当然の成り行きに思える。自己中心。いままでの人生で自分のどこが悪いかなんて深く考えたこともないんだ。

謝ればいいんだろ、謝れば。

ふと見た綾木が首を左右へ振ってる。そんなことはしないで、てところか。

僕は息をついた。

「もう言いません、すみませんでした。だから俺達を逃がしてください、お願いします」

彼女は唇を噛み締め、怒りに満ちた目でストーカーを凝視してる。おいおい、作戦をぶち壊しにするつもりかね。あくまで低姿勢になつて切り抜けるんだ。自由になれれば敵じゃない。ぎったんぎったんにしてやるんだ。そう思えば、謝罪ぐらい何度だつてする。だからそんな恐い顔をするなよ、似合わないぞ。

ストーカーが笑いをやめた。ふーふーと呼吸して落ち着こうとしてる。

改めて視線が向けられた。

「駄目だ、お前は死刑」

バットが頭上高々と振り上げられる。

生きてられるかな、なんて思つてると横の方で目一杯の空気を吸いこむ気配があつた。綾木の怒気が膨れてる。制止は間に合わない。「てめーっ、ふざけんよ、このがりがり！ きもいんだよ！ おめえみたいなふにゃふにゃは、こんなことしなきゃ伊吹先輩に勝てねえんだよ、クソがっ！」

不可思議なものを見るように首を傾げる男。照準が綾木に変わった。無表情に彼女へ近づく。やめろ、と僕が言つても聞こえてないようだった。肉薄し、じつと見つめてる。

「なによ、近づかないでよっ！ 息が臭いんばしんっ。」

平手打ちだった。綾木は目をぱちくりさせてる。

「麻由たんは汚い言葉を使わない」

「はあ？ バツカじゃないの、夢見すぎなんだよばしんっ。」

今度は逆の頬だった。

きつ、と男を睨みつける。

「つてーな。どうせあんた、誰とも付き合つたことないんでしょばしんっ。」

「麻由たんは、もっとおしとやかでしおらしい」

「モテなくて当たり前ね、ブサイクでキモくて暴力振るう男なんて最っ低」

ばしんっ。

「僕はモテないんじゃない、モテようとしてないんだ。汚い女共なんか眼中ないね。だいたいあいつらは女の匂いプンプンさせて臭いんだよ。寄ってきたら蹴り飛ばしてやる」

「正気？ あ、狂ってるか、ごめんごめん。言っておくけど、誰もあんたなんか相手にしないっつーの」

ストーカーが停止する。綾木は来るなら来なさいとでも言わんばかりの気迫で身構えてる。いくらなんでも危険だった。こういう人種はスイッチが切り替わると過去の好き嫌いを逆転させる。今回だと、自分のことを好きにならない綾木が悪い、とする。なにをしかすか分からない。

にへらと焦点の合わない視線で彼は笑った。

「そんなに照れなくてもいいじゃないか」

こういう奴なんだ。

さすがの綾木も壁際にいるのすら忘れて後退してる。

「でもいまのはちょっと言い過ぎだよ、お仕置きしないとね」

平手が大きく振りかぶられ、彼女が瞼を強く閉じた。加減してるさっきのものとは明らかに違うスイングだ。弾き散らさんばかりの暴力が迫る。

僕が阻止した。

物理的に届かない距離にあっけどうやったか。手足が届かないから飛び道具を使えばいい。スニーカーを飛ばしてやったんだ。見事顔を直撃。威力は微々たるもんでも意識は再びこっちに移った。

「調子に乗んなよ。綾木にそれ以上手え出してみろ、ぶっ殺してやる」

するとどうだろう、空中に黒目を行ったり来たりさせてぶつぶつなにかを言ってる。そうかそうだったんだこいつが膿みみたいな情報

で洗脳したんだね可哀想な麻由たんすぐ元の君に戻してあげるよ、と呟くのを辛うじて聞き取った。

そういう設定になったらしい。この勘違い野郎をどう殴ってやろう。思案していると男は迷彩色ズボンの後ろポケットをまさぐった。

鋭い輝きが小窓から射した夕日を映す。なんともよく切れそうなハサミだった。

**エキセントリックワールド(1)(後書き)**

次話更新予定は明日(11/20)です。

Next:」 エキセントリックワールド(2)  
「

## エキセントリックワールド(2) (前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価/感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=P47878715

## エキセントリックワールド(2)

奴が刃を開閉させてしゃきしゃき鳴らしてる。あれーいきなりそんなことになっちゃうんですかそうですか！。目的のためなら人刺すのもいとわないんですね、と。

こうなったら一か八かだった。攻撃の瞬間に切り傷覚悟で蹴りをぶちこむ。上手くいけばハサミも手に入る。よし、それでいこう。

だんだんと凶器が迫ってきた。どこを狙ってくるんだろう、目玉か、首か、腹か、はたまた心臓か。判断を誤ると即死できる。

悩む僕を尻目に彼はいきなり腕を掴んできた。予想外だ。確かに左手首には動脈があり、急所の一つではあるが、そんな地味な局部に来ると思ってもなかった。こいつの性格上、絶対に感情任せのめった刺しがお似合いだ。意外にも冷静。

黙ってやられてたまるかと腕を揺らすと途端に力が解放された。勢い余って壁際を離れて転んでしまう。短く切断されたビニール紐が静電気で服にくっついた。

ハサミがホコリっぽい床に捨てられて跳ねる。どういう気まぐれだ、変態の考えることは分からない。綾木を背に庇って体勢を整える。

「麻由たんは僕がこいつに勝てないとか言ってたね。勝った方が麻由たんを自分の物にできるってわけだ。お姫様に相応しい勇者は強くないとね。分かる、分かるよ麻由たん」

話しかけられた綾木は完全についていけてなくて放心してる。分かる、分かるよ綾木。こいつは社会に生かしておいちゃいけない。自分がやられた分、綾木が叩かれた分、万倍にして返してやる。

手足が自由になればこっちのもんだ。激しい妄想癖のある奴で助かった、自分が強いとも思いこんでるんだ。鼻屑目に見ても貧弱で骨に皮が張ったみたいな体つき。対する僕は皮肉にも汚い過去の経験でケンカ慣れしてる。さっさと終わらせて、警察につきだして



終わり。

「相原伊吹。麻由さんに寄生する害虫め、ルームシエアなんて凶しいにもほどがある」

ストーカーがハサミを拾って襲いかかってくるでもなく新たな凶器を持つでもなく素手で体育館の中央へ移動する。

すぐにその紐解いてやるからな、と八の字眉の綾木の頭を軽く叩いて僕はついていった。

いったい害虫はどっちら、駆除されるのはお前の方だ。ふと立ち止まる。いま奴が発した言葉に引っかかりがあった。

「なんでルームシエアなんて知ってるんだ」

彼女と親しくして家を出入りしてるのを目撃してただけじゃ、ルームシエアなんて特別な言葉は使わないんだ。男女が一緒に住んでるってなったら「同棲」と普通は言う。表面的には事実そうであり、ルームシエアが同棲かは当人らの線引きによる。

「麻由たんのことならなんでも知ってるよ。僕は彼女が一番近くにいるのさ、会話も一言一句暗記してる」

胸を反らせて笑った。どうだ参ったか、と鼻息が荒くなってる。

なんの自慢にもならない不気味なことなのを自覚できないとは罪だ。盗聴してるのは間違いない。いったいどこで？ 家に入られた形跡はない。郵便物は念入りにチェックしてるし、立神警戒で鍵周りにこじ開けたような怪しい傷跡なんかがないかとそれとなく見てる。一番近く……。

踵を返して綾木の傍へしゃがむ。彼女の荷物があった。鞆にはいくつかキーホルダーが付いている。目立つのはやや大きく細長いヌイグルミがぶら下がった物だ。ネズミだかなんだか分からないキャラクターだった。一度紛失したというチュー太だ。

「先輩、どうかしたんですかあ」

「やられたよ、綾木。ずっとあんな奴に覗かれてたんだ、プライベートを」

綿に混ざってお尻部分に硬い感触があった。それほど大きくはな

い、注意しなくちゃ気づかない程度のサイズだった。ごめん、と断つて縫い目を破く。簡単に糸が切れたのは一度開いたあとに手縫いしたからだ。粗い仕事だった。こんなことにも気づかなかった自分が憎い。

本体らしき黒い長方形のケースにケーブルが繋がって先端にはマイクらしき装置があった。足元で踏みつける。

血液はすっかり末端へ冷え落ちていった。テレビでは盗聴器に關連した番組を見かけるも、本当にこんな人間がいるなんて信じられない。なんなんだこいつは、なにがしたいんだ。なんでそんなふうなんだ。

合図は必要ない。ふざけた顔面目掛けて殴りかかるのみ。助走も相まって我ながら最高の一撃だった。おまけに相手は棒立ちだ。

接触の瞬間、なぜか向こうにいる綾木が宙で逆さに舞ってた。攻撃された？ それにしたって距離がある、超能力でも使ったんだろうか。そんな馬鹿な。

違う、これは彼女が吹っ飛ばされたんじゃない、僕が投げ飛ばされたんだ。なにをどうやってこうなったのか考える間はなかった。背中から床に叩きつけられる。油断した、こいつなにかやってる。

咳きこんでしまいそうなのを抑え、立ち様に身を翻す。強烈な回し蹴りが二の腕に当たる。手応えならぬ足応えがない。当たったものの、それは触れた程度の威力だ。軸になってた左足があっさりすくわれ、尾てい骨をしたたかに打ちつける。ついでにコブのある後頭部も床にぶつかかった。泣きそうだ。

追い討ちを警戒して転がり、即座に体勢を戻す。敵は前歯を剥き出しにして眼鏡をくいっと直した。ひいっひいっと引き笑いをする。

「どうだい、僕の合気道の味は。外見で判断するなよ」

左右の手をラフに突き出して男が見慣れない構えをした。なるほど、格闘技をやってるなら妙な強さも肯ける。

だからどうした。こいつに立神のような恐怖を感じない。それと

ころか銀行強盗の緊迫感にすら遠く及ばない。命を賭けてるんじゃないんだ。臆することなどなにもない。

間合いを詰めてジャブを放つ。舐め腐って大振りに片付けようとしたのがいけないんだ。相手がただの素人じゃないならそれ相応のやり方つてもんがある。

隙のない細かい連打だ。案の定、向こうは防戦一方で後退しながら捌くのみ。合気道とは相手の重心の流れを読み取って受け流す技だ。ゆえに圧倒的な素早さと力をもってすれば防ぎようがない。女を平気で平手打ちするクズには負けられなかった。

フェイントも混ぜてやる。時には重く、時には速いだけのパンチを織り交ぜる。さっきの余裕は相手にない。身のこなしは良くても紙一重だ。どんどん追い詰めていき、綾木のいる壁際に近づく。そこまで行けばこっちのもの、逃げ場はない。

後ろを気にした奴の頬に拳が掠った。ここでフィニッシュだ。一際に力を込めたストレートを発射する。

歯茎を見せて笑む横顔が見えた。次には腕を捻られて体が反転、背中を見せてしまった。力んだ一発を待ってたんだ、全て読まれた。思ったより強い。後ろを蹴られる。前のめりに倒れかかった。膝に無理を言わせてブレーキをかける。

有利になれる状況は変わらない、今度こそむかつく出っ歯に拳を打ちこんでやる。

振り返る僕に特攻を躊躇させたのは奴がバットを構えてたからだ。ちようど振り下ろされるところだった。

綾木の叫び。

反射的に身を反らす。直撃を寸前で免れたが、こめかみに当たって立っていられなくなった。片膝をつき、バットを捨てる男へ憎悪のたっぷりこもった双眸を向ける。頬を生温かいものが伝った。床で赤い雫が弾けて模様を作る。

「てめえ、きたねえぞ」

足があごを捉えた。容赦のない攻撃だ。体が思うように動かなく

て回避は無理だった。脳がシェイクされて倒れる。高く暗い天井が回転したり縦横無尽に揺れたりした。また後頭部を打った。もはや漫画みたいなコブになってそうた。

「汚い？ 戦いに汚いもなにもないだろ。調子に乗ってバットを置いた場所まで退かせたお前が悪い。もつと頭を使えよ、頭をさ」

こつちが優勢なように逆転するのは全て計算されてたんだ。油断に次ぐ油断だった。理屈では分かっても無意識でそこまでじゃないだろうと侮ってしまう。勝てるに決まってるという深層心理があった。無様な失態だ。

腹を蹴られた。抵抗するエネルギーが余ってない。目眩がする、意識を失いかける、視界がぼやけた。僕がこんな奴に負ける？ やっぱ信じられない。こんな汚くて卑劣な変態野郎に負けたら心の奥で大事にしてる最低限の人間としての正しさを壊されてしまう。

そんなことは絶対にあつちやいけないんだ。僕が間違つてなきや勝てる。ここで立ち向かわなくてどうする、綾木がなにされるか分かったもんじゃない。

身を捻り、四つん這いになる。腕がふるふる震えた。歯を食い縛って崩れ落ちるのを阻止する。

またあのむかつく笑いが聞こえた。

「産まれたての子鹿か。滑稽だねえ、惨めだねえ、醜いねえ」

うるさいよ、出っ歯。けちよんけちよんにしてやるからちよつと待ってる。

さて、どう立とう。初めに右足を立ててしゃがんで、そこから思い切つて踏ん張ればなんとかなるか。深呼吸をする。いっせーのっせ、でいこう。タイミングが外れると潰れてしまう。いっせーの「さつさとくたばれ！」

またも腹部に蹴りがめりこんだ。筋肉も緩んで水袋を打つ心地良い音が響く。気分は最悪だ。仰向けに転がってふりだしに戻る。こめかみへのダメージが大きすぎた。体に力が入らない。指を曲げるのさえスローモーションだ。僕は負けるのか。

あれ？

こんなにもピンチなのに例の能力が発動しなかった。逆に言えば、発動するまでもない、てことだ。なんだ、それならやれるじゃないか。

僕はゆっくりと体を起こした。

「馬鹿か、お前。立ち上がってなにができるんだよ。足元もおぼつかないし、なにしてんだ。そのまま寝てりゃいいだろ、なに考えてんだ」

口を利いてやるつもりはなかったし、声を生む力もなかった。全身が怠い。歩くのが億劫だ。靴底を引きずって一步を踏み出す。そうしてまた一步。一步。

なぜかストーカーは向かってこない。しかも退いてる。勘弁してほしい、こっちは体力が続かないんだ。自滅させる作戦に出たのか来い、かかって来い。渾身のパンチをお見舞いしてやる。

目に映った男の姿が分身した。最悪の体調だ、膝に手をついて一旦休憩。対面する奴の方も止まった。僕は、呼吸を繰り返しながらじっと見つめる。

「不気味なんだよ、死に損ないが！」  
待ってたぞ。

繰り出された拳を受け止める。くたばれ、ストーカー。

全身に残った力を右ストレートに注いだ。このあと気絶したって構わない。一発だ、一発を食らわせて二度とこんなことができないよう腹一杯にさせてやるんだ。

ひつと悲鳴する男。こうなったらもう遅い、逃がさない。勝つのは僕だ。

命中。全力の制裁は頬肉を歪ませた。

「へは？」

倒れなかった。よろめきもしなかった。別に相手に根性があるわけじゃない。僕はひたすらに愕然とした。たかがバットに殴られてここまで衰弱するなんて。バランスが崩れて不覚にもストーカーに

掴みかかる。鬱陶しそうに転倒させられた。

「ふ、ふざけんなよ。びびらせやがって、このっこのっこのっ！」  
めちやくちやに踏みつけられた。頭を庇うので精一杯だ、なんとも情けない。綾木が見てる。格好悪いったらありやしなかった。後輩の女のコー人として守れないのか。

そんなのは嫌だ。

足首にしがみついた。転びそうになったストーカーが、悪足掻きしやがって、と改めて執拗に踏みつけてくる。コブがいくつ増えようと離すもんか。漫画コブ上等だ。笑え、盛大に笑え、彼女を守れるならどんなに笑われたっでもいい。こうしてればきつと森里さんが来てくれる。他人任せと言われようと、それはきつと僕の勝ちだ。情けなくなつて無様だつて格好悪くたつていい。守ったら勝ちだ、それでいい。

「ひひひひひい、もういいや。お前死んじやえ、死んじやえよ」

強烈な足裏が頭部を押し床に額がぶつかった。一回ずつ力を溜めた足が降ってくる。ごん、ごん、と鈍く響き渡った。これなら意識を保つてられる。ゆっくり待とう、助けを。

攻撃の雨をやませたのは綾木だった。

「もうやめてよっ。本当に死んじやうでしょ、馬鹿っ！」

擦り切れて裏返つた絶叫だった。

「私が一緒に行けばいいんでしょ。だから、伊吹先輩に酷いことしないで」

「僕を選んだね、麻由たん」

いやらしい笑みに綾木は黙りこんだ。

ストーカーの脚がすつと動く。ローキックが僕のみぞおちに突き刺さる。知らずのうちに咳が出た。重いダメージが胸を中心に浸食していく。

「僕を選んだよね、麻由たん」

言つな、綾木。こんな奴に建て前でもそんなこと言つな。言葉にしたら終わりだ。心底で思つてなくても、言葉にした途端にそれは

力を持つ。言っちゃいけないんだ。

「私は」

声が震えてた。

「あなたを」

彼女も文芸部だった、未熟だけど一番熱心だった。言葉の重みは誰よりも心得てる。

「私は、あなたを」

「それは聞いたよ。僕を選ぶのか選ばないのか、はっきり言って「らんよ」

綾木がこっちを見た。泣きそうな表情だ。僕は首を振った。

目をつぶり、彼女は息を吸いこむ。

やめろ、言うな。言うな、綾木！

必死の訴えも虚しく声は紡がれた。

「私は、あなたを、選」

そのときだ。閉じた鉄の扉がゆっくりとスライドした。いったい誰だ、ギリギリセーフで森里さんが来てくれたのか。西日が逆光になって視覚が機能しない。森里さんにしては小さな影が入ってきた。ちよっぴり猫背と目元を隠す長い黒髪の少女を僕は知ってる。

「なんであんたがここに」

「なに、簡単なことさ。森里刑事から連絡が入ってね、心当たりはないかと訊かれたのだ。私は分からないと応えたのだが、君の通り道で潰れた学校はここぐらいしかからないからね」

自信満々な物言いはちつとも変わってない。どこからどう見ても比佐麗葉だった。

「俺が訊いてるのはそんなことじゃない。だって、あんたは俺に会いたくないみたいなこと言ってる」

「うむ、会わないのが望ましい」

「じゃあ、なんで来たんだよ。だいたいあんたがな、ストーカー調査を真面目にやらないからいけないんだぞ。誰のせいでこんな状況になったと思ってるんだよ」

「すまない。早とちりをしてしまったのだ」

二の句が継げなくなる。会わないのがいいのにここに来る理由はいつたいなんだ。尻拭いのつもりか。しかしあの時点での彼女の推理は的確だった。責任を感じ、わざわざ助けに来る動機にはならない。

僕を心配してくれたんだろうか。そうだとしたら会わないなんて言わない。矛盾ばかりで、なにを考えてんのか分からなかった。

あんたは立神みたいに殺人を平気でやる犯罪者なのか、それとも全部が誤解なのか。態度からは一切感じ取れなかった。

ストーカーが麗葉を見て苦笑いをする。

「警察かと思えば、ブサイクなお化け女か。女を捨てたような女ほど醜いものはないな」

「安心したまえ、私もストーカーなど眼中にない」

眉間に皺を寄せる男が彼女へ足を向けた。

「気をつける、麗葉。そいつは合気道を使うぞ」

助言を聞いてるんだか聞いてないんだか、悠然と怖じけず歩みを進めてる。なにか策があるのかもしれない。実はすごい武術を体得してたり。上戸さんとの対決が劣勢だったのは用意なく武器で攻撃されたからと言える。

弱気を一切見せない麗葉に男は一定距離を保って止まった。

「どうした、合気道は受け専門なのかね」

煽りには応えないで構えてる。無防備に近づいてくるのは異様だった。奴はこう思ってるはずだ。こんな隙だらけの女に負けるわけがない、しかしなにか企んでたらどうする、ここは一打を無難に受けて様子見だ、と。なにことも焦って失敗するのはありがちだ、賢明な判断だった。

「応答なしは肯定と受け取ろう。ではこちらから攻撃させてもらおうよ」

素早く間合いに入りこみ、パンチが繰り出される。ストーカーは防御できずに腹で受けた。



ただそれだけだった。その場の全員が啞然とする。全くもって腰の入ってない拳なんだ。言うなれば、へなちよこパンチ。容姿に比例したものだっただ。

手首が掴まれた。拍子抜けした様子の男が片眉を痙攣させてる。警戒した自分にも怒りが湧いてるんだ、顔は真っ赤になってた。

「どいつもこいつも舐めやがって。だから嫌いなんだ人間なんて、見かけで判断して、見下して、一人じゃなんもできねえくせに、寄ってたかってつかかってきて」

他にもぶつぶつ言ってた。

彼は体を回転させる。軽々と投げ飛ばされる麗葉が苦痛に表情を歪めた。その拍子にポケットを重々しくなにかが落ちた。形見の銃のオモチャだ。拾おうとするも、腰を打ったせいで上手く腕を伸ばせてない。先回りしたストーカーに取られてしまった。

「よくできてんなあ、このモデルガン。マニアに売ったら高く売れそうだぜ」

「モデルガンではない、本物さ」

妙なハツタリだった。例え本物だとして本物だと明かすメリットはどこにもない。下手をすれば銃で脅されてジ・エンドだ。逆にオモチャなんだとしても嘘をついたところで有利にはならない。麗葉のことだ、意味もなくそんな発言はしないだろう。なにかあるんだ。逆転するに足るなにかが。だけどなんでだろう、胸騒ぎがする。

「へえ、じゃあ撃ってやるよ」

奴も冗談だと思ってるんだろう、面白半分なノリでトリガーを引こうとしている。指の腹が圧迫されて白くなった。徐々に力が込められてる。銃口は完全に麗葉をロックオンしてる。いまにも弾丸が射出されそうで見てるのが嫌だった。

麗葉は微動だにしなかった。銃が本物ならいくらなんでも逃げる。こんな状況でなにもしないのは得策じゃない。

おかしいのは男の方もだ。グリップを握る腕が小刻みに震えてる。眉間の皺が激しく山になり、顔はますます赤くなった。恐くて撃て

ない感じじゃなかった。

「どうした、撃ちたまえ。それはハイスタンダードデリンジャーと  
いってダブルアクション式だ。安全装置はついていない、トリガー  
を引くだけで発砲できるのだ」

嘘はついてない、銃はシンプルな構造で僕が見たときには安全装  
置らしき物はなかった。

撃てない。

腕に筋や血管を浮かせてぶるぶるしてる。

「壊れてんじゃねえかよっ、騙しやがって。モデルガンとしても価  
値なしだ！」

馬鹿らしくなったんだろっ、唾を飛散させて彼女に銃をぶつけた。  
やっぱりオモチャだったんだ。ほっとしたのは束の間だった。即  
座にそれを小さな手で掴んで相手の脚にしがみつく麗葉。銃口をび  
たりと押し当ててる。

「なんだ、そんなオモチャでなにしようってんだ、ああ？」

「壊れてはいないよ。安全面を考慮した構造上、トリガープルが約  
一〇キ口必要なのだ。テレビやゲームの感覚では引けないだけさ」

「あ？」

銃身に人差し指を添え、中指をトリガーへ当てる独特の構えだっ  
た。

発砲。

鮮血が咲き乱れた。

絶叫。

尻餅をついたのは男だ。膝を抱えて左右へ転がる。

「いてえ、いてえよ！ 誰か助けて、助けてくれえっ！ ママっ助  
けてっ、殺される！」

麗葉の方は落ち着いて衣服のホコリを払ってた。痛みで喚く男を  
静かに見つめる。

「殺しはしない、すぐに森里刑事も駆けつけるだろう。私はこれで  
退散するよ」

銃をポケットにしまつてなにごともなかったかのように去つていった。あまりの出来事に声をかけられない。どうにもできないで、苦しみ足掻くストーリーカーをなんとなく眺めてた。

彼女の予言通りに二、三分で森里さんが現れて我に返る。現場を見た彼は凶器の銃がないのを訝しげにしてた。

「比佐だね、あのコならやりかねない。とうとう尻尾を出したか」  
僕に反論する気力はなかった。麗葉に関しては無言で通し、ストーリーカーについてのあらましを説明して、暗くなる頃に綾木とコンビ二弁当を買って帰った。会話はほとんどしなかった。

「なんで撃った」  
「身の危険を感じたからさ。私には対抗し得る体術がない、正当防衛が成り立つ」

事務所を訪れた。銃を発砲した翌日だというのに彼女に変化はない。ちらつと見て、やあ来たのかね、などと平然としているのが苛立たしくさせた。お構いなしでキーボードを打ってる。

「俺にはわざと無防備に近づいて油断させたように見えただけだな。それにすぐ警察が来ただろ」

「それは結果論なのだ。不確かな想定で物事は決断できない」  
「そうだとしても向こうが素手にこっちは拳銃で正当防衛って言いんのかよ」

「体術を会得している者は凶器を持っていなくてもただそれだけで脅威なのだよ、君も身をもって味わっただろう」

打撲多数に裂傷複数で僕は頭に包帯を巻いている。見た目には派手でも入浴で傷が染みる程度だった。銃撃よりは何倍も軽傷だ。

作業中に使ってるノートパソコンのモニターを勝手に閉じてやった。麗葉の両肩を掴んで揺さぶる。ようやく目が合う。

「理屈の言い合いをしにきたんじゃないやねえんだよ、事態が分かってんのか。今回の件で確実に疑われてる、十六歳になつてるあんたは逮捕されるんだぞ」

「いまに始まつたことではないさ」

「過去になにがあつたか知らないけどな、銃弾だつて体内から検出されてんだ。使った銃と弾に残った線条痕とかいうのが一致すれば逮捕されるって知ってるか？ 知ってるよな」

「そうだ、銃だ。」

すっかり本が散乱した部屋を見渡す。しゃがんで本の山を掘り返した。昨日今日のことだ、そんな深いところにはない。

「どこやった。あるんだろ、どうせここらへんに。毎日片付けてたからな、俺は知ってたんだ」

埋もれさせた指先に硬質な感触があつた。ビンゴ。誤って撃つてしまわないようグリップ部分を持つ。重みといい銃口周りの焼けた跡といい見れば見るほど本物だ。どうしていままで気づかなかつたんだ。知らなかつたとはいえ、草加部さんに向けた自分を思い出すとぞつとする。

「俺に任せろ、処分してやる。こんなもんがあるから警察なんかに追われるんだよ、二度と使わせねえ」

大股で本の数々を越える。幸い手のひらに収まる小さな銃だ、隠し持って歩くには困らない。誰かに見られたとしてもオモチャだと思われる。トリガーが容易くは引けないんだから余計にだ。誰にも見つからない場所へ捨てるには都合が良かった。

海か山か、どこでもいい。とにかく人気のないスポットに隠せば安心だ。発見されるときには腐食して線条痕もクソもない。そうだ、塩水のある海がいい。東京湾にでもちよっくら行ってこよう、今日にでもすぐ。

不安定な床を歩くのにバランスをとるため伸ばしてた右腕へ激痛が走った。シャツを貫通して皮膚に歯が食いこんでる。いつもの冗談の噛み方じゃなかつた。反射で、銃を落とすと同時に彼女を引っぱ叩いてた。

簡単に倒れる麗葉。殴ってしまった罪悪感と怒りが混ざって困惑した。平手打ちするなんて、これじゃあのストーカーと同じだ。

ごめんを言う前に、彼女の顔を鼻血が垂れた。息を荒げ、銃を渡

すまいと抱き締め、敵意の視線を向けてきた。なんだか遠くに感じ  
てしまった。理解できたことなんて一度もないけど、いままで先生  
って呼んでくれたりからかったりからかわれたり笑ったりして通じ  
合える面があると思ってたんだ。

今日だっただからこそ来た。単純に、警察に捕まえさせたくなか  
ったんだ。すんなりストーリーカーを撃った麗葉は理解できない。でも  
彼女の言うことだっで一理ある。犯罪行為もいくつも目撃してる。  
今回もその一例として協力してやりたかった。麗葉は立神や銀行強  
盗、ストーリーカー野郎とは違う。

そう思ってた。

違った。こいつも例外じゃないんだ、犯罪者の目をしてる。自分  
さえ良けりゃいい自己中心の思考だ。もう知らない、辞めてやる。  
こんなところにいたら自分が逮捕される。

じゃあな、と簡潔に言っただアが壊れるほど強く閉じてやった。  
殺したんだ、あいつは母親を殺した、いまなら確信できる。いく  
らスパルタ教育が苦痛だからって殺す必要がどこにある。あまりに  
不相応じゃないか。昨日もそうだ、俺も動けないことはなかった、  
手を組めばなんとかなったんだ。

森里さんだっただア。結果論かもしれない。だけど彼らだっただア  
鹿じゃない。廃校になった学校で、それも僕の行動範囲であるう場  
所を絞ればいい。

なのにあいつは撃ったんだ。

森里さんの言う通り、彼女は犯罪者だった。暴利の金貸しやイン  
サイダー取引までは百歩譲って許せても、銃をぶっ放したり殺した  
りしたら終わりだ。それは年齢的に責任能力が問われるかどうかの  
問題じゃない。こんなんじゃない。やってることはあのおろくでもねえ銀行  
強盗と同じじゃないか。

外階段を下りると草加部さんとすれ違った。

「お世話になりました、さいなら」

呼び止める声を無視した。背後で立神がどうのこうのと言ってる。

問題ない、自分には力がある。麗葉には知能で劣ってても、それは推測や不確かな要素を多分に含む。確実に近い未来を見通せる予知の能力の方が上だ。大丈夫、切り抜けられる。綾木も僕が守ってやれる。

家に帰ると中年の女がいた。綾木の母親だ。二言三言の当たり障りない挨拶をした。部屋で荷物をまとめる後輩は元気がない。ストーカー騒ぎで保護者に連絡がいったんだ。こんな事件が起きちゃ立場が悪かった。親の身になると痛いほど分かる、帰るのが妥当だ。

彼女にわんわん泣きつかれた。  
いなくなつた。

ソファーに身を託す。お金はあつても静かだった。豪邸に住んた上戸さんもこんな心情だつたんだろうか。

分かつたことがある。例えば僕が金持ちの家に生まれてたつてなにも変わらなかつたんだ。お金がないせいでぽっかり空いてるんだと考えてたやるせない気持ちは、いまだに満たされなかつた。

僕はなにがしたいんだろう。自分で自分が分からない。お金が解決してくれるんじゃないならどうすりゃいいんだ。事故にあつて高校に進学できないつてなつたあときから変わつてない。三年も経つのになんも変わつてない。我ながら色々経験したつもりだったのに、一歩だつて進んでなかつた。

笑えてくる。死ぬのは恐くなかつた。立神荘士？ 来るなら来いだ。自分のようなゴミ人間が蔓延る世界はリセットしてしまつた方がいい。向上心溢れる優秀な人間にとつても邪魔だし、劣つた本人からしても生きるのは苦痛なだけだ。

さあ、無能者ゼロ国家をぜひとも作ってくれ！

## エキセントリックワールド(2) (後書き)

次話更新予定は明後日(11/22)です。

Next:「待ち侘びない招待状」

メールフォームでコメントをくれたNさん

思ったことをそのまま言っていただけのが一番望ましいので感謝します^^

親切に訂正例まで書いていただいて指摘のポイントが大変分かりやすく、とても参考になりました。

今後のために色々と見当して試行錯誤させてもらおうと思います。

貴重な時間を割いていただき、ありがとうございますm( )m( )

m

## 待ち侘びない招待状（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

X?ID=PP47878715



## 待ち侘びない招待状

朝とも昼ともとれない時間帯、コンビニからの帰路で携帯に着信があった。液晶に、綾木、と表示されてる。一週間ぶりだった。

「元気か？」

「元気元気です」。昨日もうちのババア殴ってやりましたよお」

おいおい。

「嘘です、元気ないです」

すぐにエネルギーは尽きたようだった。トーンダウンした声でぼそぼそと話す彼女。最近は家に引きこもってるらしい。変に気遣われて以前より両親との隔絶が増えたようだった。

そういえば彼女の家もお金には不自由しない暮らしをしてる。おまけになにからなにまで身の回りのことをやってくれる。再会当初、それが嫌なんだと言ってた。過保護から逃れるなんて贅沢なことしてると思ったもんだけど、そういうことじゃないんだ。彼女の行動や言動は幼く見えて、実は僕を優に超える大人だった。

僕に会いたいと言ってくれる。むしろ僕が綾木に会いたかった。会えるさ、と余裕をかましたのは先輩としてのちっぽけな威厳を守るためだった。

「何年経とうが、死なない限り会える。いまが無理でもなんの束縛なく会えるよう頑張ろうぜ。俺も頑張るから」

はい、と明るい返事。ようやく彼女らしい声を聞かせてくれた。それから家の郵便受けに着くまで談笑した。どうでもいい話をするのがとても安心できた。

「いやー妬けるねえ、女と電話かよ」

通話を切ったあとだ。忘れ去りたい悪仲間二人が背後に立ってた。綾木としゃべって、せっかく爽快な気分で心機一転しようっていう気になれたのに鬱陶しいったらありゃしない。

「なんか用か、ブタ君」

「んだと、てめえつこらっ！」

突っ張り一発、襟首を掴まれて郵便受けの並びに押しつけられる。こいつは成長しないな、キレれば恐がると思ってる。こっちは違う世界にいるんだ、こんなことされたって鼓動も早まらない。ケンカしたいなら望むところだった。

残念ながら殴り合いにはならない。珍しくガリノツポが仲裁に入っただからだ。そんなことしに来たんじゃないだろ、とチビデブをなだめてる。

ノツポがいつになく深刻な表情だった。

「高橋がお前のこと狙ってる、本気で殺すつもりらしい。でもおとなしく戻ってくるなら、ちょっとケガするぐらいで済ますってよ。殺されるよりいいだろ、指の一本は覚悟した方がいいけどな」

人生は不条理だ。なにもやってないのに、なんで命や指を狙われないとならないんだ。どいつもこいつも自己中で困る。

無言で応えて、郵便受けを開けた。一通の便箋が入ってる。裏にも表にも宛名や差出人名がなかった。またストーカーの仕業ってわけじゃないだろう。心当たりは一つしかなかった。

「前みたいにみんなでナンパしようぜ。お前いる方がヒット率高いんだよ」

すっかり謝れば許してくれる、と同情を込めて言ってる。高橋がそんな聞く耳を持った奴かよ。戻ったら殺しはしないってのも胡散臭い。集団リンチの刑で翌朝には海の藻屑になってそうだ。

便箋を開ける。

とうとう“アクション”が来た。これのせいで、予防注射を控えた小学生気分になってたんだ。

「なあ、いいだろ。元に戻れば」  
「振り返る。」

「悪いけど、気持ちだけありがたく受け取っとくよ。他にやらなくちゃいけないことがあるんだ」

真っ直ぐに視線を返した。ノツポはきよとんとし、すぐに苦々し

い顔になる。どう言っただって無駄なのを察したんだ。デブを押し、行こうぜ、と背中を向けた。

二人の姿が小さくなってく。

「命より大事なことなんかあんのかよ！ バーカ！」

デブが身を捻り、中指を立てて叫ぶように言った。ノツポも少しだけこつちを見てから角に消えた。

命は大事に決まってる。優先順位の問題だ。便箋は立神からの招待状だった。どっかの屋敷であのときみたいにクソゲームをするんだ。簡略化された地図も添付されてた。条件に、余計なゴミをつれてこないこと、とある。一人で来いつてか。

「なんだい、怖い顔して」

森里さんだった。便箋を背中に隠し、いやなんでも、と応じる。

「森里さんこそどうしたんすか、こんなとこまで」

「ああ、うん、一応報告しておこうと思ってさ、その  
「  
気まずそうにして後ろ頭を掻いてる。ストーカー逮捕のお礼じゃなさそうだ。」

「比佐麗葉を任意同行で署に連れていったんだ」

電流めいた衝撃が背筋を走り抜ける。ついに彼女の尻尾が掴まれた。当然だ、あんなおおやけの場で銃を使っちゃ知らぬ存ぜぬではいられない。

「逮捕、ですか」

「それはまだどうとも言えないよ。でもそうなら、僕を恨むかい」

「あんな奴がどうなるうと知ったこつちやないッスよ。犯罪者なんてどいつもこいつも性根が腐ってるし、じゃんじゃん逮捕しちゃってくださいよ。応援しますよ」

「もし彼女が捕まった場合、君を警護することになると思う。上手くいけば立神逮捕のきっかけになるかもしれない」

「ありがとうございます。礼を言いながら、無駄だろうな、と思う僕自身もおそらく性根が腐ってる。」

自分で決着つける。いや、自分“に”だ。過去を振り切って家を出たつもりでずっと引きずってた。わりのいい仕事を探して悪い仲間とつるんで荒稼ぎ。嫌気がさしたものの結局は楽しんで儲けようという怠慢が残ってた。

麗葉も向こう側の人間だった。断ち切らなくちゃ終わりだ。一度入ったこの世界、抜け出すには生死のやりとりを覚悟してる。

森里さん側の人間になるんだ。事故以前の自分は彼のような男を理想としてた。僕はまだ十代だ、やり直せる。今度こそまともな職に就く。稼ぎが安くてもいい、殺すだの死ぬだののない日常に戻るんだ。

僕の手を例の地図が落ちた。おっと、と追いかけるのに手間取るわざとだった。どこに潜んでも助かる確率は増やしておくに限る。誰かを連れてきちゃいけないんだから堂々と教えても良かったが、これぐらいが無難だ。疑われても手紙の内容は教えてないし、勝手に推理して尾行してきたんだ、と言い通せる。嘘はついてない。

森里さんの視線をばっちり感じた。だいたい把事情を読み取ってくれただろう。立神の監視に引つかかる真似はしないでくれる。奴らは超能力者じゃない、所詮は人間なんだ。隠密な逮捕の策を練ってくれば幸いだった。

「相原君」

複雑そうに口元を歪めた彼は周囲を見渡し、三〇分待つ、と小声で言った。上手く伝わったようだ。本当は行かせるのも引き留めたい胸中だろう。それじゃ奴は捕まらないと痛いほど分かってるんだ。三〇分。これは重要なキーワードになる。その間のゲームを我慢すれば助かるってことになり得る。最悪な展開としては、森里さんの到着がバレて僕が殺されて立神に逃げられることだった。警察も安全を考慮した手段を考えるだろう。

携帯が鳴った。森里さんの物だ。

「なんだって？ 逃げた？ 分かった、すぐに合流するよ」

たったそれだけでなんとなく会話の内容が読めてしまった。

麗葉が事情聴取中に逃亡した。無実なら逃げる理由はない。なにやってんだ、あいつは。ますます疑われてどうすんだ。

知るか。他人を、しかも犯罪者を気にかけてる余裕はなかった。

待ち侘びない招待状（後書き）

次話更新予定は明後日（11/24）です。

Next: 「優柔不断は嫌われる」

## 優柔不断は嫌われる(1) (前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価/感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

X?ID=PP47878715

## 優柔不断は嫌われる(1)

電車を乗り継いでぎりぎり埼玉県手前の駅で降りた。窓越しに山と田んぼが目立って、方向を間違ったんじゃないかと何度も不安になった。電車一時間程度でこんな田舎景色が見れるとは。

駅前の人通りは多くも少なくもない。ファーストフード店や本屋があり、ちよつと行ったところにスーパーマーケットの看板も見える。学生や主婦が主に行き交った。バスに乗り換えて山間にできた私立大学を過ぎた頃には人気はなくなった。

バスで行けるところまで行って山道を徒歩する。舗装されてるのが唯一の救いだ。たまに乗用車が脇を通り過ぎてく。

ガードレールの途切れたところがあり、野山に向かって砂利道が延びてた。地図にはここを登っていくと記してる。

冬なのに衣服の下でしつとりと汗をかく頃、突き当たりにぶつかった。枯れたつたの絡まった金網のフェンスがしてあって、私有地の表示と熊出没注意の看板がいくつも並んでる。

「熊の平穩、破ればプンプン」  
なんじゃこりゃ。

熊同士が手を繋いでスキップしてるところへ、リュックを背負った人間が木陰から出てこようとしてるイラストが描かれてた。山奥とはいえ東京に熊がいるんだろうか。異常気象だ森林伐採だで近頃は生物も住処を追われてる。いてもおかしくはなかった。目的地へ着く前に襲われちゃかなわない、さっさと行くことにする。

フェンスを越えてしばしの地点に屋敷はあるようだ。草木を分けて獣道を抜けていった。

背後を顧みる。自分以外が歩行する気配がしたんだ。僕が止まると風に揺れる草木の音しか聞こえなくなった。森里さんだろうか。それならあまり探るのは良くない。気づいてないふうに足を進める。何度か誰かがついてくる似た感じがあった。今度は振り返らなか



った。

突如として鉄格子の門が出現する。山には不似合いの洋館が鎮座してた。夜には絶対来たくない雰囲気のある佇まいだ。

インターホンを鳴らすと見た目の古さに反して自動で門が開いた。隙間から雑草が生え放題の石畳を辿ってドアに着く。鍵はかかってなかった。おじゃましまーす、と覗きこむ。

直線に続く廊下はレッドカーペットが敷かれてる。清潔感に溢れてた。壁は大理石で、高そうな壺が飾られてる。

出迎えたのは上戸さんだった。こつちよ、と案内してくれた。学校脱出時に負ったケガが完治してないんだ、右目に眼帯して首や手にも包帯が巻いてある。どこまでも続く廊下を黙ってついていった。立神は昼ご飯の時間らしかった。食べ終わるまで待機してなきやならない。呑気なもんだ、こつちは朝メシすら喉を通らなかつたっていうのに。

いくつもの巨大な絵画や石像を過ぎて部屋に促された。移動に自転車が欲しくなった。トイレはしっかり各々の部屋にあるんだろうか、と妙な心配をしてしまう。

なにか飲む、と訊かれて戸惑い、じゃあウーロン茶を、と頼んだ。ソファとテーブルがあるだけの簡素な室内にはキッチンや風呂が備わってて、ここだけで十分に暮らしていける。

冷蔵庫を閉じる音がした。お盆を持ってやってきた上戸さん。冷えたグラスを渡されて一口飲む。ゲームの前に毒を入れるせこさは立神にはないだろう。

お盆を置き、彼女もソファに座った。改めてちゃんと視界に入れた。彼女が無事だったという安堵が遅ればせながら神経を駆け巡る。

「見たでしょ、新聞記事」

少女を教師殺人容疑で捜査してるっていう記事だ。未成年の犯罪は珍しくないのもあって扱いは小さい。

「高いクオリティの作品を何冊も出したのに、世間じゃあの扱い。」

馬鹿馬鹿しいと思ったらありやしない。ゾウリムシレベルの人間がいかに溢れてるかが分かるわ」

「しょうがないよ、読書離れが酷いみたいだから。マスコミは注目されそうな事件を取っ替え引っ替え載せるのが仕事だし」

「それにしたって、あんまりよ。相原君は私の小説を面白いつて思わなかった？ 思ったでしょ？」

うん面白かったよ、と一言。ウーロン茶をすすった。

苦い。

「そうよ、分かる人には分かるの。その点あいつは駄目ね、物書きの真似事してるみたいだけど無駄な時間。才能とセンスのある人間だけがこれからは生き残るのよ」

かける言葉はなかった。

僕は諦めきれないでいる。上戸さんがこうなったのは立神の影響がある。じゃあ奴がいなくなったらどうだ。今日、森里さんに逮捕されるとしたら、彼女は元通りの彼女になってくれるんじゃないか。「上戸さん、約束してくれないか」

しゃべりを続けてる間に割りこんで言った。

なにを、と首を傾げてる。

「俺が生きて屋敷を出たら自首するって、約束してほしい」

駄目元の提案だった。

返事は予想を覆す。

「いいわよ。相原君には悪いけど、立神様は負けないもの」

「本当にいいのか、負けるイコール死ぬとは限らないだろ」

「望むのは平凡な日々でしょ。それなら勝つことのみが生きる道よ。負けて生きる道はあり得ないの」

「負けが即死のゲームをやるうっての？」

「それもある。でも違う。立神様は負けながらも生き残る者を同志に迎えるの。分かるでしょ、私の言いたいこと」

「死を回避できた底力のある人間が欲しいってことか」

「立神様を超える人材もいらぬ。世界各国をまわっても一人とし

ていなかったけど。輪を乱しかねないならナンセンスでしょ、尊敬と信頼のもとに私達は成り立ってるの。だから強い、だから安定する」

だから勝てば逃れられる。希望の道が見えてきたつてもんだ。総合的に立神を上回るのは無理にしたって、僕には予知の能力がある。一矢報いて勝つチャンスはある。

「けど、勝ったとしても邪魔に思っただ命狙ってくるんじゃないか？

俺が立神だとして自分以上の存在がいたら早めに摘み取るよ」

「多勢に無勢って言葉知ってる？」

そうだった、夢幻倶楽部ってのは。

「一個人として優れてても私達に反抗したところでたかが知れてる、頭脳集団の集まりだもの。そういう意味では立神様は謙虚で現実主義者よ、私を含めた世界の有能な人間の力が必要と悟ってる。人間は変われるわ、いまが無理でもいつか心変わりして手を貸してくれるかもしれないでしょ」

仮に反対勢力を作ろうにも、それこそ早々に潰される。世界に張り巡らされたネットワークにかかれば赤子の手を捻るようもんだ。なるほど、いいシステムだった。

それも今日で終わり。少なくとも、僕の中では終わりにしてやる。天井に設置されたスピーカーから鐘の音が鳴った。インターホンだ。

上戸さんが溜め息をして出ていった。

暇になってなにをするでもなくうろろろする。壁紙や窓、その他装飾類はくまなく掃除が行き届き、ちゃんと管理されている。物自体は適度に馴染んで、昔から使われてるようだった。外観自体がもつと古いのを見ると、立神が所有してから数年以上は経ってるんだろつ。

廊下が騒がしくなる。上戸さんが声を荒げてるんだ。誰と揉めてるんだ？ ドアノブが回った。会話が鮮明になる。会話といっても一方的で、相手は無言だった。

「伊吹、やはりここにいたか。立神の招待状が届いたからおそらく  
そうだろうと思っていたよ」

麗葉だ。

僕は戸惑った。現場付近には森里さんが潜伏してるかもしれない  
んだ。立神と麗葉、この二人がいるところに森里さんが来たらどう  
なる。彼からしたら立神のみならず麗葉だって標的だ。シンプルな  
展開にはまずならない、当初の予定と差異が生じてくる。

僕が誰か 共通の敵方である警察に助けを呼ぶのを見越して立  
神は麗葉を招待したのか。事態がややこしくなればなるほど立神は  
逃亡しやすくなる。

深読みしすぎだ。変わらない、問題ない、僕は僕のやるべきこと  
をやる。

「さて一緒に帰ろう」

麗葉がいきなり手首を握って引つ張った。目を丸くしたのは上戸  
さんだ。

「そんなことが許されると思ってるの？」

無視。強引な力に僕は歩かされる。

「新作ができたのだよ。前作を大幅に改稿したのさ。ボーイフレ  
ンド全員に批評させて推敲に推敲を重ねて最後にはみんな絶賛したの  
だ。きつと君も面白いと言わずにはいられないよ」

珍しく興奮した口調だった。前作というところ「刃中の羽虫」だ。

呑気な発言には違いないがちょっと興味があつた。それにしても  
分からない、見ると言ったり見ると言ったり会わないと言ったり  
一緒に帰ろうと言ったり、なにを考えてるんだ。引っぱ叩いたのを  
根に持つてるふうでもない。

こっちはそんな簡単に感情を吹っ切れるほど単純じゃないんだ。  
僕は人を撃つた彼女を忘れない。本気で噛みついてきた彼女を忘れ  
ない。敵意の目を忘れない。忘れられない。

離れる。

「お前な、ここがどこだか分かってんのか」

「立神の館だろう？ 馬鹿にされては困る」

「そうじゃなくて、状況を分かれよ。あいつのゲームをクリアしない限りは無事でいられないんだぞ。招待されたんなら、あんたも俺と同じだ」

「そうよ、勝手は許さないわ。反抗した場合は殺すように言われているのよ」

物騒なごついナイフを上戸さんが腰の鞘から抜き放った。警棒よりずっと殺傷能力が高い。いまの彼女なら容易にやってのける。そう思えてしまっのが哀しかった。

冷ややかに鼻で笑う麗葉。

「やりたければあの男と二人でやりたまえ、私はくだらない趣味に付き合うほどお人好しではないのだ」

「くだらない趣味とはな、相変わらずつれない物言いだなあ、ウルン」

グレーのスーツに身を包んだ男が静かに入室してきた。穏やかなしゃべりなのに部屋の空気が張り詰めた。圧倒的な存在感が充満する。

立神荘士、その人だ。

ペットボトルのミネラルウォーターを飲み、濡れた唇を手の甲で拭う。キャップを閉じて差し出すと上戸さんが軽く礼をして受け取った。

「メインの役者が消えるのは俺も困るんだ。どうしても言うなら二対二の殺し合いでも構わない、少々つまらなくなるがな」

麗葉は気乗りしないふうだった。僕だってそうだ、やらないでないならやりたくない。命を賭けたゲームを誰が喜んでやるっていうんだ。

しょうがない。

殺し合うのよりは良かった。体術にも優れてるであろうこの二人に、しかも武器を持った二人に、例え麗葉に銃があるとしても勝てる気がしない。生存率はぐっと下がる。

麗葉もさすがにそんな危ない橋を渡るつもりはないらしい。

「舞台はどこなのだ、わざわざ屋敷に招いたからにはなにか準備しているのだろう。さっさと片付けて帰らせてもらおうよ」

「さすが俺の見込んだ女だ。ビバ、スーパーベビー、存分に楽しもうではないか、邪魔が入らないうちに。なあ、イヴ？」

邪魔が入らないうちに……なんで僕に問いかけるんだ。固唾を呑みこまずにはいられなかった。

深呼吸をする。気にするな、ここに来てから極端な考えすぎが増える。森里さんへ遠回しな救助を頼んだのがバレてる、そう仮定したとして、いま殺さないってのはまだ許容範囲なんだ。

もしくは森里さんが既に処分されてる。

おそらく、それはない。立神確保のために人数も多く集めてる。

いくらこいつだって短時間で始末するには骨が折れるだろう。これからゲームするのに応援に駆けつけられちゃ面倒になる。

バレてない、と思っておく。森里さんという切り札は健在だ。

麗葉が来るのは計算外だった。警察突入時、今度こそ彼女は容疑濃厚になる。僕は知らない、彼女のことより自分だ。生きてここを出るのが最優先だった。クソツ垂れたファンタジーワールドを脱出するんだ。

案内されたのは隣接したドア二つの前だった。いくつ目のドアかは見当もつかない。数に驚いたのに加え、通路が何度も曲がりくねってほとんど迷路だ。Ｔ字路や十字路が方向感を皆無にさせる。途中で逃げ出す選択肢はない。

僕は左の、麗葉は右のドアへ通された。隔離してなにをするつもりだろう。考えたって始まらない、おとなしく従った。背後でロツクする音。随分な念の入れようで。初めて監禁されたときが脳を掠めた。

麗葉とは同じ部屋にいた。距離にして大股分。もちろん別々に入室したからには意味がある。間には透明な仕切りがしてあった。触れてみてガラス製だと分かる。麗葉は前方をじっと凝視してた。

部屋の手前と奥は岸になって、真ん中はすっぽりと溝になっていた。覗きこむと薄暗い穴が口を開けてる。いまにも吸いこまれそうだが、落ちて無傷でいるのは難しい。唯一岸を繋いでるのが狭い橋だった。その真下にはなにやらごてごてした剥き出しの機械が密集してる。

橋は一步幅四方のタイル状になって、一つ目は「1」と書いてあった。先を見るとタイルごとに数字が一つずつ増えてる。ガラスの壁と橋との間には、なにに使うんやらベルトコンベアーがあった。タイルに対して各一周分あり、シャッターを隔てて麗葉の方に伸びてる。回転寿司ゴツコをやるってんなら大歓迎だ。

向こう岸のドアが開けられて立神が出てくる。ヘッドホン型のマイクをしてた。あーあーテストテスト、と小声で呟き、咳払いをした。

「ひとまず二人には殺し合ってもらおうと思う」

絶句した。てつきり奴との勝負だと思いこんでたんだ。

麗葉と僕が？ 殺し合う？

いくら犯罪者が相手に自分が生きるためだつて殺人は勘弁してほしかった。だいたい四人中三人が殺人の経験があるつてのはどうなんだ。健全な僕を引きずりこまないでほしい。

「あんたは俺達を試して夢幻倶楽部とやらのメンバーにしようとしてたんじゃないのかよ。二人とも有能な人材だとしたらもつたいないだろ」

「敗北者は無能。そういうことだ」

酷く簡潔な返答だった。どんな屁理屈をこねたつてゲームマスターの意向は絶対だ。舌打ちが出る。なんだつて麗葉を殺さなきゃいけないんだ。状況が考慮されるにしたつて僕まで森里さんに逮捕されてしまう。

「こんなところで人が死んでただで済むと思つてんのか。ここは

言いかけて言葉を呑む。警察が包囲してるなんて言えない。

「人通りだつてないわけじゃないだろ。誰かが迷いこんできたり、空から目撃されたり」

「心配には及ばない。屋敷から見える土地一帯は俺の私有地だ。上空を飛行したとしても生い茂った木々に邪魔されて屋敷すら窺えない」

屋外の草木が手入れされていないのも肯ける。目撃者ゼロ、人知れず山の肥料になれる。

埋めなくたっていい。屋敷内に放置されればこの広さだ、誰かが迷いこんできたところで発見はされない。

結局やるしかないのか。麗葉は特にリアクションをするでもなく突っ立つてる。そうだよな、あんたは銃を撃つのを躊躇しない。僕を殺すのもわけないだろう。悩みがなくて結構。

「質問は以上か？ それではルールの説明をさせてもらおう。聞こえるか、ウルルン」

呼びかけに僕の隣に位置する彼女が口をぱくぱくさせてる。正確には近くなのに遠い場所から発声してる感じだった。言葉としては聞き取れない、防音になってるんだ。とすると、この透明な仕切りは思ってるよりずっと分厚い。

どこかに設置してあるマイクで声を拾って立神には伝わったみたいだ。

「よし、問題ないな。ウルルン、部屋の角に個室があるだろう。そこにはとある液体の入ったワイングラスが二つ置いてある」

彼の言う通り、試着室に似た空間が設けられてた。僕の方にはない、軽い差別だ。

指示を送ると上戸さんが木製のデスクを持って現れる。続けて金槌と紙を立神に渡した。

「この紙にはその液体を染みこませている。いいか、素晴らしくスリリングな液体だぞ」

デスク上に紙を置き、金槌が振り上げられた。なにが起こるのか見当もつかない。網膜に焼きついたのは衝撃的な現象だった。勢い



良く紙を叩いた直後、デスクが破裂音を立てて爆発したんだ。

立神は手を叩いて大爆笑してる。

「ニトログリセリンだ、最高だろう？ たった一滴でもグラスを容易に破裂させる威力がある。摩擦や熱、刺激に対して思春期のガキのようにデリケートなんだ」

悪ふざけにもほどがある。奴がさせようとしてることが徐々に想像となって膨らんできた。なににしたってくだらない。

「ニトログリセリンのテイスティング勝負でもやらせるつもりかよ」「そう急くな、イヴ。いくら人生を変える事故を起こした張本人が相手だからって、短気は良くないぞ」

ちつちつちつと人差し指を揺らしてる。へし折ってやりたくなかった。僕が軽口を叩くのは少しでも早まる鼓動を正常な状態にしたいからだ。

麗葉は立神の発言を否定する素振りなく無表情になってる。事故の犯人なのは真実なんだ。僕は無意識で奥歯をかち合わせてた。

あなたは高額な時給で謝罪してくれようとした。でもお金じゃ時間は戻らない。好き放題に殺して逃げ回ってる人間には分からないかけがえのないものを僕はいくつも失ったんだ。犯罪者とは所詮相容れない存在。

けじめをつけてやる。立神とも麗葉とも終止符を打つんだ。

上戸さんがデスクの残骸を片付けてる前で説明が再開された。

「いいか、ルールは簡単だ。まずウルルンにワイングラスを選んでもらう。ただし片方はニトログリセリンに色も味も匂いも感触も似せた液体だ。どちらが本物でどちらが偽物かはウルルンには分かるよう置いておいた。一人はニトログリセリン、一人は無害な液体を持ってこちら岸に渡ってもらう簡単なゲームだ。しかしニトログリセリンの入ったグラスを落とせば部屋の中は瓦礫の山となる、即死は免れない。ざっと三百ミリリットルを注いでおいたからな、脚をつまずかせて転んだ拍子にアパートを粉々にできるだけの量が入っていると思え」

「ちょっと待てよ。そんなもん、あつちが安全に決まってるんだろ」  
「彼女が自分の方で偽物を持つからか？」

肯く。偽物を持つてる限り、百パーセントの保障がされる。  
彼はやや呆れたふうに肩を竦めた。

「イヴ、それではなにも面白くないだろう。こちらへ渡るといつてもただ渡るだけではない。一マスずつ駆け引きを楽しみながらだ」  
ジェスチャーといい話し方といい、とつても楽しげだった。僕のどきまぎはらはらとする様子で遊んでる。

携帯の時計をチェックする。屋敷に入ってから十五分も経ってなかった。さつさと森里さんにこのふざけた野郎を捕まえてほしい。警察が突入されて慌てる姿が見てみたい。

「数字が見えるだろう、『1』から『13』までだ。奇数マスではグラスの交換を許可している。これはどちらが宣言しても構わない、強制的に交換できる。片方が行った場合、そのマスではもう宣言できず、次のマスに行くことになる」

橋を歩いて中央で停止する。

「ご覧の通り、この部屋は防音防壁仕様になっていて互いの意見交換はできない。その上、仕草やサインでの意思疎通も禁止している。特別なマスとして、『6』と『10』に関しては一問一答を許可し、問いを行わない場合は離脱マスにもなる。離脱マスは読んで字の如くゲームを終わらせる宣言だ」

「奇数とその例外マスは分かったけど、残りのマスはなにするんだ」  
「六面ダイスを俺が振る。これは偶数マスでどちらも交換を宣言しなかった場合も同様だ。二人の名前が書いてあるんだが、出た目の方にはゲームを離脱するかどうかの権利が与えられる。離脱する場合、双方の足場に震度七弱の揺れを起こす。振り落とされないうようマスにしがみつくのがやつとだろう。その意味は分かるな？」

考えるまでもない、グラスを手放さずにはいられないってことだ。意地で持ってたって二トログリセリンが本物だとしたら万が一の生存もなくなるし、揺れに堪えきれず橋を落ちて大ケガだ。クソゲー

ムここにあり。

「離脱を宣言されたときには二回まで打ち消しを許す。あまり短期決着してもつまらないからな」

「そりゃ親切にどうも、クソ野郎」

ふつと笑った立神が懐から黒光りする銃を出した。僕は後退る。

ゲーム開始直前だから安心だとたかをくくって、ちよっぴりお茶目なことを言っただけなのに、ここで殺すつもりか。トリガーに指がかかっている。死への入口が僕へ向いてた。

おい、やめる、心は広く大きく持ってくれ。

発砲。

意味がないのに腕で顔を庇う。弾は当たってない。寸前で銃口が逸らされたんだ。強化ガラスに命中したあと跳ね返り、一般家庭の倍はある高さの天井を穿つたらしい。動悸がやまない。

「これが一番重要なんだが、決着つかず橋を渡りきってしまった場合も同様に二人ともこのグロック17の餌食になってもらうからな」  
そんな滅相もありません、仰せのままに。だから早く銃をしまってください。何度見たって射程距離内にあるのは気持ち良くない。僕には銃国家のアメリカ暮らしは無理だ、神経が衰弱して床に伏せてしまえる。

立神は親指で自分の背後を指した。

「すぐ隣の部屋でモニタリングしている。駆けつけて始末するのはイナゴを捕まえるより簡単だ、ルールにのっとってくれよ」

いまさら憤りは感じない。イナゴ捕りを冷静に想像して、ああ確かに、と思ってしまうたせいでもある。

「ゲームスタートだ。エキサイティングな時間を楽しもうではないか」

立神と上戸さんがドアへ消えようとする。直前で、そうだった、と振り返った。ポケットからなにかを出して僕へ投げってくる。ナイスキャッチ。手にしたのは小柄な筒だ。ごつい金属筒で一定間隔でひだ状の構造になっている。麗葉には上戸さんが同じ物を投げ渡して

た。

「それを左手の薬指にはめてくれ」

考えが読めた。 magari なりに僕らは立神と接触して生き残ってきた者だ。薬指をコレクションするだけの価値はあるんだろう。離脱に失敗して吹っ飛んだ暁には指を奪われるんだ。拒否したところで意味はない、死んだらどの部位をくれてやったって同じだ。素直に従った。

正面に設置された大型のモニターが点灯する。全面青く、なにも映ってない。上部からにゅっと突き出たのは手のひらだ、サイコロを持つてる。テーブルを真上から撮ってるんだ。ほっそりと長い指であつても、サイコロと比較したサイズで上戸さんのものじゃないと分かる。

「ウルルン、ウィンググラスを選んで持ってくるんだ」

スปีカーからの指示で個室へ入った麗葉が間もなく出てきた。

橋のもとで口をぱくぱくさせてる、立神になにかを訊いてるんだ。

「グラスはマスの横にあるベルトコンベアーに載せて渡すんだ。交換時も同じ要領だな」

彼女が片方を置く小さなシャッターが下がって開いた。ミニ回転寿司が作動する。非常にゆっくりな速度だ。ベルトコンベアーは急停止しないでだんだんと動きを緩めた。

慎重に掴む。思いのほか内容物が揺れて焦った。紙に染みこませてる程度の量であの爆発だ、塊をこぼして衝撃を与えたら粉微塵は必至。ゲーム開始前に自爆するのは馬鹿らしい。

蛍光灯に照らすとやや黄色みがかつてる、匂いはない。麗葉を横目で見ると表情は変わらなかった。グラスを意識してるふうでもなくモニターを眺めてる。

本物はどっちだ。

奇数マスは交換ができるルール。スタートと同時にその権利があることになる。自分ならすぐ交換するとしても、一秒たりとも長く持つてたくない。二つのグラスから片方を選ぶ時点で二トログリセ

リンを相手に渡す。

迷いがある。彼女と再会したときの反応だ。彼女は俺を必要としてるんじゃないか。それなら僕には偽物を渡してくれる。ない。

さんざん来るななんだと拒んでたのは当人だ。これは策略。彼女は立神という男を深く知ってる。こういうゲームを既に想定してたとしたらどうだ。信用させておいて罠にはめる。犯罪者の常套手段だ。噛みつくほど怒ってた彼女が正反対の極端な態度で接してきたのも納得できた。

交換すべきか。

「初めの一步」

立神の声で一つ目のタイルへ足を踏み出す。

沈黙。僕も麗葉もなにも言わなかった。

「どちらも交換は宣言しないのか。ならばサイを振るぞ。手を離れた時点で交換の権利は失効する」

モニターに手中でサイコロを踊らせる映像。いまにも転がり落ちそうだ。

麗葉は堅く口を閉じてる。心底が全く見えない。僕は、交換、と言ってしまうそうになった。踏み留まらせたのは、もうサイコロがテーブルクロス上を跳ねてたからだ。

僕は初めから相手に本物を渡すと考えた。すぐに交換されるのも構わずに。人間は誰にでもミスがある、もし本物を持ってこけでもしたら阿呆らしい。それならやっぱりなるべく長くは持つてたくないのが心理だ、まずは僕へ渡す。

なのに交換を宣言しなかったのは彼女なら裏をかいて敢えて自分で本物を持つと考えたからだ。

どうだ、当たってるだろ。

ポーカーフェイスは崩れない。計算が狂って内心は冷や冷やしてるだろうに。

サイコロは麗葉の名前が刻んであった。離脱するかどうかの権利

は彼女に託される。本当は僕の目が出てさっさと離脱するのが良かったが、彼女がどんな選択をしようとノーリスクだ。

麗葉が口を動かす。

「いいんだな、それで」

立神がくつくつと喉を鳴らしてる。奴にはどっちが本物か分かってるんだ、高みの見物でいい気なもんだな。

笑い声が響き渡る。なにがそんなにおかしいんだ、さっさと離脱しないってのを僕に伝える。

「ウルルン、離脱宣言」

息を呑む。

嘘だ、そんなはずはない。裏の裏をかいたってのか。麗葉の言がこっちに聞こえないのをいいことに面白くなるよう立神が適当を言ってるんじゃないのか。

いいや、彼女は抗議しない。離脱なんだ。

やられた。僕が持つてるのが二トログリセリンだ。素直に考えれば良かった。妙な深読みが仇になってる、クソッ。

「どうした、イヴ。お前も離脱でいいのか」

「打ち消しだ！」

「あまり興奮するとこぼれるぞ」

愉快そうな笑い。

液体が激しく円を描いて揺れてるのに気づく。慌てて落ち着いた。あつちが離脱しようとしたからには限りなく本物と思っておいた方がいい。もしかしたらこれすらも罠の可能性はある。いきなり離脱と言われれば、どんなに理屈が通ってたって誰だって打ち消すだろう。本物がどっちかはもうちょっと先に進んでからでいい、焦ったら負ける。

指に汗が滲んだ。グラスが滑りやすくなった。持ち手を変えてズボンで拭う。

二マス目。

サイコロは僕の目が出た。肩の力が抜ける。麗葉が出てたら、さ

つきと同じく離脱を宣言する。そうしたら僕は打ち消しを全部消費してしまふ。保険は残しておきたかった。

僕は離脱しない。立神の声はつまらなそうだった。エンターテインメントしたきや遊園地にでも行ってくれ。

### 三マス目。

奇数だ、ここに至るたつた数分の時間が待ち遠しかった。真つ先に交換を宣言する。恐る恐るベルトコンベアーへグラスを置いた。早く向こう側へ行ってくれないのが焦れたい。シャツター部を境に偽物の入ったグラスが巡ってくる。

念のため気をつけて持った。見た目や匂いに違いはない。これで本物らしき方は麗葉へ渡った。彼女は相変わらず無表情だ。いや、前髪の奥で少し見える眉間にて微かな皺が窺える。これでもちよつとした付き合いだ、表情の変化は読み取れる。こつちが偽物の確率はぐつと高まった。

安心するのは早い。このゲームは離脱権利が与えられるサイの目が鍵になってる。離脱の権利さえもらえれば本物か偽物かどっちを持ってても爆発は免れる。十三歩という制限はあるものの、まだ前半。勝負はこれからだった。

### 四マス目。

サイコロは僕に幸運をもたらす。離脱を言えば麗葉は打ち消しをするだろう。ルールと攻略法が体に馴染み始めた。奇数マスで交換を行ったり来たりさせつつ離脱し、相手の打ち消し二回を使い切らせるのが正攻法なんだ。おそらくあと数歩でどつちかの打ち消し権利は消える。

麗葉だって分かってる。ルールが単純なだけに防ぎようがない。僕は祈るように、離脱、を口にする。

彼女が前髪の内側でまぶたを閉じる。再び開かれた目は苦渋に満ちてた。

「ウルルン、打ち消し」

ガッツポーズをする。よしよし、推測は外れてなかった。なにか

想像もつかない行動に出るんじゃないかと一抹の不安があった。一定の小さなルール内に立てば対抗できなくはないんだ。いま僕は彼女を凌駕してる。

本物は向こうだ。

五マス目。

奇数マスだ。交換が宣言された。まあそう来るだろう。ゲームの性質上、グラスは何回か往復することになる。ベルトコンベアをほぼ本物確定の液体が流れてきた。

手が震える。緊張が究極に高まってた。もう片方で手首を押さえ、呼吸を落ち着けた。麗葉は涼しい顔をしてる。僕が対戦者で余裕面かい。読み合いが難しくなるのはきつと半分以降だ。

六マス目。

「一問一答マスだ。質問者と回答者をサイコロで決めるぞ」

そういえば初めのルール説明で言ってた。六、一〇マス目は手掛かりを聞き出せる。

交換時に使用するシャッターが全て開いていった。これで防音性はなくなったに等しい。

サイコロは、またも僕だ。ツいてる、完全に運が傾いてる。

いざ質問するとなるとなにも浮かばない。六マス目じゃ機が熟してない感じがする。

重要なのは一〇マス目だ。あとたったの四歩、されど四歩。数メートル程度で互いの思考はぐちゃぐちゃに絡まるに違いない。麗葉は初めからどっちが本物かを知ってるから、どうやって偽物を奪うかが問題になってくる。一見、僕が不利でいて、実のところは違う。彼女の選択を見て分かる通り、どうしたって本物か偽物かについては中間あたりで見当がついてきてしまう。戦いはいかに偽物を奪取して離脱するかに終着していくんだ。

てことは、この六マス目に大した価値はない。どうでもいい質問を一応訊いてみる。

「俺の持つてる方が本物だな？」



「違う」

短い応えのあと、シャッターが一斉に閉まった。ずばりの中させた動揺をちよつとは見れるかと思つたのに彼女は無表情のままだ。気にかかるのは、ここにきての嘘だった。あくまでも否定する理由がどこにある。仮に真実だとして、それならどうして交換したんだ。

良くない傾向だった。麗葉が相手となると否が応でも深く考えてしまう。

もしや、そんなまさか、一番初めに持つたのがニトログリセリンじゃなかったとしたらどうなる。あのとき僕はつきり自分が掴まされたと思つてた。一マス目、離脱をされたら打ち消しをするしかない。そのせいで裏の裏をかがれて本物だと思つたんだ。こっちが打ち消さなかつたら麗葉は死ぬことになる。確率はあつてもなかなかそんな捨て身にはなれない。

微妙に焦つたあの表情が演技だとしたら全部が逆つてことになる。現にこうしてまんまと騙されて効果も大きい。恐怖に打ち勝てる精神があれば難なく実行できるだろう。

彼女にはそれがある。

立神にスカウトされるほどの人間で機知に富んでる。躊躇いなく銃を発砲し、ストーカー野郎を退治する犯罪者だ。なによりも僕の人生を大きく変えた張本人。母親を殺し、逃走の間で自分勝手に無関係な家族をまきこんで、予想してなかつた生活へ送りこむような奴。常識なんてとつくに逸脱してる、普通に考えちゃいけないんだ。僕を雇つた時点で麗葉は事故の対象者である相原伊吹だと気づいてた。携帯を返してもらつたあの日には、事故にかかりあつた人間だ、と。

以前に僕は、莫大なバイト代で謝罪をしてくれようとしてるんじゃないかと考えたことがある。それも違つのかもしいない。雑用で二万円なんて日給があれば辞めたくたつて辞められない。おまけに立神が現れて、しょうがなく麗葉に縛られた。そうして頃合いを見

計らって殺すつもりだったんじゃないか？

事故当時のことは、そうはつきりとは覚えてない。曖昧で証拠能力はないし、彼女はあのと時十四歳未満だった。しかし法律に左右されない麗葉にしたら関係ないってこともある。いつ口を割るとも分らない人間は傍に置いておく方が安全だ。微々たるもんでも法に裁かれかねない要因があるなら彼女は、いつか根本から消そうとする。

いまこのゲーム参加中がもっとも証拠隠滅には適してる。立神をも利用する悪女。あんたがいなければ上戸さんが立神の手に落ちることなかったんだ。麗葉がいなければ綾木だって嫉妬でストーカー事件をややこしくして事態を悪化させず、僕が事前に食い止めた。実家に戻る必要もなかった。みんな和気あいあいに暮らせてた。負けてたまるか。死ぬのはあんただ、麗葉。

**優柔不断は嫌われる(1)(後書き)**

次話更新予定は11/28です。

Next:「優柔不断は嫌われる(2)」

## 優柔不断は嫌われる(2) (前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。 よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価/感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

X?ID=PP47878715

## 優柔不断は嫌われる(2)

七マス目。

彼女の回答は信じるに足らない。いくら麗葉でも二択で気の利いた返しは言えない。せいぜい逆を応えるぐらいだ。ここまで来た僕が、裏をかいたんじゃないか、なんて考えると予想するに違いない。この奇数マス、本来は交換しないんだ。

「交換するぞ」

グラスをベルトコンベアーに置く。立神の不敵な微笑は気にしない。

裏の裏。敢えて素直に交換する。彼女の回答は信じないけど、結果的に言葉通りの意味で捉える。おそらく初めの一步、あの時点でミスを犯してた。全ては逆だったんだ。まんまとハメられた形。

グラスが流れてくる。これが偽物だ。とうとう互角になった。麗葉の反応も、いちいち思考に入れちゃ騙される。考えてみれば向こうはリアクションで誤解を与えるのが武器になる。行動と結果、参考にするのは二つのみで十分だ。

八マス目。

サイコロはもう何度目か、また僕の目を出した。ツキを支配して、試してみるのもいい。

「離脱だ、立神」

「ウルルン、打ち消し」

笑いが込み上げてきそうだ。一種の賭けだった。どうせ確認しとかなきゃ、あと五マスで終わってしまう。ぐだぐだな展開になってどっちがどっちか分からなくなって自棄に離脱してしまうだろう。踏みこむ必要があった。

麗葉を読み切った。最初っから僕の考える方向性は丸見えだったんだ。恐ろしい奴、危うく罠にかかるところだった。

僕の逆襲が始まる。既に彼女に打ち消しを二回消費させたんだ。

勝った、勝てる。

九マス目。

麗葉が交換を宣言する。確証に確証が重なったようなもんだ。渡されたのが本物、小細工は利かない。残り四マスを上手く切り抜ければいい。なんせこっちはあと一回の打ち消しがあるんだ、いざとなったら保険になる。有利は揺るがない。

四マス、か。

なにかが引つかかった。それほど有利ってわけじゃないんだろうか。次の一〇マス目は一問一答だ。特例として質問をしない場合は離脱の権利が発生すると言ってた。麗葉のサイの目が出て離脱したら本物を持つてる僕は打ち消しを使い切ることになる。簡単に立場は互角になってしまふんだ。否、本物を持つてる分、僕が危険だ。

頭を掻きむしる。つまり、どうなんだ。本当に必勝の道はないのか。紙とペンが欲しくなる。一から整理しよう。もし打ち消しがなくなる最悪な状況になったとして、僕はどうしたい？ もちろん交換したい、本物の放棄だ。

交換の奇数マスはあと二つある。十一マス目と十三マス目だ。十一マス目で交換して偽物をゲットする。次が一三マス目。麗葉が交換を宣言するってことか。最終的に僕へ戻ってきてしまう。

そうなんだろうか。このゲームにおいて十三マス目の交換は得策じゃない。勝敗が決まらないで岸に辿り着いちゃったら銃殺されるルールだ。どっちも交換は宣言できないから離脱マスとなり、サイコロが振られる。どんな目が出ようと関係ない、僕と麗葉は一か八かで離脱する以外にないんだ。例え二トログリセリンを持つてると分かってたって命は助かるかもしれない。

てことは、十一マス目で偽物を掴む僕の勝ち揺るがない。一問一答で麗葉に離脱を宣言されようとなんも変わらずだ。

この勝負、もらった。

一〇マス目。

転がるサイコロを落ち着いて見れる。僕はにやけてしまった。質

問の権利が与えられたんだ。最も望ましい展開だった。打ち消しを一つ余らせて最終局面へ移れる。

シャッターが開いた。

彼女は俯き加減になってる。これが麗葉と交わす最後の会話かと思つと犯罪者相手でも感慨深くなつた。

遠慮はしない。

初めは殺し合いと聞いて戸惑つたが、そもそも立神が企画したゲームで僕が手を下すんじゃないんだから殺人にもならないんだ。なによりも麗葉は僕に対して代償のきかないことをしてる、自業自得だ。

「悪いな、俺は普通の生活に戻りたいんだ。次の交換で本物はあんなところへ行き、十二歩目で俺の目が出れば離脱して勝ち。出なくても、十三歩目は交換しないから天運に任せて二人とも離脱するしかない。だから、俺の勝ち。そうだろ？」

質問なんてないし、素直に伝えてくれるとは思ってない。離脱マスにしないために、べらべらと筋道をしゃべつたんだ。明解な結末を教えてやり、どんなことを言うかも興味があつた。

麗葉は空中に視線を漂わせてる。

なんだよ、なんか言え。ゲームは終わつてると知つてぐうの音も出ないつてか。最後に一言を聞かせてくれたつていいだろ、謝罪だつてなんだつていい。俺の中で完全な犯罪者として終わるつもりだよ。

電気ショックでも食らつたみたいに麗葉の首が上がつた。

「伊吹、気づくのだ！ このゲームは――」

シャッターが強制的に閉まつた。立神の阻止だ。

「一問一答、ルールは守ってもらわないとな。イエスかノーがいまの質問に対する模範回答だ、ベビー」

構わずに麗葉がなにかを叫んでる。声は遠くて全然聞こえない。

なんだ？ なにが言いたいんだ？ 六マス目の一問一答と比べて明らかに異質だ。それだけじゃない、ここに来るまでの彼女の雰囲気

気とは全然違う。ついさつきは淡々と進めてたんだ。それがどうして終わり間近になってそんな態度になる。作戦を変えたのか？

そんな悪足掻きするタイプじゃない。

気づいた感じだった。そう、麗葉は気づいたんだ、ゲームのなにかに。

なにに？ なにがあるんだ。

両方とも本物のニトログリセリン？ 立神ならやりそうだ。片方は偽物と言っておいて、両方が本物であると気づかなければ生き残れない仕掛け。確信し、離脱をした直後に二人して爆死なんてのはありきたりな展開だ。もしくは反対に、両方が偽物か。

十一マス目。

推測の域は出ない。考え方は当たってる気がする。他に、なにがあるんだろう。麗葉がジェスチャーを禁じられて黙りこくってる。

分からない。僕は正規のルールでやるしかないんだ。

「交換、だ」

「イヴ、交換」

本物は麗葉に行った。終わり良ければ全て良し。早ければ、いよいよ次で決まる。

十二マス目。

サイコロがテーブルを転がった。自分の目が出てほしいのに、結果を知りたくない気持ちがあった。心臓が加熱したエンジンの如く、どっどっどっどっどと暴れる。

なんだかあらゆる動きがもつさりと見えた。サイコロも、添えられた立神の手も、僕も、持ったグラスの液体も、麗葉も。

後頭部の古傷が痛んだ。気分が悪くなってくる。

来た。

右側が騒がしかった。麗葉が騒いでるんだ。本来、聞こえない声が耳に届く。ぎゃーぎゃー叫んでるだけで内容はなにも意味を含んでない。ベルトコンベアーに乗っかり、ガラスの壁を思いつきり叩いてる。



おいおい、そんなにしたらガラスの中身がこぼれるぞ。あんたの持つてる方が本物なんだ、無茶するな。そんなにしてまで、なにを僕に伝えたいんだ。

嘘だろ。麗葉がガラスを高々と持って振りかぶってる。投げた。コマ送りでガラスが砕け、雫が舞ってる。ただただ茫然としてしまった。

呼ばれて我に返る。サイコロが僕の名前を上にして止まっていた。離脱の権利が難なくもらえた。

それにしたって、この予知はなんだったんだ。いくら強化ガラスだって直接にニトログリセリンがぶつかれば破片ぐらいは飛んできそうだ。

このあと麗葉が本当にそんなことをするのか疑問だった。彼女らしくない取り乱しようなんだ、いま橋の上でじっとしてる姿からは想像もつかない。

「どうした、イヴ。さっさと選ぶがいい、離脱をするのか、しないのか」

「一つ訊かせてくれ。本当に本物を持ってない方の安全は保障されるんだろうな。例えばガラスがどんな状態で飛ぼうとも」

立神は、そんなことが、と言う。

「むろんだ、俺の計算に狂いはない。もともと、マスにしがみつかず落下して打ちどころ悪く死ぬなんていうドジを踏まなければだかな」

それならいい、必勝だ。百パーセントの勝ち。あとは言うだけだった、離脱、と。

麗葉へ視線を向ける。ワイングラスの柄を握ってこっちを見てた。同じだ、たぶんこの場面だったんだ。

り、と言いかけた瞬間、彼女は目を大きく開いた。ベルトコンベアーに乗り上げて口を慌ただしく開閉して喚いてる。今度は声は全然聞こえてこない。

グラスが高々と上がる。僕は目をつぶってしまった。予知しなく

たつて次にどうなるか分かる。人が、彼女が粉微塵になって吹き飛ぶのを眼球に焼き付けたくない。

そんなんで良かったのか、あなたのその行動は最良だったのか。なにか作戦があったんだろ。あんたならできたんじゃないのか、スーパーベビーなんだろ。クソツクソツ！

無音。

ひたすらに沈黙が訪れた。防音仕様つてのは大爆発が起きても影響を受けないんだろうか。それとも僕も被害に遭って死ぬと意識する前に天国に来ちゃったとか。

ゆっくりと視界を開いていく。

ガラスの壁には油質を含んだ液がしたたつて虹色にきらきらしていた。爆発してない、麗葉は無事だ。液体の性質上、爆弾でもあるまいし不発じゃないだろう。結果として表された方程式の解は、僕が持つてる物こそが本物の二トログリセリン。君も割ってみろ、というサインには見えなかった、両方が偽物の可能性は低い。

麗葉は教えてくれたんだ、こっちが本物だと。なんでそんなことをしたんだ。分からない、分からない、分からない、分からない……。

「やれやれ、ウルルンには困ったものだ」

静かな響きは立神だ。

ゲーム内でのジェスチャーやサインは禁止されてる。

彼女は殺されなかった。意外にも彼は先へ促した。これはこれであいつにとって楽しめるシチュエーションなんだ。僕は死ぬと知りながら離脱しなくちゃならない。麗葉にサイの目が出て同じ。離脱し、僕が死ぬのを眺める以外にない。十四歩目はないんだ。橋を渡ってしまつて二人とも死ぬのは馬鹿馬鹿しい。天国行きの切符は一人分で良かった。

つい数分前の余裕は一切なくなった。考えてたのと逆だったとすれば、完全なる敗北を意味する。自信がそのまま裏返ったんだ。肩で気張つてたものが抜けていった。

離脱はできない。

### 十三マス目。

「さあて、最後のマスだ。交換したきや素直に伝える、いい子になどちらもしないなら離脱の権利を左右するサイコロを振ってやる。最高だろ？」

いちいち虫酸を走らせる男だ。敢えて訊かなくなつて、ゲームは終わってる。僕が死んで、はいおしまい。他にどうしろってんだ。黙って死ぬしかないんだろ。誰でもいい、一発逆転ホームランできる案があるなら教えてくれ。

ありつこない。

なぜか中学時代の光景が映像として網膜に甦る。予知能力の一端かは知らない。

中学校の理科室だ。そこが文芸部の部室だった。部長が僕で、副部長が上戸さん、書記が綾木。たまたま三人しか集まらなかった日があつた。僕達以外の部員は各々なんかしらの用事で来なかつたんだ。

いつもと変わらなかつた。三人しかいなくても寂しい部活風景にはならず、やたら盛り上がったつげ。あの小説のどこが面白いとか書いた作品のここはこうすべきだとか、普段と過ごした時間が同じなのには有意義な一日になつた。

その光景のなんて遠いことか。みんなばらばらになつてしまった。僕はもつと遠いところへ旅立とうとしてる。

なんでだろう、死ぬときが来たらそれはそれでまあいつか、て長いこと思つてたのに、このどうしようもない世界を離したくない。離れたら、全部終わってしまう。嫌だ、遠ざかりたくない、死にたくない。

「イヴ、諦める。ルールはルールだ、死ね」

淡々としてた。声のトーンと内容がそぐわない。

こんなにあつさり死なないといけないのか。せめて、大往生。精一杯戦つて誰かを救つたり 贅沢は言わない、救わなくてもいい。

そつだ、満身創痍で死ねるなら許せる。病気でもなんでもないのに、人生の折り返し地点にも達してないのに、なんで生きてちゃいけないんだ。

「無能が生きるのはそんなに悪いことなのかよ」

「なんだと？」

「何遍だつて言つてやる。無能が」

モニターを睨みつけてやろうとして、立神の言葉が僕に向けられたものじゃないと察する。麗葉が珍しく身振りを大きめに怒鳴つてた。

間もなく例の嫌な笑い声が聞こえてくる。

「命拾いしたな、イヴ。ウルルン、交換だ」

なんだつて？ なんの意味があるんだ。そんなの犬死にだ。交換したら最悪な事態になる、無理心中と相違ない。あんたに死なれたつて僕は嬉しくなんてないんだぞ。そんなんだつたら生きる道を考えてくれ。上戸さんも綾木も、みんなが幸福になれる行動をしてくれ。

「交換だ、グラスを置くんだ。ウルルンがここまで阿呆だとはなあ、恨むなら彼女を恨めよ、イヴ」

なに考えてんだ。こんなことしてなんの得になる。二人とも、あと一步を進んだら容赦なく殺されるのに。グラスを落とす場合は、一か八かで生き残れるかもしれないのに。

打つて変わつておとしなくなつた麗葉。

もういい、どうとでもなれ。

僕はベルトコンベアーにワイングラスを置いた。

置こうとした。手を離れなかった。

目の前をフラッシュがよぎつた。脳内に清涼感が吹き流れる。

そつだつたんだ。

改めてグラスを持ち直し、僕は岸へ右足を乗せた。

「どうした。マスに戻つて交換しろ、さもないと殺すぞ。どちらにしろ殺すが」

「やってみろよ、クソ野郎」

後悔するなよ、と聞こえてモニターが暗転した。

すぐにドアが開く。ご丁寧な銃口が初めから僕の脳天をロックオンしてる。麗葉側には上戸さんだ。麗葉がガラスを叩いてなにか言ってる。必死だ。そりゃ必死にもなるか。あんたがやるうとしてたことだもんな。

「どうやら俺の見込み違いだったようだな、がっかりさせてくれる。薬指を収集する価値もゼロだ」

「収集どころじゃないだろ。あんたに俺は殺せない。いや正確には、俺を殺せばあんたも死ぬ。違うか？」

立神の片眉がぴくりと動いた。

僕は続ける。

「あんたは初めにこう言った。決着つかなければそのグロックで殺す、と」

「ああ、言った。だから殺すんだ」

「いいや、殺せない。このゲームはそもそも成立しないんだ。なぜなら」

強気に足を前へ動かす。近づくのが一番いい、この位置がとてもいい。

「二トログリセリンを持った人間が、こんな至近距離にいたんじゃ撃てねえからだ」

トリガーが引かれれば例外なく僕の額に穴が空く。銃口まで、ほぼゼロ距離だった。恐すぎる。無意識で腕が震えた。液体が波打ってる。

ほとんどハツタリだった、なんの解決にもなってる。奴には、こっちの考えなんて見え見えだ。じゃあ死ぬ、と言いかねない。

いまだに麗葉は透明な分厚い壁を叩いてる。どんだんどん。そんな音が聞こえてきそうだった。彼女を信じ切れなかったのが心残りだ。だけど信じなかったからこそ、この状況が生まれた。それは良かった。あとは野となれ山となれだ。

「さあどうすんだ、撃つのか撃たないのか、男ならさっさと決めがやがれクソ野郎！」

立神が口角を持ち上げる。

「両方が偽物とは考えないのか。建物自体の耐久性を考慮し、あらかじめこちらが仮のニトログリセリンとして設定していて、そのグラスを持つ者を射殺するつもりだったとしたらどうだ」

それはない、と否定する。

「麗葉が交換を宣言した意味がなくなる」

「本物かどうかはグラス選択の時点で彼女が確かめてた、と？」

「そうだ。試しに小さな爆発を起こしてもこっちは聞こえないからな」

「交換や他の駆け引きはお前を陥れるための演技かもしれないぞ」

確かに。どちらも偽物なのが伝わらないよう逆を演じてるのかもしれない。僕を死へ導くために。彼女ならルール違反であっても立神が殺さずにおくこともあるだろう。生か死か、ぎりぎりの攻防になる。

だけど

「そんな器用なことができる奴じゃないって俺は知ってる。見ろよ、あの慌てよう。あれが演技か」

歯を剥き、唾液を撒き散らし、鼻水垂らし、食い破らんばかりに壁にへばりついて拳を叩きつけてる。

「死んでもらっちゃ困るってよ。俺はあいつの先生なんでね」

これで無理なら、終わり。

OKだ、満身創痍、こうでなくっちゃ。僕はいま納得してる。死んでもいいなんてどうでもいい気持ちにはなってる。生きれるなら生きたい。死を受け入れる準備が済んだ、ただそれだけのこと。十三階段のあとに待ち受けるのは首吊りの輪っかなんだろうか。それともしようもない現代社会へ続く道か。立神の薄く開いた瞼、その奥の黒目を覗む。

拍手。

拍手。

銃をしまい、立神と上戸さんが両手を打ってる。

「正解だ、イヴ。瀬戸際だったな」

「このまま帰っていいなら大喜びだ」

強がってみせた。そんな余裕はどこにもない。腰が砕け、せつかく生き残れたのにニトログリセリンを落としてしまいそうだ。

「おっと気をつける、楽しくなるのはこれからだぞ。グラスをそこに置いて来るがいい、次のステージを案内しよう」

言われるまでもなく、そっと膝を曲げてく。ちよつとの衝撃でこぼれる代物だ、最後の最後まで注意した。

リノリウムの床にグラスの底が触れた。優しく手を離す。

立神が背中を向けてた。隙だらけだ。

一つの策を閃いた。ここでニトログリセリンをぶっかけてやれば奴は死ぬ。僕も死ぬ。今後被害者がいなくなると思えば自分の命ぐらい安いじゃないか、それが正義ってもんだ。森里さんに 僕が本来なりたかった人間になれる。

やるか。

再びグラスを握る。やたらと重みを感じた。床からビー玉ほども離れてくれない。なんで、できない？ 死をも覚悟した僕はどこ行った。

ここでやんなきゃいままでと変わらない偽善者だ。中学時代の自分ならやる、自滅覚悟で特攻する。いまだって根本は変わってない。やれる、いける、やれ、いましかない、やるんだ。

「伊吹！」

立神を突き飛ばして麗葉が入ってきた。しゃがんだ僕に差し伸べられる小さな手。自分が息を荒げると気づく。暑くないのに汗が噴き出た。

体温を感じた瞬間、安らぎが注入されていく。天国に昇る気分だった。なんて頼もしい手をしてるんだ。

握り返さずにはいられなかった。

ドアをくぐると立神がサイコロを指で弾いて飛ばし、キャッチしてる。三回繰り返し返したあと、いきなり歯で挟んだ。破碎する響き。ぷつと吐き捨てられ、麗葉の足元に転がった。半ばで割れてる。

「重りか」

摘まみ取った彼女は断面を見つめてる。大部分はプラスチック素材なのに、一面のみに金属質の物体が埋めこまれてた。両断された麗葉の名前に隣接してる。その裏側は僕の名前だ。

きゃっ、と短い悲鳴。立神が容赦なく上戸さんを殴りつけたんだ。止めに入ろうとすると彼女本人に止められた。

「どつりでイヴの目ばかりが出ると思った。このゲームはサイコロで左右するからな、ウルルンを不利にしようと思かにも考えたんだろっ」

ゲーム中に僕も感じてた。夢中になつてて、てつきり運がいいんだと思つてたら、そういう種があつたんだ。通常でも確率は二分の一。連続で出ても、それほど不自然じゃない。ましてや、上戸さんが細工してるとは思いつきもしなかった。

膝をつく彼女に強烈な靴先が放たれる。上半身が跳ねて床に倒れた。

ぶち切れそうだ。立神に食つてかかつて殴り飛ばしてやりたいのに、上戸さんは望んでなかった。奴をよく知ってるなら、こうなるのを覚悟してただろう。僕が間に入ったら、余計に困らせてしまう。見てて堪えられなくなったら突撃すると決め、拳を固めて静観する。

「使えるように使えないメスだ。日本滞在中は時間的融通のきくお前に補佐を任せたのは俺だが、ここまで恥をかかせるとはな」

危うい匂いが室内に漂った。次には銃をぶつ放すんじゃないかと思えた。

よろめきながら、お言葉ですが、と上戸さんが立ち上がる。

「立神様は命令以外で動けない能なしをお望みですか」

風を切った平手が頬を弾き、彼女を傾かせた。ぐつと膝で踏ん張



つて改めて自分の主人を見上げる。

「私は比佐麗葉が憎い、殺してやりたい。そして証明したいんです、この女よりも優れているのを」

彼女の頭に手が置かれた。安堵の表情へ変わろうとする瞬間、苦痛に満ち溢れた喘ぎが漏れる。長い髪を乱暴に掴み、そのまま持ち上げられたんだ。ぷつぷつと抜ける音がこつちに届く。爪先立ちになり、やがて床を離れた。

立神は視線の高さにまで上げ、唇をつぐんで必至に悲鳴を我慢してる彼女を睨んだ。

「できるのか、たかがお前如きに」

腰のナイフを抜き放ち、上戸さんがしっかりと目を開く。

「訊かないください」

切りつけた対象は自らの髪の毛だ。着地した彼女は雑なシヨートヘアになってる。毛先が不揃いで、綺麗な黒髪は見る影もない。

「やれ、とご命令ください。全身全霊をもって実現します」

立神の手を離れてはらはらと髪が舞う。黒い塊が床に散らばった。彼女の瞳には決意の色がありありと窺えた。僕の知ってる上戸さんはそこにいない。

振り返る立神。

「イヴ、悪いが少々休憩してくれ」

通路へ続くドアを開けて向き直る。上戸さんを見てた。

やれ、と一言。出ていく。

彼女の顔が晴れ渡った。

「ありがとうございます、一人前のイラストリアスになってみせます」

深々と頭を下げる。ヘアピンを付け直して麗葉を睨むと彼についていった。僕達もあとに続く。また永遠に延びる廊下を歩かなきゃいけないと思うと気が滅入る。一回休みつてのが救いだ。

「おいおい、私に拒否権はないのか」

「あつたら、こんなところには来てねえだろ」

「頭いいな、君」

「馬鹿にしてるだろ。上戸さんに痛めつけられちまえ、クソッ」

ああ、こんなやりとりをできるように戻ったんだなあ、と懐かし  
くなつた。

完全には気持ちを整理してない。麗葉の事務所みたいな汚さだ、  
なにがどこにあるかさっぱりだった。片付けようとしてもどうやっ  
て棚に収めればいいか分からない。

分からないなら、放置するに限る。

歩いてると小さな影が飛んだ。軌道を追うと麗葉の右手からだっ  
た。腫れて出血してる。ガラスの壁を闇雲に叩いたせいだ。

触れるときしゃつと痛がった。こんなになるまで叩くなんてどうか  
してる。

「アンポンタン」

「うるさい、触るな。君は鬼か」

「こらこら、おとなしくしてろよ、ほら」

常備してるハンカチで縛ってやる。傷が治るわけじゃないけど、  
ないよりは痛みが薄れる。

「時給は上げないぞ」

「へいへい結構ですよーだ、雇い主様」

「金目の物もやらないぞ」

「期待してないっての」

「新作はちゃんと読んでくれたまえ。一言一句、読み流さずに」

「生きて帰れたらな」

ニトログリセリンを彼女に託すべきだったとちよっぴり後悔した。

**優柔不断は嫌われる(2) (後書き)**

次話更新予定は未定です。

Next: 「網の中の魚」

## 網の中の魚（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記の手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=P47878715

## 網の中の魚

階段を上がったときには歩いてきたフロアとの違いを感じ取った。鉄製のドアを開いた立神の背中が部屋へ入ってく。海の香りが鼻孔をほのかに突いた。部屋の中から漂ってきたんだ。

足を踏み入れてみて理由が分かった。

総合体育館によくある備え付けのベンチが突き当たりまで一直線に並んでる。湿気も多い。潮のべとつとした空気が肌を撫でる。コンクリの床や壁にはところどころに鮮やかなコケが生えてた。

真ん中まで行った立神が、こちらでくつろいでくれ、と言って出ていった。ボタンとレバーの付いた装置がある、あまり近づきたくない。五つ空けて僕は腰を下ろした。

吹き抜けになって一階下を展望できる。部屋の中なのに遙か下には水面があった。底が暗かった。深さは地下に達してるだろう。あれが海水なんだ。

一階フロアの地面の代わりとなるのは、建築現場でよく使われている鉄骨だった。円状に接合されて、大雑把な網目みたいに組まれている。均整を保ってられるのは四方をワイヤーで吊してるからだ。

奇妙なのは、コンクリの壁に覆われた個室が突き出て円に接していることだった。一体化してるようだ。対面側にもある。

鉄の擦れる音をさせて右側の個室から三人が出てきた。ポストンバッグを持った立神を先頭に足場を歩いていく。足場といっても剥き出しの鉄材だ、滑れば落下する。円の中心にはもう一つの円があり、木製の床が敷いてあった。唯一の安息の場となる。

「こんなこともあるうかと管理をさせておいて良かった」

「いつたいなんなのですか。屋敷の構造はだいたい把握してますが、ここは」

上戸さんも知らない施設のようだった。上下左右を訝しげに見回してる。

「お前が知らなくても無理はない、使っていたのは俺が大学在学中の頃だ。意見の割れた者同士で度胸試しも兼ねて争わせていたリングだった」

僕は笑ってやった。

「水に落ちたら負けってやつかよ。まるまるB級のバラエティー番組だな」

「そう見えるか。視力の精密検査をおすすめするぞ」

ぱんぱんに膨らんだバッグを開いた彼は、おもむろに肉塊を取り出した。首を落とされたブタだ。四足が縛られ、ひづめが手提げになつてる。

鉄骨の網目は粗い。横の穴をすんなり落下していった。

水面が山なりに盛り上がる。ノコギリ型の歯が露出し、赤黒い口内が大気に触れた。なにもかも呑みこみそうな喉へ豚肉が丸ごと収まる。飛沫が激しく霧状になって、ここにまで届いた。

悪ふざけの過ぎた番組になること間違いなし。

「最高だろう？ 簡易水族館になつてる。しかしこのファイトには少々難があつてな」

鉄骨を地面と同じようスマートにウォーキングした。難なく逆立ちし、でんぐり返しへ結びつける。

「勝者が生き残りにくい、極めて高い確率で。双方揃って脱落するつまらない展開が続いてしまった。仲間を無闇に失うのは本意だ、やむを得なく閉鎖したつてわけだ」

立ち上がりと同時に地に蹴ってバク宙をした。安定した着地をし、更に一段高い位置で膝を抱えたジャンプ。危険です、と上戸さんが止めようとするも下手には近づけない。ぶつかりでもしたらバランスを崩して真つ逆さまだ。

空中で回転した彼は体を弓なりにして足を下ろした。そこに鉄骨はない。上戸さんの悲鳴。サメが再び水面を目掛けて影が上昇してくる。

大口登場、水滴飛散。

立神はそこにいない。足場に掴まって鉄棒の要領で体を振り子にし、見事にぐるっと舞い戻ってみせた。一〇点満点。体操選手になった方がいい。

「俺にとつては楽しい遊び場なんだがなあ、童心に返るとはこのことを言うんだらうな」

海の荒くれをおちよくるなんて嫌な子供だ。

胸を撫で下ろす上戸さんの肩を軽く叩く。同意を求めたようだが、彼女は苦笑いをした。

「水面まで三メートル。システムを作動させると同時にゆっくり降り始める仕掛けだ、一分で約五センチ動く」

一時間後には水面に浸される計算だ。

「生きたければ安全地帯へ逃げこむしかない。東西にドアがあるだろう。さっき通ったのが東側のドア、対面にあるのが西　いまトスミの後方にあるドアだ。要はドアを開けて逃げこめば勝利、三メートルの防水壁に囲まれていて命は保障される。ちなみに片方が開けられた時点で時間に関係なくリングは落下する仕掛けになっている」

肯く上戸さんが目を凝らして一方を指差した。

「あの、立神様。ドアになにかぶら下がっているようですが」

「ああ、そうだった。二人にはまず手錠で繋がってもらおう。好きな方の腕を出せ」

上戸さんは左を、麗葉は右を出した。一つで二人が繋がり、満足に動けなくなる。

なんで麗葉は右手にしたんだ、利き腕なのに。いくらケガしてるからって不自由にしてしまうのは不利だ。こういう点も立神の好奇心をそそらせるんだらう。

「注意事項として言うならば、手錠に小型爆弾を仕掛けている」

遠くていまいちはずきりとはしないが、警察が使う手錠とは異なっただけに見える。筒状の輪になっていた。輪と輪の間のチェーンも、だいぶ長い。

「硝酸アンモニウムと亜鉛の混合物が含まれた物だ」

「ふむ、水が発火剤になるのだね」

手首に付けられた物をつまらなそうに麗葉が眺めてる。

「Yes。水がかかるか落ちたらポーン。早く外すに越したことはないな」

今回は薬指を確保するフォローはない。サメに食われるような奴は無能つていう扱いなのだ。脳みその小さい生物に殺されるんじゃないお眼鏡には適わないってか、クソ野郎。

「鍵はそれぞれ別にある。ウルルンの鍵はトスミの後ろにある西側のドアに。トスミは反対に東側だ」

それらしいのが上部に掛かっている。フックは二つあった。

「ドアもロックがかかるため、その鍵も横に掛けている」

「二つを手に入れるのかね」

手錠のチェーンを引つ張ったり噛んだりしてるのは麗葉だ。

「スタンダードな進路はそうなる。手錠を外し、ドアのロックを解き、中へ逃げこめればハッピーになれる単純明快なルールだ。持ちこんだ武器の使用は不可、それ以外はどんな手段をとろうと構わない」

武器なしなら麗葉が銃を使わなくて済む。今度の相手は上戸さんだ、彼女が撃たれたら自分がどうかしてしまう。どっちにも死んでほしくなかった。

質問はあるか、と訊く立神。

上戸さんが静かに言う。

「殺していいんですね」

彼は一拍のあと首肯で応えた。

立神がドアへ戻るとロックがされる。円形の床の上で睨み合う少女が二人。彼女たちは獰猛なサメの檻に監禁されたも同然だった。

今回の攻略方法は分かりやすい、両方が助かるケースがはっきりしてる。行動をともしして鍵を取り、それぞれ安全地帯に逃げこんでドアを同時に閉めればいい。立神はその点でなにも口にしてない、



ルール違反ではないだろう。

彼には珍しく生温い縛りなのは理由がある。前提が争う者同士なんだ。戦う意思がないならぶつからずに済み、対話で解決して終えるパターンもある。

上戸さんはやる気だった。今日は誰も止める者がいない、思う存分に凶悪な感情をぶつけてくる。僕がどうにかするにも、いまや立神は装置の前のベンチに座ってた。邪魔でもしようもんなら射殺される。

携帯の時計を見る。館に入ってから二〇分は過ぎた。託すは森里さんだ。麗葉の疑いはあくまで疑いで、まだ証拠が見つかってない。事情聴取中に逃亡したのはまずいけど、僕が口裏を合わせてフオロ一すればなんとかなる。ストーカー事件の現場にいた張本人だ、なによりも説得力がある。

彼女は捕まらずにいられる。立神が逮捕される。ゲーム中断、上戸さんも死なない。ハッピーエンドで万々歳だ。

至って他力本願だった。それ以外に二人が助かるシチュエーションが浮かばない。

「ウルルン、トスミ、準備はいいか。それでは、ゲームスタートだ」  
操作パネルのボタンが押された。天井の方でブリキの軋るモーター音が唸りを上げる。錆びたリングが小刻みに震えた。

先に仕掛けたのは上戸さんだ。懐柔のつもりは一切なし。左手で手錠の鎖を引っ張り、麗葉を呼び寄せる。バランスが崩れてよたつく彼女の頬へ拳がめりこんだ。

殴られながらにして小さなパンチを返す麗葉。利き腕じゃなくてスピードも威力もない。ガードされ、一瞬の間が空いた。上戸さんが見逃さない。鋭い突きがまたも顔面に命中する。膝の力が抜けて身が沈んでしまった。

突進。なんとか堪えて低い姿勢のまま股ぐらへ頭をぶつける。たまらずに相手は倒れ、勢いで滑った。床の切れ目を通過する。止まったのは一本の鉄骨の上だ。彼女の左右は地獄への入口。麗葉も本

気だった。

とどめを刺すべく追い討ちをかける。安易だったとしか言いようがない。両脚を高々と垂直に上げた上戸さんが背筋のみを駆使して跳ね上がった。過程で足底の攻撃が顔面に当たる。カウンター気味に入り、麗葉は仰向けに転倒した。すかさず乗っかられる。マウントポジションで額を殴りつけられた。戦闘能力の面では圧倒的な差がある。

完全に上になられてパンチを連打されては対抗のしようがない。下にいる人間は打撃を繰り返して力が入らないんだ。おまけに関節技をする体勢ですらない。一方的な暴行が待ってる。

これで決まった、かに思えた。右の手首を麗葉が掴んだんだ。上戸さんが引こうとしても離さない。離さないなら、と渾身の左拳が振り上がった。

悲鳴したのは上戸さんの方だ。手首に指がめりこみ、握り潰そうとした。転がるようにして退き、敵を苦悶の表情で睨んでる。手の跡が赤黒く残ってた。

麗葉はデリンジャーの重いトリガーを引くために握力だけは人並み外れてるんだ。迂闊に攻撃できない。利き腕を負傷してなければ、もつと有利だった。手錠で繋がれちゃ、どうしたって近距離になる。惜しいのはダメージを食らいすぎてしまったことだった。

上戸さんの腰の回転が加わった蹴りに腹部を打たれる。ろくにガードできずふらついた。歩くのが困難そうだ。

お返しとばかりに突進される。倒れかかる麗葉。上戸さんの移動は止まらない。鎖を持って引きずられる。強引に突破して東側にある鍵を取るつもりだ。握力を警戒して早々に手錠を外してしまう作戦だろう。それと片方が落ちた場合、巻き添えを食うリスクもある。麗葉に勝ち目がなくなってしまう。

上戸さんの指先が鍵を揺らした。掴む寸前で届かない。麗葉が腕を引っ張ったんだ。同時にパンチを放つ。左のフックのかかった大振りな攻撃だった。そんなのが当たるわけがない。

意外。直撃。

切れた唇で彼女はにやりとした。期待の持てないパンチが当たったんだ。

上戸さんは学校爆破時のケガで右目に眼帯をしてる。視野が狭く、外側から迫りくる拳を感知するのは遅れてしまう。麗葉が打ったた初めの直線的で小さなパンチは伏線だったといえる。利き腕を敢えて手錠に繋いだのも納得だ。この左の一発を狙ってたんだ。

上戸さんの体がぐらついて、隣の足場へ跳ぶ。その間に鉄骨を駆け渡った麗葉が鍵を取った。サイズからしてドアの鍵だ。にっと口端を上げ、ぽいっと投げた。あ、と上戸さんが腕を伸ばす。

ちよぽん。

小さな小さな波を立てて水面へ沈んでいった。敵が愕然としてる間に手錠の鍵にも狙いをつける。そうはさせまいと繋がった腕を引かれた。諦めて跳び移るしかない。ほとんど倒れるようにしてしがみつく。下半身が落ちかけた。

上がるうとする麗葉を上戸さんが踏みつけた。余裕で手錠の鍵を入手してる。勝利を確信する笑い声。

手錠を外す。両手の塞がった麗葉は易々とそれを許してしまった。爆弾入り手錠のリスクが減る以上に勝ちへ近づかれる。放られた手錠が鼻面に当たって垂れ下がった。鍵は離れて落ちる。

一旦、体勢を整えるんだろう、中央の床へ戻っていく。屈伸や手足をほぐすなど柔軟体操をした。たつぷりと時間に余裕がある。ドアに逃げこむのを邪魔されないために麗葉を確実に仕留めてからと考えたんだ。

麗葉もようやく立って内円へ向かった。鎖を腕に巻きつけて障害にならないようにしてる。肩で息をして消耗が激しい。もともと肉弾戦を得意とするタイプじゃない。負傷してる右手は動くにたつて殴るには向かないし、爆弾が二個も付いてる。サメの気まぐれで水飛沫が舞い上がれば腕が吹き飛びかねない。

彼女が負ける？

考えたくない現実だった。もし死なれたらこの先は一人で乗り切らなくちゃならない。一度は一人でだつてやってやると思った。関係が修復したいま、いなくなるのは損だ。森里さんの登場が恋しい。三〇分まであと二分。

堪えてくれよ、麗葉。

「どうした、時間を気にして。ゲームはまだ始まったばかりだぞ」立神はひたすらに楽しげだった。そうしていられるのもいまのうちだ。屋敷を包囲すればいくら立神でも逃げられない。組織員数は多いとしても、ここに警察を上回る人数がいるとは思えなかった。

現状維持、それが勝利への道だ。上戸さんにとつてもそれが一番いい。

分かつてる、と無難に応えてリングへ目をやった。

上戸さんの切れのいいパンチを両手で庇う麗葉。拳は当たらない途中で引つ込めたんだ。身を翻し、回し蹴りが飛んできた。フェイントに騙されてノーガードだったみぞおちへ食いこむ。麗葉は無惨にも倒れて咳きこんだ。能力、状況、なにもかもマイナスに働いている。

足元の彼女を上戸さんは蔑視の眼で見下ろした。

「脆弱ね、メス犬。見ていただけでするかー、立神様ー。ご覧の通り、私の方が上だったでしょう？」

余裕の現われか、キャラに似合わず手を振ってはしゃいでる。僕も見たことがない一面だった。よっぽど麗葉の存在が疎ましかったんだ。

口元に弧を描く立神。

「前ばかり見ていると足下をすくわれるぞ」

「はい？」

首を傾げた彼女の顔が残像を残して落ちる。麗葉の足払いが綺麗に決まった。不意打ちで受け身をとれず腰をしたたかに打ちつける。

「このゾンビ女、よくも」

恨めしそうな声色で彼女が立ち上がるうとした。

どこかで硬い物が弾き飛ぶ音。それと同時にリングが大きく揺れる。ワイヤーの一本が切れてた。立神が操作したんじゃないかった。古くなってたのが久々の稼働で自然と寿命に達したんだ。

麗葉が姿勢を低くして床の縁に掴まる。

位置の悪い上戸さんは自らの重みのせいで円を傾かせ、ただただずり落ちていく。一度下つてしまうとスピードが乗ってちよつとやそつとの摩擦では止まらない。

床をはみ出る。辛うじて鉄骨を掴んでぶら下がった。危険だ、リングが下落してるのと傾きが加わって足と水との距離はさほど離れてない。

真下に影が揺らめいた。盛り上がる水面。食い千切ろうとする凶悪な口が出現する。

接触。

噛み締められた口に脚はない。寸前、筋力便りに体をL字にしたおかげで無事だったんだ。サメはまた視覚できない水底に潜っていた。

いままで上戸さんは大幅に体力を使ったようだ。床になかなか上がれないでいる。つい手を貸してやりたくなる苦しそうな表情だった。力尽きていまにも落ちそうだ。

森里さんがそろそろ来てもいい時刻だった。なんてことだ、あと少しだっというのに。

僕はベンチを立った。

「どこへ行くつもりだ、トイレならゲームが終わってからにしろ。動けば殺す」

グロック17を向けられた。

あることに気づく。僕は森里さんの到着が待ち遠しかった。希望だった。

だけど今後は枷になるとも言える。ゲームの始まった現在、ここに突入してきたら興を削がれたとして逆上する場合もある。

そのとき僕は無事でいられるのか？ 逃亡する動作を見せようも

んなら全てを見通されて蜂の巣にされる。殺戮の映像を想像するのは難しくなかった。そのあと警察に取り押さえられるにしたって、自分が死んじゃおしまいだ。

例え逃げず反抗したって無駄だ、単純な武力のぶつかりじゃ勝てない。ゲーム内にいるからこそ渡り合えるんだ。

まずい。

先決すべきは上戸さんをどうにか救出することだ。

麗葉と目が合った。

「頼む。上戸さんを助けてあげてくれ」

「嫌だ」

即答だった。

「なぜ私が助けなくてはならないのだ。仮に助けても今度は私が殺される。それとも君はこの女を優先するのかね」

「そうじゃない！俺は二人に死んでほしくないだけだ。ルールには二人が同じ安全地帯に入っちゃいけないとはなかった。まだ二人が生きる術はある」

確認の意味も込めて立神を見る。

これで禁止されたらアウトだ。口には決して出さないが、必死に懇願する。

「確かにそんなルールはない。もともと対立する二人に用意していたゲームだからな」

よし。

「ほら、ゲームマスターのありがたいお墨付きだ。二人助かっておしまい、それでいいだろ」

静かに目をつぶった彼女が大きく溜め息をついた。しゃがんで、注意深く斜めのリングを下りていく。掴みたまえ、と乗り気じゃないふうに腕を垂らした。上戸さんが背に腹はかえられないといったように掴み、寝そべるようにしてようやく上がる。

ナイスだ麗葉。

彼女は納得してないみたいで唇を尖らせて睨んでくる。そう邪険

にするなよ、新作読んであげるんだから貸し借りなしにしよう。

ホッとした僕の目に信じられない光景が映った。首に上戸さんの腕が巻きついてる。感謝の抱擁には見えない、スリーパーホールドをかけたんだ。

「早く助けなさいよ、グズ。死ぬかと思ったでしょ」

愕然とする。助けにくれた相手にどうしてそんなことができるんだ。それにあれは以前、僕を気絶させた技だった。一瞬で気持ち良くなれる。麗葉は咄嗟に腕と首の間に片手を入れてた。絞まるのは時間の問題だ。

上戸さんに呼びかける。彼女は可愛らしくベロを出し、ごめんねとおどけた。

数年で人がこんなに変われるとは知らなかった。かつての彼女はこんなことしない。恩を仇で返す人間じゃなかった。僕が勝手に美化してたつていうのか。嘘だ、そんなの信じたくない。

ついに麗葉へ腕が決まった。落ちたのをじっと観察し、ゆっくり下ろす。すぐサメのエサにしないのは、せめてもの良心か。踵を返してゆっくりと鉄骨へ移動する。未着手の西側のドア。ワイヤーが欠けてるせいで再度傾く。

ドアの鍵をなんとか取った。

手錠の鍵も手に入れようとしてやめる。捨てておけば麗葉が爆弾から逃れられなくなるが、傾きの中で無理して落ちては阿呆らしいと判断したんだ。あとは安全地帯へ逃げれば勝ちだった。麗葉が目を覚まさなければリングが急降下してサメの餌食になってしまう。

停止した上戸さんが彼女を見つめた。

蹴り。

蹴って転がし始めた、水面へ落とすつもりだ。一時的に放置したのは良心でもなんでもなく、確実に鍵を保持したかったからなんだ。最後の仕上げとして麗葉を殺害してフィニッシュにしようとしている。

「やめろ、上戸さん！ 勝負はもうついている、どうして罪を増やそうとするんだ！」

「殺したいから」

至極簡潔で究極の動機だった。麗葉の左半身がほとんど床を出て  
る。

「貧相な体のくせに重いわね、さっさと落ちなさいよ、このっこの  
っこのっ」

小刻みな蹴りじやらちが明かないと見てか、サッカーのセンター  
ングを思わせるほど片脚が後ろへ大きく浮き上がった。

硬直する。散々の蹴りで麗葉が覚醒したんだ。軸足を掴んでる。

かちゃん、と軽やかな響き。上戸さんの足首に手錠がかかったた。  
もともと自身が外した方だ。

「なっ!？」

蹴りのモーションにあつた体勢を直すしかない。麗葉を落として  
しまえば上戸さんも落ちる。有利と不利が分からなくなってきた。

脚に手錠があつては満足に動けない。

軸足を引いて転ばす。上戸さんが激しく側頭部を打った。鮮血が  
額を濡らす。患部を押さえて呻いた。

のっそりと麗葉が起き上がる。

「やはり伊吹は甘い。角砂糖百個より、いや千個よりも甘い」

そんなにあれば百個も千個も変わらないって。

ツツコミを入れる間もなく、彼女の膝が上がった。真下には敵の  
頭。

踏む。踏む踏む踏む。

残虐なる攻撃だった。脚は腕の三倍の力があるという。加減した  
にしても意識を切断させるのは容易だ。こうなってはどんな有利な  
状況でも関係ない。上戸さんはぐったりして動かなくなった。

あっさりした逆転劇だ。人間は脆い。

ドアの鍵を奪い取り、相手を引きずりながら悠々と手錠の鍵も入  
手した。爆弾付きの拘束を外して放る。鉄骨にかかつて垂れ揺れた。  
反対側のドアへ入れば勝負が決まる。上戸さんをまたいだ。

足首を掴まれる。力はない、簡単にどけた。



鉄骨を渡って鍵穴を回す。ようやく上戸さんが這って阻止しようと進んだ。到底間に合いそうにない。

個室の安全地帯内で振り返り、その姿を見据えた。閉めればサメのエサになる。思い出や人格を無視して肉になる。この世をいなくなってしまう。消えてしまう。僕自身からもなにかが消えてしまうようだった。それは、そう、手とか足とか目鼻口とか、そういったものを失う感覚だ。

「やめるんだ、麗葉。ドアを閉めるな、上戸さんを待ってくれ」  
「まだ言うかね。彼女がどうという人間か分からないわけではないだろう」

「少しいいんだ、待ってくれ」  
森里さんが来たら僕は殺される。死ぬのは嫌だ。かつて心を交わした同級生が死ぬ姿を見るのはもつと嫌だった。

「お願いだ、麗葉。頼む、この通りだ」  
手摺りに額を痛いほど押しつけて頭を下げる。上戸さんが犯した罪は消えない。起こってしまった過去は戻らない。逮捕されればしばらくは会えないだろう。

未来は自由だ。新しく切り開いていけばいい。そうして僕と上戸さんと綾木で、あの頃みたいになれたらいい。それでいい。死んでしまつたら、それもかなわなくなる。

「悪いが、私はドアを閉めさせてもらうよ」  
「麗葉」

そうだ、乗り気じゃないのに既に一度助けてる。二度目はあり得ない。麗葉は麗葉なりに譲歩したんだ。彼女を責められない。

責めるとしたら 僕自身だ。  
彼女が上戸さんを見る。

「伊吹は君に助かってほしいらしい。頑張りたまえ」  
ドアが無情にも閉められた。天井の方で一際大きく金属音が鳴る。ワイヤーのブレーキが解除されたんだ。

落下。

盛大に飛沫が舞い散った。上戸さんを包みこんでいく。こうなっちゃどうにもならない。手錠が爆発してサメに食われ、遺体も残らなくなる。

上戸さんは殺人を犯しました。殺人は悪いことです。その罰は死ぬことでしか償えないんですか、神様。

無神論者の僕は初めて天に祈った。それしかできなかった。

願いが通じる。跳ねた海水が落ち着いたのに彼女は無事だった。あぐらをかくようにして背を丸め、水面に浸されたリングより上へ足を持ち上げてる。爆発をなんとか免れたんだ。

あまり喜べない。ワイヤーはそれ以上は緩まないものの、サメが周囲を旋回してた。彼女へ食らいつくのは難しくない。上戸さんも承知してるはずだ。

絶望は窺えなかった。

垂れた前髪をどけるでもなく、一心不乱に手錠をいじってる。

水面にサメ肌が鮮明に見えた。水音をさせて高く跳び上がる巨体。非情な口。巨体が彼女を隠した。

上戸さんが立ち上がり様にジャンプする。無謀だ。食われるのを逃れたって爆発してしまう。運良く一命を取り留めても食われる。結末は見え見えだった。

轟音が耳をつんざき、視界をも奪った。想像以上の破壊力だ。

肉片があたり一面へ弾けてる。滞空してた肉と鮮血が次々に降り注いで水を濁した。上戸さんの姿はない。

「よくやった、トスミ。イラストリアスは、そうでないとな」

部下が死んだというのに、この男は……。

我慢できなかった。あと先は考えられない。乱暴に襟首を掴んだ。「最低野郎だな、お前は。お前なんかに会わなかったら上戸さんはな、いまごろ平和に暮らしてたんだよ。彼女の未来を壊しやがって

表情を変えずに手首を握られた。人差し指と親指で摘ままれてるだけなのに力が弱まってしまふ。なにかの技らしい。戦って勝てる

気がしない。僕もこれで終わりか、クソッ。抵抗ぐらいはしてやる。怒るところか立神は微笑した。

「早とちりをするな」

リングの方を指差してる。ずぶ濡れの少女が床に上がった。重傷を負ってるふうでもない、まったくの無事だ。

「ヘアピンで手錠を外したんだ。多少の時間を使えば誰でもできるだろう」

色んな感情がごちゃ混ぜになる。立神にぶつけようとしてた鬱憤は彼女が死んだと思っただからで、生きてたとなると僕の誤解で、だからって謝るのもおかしいし、それよりもなによりも上戸さんが生きてた。

喜べ。

安堵と疲労感が降りてきてベンチに体重を全部預ける。体内に磁石を仕込まれたみだだった。背もたれにくっついて離れられない。先に安全地帯へ逃げこんだ者の勝ち。

ルール通り、ゲームは終了された。仏頂面の麗葉が観覧席へやってくる。頭をぼんぼん叩いてやったら鬱陶しそうに振り払われた。夢や偽物じゃない実物の比佐麗葉だ。

びしょ濡れになった上戸さんも息を切らして帰ってきた。手摺りに寄りかかり、いまにも床へ伏せるんじゃないかと思える。手を貸そうとして立神にブロックされた。

「お前の負けだ、出ていけ」

「正しい言葉や態度は一切ない。」

「私は負けてません。立神様も見てたでしょう、いつでも勝てたのを。比佐麗葉は私より格下です」

「お前は重要な任務で、成功させようと思えばできたけど失敗しました、とでも言うつもりか。無能は邪魔だ」

ぐつと黙りこむ。

正論だった。彼女だって十分に理解してる、子供のわがままだと知ってる。

理屈じゃないんだろう。認めたくないという最深の原始的な感情が働いてるんだ。

「しかし、きつと次のゲームでもお役に立てるはずですよ」

「爆発で鼓膜でも破けたか？ 出ていけ、と言っただけ」

「でも」

拳が無情にも彼女を薙ぎ倒す。

ほっそりした顎を掴んで立神は顔を近づけた。

「いいか、これでウルルンを計れるのは俺しかいなかった。お前では力不足なんだ」

上戸さんが小刻みに震えてる。申し訳ありませんでした、と呟いた。

解放されると麗葉を睨みつける。どんよりと暗い感情のこもった瞳だ。おぼつかない足取りで去っていく背中呼びかけても無視された。

「振られたのだね」

「だまらっしゃい」

ケガしてなきや本気で殴ってやるところだ。こいつにはデリカシイってもんがないのか。

上戸さんが警察に捕まってくれるのを願った。

森里さんはどうしたんだろう、約束の時間は過ぎてる。慎重になる必要があるからジャストで来れるとは限らないが、予兆もないのはどういうことだ。いや、僕なんかには察知されるようじゃ駄目なんだけども……。

「なんだ、なにかあるのか」

首を伸ばして僕の視線の先を追う立神。心臓が止まりそうになった。

なんのきなしに、別に、と否定する。

「さつさと次やるうぜ。こんなクソゲーム、長々とやりたくも見たくもねえよ」

「安心しろ、次が最後だ。おそらく二人が喜ぶ最高の舞台装飾を用

意した」

目が糸の如く細められた。それは悪寒が走るほど満面の笑みだった。

## 網の中の魚（後書き）

次話更新予定は未定です。

Next:「 刃中の羽虫・クライマックス」

長らく期間が空いてしまい申し訳ありませんm(´`;)m  
某新人賞へ投稿するために、別作品を執筆していました。  
無事に書き上げることができたので、こちらを再開しようと思いま  
す。

もはや読んでくれる方がいるかどうか分かりませんが、  
物語は終盤なので最期までお付き合いいただければありがたいです。  
感想やコメント、アドバイスなどお待ちしています^^

作者ページメッセージにて2008/12/13にコメントをく  
れたKさん

一気に読みしていただけたんですか！

ありがとうございますm(´`;)m

やはり堅苦しさを感じさせてしまえますか。

昔からの課題だったりもします；

どうにか柔らかい印象の文章を書こうと思うんですが、なかなか改  
善できずにいます。

今後、更なる読みやすさを追究していきます

強烈なインパクトを持たせたいと思って書いているので、

その点は伝わっているようで安心しましたo(´-´)o

励みになる感想、ありがとうございます^^

## 「刃中の羽虫」クライマックスシーン（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=PP47878715

## 「刃中の羽虫」クライマックスシーン

民家の倉庫に逃げこんだ途端、岩原がとんでもないことを言い出した。自首しよう、と。

ほうぼうを逃げ回って所持金は尽きた。奪った三億円は通し番号が入っていて使えない。使えば居場所を教えるようなものだ。車はガス欠になり、遠出するには足もない。

それがどうした。ほとぼりが冷めるまで逃げ回っていれば莫大なお金が懐に入る。遊んで暮らすには少ないが、いままでのみじめな生活とはおさらばだ。資本金があるのだ、会社を興すのもいい。三人寄れば文殊の知恵。俺達に不可能はない、現に銀行強盗だってまんまと成功したではないか。

岩原は図体に似合わず、頭を抱えて弱気になっている。

「初めから無謀だったんだ。なんでこんなことしちゃったんだ」

「ああ、潮時かもしれないね」

田中が眼鏡を直しながら疲れ切った表情をした。どいつもこいつもどうしようもない。計画を練っていたときの自信ありげな物言いはなんだったのだ。

「馬鹿野郎、ここまできて自首なんかできるか。捕まらなきゃ三億だぞ、一人一億だ。それを捨てるってのか。いいや、それだけじゃない。捕まったら刑務所行きだぞ。警官も二人刺した、重罪人だ。あいつらが死んでたら死刑だってあり得る。フリーターよりも最悪な立場じゃないか。お前はそれで堪えられるのか」

そうだよってやろう、という反応を待った。奮い立ち、逃亡する計画を改めて練ろうと一致団結するのを思い描いた。強みはある。岩原の馬鹿が顔を見られはしたが、俺と田中は面が割れていなかった。それを利用すれば打破できる道がある。

期待が外れる。

二人は俯いて覇気がなかった。



「しょうがないだろ、罪は罪だ」

「僕も自首する」

岩原が立った。田中もだ。

俺は入口を塞いだ。手近にあった西洋刀をもぎ取る。棚が揺れて他の刀剣類がかちゃかちゃ鳴った。骨董屋の所有物らしい。それも刃物専用の倉庫だ。珍しい形の物が種々様々に揃っていた。

「行くなら殺す」

「冗談だろ、やめてくれよ。自首が一番賢明だってお前も分かっているんじゃないのか」

「岩原の言う通りだ。それにそんなに嫌なら、貫井一人で逃げ続ければいいだろ」

切っ先を突きつける。

「俺のことを話すつもりだろう。手掛かりをバラすかもしれない」

「話さない、絶対に話さない、約束する。だから早まるな」

岩原が腕を上げて後退する。

「信じられるかよ!」

風を切った一閃で腕を斬り飛ばした。一瞬あとに血液が迸る。

絶叫。

うるさい。腹を一突きして捻る。赤い泡を噴いて岩原が白目を剥いた。抜く。

刃に付着した赤々しい液体が換気扇から射す月明かりに照らされ、てらてらと輝いた。

下がっていく田中の背に壁が当たる。

「いまなにしたか分かっているのか。僕達、友達じゃないか。なんで殺す必要があるんだ」

「友達？ 俺は一度だっと思ってたことなかった。自分にとっては、いまも昔も敵だ。要は利用できるかどうかさ。お前だっけ友情があったと言い切れるか。違うだろう、互いの能力を知ってるからこそ協力したんだ。仲良しこよしじゃなくなっただって、三人ならやれるんだ」

彼はなにも言わなかった。凶星なのだ。所詮は綺麗事、俺には通

用しない。田中はいつもそうだった。周りにはいい子面を貫いて決して腹の底を見せなかった。表面に差があっても、中身は自分とどこか似ている。

田中は眼鏡を直して肯いた。

「分かった、逃げよう。二人の方がフオローし合える場面もあるだろうし」

「それでいいんだ。お前は岩原とは違うって信じてたよ、逃げ切れたら初めに眼鏡を買い換えよう。そのフレームはお前の細い顔には合っていないだよ」

ありがとう、と微笑した彼が、すぐ様に緊張の面持ちになった。

「それよりここにいつまでもいるのはまずいよ。岩原の叫び声を聞かれたかもしれない。外はどんな様子だ、追っ手がなければ移動しよう」

顔を知られた岩原を庇っていたから逃げるのに苦労したのだ。二人でならなんとかなる。犬共がいても問題はないが、抜け出るのを目撃されるとあとあと死体と血のこびりついた西洋刀を発見されたときに支障が出る。

扉を開いて外を覗いた。鈴虫の歌が永遠と聞こえてくる。人間は近くにいないようだった。

物音がした。外ではない、内からだ。

田中が日本刀を抜き放っている。

「なにに使うつもりだ、そんな物を持って外に出れば捕まえてくださいって言うてるようなものだぞ」

「この人殺しがっ！ お前を殺して僕は自首する！」

月光の元に晒された彼の目は充血していた。雄叫びを上げて斬りかかってくる。

咄嗟にタツクルをした。六十センチ以上ある刀身を満足に振るには倉庫は狭い。離れるより思い切って肉薄する方が安全だった。勢いのまま棚にぶち当たる。肩口が少々痛んだ。刃が数ミリ食いこんだのだ。引かなければ斬れないのが刀という物だった。

腕力ではこちらが勝る。柄を掴んで奪い取った。突き飛ばし、尻餅をつかせる。みつともなく悲鳴する田中。刀を逆手に持って狙いを定めた。

串刺し。

肋骨の隙間を通って心臓へ綺麗に命中させた。意味不明な言葉を残して彼はくずおれた。懇願か、はたまた呪詛か、どちらでもいい。馬鹿な奴らばかりだ。警察に捕まってどうする。俺は警察に捕まるぐらいならば自殺を選ぶ。

日本刀を捨てて二人を見下ろす。無意識ながら僅かに友情があった。感慨に耽るかもしれないと思ったが、特になにも湧いてこなかった。

死んでくれて良かった。おかげで三億円が丸ごと自分の物になる。当初から一人占めを望んでいた節があったのだ。ポケットに入れたコインロッカーの鍵の硬さを指で確かめる。三億円の感触がそこにあった。頬が緩んでしまう。

先程からなにかやかましい。周囲が、ぎしぎしと軋みっぱなしだった。首を巡らせて薄闇に目を凝らす。柵が揺れているようだった。揺れているのではない、転倒防止用の留めネジが外れかかって倒れてきている。

気づいたときには遅かった。

幾本もの刀剣が体中に突き刺さっていく。あっという間に床に縫いつけられて下敷きになった。口を鮮血が溢れる、止めどなく。

生温さが頬を濡らして伝わった。

外が騒がしくなっていく。耳がおかしくなり、酷いノイズがざわざわと混ざった。誰か倒れてるぞ、と聞こえてくる。

満月がよく見えた。生きてきた中で一番眩しい月だった。目の前が光に包まれていく。

俺は最後に思った。あの世まで警察は追ってこられない。

「なんだ、これでいいんじゃないか」

ノイズも眩しさもなくなった。

「刃中の羽虫」クライマックスシーン（後書き）

次話更新予定は未定です。

Next: 「トランプ株」

## トランプ株(1)(前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。 よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価/感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID= P47878715

## トランプ株（1）

立神荘士が無防備に背中を向けて歩いてる。近くに仲間はいない、相手は実質一人だ。不意打ちで倒せないものだろうか。

たぶん成功しない。こつそりと逃げるのはどうだ。  
きつと失敗する。

どこで誰が見張ってるとも分からないし、廊下は二度曲がったあとずっと直線だった。身を隠す前に感づかれたら狙い撃ちにされる。警察が侵入した騒ぎのどさくさに紛れでもしないと脱出できない。

そういえば麗葉にはまだ言っていなかった。森里さんがいつ姿を現してもおかしくない。あらかじめ教えておけば対処しやすくなる。耳打ちをしようとするのと立神が止まった。ラストステージに到着したんだ。カンヌキ錠を外して重厚な扉をスライドさせる。短い階段を下りて彼は振り向き、どうだ、と嬉々とした表情で両腕を広げた。

鋭利な煌めきが埋め尽くしてる。国籍を問わない刃という刃が天井に吊されてた。日本刀やRPGに出てくる剣はもちろん斧や鎌まであつた。一室の大部分は棚が整列してて、そこにも剥き出しの刀剣類が飾られてる。図書館の本が化したみたいだった。インテリアにしてはスリル満点だ。地震で棚が倒れてきたり、紐が切れたりして垂直落下してきたら漏れなく死ぬ。足を踏み入れるのも勇気のある場所だった。

「刃中の羽虫」

呟く麗葉。

正解、と立神が声を張り上げた。

「トスミに暗唱させたウルルンの小説をモデルにしてみた。やや規模が大きいけどな。最高だろう？」

吹き抜けの天井やスペースは体育館を上回る広大さだ。何本の刃物があるんだか数える気になれない。全部が本物なんだろうか。脇

の小さい棚にぶら下がった中世の似合う剣をまじまじ見つめる。

「おっと触るなよ、ケガをするぞ」

出しかけた手を引っこめる。その言葉はそのままの意味ともとれるが、武器として使おうとするなら撃つぞ、と聞こえた。鼻からそんなつもりはない、近接用の武器で飛び道具に対抗するのは無謀だ。誤解で殺されたくなかった。

棚は神経質なほど綺麗に並んでて真っ直ぐに道を形作ってる。それが途切れる部屋の中央にはぼつんとテーブルがあった。畏怖するかのように周りの棚が離されてて空間ができあがってる。さながら、林の中の空き地だ。

ゲームをこの場所で行うのは間違いない。万が一、刀剣を使う場面になっても離れすぎてて届かないだろう。走ったところで五秒はかかる。その間にずどんっだ。

テーブルにはカジノ風のグリーンマットが敷かれてる。変わってるのは、白いラインでマスが描かれてることだ。七つのマスが縦に並んでる。真ん中 四マス目の左右には少し大きめのマスも一つずつあった。

立神がウッドチェアへ座る。

「まずは、おめでとう、と言っておこう。リスク管理については合格点に達しているのが分かった」

これほど嬉しくない祝福の言葉はない。勝手に目をつけられて勝手に危ない橋を渡らされ、得る物といえばなにもない。失うか失わないでいられるかの違いだ。せめてアトランチス旅行チケットなんかを賞品にしてほしい。

「そう恐い顔をするな。安心しろ、もう命のやりとりはしない。ここまでくれば、もはや必要もない」

「じゃあとつとと帰してくれてもいいんじゃないか」

ちゅちゅち、と人差し指を左右へ揺らす。

「あと一つ絶対的に必要なものがある」

スーツの内側へ突っこんだ手にはリボルバーが握られてた。グロ

ツク17とかいう拳銃以外にも持ってたんだ。焦燥感めいた高鳴りが僕を小刻みに震えさせる。

弾倉を開いて、五発分をテーブルへ撒いた。一発を残して弾倉を高速回転させてる。装填。なにをするのかと思えばおもむろに自らのこめかみへ銃口を当てた。ロシアンルーレットだ。命のやりとりうんぬんと言っておいて、負けが直接死に繋がるゲームをしようつてのか。

立神は糸目にして笑んでる。

一瞬の出来事だった。

かちかちかちかち。撃鉄が四度往復。

五度目、天井へ向けて爆音。

六度目をゆっくりこめかみに当てて再びトリガーを引いた。銃声と硝煙の余韻に混ざって響く撃鉄の空音。天井の破片が照明で輝きながら降りてくる。

細く息を吐いてリボルバーを傍らに置いた。奴はいつたいなにをしたんだ。五発目に実弾が込められてると分かったのか。

そんなわけない。動体視力がいくら優れてても、あのシャッフルは見える速度じゃなかった。いまこいつは死んでもおかしくなかったんだ。一人ロシアンルーレット。これはむしろ頭蓋に風穴が空く確率の方が遥かに高い。

必要なのは運だ、と彼が言う。

「どんなに切磋琢磨して知能を磨いても鍛えようがない。人間は確率でしばしば物事を判断するが」

いま正に僕が考えてることを見透かされた。黒々とした瞳がこつちを真っ直ぐに向いてる。心の中を探られてるようで気持ち良くない。確率で動くに決まってる、なにが悪い。考えなしに動く人間は落ちぶれる。

「その考え方は無意味、ナンセンス、真実はない。運、いわゆる運つてもんが個々には備わってる。原理原則は俺でさえ紐解けていないものの、確かにあるのは事実だ」



真つ向からの否定に身を退く。横たわるリボルバーが鈍く光った。まざまざと見せつけられたいま、非現実的な戯れ言へ反論したくてもできなかった。

「俺はこれまで成功確実と思われた仕事が失敗に終わる場を幾度も目の当たりにしてきた。いるんだ、運に見放された奴ってというのが。そういう人間はどんなに優れていても使えない、ギャンブル借金を苦に自殺する連中と同等でしかない」

「あなたと同じ方法で運試ししろってのか」  
「これはもう知らない」

無雑作に払い除けられてテーブルを落ち、よくワックスがけされた床を滑走するリボルバー。弾丸も五つ跳ね転がっていった。

「ロシアンルーレットでは俺が楽しめない。運に恵まれた人間かどうかは自分の肌で感じられる方法でなくてはな」

テーブルの脇を探る。引き出しになつてて、取り出したのは紙製の箱だった。こっちに放つてくる。馴染みのあるチェックの青い柄。ランプだ。ビニールの包装がついてる新品だった。

「俺の考案したランプゲームで見定めようと思う」

「今度はどんな仕掛けだよ。負けた途端、日本刀でも飛んでくるのか」

ああこの部屋か、と楽しみに周りを見渡す立神。

「全部オブジェだ、最後の舞台にはなかなか雰囲気もあっていいしな。ウルルンに喜んでもらおうと思つて飾つただけのこと。洒落た仕掛けは一切ない。さっきも言つた通り、命のリスク管理についてはもはや試さない。試すのは運だ。安心しただろう？」

緊張はほぐれなかった。しかし心の底でほつとしてる自分もいる。甘い言葉が罨かもしれないっていうのに、人間は単純だ。

「イヴ、ランプをシャッフルしてくれ。トリックがないか調べてくれても構わない」

唾を飲みこんで僕はウッドチェアへ腰掛けた。ビニールの封を切つて恐る恐る開ける。新品ランプに見せかけた小型爆弾で、見

抜けずに爆発させたら終わりっていう結末は呆気ない。でもこの道具がこれから使うつてんなら立神に触らせたくなかった。

拍子抜けする。特に仕掛けなし。麗葉にも確認してもらおう。一枚一枚、裏と表を注意深く疑っても異変はなかった。真つ新たなトランプだ。

「気が済んだら、その中で絵札だけを全部抜き、それぞれ混ぜるんだ」

どんなゲームなんだ。テーブルのマス目を使うようだけど想像もつかない。

トランプの山が大小で一つずつ。片方は各マークの1から10、合計四十枚とジョーカーが二枚。小さな方は絵札11から13の十枚だ。

「ジョーカーを含めた四十二枚は中央のマスに置く、“市場カード”しじょうとも呼ぼう。絵札の方は交互に配り、一人六枚を持つ。これはオープンにして構わない」

言われるままにする。なんだろう、空気が過去のゲームとは別物だ。立神とトランプを囲うなんて思ってもみなかった。どうしても気が緩んできってしまう。寝ちゃ駄目だ寝ちゃ駄目だと意識しつつ眠りに落ちてしまつたた寝気分と瓜二つだった。

「マークごとに絵札を整理し、相手に各何枚あるかを分かるようにする」

ここで初めて立神がトランプに触れた。縦に連なるマス目に対して右側に置いた。僕もならつて並べる。

「これは資金だ。マークをゲーム内では“銘柄”めいがらと呼ぶが、これが合えばどんな数字のカードでも購入できる」

ぼんやりとゲームの形が見えてきた。資金で有利な数字のカードを買って合計でどっちが勝ちかっていう内容だろう。

「株式売買をモチーフにしているのかね」  
横に立つ麗葉が口にした。

その通り、と指差す。

「一応『トランプ株』がゲーム名だ。極限にまで単純化して原形は名称ぐらいいしか残していないけどな」

立神が中央の市場カードとやらをめくる。ハートの5。

「口で説明するよりは練習としてやってみた方がいいだろう。ゲームは順番に市場カードをめくることで進行する。数字は株価を表している。買わない場合はボロ株置き場に裏向きで流し、買いだと思つたら資金カードを一枚消費して手元のマス目三つの好きな場に置く。このマス目は“ポートフォリオ”代わりだ」

資金である絵札を一枚掲げる立神。

「さつきも言った通り、銘柄の一致が購入の条件になる」

「めくつたカードがハートなら、資金もハートじゃないと買えないんだな」

「物分かりがいいな。こうしてハートを持っていれば消費資金置き場へ捨てることでハートの5を無事に手に入れられる寸法だ。この時点で市場カードは“銘柄カード”となる。以降のターンで更にハート銘柄を買った場合は数字が見えるように上へ重ね、合計が株価とされる」

既に同じ銘柄があるときは他のマスには置けないんだ。違う銘柄を買う場合は強制的に他のマスへ並べるんだろう。

妙だ。

「手元のマス、ポートフォリオって言ったっけか。それが三つしかないぞ。銘柄のマークは四つで、一つあぶれる計算じゃんか」

「銘柄は三種までしか買えないってことだ。マスが埋まっているときはポートフォリオからどれかが消えるまで無条件に流す」

「なくなることがあんのか」

「ジョーカーを使う。めくつたものがジョーカーだったとき、中央にある市場カードの一番近くに置いてある銘柄が暴落したと見なし、てボロ株置き場へ葬るんだ。ジョーカーも一緒にな」

そうすると、高い株価のカードは市場カードの山から離しておかなくちゃならないな。置く場所を誤ればせっかく望んだ銘柄を買え

てもジョーカーが無情にも暴落してしまう。いつ出るかは運。スリルたっぷりってわけだ。

「ジョーカーで空いたポर्टフォリオには改めてどの銘柄を置いてもいい。資金がなくなればやることはなくなる。資金が余っていて市場がなくなればゲームは終わりだ。先に二人の資金がなくなったら同様にそこで終了する。銘柄に関係なく合計の株価が大きい方が勝ち。簡単だろうか？」

市場をめくるよう促される。スペードの8だ。山には1から10のカードしか入っていないんだ、高い株価に部類する。同銘柄の資金もあった。買った。

ジョーカーを警戒して市場から一番離れたマスに置いた。これで次ターンにジョーカーが出たらどっちにしる暴落するが、それは防ぎようがない。

立神がスペードの6を引いた。資金カードを捨て、銘柄をポर्टフォリオ中央へ並べる。

僕の番だ。ダイヤの2。ゴミ株価だった。ボロ株置き場へ流す。練習なのもあってゲームは軽快に進んだ。四十二枚の市場カードを使い切るのに時間はかからない。市場が残り僅かで僕と立神のポर्टフォリオはもう埋まっていた。株価合計は27対26で僕の劣勢。立神のターン。

「ああ、そうだ。ちなみに自分のターンで市場をめくる前でなら、資金はいつでも好きな銘柄の株価“1”として扱える。ただしポर्टフォリオになにかしら銘柄があるときに限る。既に所有している銘柄へ資金カードを乗せて株価をプラス1。これは市場をめくる前に宣言し、めくらずにターンは終了になる」

てことは、市場が一枚余分に残ってターン数が延びる。有効利用の方法はいまいち思い浮かばないが、先々の展開でキーになりそうだった。

資金の銘柄化、と彼が早速宣言する。自らの一番手前に並べたダイヤの10へ資金クローバーを重ねた。ダイヤ銘柄の株価が11に

なる。総合では28。差は2だった。追いつける範囲だ。市場をめくる。

ハートの1。ふざけてる。資金は二枚あるが、ポートフォリオにはハートがなかった。

どちらにしる1を買うんじやもつたいない。流した。

立神がめくり、微笑した。市場の山頂でジョーカーが踊ってる。暴落を意味してた。計算しなくとも逆転が分かる。市場に近い銘柄はハートの5と6の組み合わせで最も成長してた銘柄だった。ボロ株行きになって合計は17へ成り下がる。

大差で優勢になった。ジョーカー様様だ。相手は資金一枚、こっちは二枚で9の差。もはや勝ったも同じだ。

僕のターン。市場へ触れかけ、やめる。まだジョーカーが市場に入ってる。連続で出るってことはないと思うけど念のため銘柄化を宣言しておいた。ハート資金をポートフォリオのダイヤ銘柄につける。市場を引かずに済むし、差は10に開いた。市場に10より高いカードはないんだから次のターンでも銘柄化を宣言したら勝ちだ。立神は構わずに山をめくった。スペードの10だ。当然ながら買。ジョーカーのあとに10を引くとは、なんて野郎だ。圧倒的に離れたと思つてたのに差がゼロになった。

「俺のトレードは終了だ。負けた、か」

僕は銘柄化を宣言する。プラス1で27対28。

紙一重の勝ちだった。

「いまはたまたま同時にトレードが終わったが、片方が早く終わるケースがあるだろう。そのときは相手も終わるまで自ターンでは市場をめくってもらう。株価の銘柄化を宣言するとき以外は必ずめくるんだ」

「高い株価で終わらせても相手がトレードを続けてれば、こっちがジョーカー引いちまって暴落するかもしれないんだな」

早く終わらせない方がいいんだらうか。いや、長引かせても同じだ。市場の残り数は決まってるんだから、余計にジョーカーを引き

やすくなる。相手のペースを読んで、それとの兼ね合いでやっているのがいい。

「これがランプ株だ。質問はあるか？」

口元に手をやって黙ってテーブル上を見てた麗葉がボロ株置き場からジョーカーを拾った。

「ポトフォリオに銘柄が一切ない状態でこれを引いたらどうなるのだ、流すのかね」

「いい質問だ、それを忘れていたな。流しても構わないが、そのときだけは例外として資金の数字が違う意味を持つ。ハートのキングなら株価13としてポトフォリオに置けるんだ」

ふむ、と彼女は肯いた。

立神が、他には、と問う。ルール自体はそう難しくない。高い株価を求めて買っていけばいいんだ。攻略法を訊いたって教えてはくれないだろう。

「まあ他になにか重要な言い忘れがあればやり直してもいい。そろそろ始めるとしよう、楽しい楽しいランプゲームを」

カードを裏向きに掻き集めて僕が混ぜる。絵札も別にシャッフルした。市場カードを規定の位置へ置き、絵札を配る。

「ああ、それと、運の要素が強いため、ライフポイントを設けようと思う。一度の負けでさようならでは盛り上がり欠けるからな。

イヴが二点、ウルルンが二点。イヴのライフがなくなったらウルルンと交代。二人合わせて四点だ」

「あんたも四点なのか？ こっちはいま知ったんだ、ハンデぐらいつけてくれよ」

「もちろん、そのつもりだ。俺はゲーム制作者として三点で始めよう。実のところ、つい三日前に考えたゲームでトスミと試しに五、六回やってみただけだが」

こいつの場合はそれが大きいに決まってる。脳内でプレイ回数の何倍もパターンを演算処理してそうだ。

「引き分けはどうすんだ」

「互いにライフ一点を支払う」

なるほど、それなら納得いく。せめて僕が二回とも引き分ければ立神が一点、麗葉二点の情勢でゲーム開始できる。麗葉も引き分ければ勝利だ。運に左右されるってのがしっくりこなかったけど大丈夫だ、これなら切り抜けられる。

先行と後攻の選択権は僕に与えられた。

ハンデのつもりか、はたまたどっちでも勝つ自信があるのか。後者はないな。立神自身も言ってた、重要なのは運だ。練習では勝てたし、ジョーカーが出るかどうかは予測不可だ。立場は同等。買うべき銘柄を買うのが最善の手段になる。

相手の出方を知りたくて後攻を選んだ。資金はクローバーが一枚、スペードが一枚、ダイヤが二枚、ハートが二枚。それぞれのマークは三枚ずつだから、自然と立神の持ちカードも決まる。

一ターン目、立神はダイヤの9を買って後列に置く。先攻を選んでは高めだったんだ。いきなりの選択ミスにシヨックを受ける。諦めるしかない。たった一枚で一喜一憂するな、ゲームはスタートしたばかりだ。

市場カードをめくる。ついガッツポーズをしてしまった。スペードの9が出たんだ。ちょうどスペード資金が一枚ある。支払いを済ませて中列にしておいた。株価を成長させられないからだ。二枚あったら後列にしただろう。

二ターン目、クローバーの6を中列に並べる立神。続いて僕も引く。ダイヤの6。株価としては半ばあたりの数だ。買えば同点になる、安易に手を出していいものかどうか一考する手だ。僕は迷わなかった。前列へ並べる。15対15になった。

「いいのか、そんな低い株価で買って。焦って買ってもいいことはないぞ」

「下手な揺さぶりはやめろよ、あんだだって6は買ってるじゃないか」

「お前をはめるための罠かもしれないぞ」

「かもな。でも、理由はそれだけじゃないぜ。1から10までの平均は5.5。つまり6以上なら買いが定石なんだろ。6より上となると、たったの四枚。しかもダイヤの9はあんたに買われ、結果三枚しかない。ジョーカー含めた残り三十八枚のうち三枚に賭けるか、このダイヤの6を買うか、どっちを選ぶかは明白ってわけだ」  
なるほど一理あるな、と立神は涼しげな表情をしてる。

惑わされるな。ずばっと言い当てられて動揺するような男じゃない。どんなに小手先で駆け引きしたって結局は運だ。プレイヤーができるのは6以上を買って、ジョーカーを引かないよう祈るのみ。

三、四ターン目で立神がスペードの8とクローバーの10を手にして合計33になった。僕は三ターン目でダイヤの7を仕込めたものの、四ターン目は買えずに流す。計22。焦る必要はない、相手がたまたま順調に買えただけだ。代償に資金も減ってスペードとハートの一枚ずつしかない。こっちはクローバー一枚にハートが二枚だ。二人とも銘柄化しないで進行するとターンは二十一で打ち止めになる。まだまだ市場カードは残ってた。

神様が僕に味方してくれる。五ターン目で立神が引いたのはジョーカーだ。前列のスペードの8が暴落して計25。たった3の差になる。資金が一枚多い分、僕が有利になった。はずだった。

相手にジョーカーを引かせたので運を使い果たしてしまつたらしい。永遠と6以上の銘柄を引き当てられなくなってしまった。めくってもめくっても低めか資金と一致しないカードだ。立神は空いたポर्टフォリオを早々にハートの9で埋めてた。

十ターン目になっても恵まれず、愕然とするしかない。まさかと思いつつ、ラストまでこんな調子で行ってしまう気がした。34対22じゃ話にならない。

スピード資金が一枚となった相手も手が入りにくくなってる。状況が動かずに訪れた十三ターン目。彼がめくつたのは不運なジョーカーだ。歓喜せざるを得ない。ハートの9が消えて25に逆戻りだ。ふふ、と立神は鼻から息を出し、



「参ったな、資金一枚で粘れるか」

「あんたに高めの株価が入ってると思ったけど、二回も暴落するよ  
うじゃツキがあったんじゃないんだな。勝たせてもらうぜ」

「資金が残り三枚で市場が十五枚。余裕になるのも分かるが、気を  
緩めたお前にツキは回ってこない。運とはそういうものだ」

はいはい、そうですか。聞く耳は持たない。たつたを買いえば  
同点で、4以上なら逆転。十五枚のうち、自分が引けるのは八枚。  
そんなに引ければ、中には欲するカードが眠ってる。ジョーカーも  
出尽くしてくれたし、ゆっくり待てばいい。

余裕の気分で市場を掴む。赤い数字が見えた。ハートは買える。  
唯一の株価を下げるジョーカーがないなら、ハートの3が出た時点  
で詰む。

ダイヤ。

がつくし。

続けて立神が引いた。

ハートの4。にやりとするのを見逃さない。僕が望むカードを奴  
が引いた。ここには本当になにもないんだろうか。偶然じゃないな  
にかが。いいや、あるわけない。こっちは圧倒的に有利なんだ、た  
つた一枚で決まる。

出ない。

出ない出ない出ない。

しかも立神の引く銘柄はことごとく喉から手が出るほど欲しいも  
のだった。クローバーの8や7、ハートの6。一枚の違いで天国と  
地獄。このゲーム、資金が一枚になってなかなか買えなくなっても  
終わりじゃないんだ。自ら引くのがツキなら、相手に引かせないの  
もツキ。奴には前半からのツキがあるってことになる。

十八ターン目の自分の番。市場はあと七枚ある計算だ。端っここ  
ら少しずつめくっていく。赤い色が反射して下のカードに映ってる。  
ハートよ、来い。

ダイヤの10。

ボロ株置き場へ叩きつける。

「おいおい、そう荒れるな。たかがゲームではないか。気楽にめくれればいい」

こうやって、とあっさり翻した。

ハートの7。僕が渴望するカード。

「おや、つくづく流れは俺にあるようだな」

残り五枚の市場。

認めなくちゃならない、自分自身の運のなさを。非科学的で納得するのに抵抗があるけど、現実として起こってしまった。市場をめぐるチャンスはあと三回だ。資金が三枚あったってしょうがない、ほぼ必ずどれかしら余る。

「銘柄化だ」

1でも稼いでおけば多少は楽になる。合計23にしておけば3以上のカードで有利でいられる。希望の買い水準を一段下げられるんだ。問題はハートとクローバー、どっちを銘柄化するかだった。

考えるまでもない。ハート資金を中列にあるスペードの9へつけた。ハートは二枚ある、一枚しかないクローバーを銘柄化したんじや買える確率も減るってもんだ。我ながら、なかなか冷静な対処と言える。

「保守に回ると運はますます逃げていくぞ」

立神が取ったダイヤの1をさっさと裏にして流した。どっちにする買えないカードだ。本来、自分が引くはずだった市場。銘柄化は正解だった。

市場に手をかける。

めくれない。

もし引けなかったら市場は三枚で、立神が引き、僕が引き、ラストに立神が引いてゲームエンド。自分のターンは残り一回だ、資金が余る。ここは再び銘柄化するのが得策かもしれない。株価プラス1にすれば市場を一枚引かない分、1ターン延びる。

考えるべきは、資金二枚持って一回めくると、立神との差を1

にした状態で二回引くのはどっちがいいかだ。資金マークを二種で手広く構え、一回引けるのは前者。資金マークを一種にして、チャンスが二回になるのは後者。

一見どっちもどちな条件だ。しかし後者の場合、最悪は二枚とも銘柄化して25、同点へ持つていける。一回引いたあとに自信がなきゃ二回目は市場を引かずに方向転換できるんだ。

反対に前者は買えても買えなくても資金が一枚残る。余分に持つてる旨味がない。最悪は買えないときだ。チャンスは一回ゆえ、もはや銘柄化で同点にできるかどうかだ。

敵は資金を一枚残してる。僕は分かってしまった。奴にとっては1や2の差は眼中にないんだ。大きい一発を当ててしまえば、みみっちい勝負は吹っ飛ぶと知ってる。理解できなくはない、方針の違いつてやつだ。

僕は僕の最善を尽くす。

彼の言葉に揺れかけてた心が静寂する。

保守だって？ これは戦略って言うんだ。

銘柄化を宣言して中列のスペードへ重ねる。前列にダイヤの8と6、中列にスペードの9と資金銘柄化によるプラス1が二枚、計24。資金はクローバーとハートがあつたが、十五ターン目あたりで立神はクローバーの高めを連続でめくつてたし、既に買い銘柄にも6と10が出てる。ハートの方が残ってる印象があるんだ。クローバーの銘柄化でいい。

希望の一枚、ハート資金を横目で確かめる。

案の定、立神は余った資金を銘柄化しないで市場の一枚を裏返した。ダイヤの3。精神的に優しいカードだった。クローバーが出た日には悶えてしまえる。なんといつても銘柄化してなきゃ絶望してゲームオーバーだ、判断は正しかった。

運は来てるはずだ。僅か三枚の市場、チャンスの1回目だ。拳をぎゅっと握ってトランプの背に願う。じっと見ると赤いハートが透けてくるようだった。

思い切って引つ繰り返す。できればこのターンで引き当てたい。いや、引ける。ハートの2以上ならほぼ勝ちだ。

息を吸ったまま吐き出せなくなった。

黒。それも、クローバーの5だ。

「嘘だろ」

勝ってた、ハートの方を銘柄化してれば勝ってたんだ。土壇場での裏目。足元の床が泥沼になってずぶずぶ沈んでいける。

立神が破顔してた。易々と市場をめぐって流したのはダイヤの5だ。次に僕が引いたらゲームセットで、残り一枚の資金を銘柄化できなくなるってのに、そうしようとする動作や逡巡は一切なかった。別に構わないってことだ。

市場が一枚で25対24。

「ここに来て、自分が不利に立っているのは分かるな？ ラスーで買える銘柄が来ないと負け。銘柄化を選択したところで俺も銘柄化すれば26対25でイヴの負けは決定する」

残酷な現実を目の当たりにする。立神が銘柄化しないで終わると思いきんでたのと、二回のチャンスに気を取られて先を読めてなかった。最後の一枚に賭けるしかないってのか。ライフを一つ賭けるには確率が低すぎる。

「が、一つここで予告しておこう。俺は例えお前がどちらを選択しても銘柄化はしない」

「願ってもないことだけど、信じられつかよ。あんたになんの得があるんだ」

「試すのが本来の目的だからな、遠慮しないでいい」

「もしあんたが銘柄化したらどうする？」

「ライフに関係なく負けでいい」

きっぱりとした物言いだった。僕は麗葉へ視線をやる。彼女が肯いた。立神のプライドからして嘘はない。自ら提案した規則を曲げるのは死ぬほど醜いと思ってるんだ。さっきのはなした、と銃で脅すような幼稚な奴じゃないのは知ってる。そんな男だったら初めか

ら夢幻倶楽部へ入れるのを強制するか、殺しにくる。

あるとすれば、他の目論見だ。ただし単純なルール内では考えにくかった。いま僕が見えてるもの、それが全てだろう。

「さあイヴ、勝負しろ。銘柄化したってライフを二人とも削るだけだぞ。つまらないだろう、そんな終わり方は」

それはそうだ、また裏目になる場合もある。ハートはなにかしら残ってる感じがしてるんだ。1はなんとなく自分がめくったのを覚えてる。9は立神が買い、ジョーカーで暴落させた。6と7は数ターン前に立神が引いてた。

運動もしてないのに呼吸が乱れてくる。一秒ごとに体力が抜けていく。錯覚じゃなく、実感としてあった。そりゃ心臓ばくばくさせてるんだ、疲労が溜まるのが普通だった。

「長考するな、こういうのは直感が大事なんだ。理論を組み立てる以前に無意識下で答えが出てることも多い。めくれ、イヴ」

カードの背を睨みつける。予知は出現しない。

僕なりに考察して、命がかかってない事態じゃ発動しないと分かった。たぶん本能が危険だと感じてないのが原因だ。役に立たない力だった。いつそのこと負けたら殺せとでも言うか。そんな曖昧なものに命は賭けられない。能力が働かなかつたら無駄死にだ。

息を吸い、吐く。

待ってたって精神力が保たない。一回目なんだ、根を詰めすぎなくたっていい。

僕は腕を移動させる。

「銘柄化。合計25」

資金をポートフォリオへ置いた。肩の荷が何倍も軽くなる。

「その選択は正しいのか？ いまならまだ市場をめくるのを許してやるぞ」

「いいんだ、一人でライフ消費するより確実な道連れの方がいい。ハンドの分、俺らの方に分があるだろ」

やれやれ、と弛緩する立神。

「お前はもつと見所のある奴だと思ったんだが。苦手か、運のやりとりは」

予告通りに銘柄化はしないで最後の一枚が反転された。

目を疑わずにはいられなかった。

赤だ、ハートで、数字は8。

裏目。何回も連続しての裏目。

勝ってた。ライフ無傷で次の戦いに堂々と臨めてた。床という名の泥にスニーカーの裏がめりこんでいく。足首を呑みこまれて体が傾いた。

「二回も暴落させた俺に運が流れていたと思うか？ あるとき、お前の発言は実能的を得ていた、流れはそちらへ向き始めていたんだ。それをいま手放した」

するとどういうことになるだろうな、と立神はカードを掻き集めて放心気味になる僕へ押しつける。

力なく混ぜ、整えた。負けるよりダメージが大きかった。だんとうで勝利を掴めてたのにみすみす逃したんだ。自分で相手にはツキがないだのと言っておいて、この様。言動と矛盾してしまってる、なにをやってるんだか分からない意味不明さだ。最後の一枚ぐらいはダメ元で引くべきだった。

はっとする。

ハートの8を引いてたら計32だ。市場はなくなるから、立神は資金をあぶれさせて25で終えることになる。あるとき、僕は弱気になってた。どう動いたって負けだと認識してしまったからだ。そこへ突如として一方的に美味しい予告がされた。同点か、最後の一枚に賭けるかの二択。

立神は消費したカードを覚えてハートの8が残っていると分かってたんだ。そう考えるとなんであんなことを言い出したのかすつきりする。僕に引かれると負けが確定するからだ。奴からしてみれば自然と銘柄化へ導く必要があった。

考えてみると不自由な二択だ。弱気になってちゃ最後の一枚にな

んで希望を託せないんだ。誰だつて安全な同点へなびく。自分で選んだようできて、知らずに選ばされてた。

よって、同点。もともと立神一人がライフを削るゲームなのに、二人で削った。僕が道連れにしたようできて、実際は道連れにされてたんだ。

いまごろ気づいたって反抗のしようがない。向こうはなにもルールを破ってないんだ。

僕は悔しさを喉の奥に押しこんでカードをシャッフルした。

トランプ株(1)(後書き)

次話更新予定は来週頃です。

Next:「トランプ株(2)」



## トランプ株(2) (前書き)

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。 よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価/感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=P47878715

## トランプ株(2)

二ゲーム目。立神の資金はクローバーとスペード、ダイヤの三種で二枚ずつだった。僕の手元にあるのはハートが三枚に他が一枚ずつ。四種だと買いやすく強みになる。あぶれる一種はジョーカーが出たときの予備と銘柄化を兼ねる。まずまずの有利な配カードだろう。

先攻を立神に譲ってゲームスタート。クローバーの6買いで後列に置かれる。僕がめくったのもクローバーだった。対戦者を上回る9だ。前列には置きたくない。後列へ持つてくる。

二、三ターン目でダイヤの6とスペードの7を仕入れた立神に対し、僕はハートの4を流したあとスペードの10を招く。もちろん買った。クローバーの9よりこつちを後列にしたくなる。位置の変更はできない、中列へ並べる。

大層な文句を垂れてたのに相手の手は地味だった。資金を三枚消費して19。こつちは二枚で同等の株価だ。確かに一ゲームの中に流れはあるかもしれない。カードはどんどん使われていくため、残ったものが自然と波を作るんだ。

奴が誤解してるのは、ゲーム毎にシャッフルされる点。丸ごとリセットされるんだ。僕が流れを手放したとして、今ゲームには影響されない。この二ゲーム目は再び最高の運が巡ってきてる。弱気になるな、勝ち目はたつぷりある。

それを確信する局面が来た。

六ターン目。立神のポートフォリオは前列からスペードの7、ダイヤの6と8、クローバーの6。対する僕が合計19のまま。

市場がめくられた。出たのはジョーカーだ。スペードの7が暴落する。立神は資金二枚で、合計20へ陥った。完全にツキが降臨してる。僕には後光が射してそつだ。

参つたか、と見るとポーカーフェイスで手元のカードを撫でてた。

勝てばライフを一つに減らせる。次に同点にでもすれば麗葉の番なくして勝ち、問答無用に解放だ。

いける。

そろそろなにか欲しかった。奴の片眉を歪ませるカードを。

ダイヤの10。

感情を押し殺してはいられなかった、嬉しさがどうしたって溢れてくる。買えば差が更に広がる。ジョーカーを警戒しなくちゃいけないけど、市場にはたったの一枚しかない。ツキにツいてる僕が引くとは思えなかった。

調子に乗るな。脳内の頑固オヤジがちゃぶ台を引つ繰り返す。思考が自分寄りに過熱してしまってた。資金はあるが、冷静になると買えないカードだ。

「流し。ターン終了だ」

「ほう、せっかくのチャンス流すか。賢いとは言えないな」

その手には乗らない。

こう考えたらどうだろうか。ダイヤの10は魅力的だ、市場が少ない終盤の展開でなら間違いなく買う。しかし買ってしまおうとポトフオリオは埋まってハート資金が三枚も余る。三枚を銘柄化する。と32。相手の資金が二枚しかないとはいえ、届く距離にはある。そして、10が単体最高の株価でも、それはハート三枚で平均4以上のやや低めを買えば余裕で上回るんだ。

立神はゲーム制作者だ、理屈を分かっている。6以上であっても手癖で買ってしまつのはミス。あたかも全部が運頼みみたいに言っているのは嘘だ。理詰めも必要なのはやってれば分かる。

七ターン目に立神はクローバーの7を後列に重ねた。九ターン目にはスペードの8を前列に置いて資金打ち止めになる。合計で35。もはやもがいたってそれより株価は上昇しない。じっくり追い上げるとしよう。

同ターン、ついにハートを当てる。6だ、空いた前列へ並べた。25になって、差は10。次ターンには7を引き寄せた。文句なし

の買いだ。

3以上が来ればあぶれのダイヤ資金を銘柄化してゲームエンド。それだけじゃない。立神がジョーカーを引けばスペードの8が消えて計27。ジョーカーがなくなつて株価が変動しなくなり、僕の勝ちになる。

絶対的な有利だつた。

立神の番だ。ジョーカーが出るのを祈る。引つ繰り返すときに黒っぽいのが見えた。期待を吹いて膨らんだ風船がしぼんでいく。スペードの8だつた。

まあいい。

めくつた市場カードはハートの2。おしい、もうちょっと高ければ即買いだつた。どうするべきか。2を加えると計34。ダイヤ資金の銘柄化で35。百パーセント引き分けられる。

立神のライフが一、麗葉が二。麗葉も同点に持ちこめば生還が約束される。

そんなのは駄目だ。俺よりずっと上手くやるとしても運の比率が大きいこのゲーム、どう動くかは分からない。麗葉が一度でも負ければ一対一。追いつめられる状況になる。

なにより、勝てるゲームを捨ててどうする。前ゲームで無難な選択して勝ちを逃したのはどこのどいつだ。過ちを繰り返す人間ほど愚かなもんはない。

ハートの2も当然流した。

十二ターン目、ハートの3を立神が引いた。

すぐ下に一つ高めの株価があるとは。だけど並びがいい感じだった。望むものを引くのは近いとみえる。僕に有利なように偏ってるんだ。

違つな、と彼が言った。

「見当違いも甚だしい」

「なにがだよ」

「運が来るとでも思ってるんだろっ」

こいつは心を読めるんだろうか。

「逆だ。このカードを引けなかったのは運が離れてる証だと言える」  
「なに言われようと俺の有利は変わらないぜ。ハートはまだ何枚も市場に残ってる。俺の記憶が合ってるなら、一枚であんたに勝てる株価だ。例えば、この」

十二ターン目の自分の市場を気取って指に挟み、はらりと下ろした。

スピードの9。

「買えもしないクズカードだ。やっぱりドラマみたいには格好つかない。」

「疑うなら寝ぼけた一般人の大好きな理屈で説明してやろう。俺の番で、いま十三ターン目になる。市場は何枚残ってる？」

「十八枚だろ」

「ご名答よく分かったな、と茶化してくる。馬鹿にすんなど言いたい、僕は勝つ気でいるんだ。制作者よりトランプ株の理解度が上回ってる自信があった、なにを訊かれたって応えられる。」

「そのうちハートの枚数はいくつだ」

「はい？ いきなり反則な質問だった。」

「んなの分かるわけないだろ」

「四枚だ。5、8、9、10の四枚」

まさか覚えてるってのか。他のカードならまだ分かる、立神はそれぐらいカウントできるだろう。現に一ゲーム目の最後の一枚を記憶してる感じがした。

しかしハート資金は僕が三枚全部持つてる、わざわざ押さえなくてもいいカードだ。十二ターンで場に出たのは二十四枚。四種のマークと1から10までの数字、単純だからこそ覚えるのは至難の業だ。どれが出て、どれが出てないかなんて分かるわけない。

分かるわけがない？

「そうか、分からないんだ。今度はそうやってハメるつもりだろ。俺が記憶してないのをいいことに適当な枚数を言って弱気にさせる

作戦だな」

「じゃあ仮定としよう。十八分の四の確率でハートを引ける。そして」

市場がめくられる。クローバーの5。

「これで一七分の四。約四分の一の確率になる。逆に言えば、四分の三はボロ株。そのうち一枚がジョーカーだ。自信満々でいられるか？」

弧を描いた唇の隙間から白い歯が光った。言っていることが真実だとしたら無事にハートを買えない方が多い。

まやかした。二人で交互に引いてるんだ、どっちは絶対ハートに当たる。四枚が四枚とも一方のもとへは来ない。四枚もあれば足りる。

「ああ、自信満々だね。第一、初めに確率じゃ説明できないもんがあるって言ったのはあんただろ」

「確率を全部否定したわけではない。ある程度までは必要なものだ。千粒の米粒の中に一粒だけウジ虫が混ざっていたとき、ウジ虫を摘まみはしないだろう？ 確率も存在してはいるんだ」

稀にウジ虫を摘まむ者もいるがな、と片肘をついてこめかみを押さえてる。市場カードの山が怪しくオーラを纏ってるみたいだ。さつきとなにも変わらないのに、引きたくない気持ちが滲み出てくる。理屈とか理論とか関係ない、立神の発する無言のプレッシャーが場を呑んでる。猛烈にゲームを降りてしまいたくなった。カードの裏表紙に指が吸いついて離れないんだ。指が重いのか、カードが重いのか、とにかく一枚を摘まむのにも苦労した。

鼻の尖ったピエロが玉乗りとお手玉をしてる。

「出やがった」

ジョーカー。嫌な予感はしてたんだ。だからってこんな場面での銘柄化は余計にわけが分からない。引くしかなかった。

てことは、どうなる。前列が暴落する。前列には、ハートの6と7があった。13も株価が下がってしまった。合計が19になる。

急激な変動だった。なんで僕はこんな大きい銘柄を前列に置いてるんだ。

いや、それはしょうがない。市場をめぐった順番のせいだ。初めにクローバーの9、これは中列か後列に置くのが普通で、次にスペードの10だった。これを中列に置いたんだ。あの時点ではそうするしかない。判断は狂ってない。

それからハートの6が来て、続いて7。合計13。

ジョーカー。暴落。消失の必然。

残り19。資金は二枚ある。立神との差が16。ハターンもあるなら狙える。悪材料も出尽くしでのんびり集めればいい。むしろこれは望ましい展開だ。相手の株価を指標に買える。

いける、いける。

十四ターン目、立神は微動だにしなかった。思考してるにはおかしい。資金のない立神のできる行動は一つ。

「焦らしプレイは好みじゃないんだ、さっさとしてくれ」

「自分の資金をよく見ろ」

なんのことだ？

言われるままにする。見なくたって分かる、ハートとダイヤが一枚ずつだ、異変はない。

彼はすつと息を吸った。

「ジョーカーがなくなつたせいで片方はあぶれて銘柄化するしかない。もう片方では10を買ったとして、合計は30。俺の35には届かない」

詰みだ。

静かで無情な一言が胸に刺さる。なんで、こんな結果になるんだ。数ターン前まで圧倒してたのに、変だ。最低でも引き分けの計算だった。小学生とバトンタッチしたって勝ってた。

何度見てもカードの数字は変わらない。一ゲーム目と違って駆け引きもなかった。純粹に僕が選んで、こうなつたんだ。

「麗葉も見てただろ、俺、勝ってたよな。ハートの3以上が出るだ

けで良かったんだ、楽勝だった。なんか間違ってるか？」

「合ってるさ。ただ」

肩に小さく温かな手が乗った。

「君には運がなかったのだ」

「そんなの……」

そんなのありかよっ！

テーブルを殴りつける。立った拍子にウッドチェアが倒れた。

運のなさ。そうなんだ、決して運は良くない。中学時代の事故からずっと最悪だった。努力したってどこまでできるもんじゃないんだ。みんなそうだ、夢を追う大部分が志し半ばに挫折する。究極に努力をしたって辿り着けない人間がいる。努力しないで上手く立ち振る舞える人間もいる。

運はいくらだって存在してる。

「悔しいか、イヴ」

「負けは負けだ、おとなしく代わる」

「再チャレンジの権利がないでもないぞ」

麗葉と交代しようとする僕にそんなことを言い出した。

引き出しを探って出したのはごついナイフだ。木の枝ぐらいは難なく切り落とせる威圧感があった。

テーブルに突き立て、

「薬指を切断しろ。ライフ一個分にしてやるっ」

恐怖の提案にリアクションができなかった。薬指とライフの交換予想だにしてない展開だ。

麗葉が負ければ自分も終わる。立神は自身を超える者は手放すと上戸さんが言ってた。能力が高くとも、思想は人それぞれ違う。自分の思想を汚されては意味がないんだ。

彼女の話しぶりからすると立神を超えて反抗をしなければ生かされる。有能は有能と認めての判断なんだろう。奴にとって無能こそが悪なんだ。

ここを無事に出て平穏な日々を暮らすには勝つ以外にない。負け



ると、最後のステージにまで進んだ僕は少なくとも夢幻倶楽部とやらの下っ端ぐらいには任命されるだろう。どちらがいいか？ そんなもん決まってる。

垂直に立った刃に沿って薬指をセットした。冷たい感触が皮膚へぶつかる。犯罪組織なんかに入ってたまるか。

柄に力を入れる。

横から衝撃が突進してきた。よろめいてこけそうになる。麗葉だ。僕の立つた位置で立神へ顔を向けてる。

「君の目的は私を屈服させて夢幻倶楽部へ招くこと、それと伊吹の真価を問うこと。違うないね？」

「それがどうかしたか、ウルルン」

「私は正直そんなものに入るつもりはない。勝とうが負けようが拒否する。命を狙われようと、だ。ただし例外として、一つ条件を呑めば考えてあげてもいい」

「なんだ、と訊き返す。」

「ウッドチェアを元に戻した彼女が座った。」

「勝負の如何にせよ、伊吹を狙うのは今後一切やめるのだ」

「条件を呑まなければ一生ウルルンが我々側につくことはない、か肯き。」

「イヴにはなにかあると読んでいるんだが、いいだろう。負けた場合は問答無用で俺の右腕になってもらうぞ」

「それでいい、と応える麗葉。僕を置いて迅速に話は終結してしまった。納得のいかない話だった。」

「なに勝手に決めてんだよ。俺はやるぜ、指一本なくなったって死にはしないし」

「お返しさ」

「彼女が僕を見上げた。」

「二トログリセリンをぶちまける私の作戦を誰かさんが潰したのだ。借りは返させてもらおう」

「意思のはっきりした色が瞳を淀みなく塗ってる。初めのステージ

のことを根に持つてるとは暗い奴だ。きつとなに言っただって聞かない。

頬を掻く。

「しょうがねーなー。分かったよ、立神を倒すのは譲る。ただ・  
し」

頭を撫でてやり、絶対勝てよ、と言った。即座に鬱陶しそうに振り払われる。

麗葉がカードを集めてシャッフルする。

「心配をしないでくれたまえ、君の運は受け継ぐ」

受け継ぐ？ なにを受け継ぐって？

僕の運？ 一番やつちやいけないことだろ、それは。最悪の流れなんだ、負けるつもりか。

資金を配る彼女の横顔からはなににも読み取れなかった。

トランプ株(2) (後書き)

次話更新予定は来週頃です。

Next: 「熱愛ジョーカー」

## 熱愛ジョーカー（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=P47878715

## 熱愛ジョーカー

僕の出番は終わりだ、応援するのが精一杯。立神の背後に忍び寄って剣で斬りかかろうとしたって、どうせ返り討ちにされる。

疑問もある。いくら「刃中の羽虫」のラストに登場しても凶器になる物を身近に飾るのは奇怪だ。堂々としすぎて近づきたくなくなる。

変に奔走するより黙って成り行きを見物するのが一番だった。いざとなったら最後の手段にすればいい。状況はそう悲観したもんじゃなかった。ライフ数は同じ。彼女だって僕のプレイ内容からあらゆるシミュレーションをしてるだろう。

麗葉が先攻を選んだ。

資金カードの並びを立神は丁寧に整える。

「天才少女のお手並み拝見といこうか」

「私はそんなものではないよ」

「自分が“作られた者”なのを気にしているのか」

「血筋の配合で天才を誕生させるなど、夢見がちな人間の幻想さ」

「相応の人間にはなる。夢や幻を現実にするのが夢幻倶楽部の意志、人間の想像し得る事柄は具現化できる。“夢幻”を“夢現”に、可能性は“無限”だ」

立神の陶醉した物言いをちらりとも見せず市場をめくる。

「夢から目を覚ますのだ」

クローバーの6だ。資金は二人とも四種ある。麗葉はクローバー

資金を二枚持ってた。買っても損はない。

「人間は、小さい」

買わなかった。ボロ株置き場へ放る。

「砂粒なのだ。頑張って石コロさ」

彼女の例えに立神がふっとほころび、市場を手にする。

「ならば俺は無数の石コロとなって地球を覆おう」

スペードの9をポルトフォリオの中列へ置く。

麗葉にはスペードの7が出た。捨てる。高めを狙う作戦だろうか。対する相手はダイヤの10買いで羨ましいほど順調だ。こんな調子だと6や7を買わないでおくのは分からなくもない。せめて8は欲しい。

三ターン目。グッドタイミング、ハートの8が市場の頭に露わになった。これは買うしかない。麗葉がカードを掴まむ。

移動させた先はポルトフォリオじゃなかった。ボロ株行き、正気とは思えない。敵の買った二枚と比べると8は見劣りするけど平均よりも上だ、僕なら買う。

待ったをかける前に立神によりハートの9がめくられた。止めたって無駄だっただろう。負けた自分が横槍を入れたって説得力はない。

流れは完全に敵にあった。四ターン目にはハートの10を前列の9に重ねた。四枚で38という脅威の株価だ。六ターン目にもダイヤの8を買い、46。平均取得額が9だ、僕とやったときよりずっと水準が高くなってる。早くもあぶれたクローバー資金が、ただ一枚となった。

こうなつちや市場に潜んだ9か10を買い集めるしかない。流れからしてそんな高めが来る気配はなかった。低めをせこせこ買ってジョーカーに怯える以外にない。

やっと麗葉が動いたのは次ターンだった。市場を引く。僕は反射的に顔を引き攣らしてしまった。やっぱり来たか、と思ったんだ。

「ポルトフォリオに銘柄がないとき、これは好きな資金カードの数字をそのままに銘柄化できる、だったね」

スペード資金である13へ出たジョーカーを携えて後列に置いた。そうか、これを待ってたんだ。

9や10がなくても平均取得額は上げられる。ピエロ野郎に酷い目に遭わされた僕にはない発想だった。

なるほど、と立神が腕を組んで彼女のポルトフォリオを眺める。

「なにか仕掛けてくるとは思ったが、そう来るとはな。しかし6以上のカードを三枚も流したのは失敗ではないか」

「暴落してしまえば資金一枚以上の損失なのだよ」

「前半でジョーカーを当てるとは限らないだろう」

「そのときはそのときさ。それに、“来る”と思っていた」

ゲーム開始前の言葉を思い出す。

運を受け継ぐ。

彼女は僕に言った。こういうことだったんだ。でたためにジョーカーを狙ったって無謀でしかない。加えて、立神のハイペースな高カードの取得ではつきりした。運の悪いこちらに必ず前半でジョーカーが訪れる、と。

胸の内が小刻みに揺れた。僕とは格が違う、きつとやってくれ。くつくつと喉を鳴らした立神がハートの4を引いた。

「実に楽しい、さすがウルルンだ。俺を高揚させてくれるのはお前ぐらいだぞ」

捨てる。

麗葉がダイヤの6買いで中列へ並べた。13と合わせると平均は9を上回る。希望が見えてきた。九ターンではクローバーの7をポルトフォリオの前列に連結させる。相変わらず冴えないカードだった。

平均にするとそう悪くはない。

待ってれば9か10に恵まれるだろう。資金もクローバーとスペードとハートで三枚ある。合計26。二枚で10を買い、余った一枚は銘柄化すれば逆転勝ちだ。届きそうになかったのに、こうして射程内に持ってこれるとは大したもんだった。

十ターン目。麗葉は市場を無視した。

なぜ？ 嫌な予感。

ハート資金を中列にあるダイヤの6へ被せた。

「銘柄化。プラス1で合計27、君の株価まではあと19だね」

なんでこの場面でなんだ。明らかミス。

銘柄化は終盤にすべきだ。ジョーカー予防として余力を残しておくんた。立神だってそうしてる。ジョーカーに出会わず、あぶれたそのときにするのが常套手段だ。前列にあるクローバーの7が暴落したらどうする。僕には考えが全く読めなかった。

最悪なことに立神がクローバーの10を引いた。彼は買えないにしても、銘柄化しなければ麗葉が前列に重ねられてたカードだ。せつかくのチャンスが無下にし、相手の暴落狙いでいくしかなかった。なにをやってたんだ。僕と同じ、裏目の原理が働いてる。

十一ターン目になにごともなく麗葉はスペードの8を買った。一応は高めのカード。計35で総合としてはなかなかだ。

46には届かない。都合良く立神が暴落するとは考えられなかった。

彼がハートの7を出した。こいつのツキは絶対だ。一人ロシアンルーレットを成し遂げるほどなんだ、波に乗れば無敵に等しい。

十二ターン目、麗葉はダイヤの2をボロ株置き場へやった。

「俺がジョーカーに魅入られるのを待っているのか」

彼女は市場を黙って見つめてる。揺らぎのない双眸だった。一番上にある、これから立神の引くカードがジョーカーであると疑わない視線だ。

一度、彼の手がぴたりと止まる。麗葉の眼力が具現化して絡んだみたいだった。

ピエロ出現。

今度は心強い銘柄としての姿じゃなくて、残酷なる使者としてやってきた。前列にあつたハートの9と10の首を根こそぎ刈り取ってボロ株の巣窟へ運んでいく。高めのカードを抱えてるだけに減りも大きかった。

驚嘆より驚愕した。麗葉が平然となにかしやがったんだ。

結局、勝負を左右したのはこのターンだ。終わってみると実に呆気ない。麗葉はクローバーの8を、立神はクローバーの9を買ってゲーム終了。43対36で麗葉の勝ちだった。



テーブル上へ目を馳せて立神が口を開く。

「ポートフォリオゼロでのジョーカー待ち、普通は考えない場面での資金銘柄化。場が荒れて俺にジョーカーが送り込まれたのか」

銘柄化してなかったら彼女へ二枚目のジョーカーが来る予定だった。麗葉は立神の、立神は麗葉の引く予定だったカードになったんだ。あの十ターン目で強引に運をねじ曲げたと言える。

僕が同点に持ちこむのがせいぜいだった相手に一発かましてくれてすっきりした。背中をぽんと叩いて、やったな、と褒める。ライフが二対一になり、無理して勝つ必要がなくなった。

彼女の表情は浮かなかった。

「まださ」

「まだ、て。次は気楽に同点にでもすれば終わりじゃんか。勝って流れもこっちに来るし、楽勝だろ」

「今回は荒らしただけなのだ。いわばリセットさ。次はどちらに転ぶか分からない、やりにくい相場になるのだよ」

黒い髪を掻き乱す麗葉。自信はなさそうだった。動じてない立神とどっちが勝者か分からない。

ジョーカー待ち作戦は有効だ。流れの悪さは相手には変えられない。変えようとしたって、それは自滅を呼び込みかねない。どうとでもなれっていう自棄気味なプレイヤーがする分には防ぎようのない武器になるんだ。

ぴーぴーぴーぴー。

いきなりちやちなビーブ音が鳴る。内ポケットから立神が出したのは小型のモバイルだった。

「ネズミでも入りこんだか、そこそこの数だな」  
う。

まずいますまずいます。僕には心当たりがある。言わずもがな、森里さんだ。なかなか僕が出てこないもんだから、とうとう突入に踏み切ったんだ。

いまは来てほしくない。

せつかく優勢になったのに、めちやくちゃになってしまう。警察の介入がなくなつてやれる。仮に麗葉が負けても自分は逃される約束だ。森里さんに情報を与えたのが自分だと知られたら、立神なら即座に推理する。ペナルティが課せられて約束どころじゃなくなるだろう。

皮肉にも警察が完全なる枷になった。安易に地図を見せたのがいけなかつたんだ。良かれと思つてやつたのに、たぶん僕みたいな一般人は日々こうして少しずつ間違いを積み重ねてる。

「まあいい。ここに辿り着くのはまだ先だ」

どのぐらい先だよ、とは訊けやしない。彼らが来る前に終結させるのが考えられる生存の道だった。

麗葉が資金を交互に配つていく。手元にはクローバーとダイヤとハートの三種。立神も三種だった。スタートの条件は同位置になる。今回も彼女は先攻を選んだ。ジョーカー待ちがある。流れが変わつてなくても大丈夫だ。変わつてれば変わつてたで方向転換する。予知をしない限り、なにが出るかは分からない。後出しでいいんだ。

一枚目の市場を裏返す。

おいおい、そう来るかい。

ダイヤの10が鎮座した。さすがの麗葉も即断即決とはいかない。捨てるには株価が高すぎる。運の悪いことと言つべきか、良いことと言つべきか、資金にはダイヤが三枚もあった。手札の柱になる一番の成長株だ。

どう考えても買い。カードを後列へ置いた。

これだけじゃない。二ターン目にはハートの10。ハート資金は一枚しかないけど買った。三ターン目にクローバーの8。ジョーカー待ちはもうできない。当然、買いだ。いいカードが続いて戸惑つたものの、素直に喜べる風潮だった。運が流れてきてる。

立神はポートフォリオにハートの7と9、スペードの8を並べた。二枚あつたハート資金を消費して、二人の枚数だけを比べると同じになった。合計にはしっかりと差が出てる、28対24。

流れが完全に変わったと実感したのは以降のターンだった。

麗葉がダイヤの7やクローバーの7を無駄ターンなしで買ってるのに、立神はさつき使い切ったハートが出る。それも8という高めターン目で7を買わなければプラス1ほど得だった。トランプ株において1が命取りにもなる。

一見ツキがあるように見えて実質は裏目だ、買えなきゃ無意味。それは転換を表す。僕自身が体験したことだった。

続けてダイヤの2やスペードの1が出た。奴は低めのカードに魅入られてる。

六ターン目には早々に麗葉が資金を使い切った。前列からハートの10、クローバーの7と8、ダイヤの10と7と8で合計50。笑いが止まらなくなりそうな株価だ。

もつとも惚れ惚れするのは、スタート時の考え通りに柱となるダイヤが安全な後列に控えてる点だ。前列が暴落しても40。いまの立神と16も差が出たままだ。資金が三枚あるとはいえ、落ち目のあいつには大きいカードが入らない。粘ると暴落のリスクが高まる流れが悪くなり、ジョーカーも引きやすいに違いない。

八ターン目に立神の買えるカードが来た。クローバーの1という底辺中の底辺。陥落を目の当たりにした。運だツキだと初めは胡散臭かったものが、だんだんと面白く感じられてくる。不可視のものがこうして形として表出してるんだ、ゲームの時空とは別のところだなにか不思議な感覚を味わった。

驚く。立神が資金を支払ったんだ。

資金の銘柄化をするのと同じ株価なのに！買ったって買わなかったと一緒に、あり得ない買い。クローバー資金は一枚しかなく、株価を上げられない。買うとしたら高めが普通だろう。

現在の26の差を埋められなくなる。他にスペード資金二枚しかない。9と10を手に入れても届かない。

狙いはだいたい見当がつく。麗葉の真似事だ。あり得ない動きで場を攪乱し、こっちがジョーカーを引くのを待ってるんだ。そうな

つたとしてもツキのない彼には高カードが入らない。差は埋まらずにハッピーエンドだ。

それにしたってクローバーの1買いは異様な雰囲気醸し出していた。微かな胸騒ぎを起こすに足る行動だ。

十ターン目。

立神の思惑かは分からないが、麗葉がジョーカーを食らった。ハートの10が消えて合計40へ暴落だ。しかし相手はスペードの7と8以上のカードを二枚持ってこないとならない、余裕は変わらなかった。

次ターンの立神の番でクローバーの9が出る。再びの裏目だ。1なんて買わなければ勝ち目はあった。麗葉の運が逃げたわけじゃない、運があったってジョーカーは出る。最善を尽くしてれば勝てるんだ。

僕は深く考えてなかった。奴の狙いはそんなもんじゃなかったんだ。

十一ターン目からしばし市場をめくるだけの行為が続いた。立神にはどんどん低いカードが出て異変は感じられなかった。

そうして迎えた十七ターン目。市場はあと十枚だ。麗葉が引いたのはダイヤの1だった。取引を終えて関係ないカードだが、そんな低めの数字を見たくなかった。ここ数ターン、そういうのが続いている。おそらく前半に高めが偏ったからだ。

待てよ、そうすると。

電撃の如き直感がショートして脳内に破裂を起こした。立神が小さくなった市場をめくる。

スペードの9。

即買いで合計が34となる。資金一枚残して差が7。市場は八枚。胸騒ぎの原因はこれだったんだ。問題は市場の中身だった。

「立神は逆転できるのか」

「スペードの5と7と10が残っているね。それに、ジョーカーも」  
「スパーベビーは伊達じゃない、記憶に不備はないだろう。奴は

とことん7と10に口ツクオンしてくる。それに9を当てたいま、彼女にジョーカーを引かせればそこで立神の勝ちだ。ゲームをラストまで長引かせるのは必然だった。

ここに来て異様だったクローバーの1が生きてる。自分にジョーカーが出ても奴は1が防壁となつて消えるのみで痛みなし、7と10のうち一枚が出て逆転可能だ。知らない間に二段構えになつた。あと四ターンだ、これじゃ麗葉が不利になる。

ともかくスペードは潰してしまうのがいい。彼女の引きに賭けるしかなかった。

緊張の十八ターン目。

スペードの7。ガッツポーズする。敵を援護する蜘蛛の糸が一本切れた。奴の勝つ確率は半減だ。ついでにジョーカーを引いてくれるといい。

引かない。ダイヤの4だった。

十九ターン目。

僕は観戦者とはいえ、地雷の上を歩いてる気分になる。自信のなさそうだった麗葉はもっと重圧を一枚のカードに感じてるんだ。スペードの10を切り落としたあとはノイズなしの地雷ゲームになる。そうなつては勝敗の行方は予測不可だ。流れが続いているのを考慮すると麗葉が優勢か。

カードをめくっていく。黒のマーク。数字は10。

ふざけんな、クローバー！

三つ葉が憎くなった。びりびりに破り裂いてしまいたい。

立神も黒いカードだった。ジョーカーじゃなさそうだ。スペードの5。買った途端に麗葉の勝ちになる、もちろんボロ株行きだ。なにかの間違いで買ってくれないかとあり得ない幻想を抱いてしまった。

残り二ターン、市場四枚。心臓に悪かった。

テーブルにはぺったんこになった市場の山がある。つるつるした表面をさつと撫でてオープンにした。クローバーの5だ。

たった三枚しかなくなった。スペードの10とジョーカーと他一枚。

あっさりと立神がダイヤの6を引いた。

二枚。鍵になるカードが残ったことになる最終ターンが来てしまった。二分の一だ、勝ち負けがはっきり分別される。上と下、どちらかがスピードの10。自分のプレイ時より願いを強く込めた。

勝てれば二人とも立神から抜け出せるんだ。生き延びるだけじゃ意味がない。二つに一つの運命、先の人生で大勝負を失敗してもいい。欲はない、この一回を勝たせてもらえたらいいんだ。

決心したように彼女が肯いてカードを取った。

ジョーカー。

なにかの崩落する音が聞こえたようだった。立ってるのが辛くなる。危うく膝が脱力してしまうところだ。テーブルに手をついて堪える。

「とすると残りはスペードの10。ツキが抜けるとここまで追いつめなくては、このカードが出てこないか。それが幸いしたようだな」立神が44になった。麗葉は暴落で25。

大差の逆転負けだ。

「結末を読んでたつていうのかよ」

「言っただろう、このゲームは運次第なんだ、未来を読めるわけがない。その証拠がこのクローバーの1買いだ」

疑問だった異様なオーラを放つカードだ。ちよいと指先に挟み、ぴんつと弾く。綺麗に回転して僕の方に飛んできた。

「最低一回は暴落するだろうと踏んでの買いだった。防御を固め、前半に低水準のカードばかり出るのを見越して、ラストまで粘れば高めも出てくるしなくなる」

流れと理論の複合技だ。決して余裕があるわけじゃないのがミソだった。ぎりぎりだ、二人してやるかやられるかの戦いをしてたんだ。

勝敗を決定づけた理由が、なんとなく分かってくる。

振り返ると立神は素直に買ってれば勝てた。暴落を二回もすれば誰だって負ける。麗葉はジョーカーに魅入られてたんだ。

なぜか？

前のゲームでジョーカーをおびき寄せせる戦い方をしたからだ。場が荒れ、流れが変わってもそこは変わらなかつた。ジョーカー待ちならジョーカー待ちを徹底しなくちゃいけなかつたんだ。ああいうことをしたあとのゲームは特に。

でもどうすりゃいい。次は本当に予想がつかない。麗葉が負けたことで流れが循環し、ジョーカーの動きも変わってきそつだ。

ライフが減つて一対一。あとがない。たった一回の負けで命運が分かれる。このトランプゲーム、簡単がゆえに人生が左右されてしまうにはあまりに軽すぎた。軽すぎて重い。満身創痍で負けるならまだしも、一ゲームに十分かかるかかからないかのお遊びだ。だからこそ余計に恐ろしかった。

麗葉が冴えない表情でカードを混ぜてる。

微かに物音がした。遠くでドアが激しく開け閉めされてるんだ。

天井を立神が見上げる。吊された刀剣が揺れ、近接してる物同士がかちかちぶつかった。お客さんが、だいぶ近づいてきてる。

「そろそろ乱入者が来そうだね。やめておくかね？ 不戦勝で良ければ私は帰らせてもらうよ」

いつの間にかシャッフルを終えた市場がテーブルの中央に準備されてた。彼女は資金カードを切ってる。

「愚問だな。せつかくの流れを止める馬鹿はいない」

続行と受け止めて絵札を配っていった。一枚ごとに立神の輪郭が晴れやかになっていく。細い目を楕円形にし、唇は弓なりにした。

資金のマークがそうさせてる。立神にはスペード三枚、ダイヤ三枚、麗葉はクローバー三枚にハート三枚。

「二種類場。ないわけではないが、この数戦のうちに現れるとはな。さすがスーパードビー、楽しませてくれる」

レアな配カードだ、どうしたって通常は三種以上になる。二種だ

と買いに走れる機会が少ない。買いにくいがためにジョーカーには強くもあり、株価を成長させきつたあとには脆くもある。両極端を併せ持つ特性だ、戦い方も違ってくる。

やってみないとどうなるかは想像もつかなかった。

三度目も麗葉は先攻になる。下手に変えては余計にややこしい。流れが悪いなら悪いで認識しておいた方が対処はしやすいんだ。

それが功を奏した。

一ターン目でいきなりのジョーカー。

おかしそうにする立神の無邪気さはほとんど子供だ。

「初手ジョーカー。荒れたゲームのあとだ、なにが起こってもおかしくないな」

どうやら相場の方向性は引き続き麗葉を不利に立たせてるらしい、ジョーカーに熱烈に好かれてる。

今回はこれが大きい。クローバー資金の13をジョーカーで銘柄化して後列へ置く。

立神はスペードの4だ。ボロ株へは流さない、支払いを済ませた。僕とのゲームと麗葉との二戦を見てきた者にとっては一見疑問だ。

平均以上の6より低い株価で買うのはなんでだ、と。初めは僕もそう思った。

実はこの場、低い株価でも買っておくのが吉なんだ。買える銘柄はできるだけ買っておかないと大量の資金余りも想定される。後半で銘柄化プラス1の連続にしてしまうのは悪手だ。

銘柄化できればまだいい。一枚も買えずにポートフォリオゼロで推移してしまつたらもうどうしようもない。資金はただのゴミとなる。一枚で11以上になる初手ジョーカーの功績は計り知れないと言えよう。

立神も黙ってなかった。彼の強運は尽きない。二ターン目にダイヤの9買いだ。株価が並んだ、凡人はこつこつと低めを買い集めるのがせいぜいなのに敵ながらあつぱれだった。資金一枚分のリードとはいえ油断は許されない。



五ターン目。

クローバーの2が麗葉に出る。銘柄化プラス1とは1しか違わない、買うか否か際どい株価だ。

彼女は即断で買った。こころへんの決断力は常人のそれを超えている。僕は最低でもカツプラーメンを作れるぐらいの時間を迷うだろう。

六ターン目に立神も引く。ダイヤ。数字は3だ。ダイヤの9へ重ねられる。15対16でリードされた。ゲームの視点が高めを競うものじゃなくなってきた。買えなきゃ無意味だ。だからといってあくまで株価を比べるルール、数字をおろそかにはできない。いくつ以上の場合に特攻するかが勝敗の鍵になる。

しばし麗葉は全く引けなくなった。相手は九ターン目にスペードの10を引き入れる。雲行きが怪しかった。立神の運は本物だ、麗葉がいまだ15なのに、彼は26。二種類場において資金を四枚消費して尚且つ6以上をキープできるのは尋常とは思えない。

やっと麗葉に手つかずだったハート銘柄が十一ターン目に訪れる。4、微妙なラインだ。ここは買っておくしかない、次に買える銘柄が来るかどうかさえ厳しいんだ。中列に並べる。

心配はいらなかつたようだ、次ターンにはハートの7をめくつた。ツキが巡ってきたんだろうか。これで立神の26と同等に達する。が。

手に取った麗葉は裏にして弾いた。目をこすってポートフォリオを見てもハートの7はない。捨てたんだ、せつかくの好カードを。クエスチョンマークが僕の頭上にいくつも乱舞する。

立神がくすくすと口元を押さえながら市場をめくつた。ダイヤの4買い。スピード資金一枚残して計30。ますます差は開いていく。僕が疑問を言葉にする前にゲームは進んでいった。

「イヴはこういうゲームが苦手のような。ウルルンがハートの7を買わなかつたのがそんなに不思議か」

顔に出てたらしい。

「こいつのことだからなんか考えがあるんだろうけど、俺なら買いだ。だってそうだと、7はよくある資金三種以上の場でもまず買います。二種類の状況なら尚更だ、次にいつ買えるか分からないんだからないやむしる買えないと断定したっていい」

「お前は一つ忘れてるな。いまウルルンがジョーカーにプロポーズされているのを。もしこの状況で引けばハートの4もろとも7は消える。買わないのと同じどころか資金一枚分の丸損だ」

「流れはそうだ。でもそれはあくまで根拠のないあやふやなものだ。この場においては資金を余らさないことを重視すべきなんじゃないのか」

「いいや、実際にテーブルについていない部外者には感じられない空気があるんだ。理屈ではない塊が漂っていて、ジョーカーは必ず現れる。そうだろう、ウルルン？」

麗葉は無言だった。市場をめぐる。スペードの8、買えずに流し。そのあとはひたすらに立神のターンが終わるのを待ってテーブル上を黙視してる。

両肩を持ち上げておどけてみせる彼がゲームを再開した。

十五ターン目、ここで麗葉がまたも幸運に恵まれる。ハートの9だ。表情なく手にし、向かうは捨てカードの山だった。

やめろっ、と思わず手首を握ってしまう。無茶苦茶な行動を見るに見かねたんだ。

「なに考えてんだよ。ジョーカーを引きやすい流れだから引いたあとに買い集めるつもりだろうけど、もう十五ターン目だぞ。素直に進めば六ターンしかねえのに、このままじゃ資金が余る。ジョーカーを引くにしろ引かないにしろ、一枚ぐらい買っておいたって損はない局面になってるだろ。引かないなら引かないで圧倒的に有利になる。違うか？」

麗葉の首が二ワトリみたいにくるつと急速回転した。大口が開けられて腕に迫ってくる。お得意の噛みつき。黙って見ていたまえ、てことだ。さっと引っこめると彼女はぽいっとハートの9を捨てた。

もういい、口出しはしない。どうせ僕は助かる約束だ。自分の命は自分の考えで導くのが本人のためにもなる。高めを捨てたのを後悔するなよ、と胸中で呟いてやった。

案の定、十六、十七ターン目に買いカードなし。スペードの3を捨てる。市場へ伸ばそうとしてた立神の腕が止まった。ああ、と考え、スペード資金を銘柄化して後列のダイヤへつける。

「スペード銘柄はなくなったからな」

スペードの3が最後だったんだ。もしジョーカーを引いてもスペードの買い直しは無理で、いつ銘柄化しても同じなんだ。

立神は計31で手仕舞いになった。結局、平均5以上をキープしてる。

その点、麗葉ときたら資金三枚を使って19。平均は6以上であっても、十八ターン目にさしかかっている。ほとんど絶望的だ、ジョーカー対策が裏目に出た。いや、ハートの7と9の時点では間に合ってたんだ。それで余ったクローバー資金を立神が資金消費し切ったこのターンで銘柄化すればゲーム終了。35対31で勝ちだった。もちろんこれはタラレバ理論だ。ああだったらこうしてればって考えたって終わったことは曲げようがない。だけど、定石通りにしてれば勝てた。なによりもそれが惜しい。

こうなったら立神がジョーカーを引くのを祈るしかなかった。先頭の銘柄にはスペードの4と10がある、逆転可能だ。神頼みになるのはなんとも心許ないけど、それしかない。

十八ターン目に彼女がまたもやらかした。こんなところで一枚しかないクローバー資金を銘柄化したんだ。後列のクローバーにつけて計20になる。

もしかや、と思った。直感で次にジョーカーが来ると読んでるんであれば肯ける。立神に資金は残ってないから防ぎようがないって寸法だ。傍観してる僕には感じられないという場の空気で察したのかもしれない。

彼がめくる。

ハートの8。

だよな。

そんな超能力めいた行為は不可能だ。僕には曖昧な力があるにはあるけど別の問題で、そんな望み通りに能力は目覚めない。じゃあなんだったんだ、いまの銘柄化は。

十九ターン目。

クローバーの10が出る。つい一ターン前には持ってたクローバー資金で買ってたんだ。裏目だった。こっちにはハート二枚しかない。10を引けるなんてほとんど奇跡に近かった。だから銘柄化なんかしなけりゃ良かったんだ、せつかくの運を自ら逃してるなんて馬鹿げてる。

そもそもこうして裏目に幸運なカードが出れば出るほどツキがないことを表してる。ポロクソな展開だ、傍目にも勝てる気がしなかった。

立神はハートの5を引く。

「これでウルルンの勝ち半分消えたな」

「半分どころじゃないだろ、あんたの勝ちほとんど決まってる」  
腹が立つてくる。言われなくなっただけ分かってる。宿題をやるうとしてたのに、宿題やつちやいなさい、と親に言われたときの苛立ちさを倍にしたみたいだった。

それは少し違うな、と立神。

「おそらくウルルンはハート資金の二枚に賭けてたんだろ。このハートの5と市場に眠った6を合わせた11。ポर्टフォリオと足してちょうど31、俺と同点だ。そうなれば互いにライフが消え、サドンデスゲームになるのは当然となる。こんな不安定な二種類場で勝負をかけるのは賢いとは言えないからな」

「だけど、それもなくなっただけは」

「ウルルンか俺か、どちらかがジョーカーを引いてこのゲームは終わる、呆気なくシンプルに」

買えるなら買えるで同点。買えないんならジョーカーで運試し。

めちゃくちゃしてるようで、ちゃっかり保険はかけてたんだ。しばらく一緒にいるわりに、やっぱり底の知れない少女だった。

二人とも一回ずつ銘柄化をしてるおかげで丸々タータンが延び、あと三タータン。

麗葉に焦りや緊張はなかった。二十タータン目へ簡単に突入する。クローバーの7。

立神も同様だ、クローバーの9。

二十タータン目。ダイヤの8。立神、ハートの6。

ちよつと待つてくれと言いたくなる。なんであんならはそう淡々と勝敗の決定打になる市場をめくれるんだ。ドラマならここはどきどきわくわくさせながらシーンを引張る。週刊漫画だと一週分を二タータンで持たせる。ものの数秒で終わるって、どんな神経してるんだよ、二人とも。

市場には二枚しかない。

どっちかがジョーカーで

麗葉が引こうとしてる。

「待て待て、んな軽々しくやるな。準備っていうか、心の中でナレーションぐらい入れさせてくれ。あんたは俺の脈を止める気が」  
深呼吸。

クソッ、関係ないなんて思ってて、この様だ。なんでこんなに動悸がするんだ。喉に心臓が駆け上ってきそうだった。

もう一度、大きく呼吸する。

よしいいぞ、と言った。彼女がめくる。半ばにして僕は瞼を閉じてしまった。薄目で黒い柄がばやけて見えた。ジョーカーも黒だ。どっち？ どっちだ？

立神はスピードはもうないと言ってた。クローバーかジョーカーだ。

麗葉が息をついてる。オープンされたカードにはクローバーの6が印刷されてた。

残りの一枚が裏返される。

見間違いようのないジョーカーだ。立神の前列に置いたスペードの4と10が消えて17へ暴落。

20対17。

「勝ちやがった。このやろっ、はらはらさせやがって！」

頭をぐしゃぐしゃに撫でてやる。鬱陶しそうに振り払ってくるのも気にしない。ぐつちやくちやくにしてやった。髪の毛さばさのボンバーヘッド。僕は手をがつつり噛まれた。全然痛くない。

噛め、もっと噛むがいい！

万事丸くおさまって帰れるんだ。一人で帰るんじや後味が悪いと思ってた、自分だけだと心にしこりがいつまでも残る。森里さんもまだ来てない。侵入してるらしいけど、どっかに裏口があるだろう。こっそり出て、後日なにか言われたら適当にはぐらかせばいい。保身が第一だ。

一刻も早く立ち去りたかった。口元に手をやった立神が視線を固定してしゃべらない。すつと摘まんだのは麗葉のポートフォリオにあるカードだった。後半で銘柄化したクローバー資金だ。

「一つ訊いてもいいか。勝ち負けに難癖つけようというのではなく、ただの質問だ。ウルルンの勝ちは変わらない」

麗葉が僕の手を離れ、静かに肯く。

「十八ターン目、ウルルンはクローバーかハートどちらを銘柄化するかの場面。ハートは二枚あり、一枚を銘柄化してクローバーと一枚ずつ手広く買い銘柄を待つこともできる。ではクローバーの銘柄化は失敗かというところでもない。あのとき市場にハート銘柄は三枚あったから二枚買いを狙うのもありだ」

彼は言葉を続けながらポロ株置き場にあるカードを数枚抜き出した。

「おかしいのはそこではない。あの場面での銘柄化自体が疑問手なんだ」

僕も思ったことだ。てつきり次にジョーカーが出るのを察して銘柄化したんだと思った。でも違ってたんだ。

「市場にはハートの5、6、8の他にクローバーの6、7、9、10もあつた。これがなにを意味するか分かるか、イヴ」  
「ぱらぱらと各カードを晒してる。」

いきなり話を振られて僕はたじろいでしまう。ざっと見てもいいカード揃いだ、あのときにこんな残つてたとは。立神が記憶してるなら、麗葉だつて覚えてただろう。

ん？ 十八ターン目？

あれは立神が銘柄化した直後で、市場の一枚分が引かれずに済んだあつた。つまり市場は九枚あつたんだ。

あ。

「買えるカードを引けるのは一度目だつて九分の七。以後のターンはもつと高い確率になって、買えない方がおかしかつたんだ」

「そうだ。しかも一番株価の低い組み合わせ三枚を買つと17。ポルトフォリオの19と合わせて36になる、俺の31を超えていた」  
「楽に勝ててたんだ。なのに銘柄化したら、チャンスを掴みにくくなつてしまう。そう考えるとますます疑問だ。まるでとんちんかんな動き。勝とうという意思が感じられない。」

「些細なことだ。ウルルンがどの道を行こうとも俺は負けていたんだからな。ただし、教えてもらわなくては今夜は眠れそうにない」  
立神がジョーカーを手にして指の間でめまぐるしく回転させた。  
なにをした、と麗葉に問う。

彼女は、ふつと笑んだ。

「物音がしたあの瞬間、市場の上下にジョーカーを仕込んだのさ。幸い私は彼らに好かれていたから、細工をするには十分な距離にあつたのだ」

単純明快だつた。

「だから立神に銘柄化されて市場を引く順番が入れ替わるのを拒んだのか」

「意識のしすぎで即座に銘柄化したのは失敗だつたがね」

ジョーカーをテーブルへ投げ、立神は二枚のハートランプをチ

ヨイスする。

「すると十二ターン目、十五ターン目でハートの7と9を買わなかったのはジョーカーを警戒してのことではなかったんだな。資金を残しておかなくてはならなかったわけか。それと一枚でも買ってしまえば、のちに同等か大きいカードを買わないのは不自然になる。怪しまれては、せつかくの百パーセント勝利を流しかねない」

彼女が肯定する。

そんな深いところで戦つてたとは思わなかった。九分の七といっても必勝にはならない、ジョーカーが混ざつて負けか同点になることもある。百パーセントを選ぶに決まつてる。

ゲーム中にバシてたら中断か反則負けを言い渡されてた。ハイリスクハイリターンだ。

彼の瞼の細い間から鋭く凝視してる目が二つ。やり直したとでも言うつもりか。さつき麗葉の勝ちが変わらないって宣言したんだ、ちまつこい嘘や言いがかりはつけないだろう。

強行突破することにした。

「よし、俺らの勝ちだ。約束だからな。勝ちも負けももうつきまとうなよ、それじゃな。ほら、麗葉も帰るぞ。あ、そうだ、小説できたんだって？ 読む読む、早く読ませてくれよ」

彼女を立ち上がらせて引きずるように一步を踏み出す。

「待て」

お声がかかりました。振り向きたくない、振り向くしかない。

テーブルへ初めに突き立てたナイフを彼が抜いた。

僕らを殺す？

ゲームを汚した標的には容赦しない、それが自然体だった。こうなりゃ無事に済まないのを覚悟でやりあうしかない。

ナイフがかざされる。投げるつもりかよ。素手で距離があるこつちは、やりあうどころじゃなくなる。逃げ場もなし。無傷で帰るのは諦める、急所だけは防ぐんだ。

高速に腕が振り下ろされる。刃の煌めきが光った。僕は麗葉に伏



せさせて頭部と心臓を庇う。

鋭く突き立つ響き。

腕には刺さってない。体でもない。

どこにもナイフはなかった。それもそのはずだ、立神がテーブル上に置いた片手へ向けて垂直に立ててる。テーブルを転がる物があった。

指だ。

彼は結婚指輪披露の如く左手の甲を表に掲げた。

リングがされる役割の指がなくなってる。赤い雫が伝って袖口へ細く流れてく。指を拾ってちゅつとキスをした。

「俺はイヴにライフポイントの交換として薬指切断を提案した。お前は断ったが、俺はやる。これでもう一ゲームできる」  
なんだって？

胸の奥が気持ち悪くなる。物理的に近づき、わりと立神荘士という男を理解したつもりだったが、人外の魔物に見えた。かわるな、と真っ赤になった警鐘が喚びてる。

麗葉がイスへ向かおうとした。抱くようにして僕が止める。

「いいや駄目駄目、断固として駄目だ！ 薬指の提案はあくまでお前の趣味だろ。俺らはそんなもんちつとも価値を感じてないし、勝手にされたって困る。いきなりぶった切って、はいやりましょう、なんて言われて了承すると思ってるのか。あれだろ、どうせお前は取り返しのつかない行動に出て罪悪感を植え付けようってんだろ。やらざるを得ない状況にしようってさ。無理、無駄、そんなことしたってやらない。俺らからの妥協案は一切なし、ここでお別れだ。じゃあな！」

早口にまくしたて、麗葉の腕を掴んで引こうとする。

抵抗された、ちつとも動こうとしない。長い前髪に見え隠れする彼女の真っ直ぐな視線がもう一ゲームを望んでる。

「熱でもあんのか？ 負けたら一生立神の下につくんだぞ」

「薬指があるぞ」

「馬鹿か。指一本なくなったら色々不便だろ、分かってんのか。キ―ボードだつてまともに打てないし、そうしたら小説も書きにくいぞ。それは嫌だろ」

「私は右利きだ、手書きにすればいいのだ」

ああ、これこそ無駄だ。一度言ったら聞く奴じゃない。わがままで自分勝手に我が道を行く雇い主。それが僕の中の比佐麗葉だった。麗葉が、それに、と付け加える。

「奴を納得させる形で終わらせないと結果的になにも変わらないのだ。イカサマでも流れは来ている、次も勝てる、気がする」

「なんパーセントだよ」

「五十」

僕の腕を解いた彼女がウッドチェアに腰掛けた。おいおい、それじゃ当たるも八卦当たらぬも八卦じゃんか。

天井を見上げて脱力する。刃物が無数にぶら下がってる。あの子の一本が偶然落ちてきて立神を串刺しにしてくれたらいい。

無理だろうな。

僕も戻った。

立神は歯と右手を使って薬指のあった部分をハンカチできつく結んでる。

テーブルの隅には失われた指が無造作に転がってた。綺麗でグロテスクに感じなく、作り物みたいに見える。断面がこっちを向いてなくて良かった。

そしてカードを集めた麗葉がシャッフルしようとしたときだ。扉が荒々しく開け放たれた。

僕の心臓が一拍停止するのを感じた。

熱愛ジョーカー（後書き）

五月病にはご注意ください（・、・、・）

次話更新予定は来週頃です。

Next:「無敵のち雨」

## 無敵のち雨（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記の手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

X?ID=PP47878715

## 無敵のち雨

出入り口で男が群がってる。初めは森里さんがついに辿り着いたんだと思った。輪郭や背丈、あらゆる面で一致しない。ワイシャツの胸元がざっくり開いた刑事が横行してたら管轄内はスラム街になる。

どう鼻眞目に見たって堅気じゃなかった。

知ってる顔が二、三ある。高橋と、かつての悪仲間二人だ。室内を埋め尽くした趣味の悪い装飾品を目の当たりにして怪訝そうにしてる。僕も同感だ。

チビデブとガリノツポが、それじゃこれで、と高橋へ告げた。奴らが僕を尾行して案内したんだ。去り際に視線が向いた。お前が悪いんだからな。そう訴えてるようだった。つけられてる感覚があったのは二人のせいだったんだ。二度と会うことはないだろう。

「気味のわりい屋敷だな、おい。こりや相原の家か」

高橋が入口の階段に腰掛けて周りへ首を巡らす。

「んなわけねえか。そうすつと俺の指をへし折ってくれたそつちの優男。おめえ、なにもんだ」

なんのリアクションも起こさないで立神は集団を視界に収めてた。「シカトか。それともこの数を前にしてびびったか。そうだよなあ、二十人相手に、三人、それも一人は薄汚い女ときてる。いくら腕が立つても敵うわけがねえ」

おそらく麗葉についての言動に反応したんだ、立神がイスを離れる。即座に奴らのストップがかかった。おい、と高橋の一声に若い衆が全員拳銃を構える。ぽっかりと空いた銃口が向いてた。一つや二つは致命傷になる弾丸を浴びる軌道上にある。今日はこんなものばかりだ、人生で一番の不幸な日だと断言しよう。

タバコを啜える高橋。近くの男がジツポで火を点けた。包帯を巻いてない方の手で摘まみ、一吸いして灰色の煙を吐く。

「三人とも並べ。武器も捨てる、持つてんだろ。しらみ潰しに覗いた一室には腐るほどの銃器が眠ってたぞ」

立神はおとなしく従って僕と麗葉の間に来た。懐へ手をやる。僕にとつても脅威だった物だ、グロック17を外気に触れさせた。

「ゆっくり足下に置き、ゆっくりだ。ふざけた真似したら体重が三倍になると思え」

相手方も緊張をみなぎらせてる。ちよつとでも異変を察知したら一斉放射してくるつもりだ。

部下の一人にあごをしゃくつてなにかを命じた。男が、はひいつ、と裏返った返事をしてこつちに来る。見た中じゃ最もなよなよしてた、下っ端だ。

「おい、相原。優男の手を縛れ。加減するなよ、思いっきりだ」

男にロープを渡された。やれやれだ、こつちの趣味はないんだけども。しょうがなく立神の後ろへ回る。彼は無抵抗だった。それどころか協力的に手のひらを上にして差し出した。随分と潔い。僕にも命がかかっている、加減して結ぼうとは思わなかった。

なよなよ男が執拗に念入りなチェックをする。結び目へ力を加えて問題なしなのを確認。異常なしです、と報告した。

目の端でなにかが落ちるのを僕は知覚する。忠実に命令を実行した男は一步前の位置にいて気づいてない。横にいる僕には分かった。立神の自由を封じたロープがあっさり落ちたんだ。どんなマジックを使ったかは不明。

テーブルに突き立てたナイフを取って男を羽交い締めにした。

一秒もかからない素早さにヤクザ軍団が固まった。

違和感があった。これで形勢逆転だ、普通は人質をとられたら終わり。なのに彼らは大して動揺してなかった。ほくそ笑んでる者もいる。

画面が揺らいだ。僕の中で、だ。

来たんだ、久々に、この感じ、予知。

「まずい、撃たれる三人とも、いや四人だ」

ずきずきと痛む頭を押さえながら声を絞り出す。

「たぶんこの男、なんか失敗しやがったんだ。落とし前みたいなものなんだろ。だから、なにをしてくるか分からないあんたに近づかせたんだ」

「なぜそんなことが分かる」

「細かい事情は分からないし、全然違うかもしれない。でも過去の経験からしていまのところは」

高橋がタバコを前方へ弾いた。

「百パーセントの中」

赤く小さな灯りが宙を回転して床を跳ねる。散って転がる火の粉。発砲音が聞こえるより早く僕と麗葉が飛び退いた。無数の弾丸が床を爆裂させて追ってくる。全力疾走、棚の並びへ駆けこんだ。立神は盾にした男を突き飛ばして自分の銃を拾い、飛び込み前転。流れるような動きで立ち、奴らに発砲しながら同じ場所に避難して行く。

彼は男が穴だらけで絶命してるのを目視し、僕を不思議そうに見つめた。

「トランプ株ではいいところなかったのに不思議な奴だ。どうだ、考え直して夢幻倶楽部に入らないか」

「丁寧に断ります」

銃声がやんで静寂した中、立神の喉を鳴らす笑いが響く。

ひとしきりのあと、さてどうするかな、と言った。

「どうするかって、ご自慢の味方がいるんだろ。騒ぎ聞きつけて来るんじゃないのか」

「一人もいない」

「はい？」

「邪魔をされたくなかったからな、この館には俺以外いない」

耳を疑う。

「逆に俺が仲間を引き連れて来たらどうするつもりだったんだよ」

「それはない、下手をすれば自分が危ういとお前は考えるだろう」

人数は必要なかった。あのヤクザ屋が入ってきたときは推測が外れたとも思ったが、イヴが俺を助けるような言動をしたことからそうではないな」

別に助けたわけじゃない。咄嗟で麗葉に伝えるにはああするしかなかったんだ。しかし立神を殺すつもりなら聞こえるように言わなかった。結果的には同じか。

「多勢に無勢、それがあんたの武器でもあるんだろ。真逆じゃないよ」

「まさか本当に復讐に来るとはな。想定してなかった展開だ」

「あんたみたいな奴でも考え足らずなときがあるんだな」

立神が眉を持ち上げる。

「なにか誤解しているな。俺を神様かなにかだとも思っていたのか。分からないものは分からない、死ぬときは死ぬ。人間はどこまで行っても人間だ」

上戸さんも言ってた、彼は現実主義者だと。僕からすれば十二分にあんたは化物だ。口にも出そうと思ひ、やめておいた。軽口が叩けないほど気分が悪かったんだ。

車酔いをしたときに似てる。食道に塊がつつかえてる感覚だった。プラス頭痛。視界には薄ぼやけた膜が張って、まばたきをしても戻らない。

背後の棚から男が迫る映像が現実の景色と重なって現れる。

「後ろだ、来る」

立神が銃口を向けると同時にサングラスをした敵が出てきた。直面した本人はあんぐりと口を開けた。我に返って拳銃を構えようとしたって無駄だ。

発砲。左胸に赤い花を咲かせた。

ここにいたら危険だ。いくら予知ができてでも囲まれちゃ話にならない。

「切り抜ける方法がないわけではない。どう辿り着くべきか考えていた。おっと、棚には近寄るなよ」



あちこちで男の叫びがした。

「触れると五万ボルトの電圧が流れる仕組みになっている。即死は免れない」

にっと口を釣り上げる立神。ゲームを始める前の「触るなよ、ケガするぞ」の言葉を思い出した。短絡的な反抗をしなくて良かったと安堵する。油断も隙もあつたもんじゃない。

これを使え、とごついナイフを渡された。周りの刀剣類が使えないとなると武器は立神の銃とこれのみになる。なんとも頼りなかつた。

そつえば、もう一つある。

「あの小さい銃持ってきてんだろ」

麗葉の物だ。ないよりはいい。

「事務所に置いてきた」

「なんでこんなときに限って携帯してないんだよ、大事な銃なんだろう」

きつめにあたる僕に、彼女は口をつぐんだ。

言って気づく。使わせないようにしたのは僕自身だ。

空気を読んでか、右手を掲げてみせた。

「どちらにしろこれではあの重いトリガーは引けないさ」

ハンカチに隠れ切れてない皮膚が赤く腫れてる。見るからに痛々しかった。トランプゲームならまだしも、運動には向かない。

「引かなくていい。今後一切、銃は使うな、人を撃つな。あんなもんなくても俺と違って頭いいんだ、どうとでもなるだろ」

現実をぼやいたって未来への道は切り開けない。状況が状況だ、僕が一番本領発揮できる。彼女に貸しを作っておくのもいい。

立神にもだ。

「なにか脱出方法があるなら協力するぜ」

「初めからそのつもりだ」

さいですか。

どうやらこいつには貸し借りなしでいた方が良さそうだ。どんな

に細い要素でも繋がってたくない。用が済んだらおさらばしてやる。高橋は共通の敵、一時的な協同戦線だ。少なくとも立神には即殺害されることはないし、館の構造を熟知してるのは彼だ。

まだ古傷の痛みの中で蠢く感覚がある。脳みそを直に指圧されてるみたいだ。僕は絶対好調らしい。

立神が一方を指差した。

「角にあたる場所に管理室がある。そこまで辿り着けばどうにかなる。出入り口付近側にあるのがネックだな。何人かが張っているだろう。それにいくら広くとも途中で出くわす確率は高い」

「そこで俺の力が」

彼は首肯する。

視界が重複した。半透明な景色には棚の上で見下ろすヤクザの姿。「上だっ！」

即座に立神は腕を動かした。ジャストで顔を覗かせたところだ。

銃口をぴたりと押しつける。見開かれる目。眉間に斑点が穿たれる。過剰防衛だろうか。いや、もはや現実の物差しの外だ。綺麗事を言っただけなら苦労しない。ファンタジー世界に迷いこんだらそのルールにのっとるんだ。それが生き残る道。

「中央突破するのが最も近いが、向こう岸の棚に辿り着くまでに蜂の巣だ」

確かに。テーブルを置いた広場のような空間は隙だらけになる。

予知しても弾丸を避けるのは肉体的に間に合わない。急がば回れだ。立神のあとについて壁沿いに迂回する。これなら右手側に注意をしなくていい、とは彼の言葉。

角を一度曲がり、順調に進んでいく。突き当たりが遠すぎだ、余裕で短距離走のタイムを計れる。一般家庭のリビングならこうはならない。それはそれでパニックになるけど。

棚の切れ目で止まる。全部連なって並べられてるわけじゃなかった。間隔は二人が手を繋いで通れるくらいになってる。それがだいたい十メートルおきにあるんだ。ここを通るときは入口側へ直線に

視界が開けてしまう。

僕が予知する。映像浮かばず。Go。

半透明な映像が後ろを振り向いている。未来の僕が物音かなんかで首を巡らせたんだ。だいたい予想がつく。

「後ろっ！」

麗葉と一緒にしゃがむ。発砲。短く呻いて倒れる男。進む。

「前！」「上！」「Go！」「左！」

僕の端折った指示に立神は的確に動いた。着実に敵は減ってきてる。拳銃一丁でヤクザ集団と対等になれるのはまんざら僕一人のおかげでもない。実際、すごい奴なんだ。

身体能力、勘、運、どれもがずば抜けてる。一時的な協力関係になって初めて肌で感じた。仲間としては最強で頼りになる人間だ。一人でも九割以上の敵は傷を負わずに倒せるだろう。予測の隙間を突いた一割未満を埋めるのが僕。

正に無敵。

万能感に満たされるのを払い落とす。これはファンタジー世界でのこと。現実に戻ればほとんど役に立たない。銃の扱い方や殺人術など覚えてたって邪魔だ。

直線上に管理室がはつきり見えてくる。コンクリ質でドアが一枚ある小屋だ。レトロな派出所みたいだった。

「なあ、あそこになにがあんだ」

「強力な武器だ。全員を一掃できる、な」

もったいぶるなよ、とぼやこうとする僕の耳にくぐもった声が聞こえた。ヤクザのものだ。リアルタイムな発声じゃなかった。ノイズ混じりで音割れしながら鼓膜を揺らす。音声の予知だ。

耳を凝らすと、せーの、と言ってるのが分かった。金属のぶつかり合う音。視界にも変化が現れた。棚が揺れている。

いま僕らは一つの棚の半ばにいた。

「走れ！」

立神と麗葉の行動は早い。僕の様子で感づき、準備をしてたんだ。

せーの、と聞こえる。予知の時点で見えた景色よりは先に行つた。間に合うかは微妙だ。刀剣がざわめいて覆い被さってくる。

跳ぶ。

ヘッドスライディングして床に鼻面をぶつけた。後方で重々しいのと同じくやかましいのがアンサンブルを派手に奏でる。

上手い具合に受け身して体勢を整えた立神と麗葉に遅れて僕も立つた。ヤクザ数人が革靴を手に装着してた、電圧を食らわなくて済む簡易防護品だ。敵は触れられないからと柵が倒されるのを思考の外に追いやつてたら盲点になつてた。

逃げ道を先読みされたらしい。

高橋はタバコをぶつと吹いて床に落とすと踏みつけた。

「あの部屋に向かつてたんだろ？ 裏口でもあんのかと思つたが、なんてことはねえ。おい」

部下の一人がサブマシンガンを持ってきて渡した。ゲームや映画によく登場する銃とそっくりだった。

「こんなもん使おうとしたとはなあ。これがあれば俺らにも負けねえわな」

部屋の中で見つけてきたんだ。奥の手を奪われた形だった。

眼球の濁つた膜と頭痛が強くなった。

マシンガンがスローモーションで火を放つてる。立神が二発撃ち返した。倒れるのは二人だ。他の連中に撃ち返される。僕、麗葉、立神が死のダンスを踊つてる。

対処は？ 不可。

隠れられるところはない、どこに逃げたつて狙い撃ちにされる。「ますます優男の正体が気になるところだが、もうどうでもいい。死ぬ奴のことなんか誰も気にしねえからな」

死ぬ、と無情な一言。トリガーが引かれようとしてる。

違う、逃げ場がないと思うな。予知とは別の動作をすることに意義がある。棒立ち、それこそ予知通りになつてしまう！

咄嗟にナイフを投げた。日常でそんな経験や訓練も積んでない、

群れの中を狙ったつもりが誰にも当たらなかった。

十分だ。

立神が発砲した。マシンガンの銃身に当たって弾く。反動で三発ほどを上空へ連射した高橋が倒れた。駆け寄る部下。

「ただこれですらどうなるってんだ。奴らがマシンガンを持ったおかげで悠長にして反撃してくるのが遅れてるんだとしても、目的の物は向こうにあるんだ。こっちに対抗手段はない。」

行くぞ、と構わず立神が言った。

「行くぞって、マシンガンはあいつらが」

「いいから来い」

銃が向けられ始める。駆け出す彼を半信半疑で追いかけるしかなかった。

足元に無数の穴が空いていく。すぐ横を高速の塊が飛んでいく。

弾丸が腕を掠る。必死なおかけであまり痛みはない。致命傷さえ負わなければいい。

到着。狭く開いたドアの中へ無理からに体をねじこんだ。閉め際、いくつもの鉄の塊が当たって弾ける震動がした。鉄製のドアで助かった。ロックをかけて一安心。次々に銃弾が跳ね返ってる。

近距離でドアノブを撃たれちゃおしまいだ、のんびりはしてられない。

狭い部屋だった。物置に使ってるんだろうか、スパナなどの工具に鉄くずや木材が放置されている。物という物がホコリをかぶってた。あとは壁に面した機械がモーター音を発してて、なんにもない。

出口も窓もなかった。

「おい、どうすんだよ。ここにいたってジリ貧だぞ。第一、希望のマシンガン奪われちゃどうしようもないじゃんか」

「勘違いするな、あれは俺のコレクションだ。それよりもっと素晴らしい物がある」

中途半端にかかった分厚い布のシートをどけると多くのメーターやらボタンやらが付いていた。電圧に関係するらしい注意書きのラベ

ルも貼つてある。ここで電気を供給してるんだ。

立神は雑多に載った図面とペンを払い除いた。プラスチックの蓋がされた赤いボタンがある。それを見たとき、なんとなく察してしまった。

ここは屋根がある場所だ。逃げこむのが同時に武器となる。

プラスチックカバーが外された。

「押すか？」

「丁寧に遠慮します。どうぞどうぞ」

「そうか、ではお言葉に甘えよう」

ボタンが押しこめられた。

頭上の方でタガが外れたような響きがあった。室内なのに雨の降る音が一斉にやってくる。どしゃぶり級だ。煌めきを伴った線條の雫に視覚を奪われる光景が目に見えぬ。その中に混ざる絶叫。

改めてとんでもない奴を敵に回してたんだと自覚する。武力で立ち向かうなんてもつてのほかだ。トランプゲーム最高。

間もなくして雨はやんだ。ドアに耳を当てても気配はなかった。

ノブを回す。

「俺と麗葉が反抗するようなら、この仕掛けで殺すつもりだったのか？」

「そんなに深い意味はない、効率の問題だ。天井に吊した物は片付けでまた一つ一つ取るのが面倒だろう？ 一遍に落として拾い集める方が楽でいい」

辺りを刀剣類が埋め尽くしてた。こんもりした刃の山中には倒れるヤクザが折り重なってるんだろう。照明が当たって銀色に輝く姿は芸術的でもある。

「気分が悪くなるな」

「予知かね」

猫背にうなだれる僕を麗葉が覗きこむようにする。否定した。色々ありすぎたんだ。彼女と会い、何度の出血や死体を目撃したことか。

足元にある刀身の幅広い剣に青白くなつた自分の顔が映つてる。酷く疲れてるのがありありと浮かんでた。これじゃ女の口にはモテそうにない。

そのすぐ脇でなにかが動いた。麗葉でも立神でもない人間の腕だ。体は刀剣の下敷きになつてる。あらゆる角度で反射した光景がこんなところにもまで届いたんだ。生きてる、その手には拳銃が握られてた。

誰かを狙つてる。

「麗葉っ！」

彼女を突き飛ばした拍子に弾丸が轟きとともに飛来した。衝撃が体を抜けてきりもみ回転する。二の腕に火傷しそうな熱を感じた。床に伏す。

応酬してるのは立神だ。射撃の方向で位置を掴んだんだ。僕が膝立ちになる頃には敵は絶命したようだった。

麗葉が深刻な表情をして寄ってくる。大丈夫だよ、と心配させないように言った。腕を少し深めに掠っただけだ、神経や骨には達してない。僕のシャツの袖をめくって傷を調べる彼女が胸を撫で下ろした。

「死ぬなら新作を読んでからにしてくれたまえ」

そこですか。大事に至らず良かったとかもつと体をいたわる気持ちで心配してくれてもいいと思ふんですよ、麗葉さん。もしもーし。近くにあつた小型のナイフでシャツの肩口に切れ目を入れ始めた。僕の長袖シャツに、だ。破いて傷口に巻きつけてくれる。片腕に鳥肌が立った。いきなり半袖になるにはまだ早い季節だ。細かいツツコミを入れる気力はない。

批評を聞きたくて僕を生かしておきたいってんなら、それでもいい。どんな動機であれ、必要としてくれる人間がいるってのはいいいもんだ。反対に自分自身も彼女を必要としているのかもしれない。頭によぎったことがある。

「早くここを出よう。警察がもうすぐここに来る」

「どういうことだね」

たまたま近くについて良かった、立神に聞かれずに小声で説明できる。彼女は応急処置を手間取ってる演技をした。

「三十分はとうに過ぎているよ、来ないのではないかね」

「立神を知ってる慎重な森里さんが簡単にドジるとは思えない、なんか理由があるんだろ。とにかく、一秒でも迅速にここは出た方がいい」

ふむ、と考える麗葉は、そうするかね、と言って仕上げに僕の腕を叩いた。声にならない声を上げて苦悶してしまう。スーパーベビ―は鬼の子だ。

「ご覧の通り、どうやら伊吹の傷は予想以上に酷いようなのだ、帰ってもいいかね」

おでこにも皺を寄せてぶるぶると痛がるこつちを立神が見てくる。なるほど、そういう作戦だったんだ。僕の素振りは天然のリアルなリアクションだ、嘘をついてるとは見抜かれない。それにしたって他に方法はなかったのか。血も大量に滲んできて、本気と書いてマジで痛い。

「この状態では続行とはいかないしな」

片付けるのに数日を費やしそうな辺りを彼が見渡す。

任務完了。内心で気が緩む。

「忘れるなよ、ウルルン。勝負はついていないんだ、必ず我が同胞へ引き入れる」

それと、と今度は僕に視線を合わせた。心臓が一瞬止まる。へびに睨まれたカエル状態だった。

すぐに麗葉が間に入って遮る。

「伊吹にはもう接触しないと約束したのは君なのだ」

「どうしてもか」

「どうしてもさ」

「そこをなんとかならないか。実に興味深い材料なんだ」

「私との決着に終止符を打ちたいならばそうしたまえ。むろん、君



の不戦敗で」

「そう来られると弱いな、参った」

「冗談半分、本気半分だったんだろっ。」

肩を竦めて彼が扉へ促す。

「さあ玄関まで送ろう。館に慣れない客人は表に出られないかもしれないからな」

迷路になった廊下を歩いた。多少は覚えてると思ったけど、行きと帰りじゃ通路の雰囲気が変わってる。一日かけたって外には出られないと言いたくなるのは大袈裟じゃなかった。

まずいのは警察が踏みこんで出くわしたときだ。麗葉が相当に怪しまれてるのは確かだし、捕まって叩かれるとボロが出る。奥の部屋で遺体がいくつも発見されるのも悪い要素になるだろう、重要参考人として連行されかねない。警察にとってはつれていく理由なんてなんでもいいんだ。この際、徹底的に遅れてほしかった。

両開きの扉が立ちはだかる。振り返ると初めに見た光景だった。無事に玄関へ来れたんだ。立神が通路の端に逸れて僕達を優先する。扉に手をかけ、予知じゃなくてただの予感がした。警察が待ち構えてるなんてことがあるんだろうか。いま正に突入の準備をしてたらどうする。高貴なおもむきのある金色のノブが重かった。

立神は不審に思っただらしい。そりゃそうだ、晴れてクソゲームを解放されるってのに外へ出ない理由はない。

「どうした、もう一ゲームしたくなかったか」

「いや、帰る、帰るに決まってる」

勇気を出して扉へ体重をかけていった。蝶つがいが軋むのが手にも伝わった。傾きかけた日が眩しくて視覚を無にする。

啞然としてしまった。ある意味で予感的中してたんだ。

そこには待ち構える姿が無数に存在した。

無敵のち雨（後書き）

一人相撲をしてる気がする今日この頃（、|、）

次話更新予定は来週頃です。

Next：「完全包围網」

## 完全包囲網（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=P47878715

## 完全包囲網

侵入を防ごうと鍵をかけようとしたところ、どすのきいた声がかかった。黒光りするサブマシンガンが突きつけられる。

「表に出ろ」

てつきり死んでるもんだと思つてた高橋だ。頬や手の甲に小さな切り傷があるものの、生死にかかわるケガはしてなかった。

「あんた、生きてたのか」

「ちょうどいい盾が沢山あつたからな、下に潜りこんだんだ」

こいつ、仲間を犠牲にして生き残りやがった。死体の山が変に盛り上がった、あの中に潜んでたんだ。刃物だらけで危なく、安否を怠つたのが甘かった。高橋は生存する本能において運も行動力も組で幹部という位置にいるだけのことはある。

銃をすんなり没収された立神とともども両腕を上げたまま外へ出た。待機してたのは警察なんかじゃなかったんだ。ヤクザ屋の群れ。

ちらほらと何度か見た顔があつた。わりと中堅どころの連中が多い。そのうちの一人が、お疲れ様です、と寄つてマシンガンを代わりに持ち、こつちへ向ける。

タバコを出す高橋に他の男がすつと近づいて火を点けた。

「他の連中はどうしたんで」

渋く低い声の問いに、彼はたつぷりと煙を吸いこみ、吐いた。

「殺された、こいつらにな。それはそれは酷いもんだつた」

一気に連中が殺気立つ。あの中に親しい奴がいたのか、血の気の多い一人が拳銃を出して、ぶっ殺してやる、と騒いだ。周りが羽交い締めにして止めてる。

おとなしくさせたのは高橋の発言だ。

「よせ、ここであつさり殺すのもつまんねえだろ。じっくり痛ぶつてやるうじゃねえか」

数口しか吸つてないタバコを地面に落とし、踏みつける。火を点

ける者がいても、吸い殻を捨てる者はいなかった。山は綺麗に大事にしましよう、ポイ捨て厳禁。

「行くか。俺はどうも土臭い場所が嫌いなんだ、薄気味わりい虫の匂いが充満してるようだよ」

部下の男がそれぞれ一人ずつついて僕らは拘束される。

大物ぶって歩く背中へ言っちゃった。

「あんなのヤニ臭さの方が嫌いだけどな」

「あ？　なんか言ったか、小僧」

「何度だって言っちゃやる。ヤニ臭ーんだよ、おっさん」

「あんまり調子に乗るなよ」

彼のアイコンタクトで二人の男が動いた。

強烈な一発がみぞおちにめりこむ。ガキ同士でのケンカで食らうパンチとは比にならなかつた。サンドバッグ状態で殴る蹴るの暴行を受ける。全身が悲鳴を上げた。

笑みを隠すのに苦労する。

いま殺そうとは考えてないんだ。奴らは警察が向かってるのを知らない。呑気にハイキングして、公道に止めた車で連れ去ろうって腹だ。実際には警察との遭遇、どたばた劇が待ってる。そうなたらこつちのもんだ。いくらでも逃げる隙がある。

僕も通った獣道をむさい集団が下ってく。

「おい、止まれ。お前ら、誰かに見られてる気がしねえか？」

間もなくして高橋が停止させた。

男達が森林を見上げながら肯定も否定もしなかつた。木々のざわめきと鳥のさえずりが聞こえてくる。

「気のせいかな。いや、念のためルートを変えるぞ。携帯が繋がりに次第、下の連中に連絡しとけや」

右方向に大きく進路を変更する。道は荒れ放題とはいえ、下っていくのに無理はなかつた。準備がいいことに先頭集団が鉈で枝葉を切り落としてるんだ。

おいおい、そりゃないだろ。警察に遭遇しないで車に乗せられた

ら終わりだ。明日には東京湾の底に沈むなんていうセンスの欠片もない結末はやめてほしい。

あつ、と声を上げる。高橋に睨まれた。

「なんていうか、そっちは行かない方がいいかな、て。道なくて危ないし、熊も出るらしいんすよ。ほら、その木、引っ掻き傷があるでしょ。人の匂いがないところを通ると狙われますよ」

「ほう、確かに動物が引っ掻いたみたいなき跡があるな。この大きさだと二メートル以上はあるか、襲われたら即死だな」

奴らは仲間同士で笑いつつ不安そうな顔をしてる。助かった、偶然この跡を見つけたのは幸運だ。トランプ株でぐてぐてだった運がここに来て流れ始めてる。

希望は一言で覆された。

高橋が腰元をまさぐる。

「だが熊なんぞ、これでイチコロだぜ」

やたらでつかい拳銃だった。

「44マグナム、俺の愛銃だ。まだ生物相手には撃つたことがないけどな」

お前あるか、と部下の一人に訊くと、ないツスよー、と苦笑いをした。ちよつとそこに立つてるよ、と言うと狙いを定める。やめてくださいよー勘弁してくださいよー、などとじゃれあつてた。

豪快な笑い声山奥で合唱する。

こいつらは銃を装備してたんだった。いい試し撃ちができると喜ぶ始末。熊を恐れるのは一般人の基準なんだ。

僕には不運の神様がついてる。

携帯が繋がるとたまかな方角を告げて待ち合わせを指定してる。到着はこつちの方が早かった。

ガードレールを超えると公道は閑散としてた。車一台来てない。電話をして連絡をする男。通話を切り、もうすぐ着くそうです、と高橋へ報告した。ガードレールに座る彼がタバコを吹かし、おう、と返事する。

いつかんの終わりだ。警察が待機するとしたら山道へ通ずる前の道路だろう。ここはだいたいぶふもとだ、僕達が徒歩で野道を下りてくるのは盲点になってしまう。

ただ一人すがりつけるのは立神だが、特に行動には出なかった。そうしてられる理由があるんだ。こいつには仲間がいる。みすみすヤクザに組織のトップを明け渡しはしない。犯罪組織もたまには役立つそうだ。

期待は真っ先に裏切られた。

車が到着する。変哲もないワゴン車が五台で、公道にすぐ溶けこめる車種だった。ゲームオーバーだ。立神に動いた素振りはない、テレパシーでも使えなきや助けを呼ぶなんて無理だ。

三人とも先頭の車に乗せられた、高橋も一緒だ。この不審な集団を誰かが見て通報してくれるかもという淡い想いはスライド式のドアで断たれる。来たときと同じで人気がなかった。

山道を下り、街へ入る。数台の乗用車とすれ違った。止める者はなく、大学のある中腹あたりまでノンストップだった。

速度が急激に落ちたのはその先だ。渋滞になって、ちっとも進まない。

運転手が告げる。

「検問みたいですね」

「銃は？」

「大丈夫です、ケツ走ってる車の座席内部に収納してます。奴らだけ他のルートで行かせますよ」

早速電話する。

高橋が助手席から身を乗り出して振り向いた。

「いいか、騒ぐんじゃねえぞ。俺が塀の中に入るとしても、お前らをぶつ殺すのは決定事項だからな」

僕はほとんど聞き流して他のことを考えてた。チャンスだ。一か八か暴れて知らせるか。不審車両として扱われれば色々調べられる、またとない機会だ。

脇腹に硬い感触が当たった。僕を拘束する隣の男だ。上手くコー  
トで隠れて見えなかった。

「サイレンサー装着の銃だ。寝てる奴がいたところで怪しまれない  
だろ」

漫画みたいな悪どい笑みをする高橋。

万全ですか、そうですか。クソッ。

列が短くなってワゴン車が停車した。運転手が免許証を見せる。  
制服警官がチェックを始めた。救世主がメートルしか離れてない  
ところにいるっていうのに口に出せない。

ここだここだここだ、ここしかない。頭で分かっても脇腹の凶  
悪な感触が躊躇させる。もしかしたらこの先にもっといいチャンス  
があるんじゃないかって都合のいい願望を考えてしまう。ジレンマ  
がもどかしくて足裏がうずうずしてくる。

まずない、ここなんだ。ここですつぱりと決断が必要だ。不幸を  
先延ばしにしてたつて状況は酷くなる。いまは人がいる、警察がい  
る。撃たれても一発がせいぜいだろう、血反吐を漏らされて困るの  
は奴らだ。

死ぬまでにタイムラグがある。運が良ければ助かる。

一呼吸のあとに声を張り上げてやろうとした。

警察官の言葉が思い留まらせた。

「硝煙反応を検査しますので、そのままお待ちください」

「あ？ なんだそりゃ」

高橋はたまらずに抗議してる。当たり前だ、こいつは銃を乱射し  
てる。不審者扱いは免れない。

チェックメイト。

運がやつと流れてきた。いままでの希望的観測じゃない、間違い  
なく助かるんだ。

傍に控えてた検査員が運転手を調べてる。反応なし。そして助手  
席の方に回っていく。高橋が小声で言う、出せ、と。

車が急発進した。



尻餅着く検査員。警察官が無線連絡してるのがバックミラーに映る。ちくしょうなんだってんだ、と悪態をついた高橋はタバコを落ち着きなく取り出した。ジッポを擦る。火が点かない。何度やっても点かなかった。フロントガラスにタバコと一緒に投げつける。

こつちを振り向いた。

「おめえらが呼んだのか」

「そんな暇がなかったのはあんたが一番分かってるだろ」

座席を殴打してる。苛立ちをどこかにぶつきたい気分なんだろう。直接の原因じゃなくても小さなミスが一つでもあれば必要以上に責め立てるのが高橋という男だ。部下が裸にされて足蹴にされるのを僕は事務所で飽きるほど見た。

「やばいですよ、追ってきてます」

「振り切れ。二つ先の交差点を右折すれば大通りだ、逃げ道はいくらでもある。ナンバーも偽造してるからな、足はつかない」

少々の冷静さを取り戻して車のシガーライターを手にした。新しく啜えたタバコに再び火を点けようとしてる。

寸前で口をこぼれた。

パトカーが並んで前方を塞いでたんだ。

「いくらなんでも早過ぎんだろ、どうなってんだ。俺らが来るのを知ってたのか」

「どうしますか」

「行くしかないだろ。突っこめ」

「しかし、それだと」

「るせえっ！ 覚悟決めろ！」

アクセルが思いっきり踏みこまれる。重力が後ろへ傾いて背もたれに押さえつけられた。

腕を振って停止を求めてた制服警官が脇へ散る。

衝突。

衝突。

エアバック作動。フロントガラスが埋まって視界はほぼゼロだ。

車体が横へ滑っていくのが分かった。

エンジンがうんともすんとも言わなくなる。

ドアがスライドした。外の光が入る。逆光を突き抜けて顔を出したのは馴染みの顔だった。油断なく拳銃を突きつけてる。僕を拘束する男が銃を落として腕を降参させた。警察に囲まれながら罪を重ねる度胸はないようだ。高橋も同様で他の刑事に押さえこまれてる。僕は車を降りた。アスファルトの感触が生きてるのを実感させてくれる。

「森里さん、ずいぶん用意周到なんスね」

「女性から匿名で通報があつてね。いまから通る車にあなたが捕まえたい人間が乗ってる、てさ」

くすくすと笑い声がした。車内の立神だ。

女性と聞いて上戸さんの顔が浮かぶ。彼女が裏切つて立神も逮捕されるのを良しとしたんだろうか。

「硝煙反応で割り出せるとまで教えてくれたよ。たまたま僕が向かつてた場所だけに信憑性は高かった」

立神に聞こえない小声で、なんで遅れたんスか、と訊く。

ああそのことだけど、と言葉を切つて森里さんが後部座席を見る。そこにいる男の纏ったオーラがヤクザじゃないと直感で分かったよ。うだ。

「立神荘士だな」

「誰のことやら」と言つても見逃してはくれないんだろうな」

二人の刑事が立神を連れ下ろし、手錠をかけた。

くれぐれも用心するんだ、と助言する森里さん。計五人の刑事がついてパトカーへ歩んでいく。あんな嚴重に確保されたんじゃない。あいつでも逃げられない。僕も世話になったことがある、訓練された警察関係者を相手に武器も持たないで対抗するのは不可能だ。

ざわめきが増えてくる。どこから湧いてきたのやら、野次馬が一带を取り囲んでいた。制服警官が警備員役になつて防いでる。パトカーが何台もあつてそこにワゴン車が突つこんで逮捕者が出たりと事

態が大きくなってちゃ目立つのが当然だ。

ヤクザ連中が続々と捕まる姿は壮観だった。順次パトカーに押しこめられてる。銃を運んでた車も別働隊が逃亡を阻止したようだ、途中で列を抜けたせいでマークされてたんだろう。

最後に残った麗葉が車を降りた。彼女と森里さんが向かい合う。こっとなつたらフオローしようがない。できるなら会わせたくない。しかしここで警察が介入したからこそ助かったんだ。任意同行か死か、どっちがいいかは決まってる。彼女ならなんとか切り抜けるだろう。

え？

体が緊張で固まった。森里さんが手錠を出したんだ。

一枚の紙切れを提示した。

「銃刀法違反、および傷害の罪で逮捕する」

ハンカチを捲いた麗葉の右手に手錠がかけられた。夢を見るような、不確かな光景だった。彼女と手錠がこっも似合わないもんだとは思わなかった。

僕は口をぽっかり開けたまま声が出てこない。唾を飲んで、ようやく言葉を紡ぐ。

「どういうことツスカ。なんでこいつまで逮捕されるんですか」

「令状の通りだよ。銃の所持、その使用による傷害。まだまだ出てくると思ってるけどね、今回の名目はそんなところだよ」

「証拠は、あるんスカ。ないのにこんなことしてるなら」

スーツのポケットを出てきたのはビニール袋だった。小さな拳銃が入ってる。麗葉の母親の形見だった。なんで森里さんが……。

「先日の発砲事件で容疑濃厚ってことでね、家宅捜査させてもらったんだ。廃校で撃たれた容疑者の膝の皿から検出された弾丸と比佐香葉子が殺された現場で見つかった弾丸の線条痕が一致した。発射したのがこの銃なのは鑑識課のシバさんが確認済みだよ」

来るのに時間がかかったのはそのためだったんだ。

麗葉が立神に呼び出され、いない間に勝手に事務所を漁って、勝

手に鑑識にかけて、勝手に逮捕。

「そんなのありかよ。警察だからってそんなことしていいのかよ。なんでもありか」

だんだん笑えてくる。

森里さんを見上げて襟首を掴んだ。

「立神が逮捕されるのは分かるけどよ。たまたま形見が拳銃で、それのなにが悪いんだよ」

「比佐は例のストーカーへ向けて発砲してる。立派な犯罪行為なんだよ」

「正当防衛に決まってるだろ！」

背広の生地を固く掴んで揺さぶる。でかい図体はほとんど動かなかった。

「男相手にこんなちくりんな女が勝てるわけないじゃんか！

知ってるか、あの男は合気道やって俺だってボコボコにされたんだ。危険な奴なんだよ、ああしなきゃ殺されるかもしれなかった、あんただって分かるだろ、なあっ森里さん」

肩に誰かの優しい手が置かれた。

草加部さんだった。

「もういいんだ、すまなかった。まさか強制搜索されるとは思わなかったんだ。私の責任だ」

「草加部さんが謝ることじゃないって」

そもそもあなつたのは誰の責任だ。

本当は分かっている。僕は気づいてないふりをしてたんだ。

「麗葉は俺のために撃ってくれたんだ。俺を助けるために」

あそこで撃たなかったら明確な証拠はいまだなかった。敢えて発砲したんだ。

なんで撃つたかなんて問い詰めて麗葉が、君のためだった、なんて臭くて恩着せがましいことは言わない。

だから

「だから！」

両手を差し出して頭を下げる。

「捕まえるなら俺を捕まえてください」

「それはできない、無理な願いだよ」

「こいつ、麗葉は、ちよつとぶつ飛んでるところあるけど、それは犯罪者になりたいわけじゃなくて、そういう教育受けてなかっただけっていつか、頭は俺より何倍もいい奴だからちよつと言えは分かつと思うんす。今度なんかしたら牢屋でも五右衛門風呂でも入れて構わないんで、今回だけは俺の逮捕で見逃してください、お願いします」

頭上で呆れてる森里さんの顔が想像できる。僕はなんてみじめなんだ。

構うもんか。どんな方法でもいい、彼女が捕まらないようにするんだ。なにかないか、考えろ、考えろ、考えろ。立神のクソゲームをクリアしてる僕ならなんか思いつくだろ。脳みそを雑巾みたいに絞り出せ。

そつだ。

顔を上げる。

「俺、ここにいるヤクザに雇われて色々汚いことやってきたんすよ。身辺洗ってくれればすぐ分かります、それなら逃すわけにはいかないでしょ」

「証拠はどこにあるんだい」

「そんなのそこの奴に聞いてくださいよ。そつだ、いつもつるんでた奴らがいるんすけど、そいつらなら俺に罪かぶせてなんでも吐きますよ」

これでどつだ。なんせ確固たる事実だ、突破口になる。一つでも犯罪を犯してれば、残り全部も僕がやったことにすればいい。この銃の所持者も僕。ヤクザと繋がりがあんなら巡り巡って持つことになったと言つてもなんとか通る。通すんだ！

森里さんはゆっくりとまばたきをした。

「僕はそうは思わない」

「なっ!?!」

なんで!

「その友達やヤクザが罪を重くしたり捕まるかもしれないリスクを抱えてまで素直に白状するとは思えないよ。そんな相原君を僕達警察が捕まえる権利はない」

なんでこうなるんだ。

捕まりたくないときは追ってくるのに、捕まりたいときには逃げていく。そんな不条理が許されているのか。僕は法律違反をした、懲役を食らうようなことだ。でも逮捕はされない。おかしいだろ、どう考えたって。

なんのための警察だ、なんのための法律だ。ふざけんな。

憤りが唇を噛ませる。

怒っても脳が働いててくれた。

森里さんを殴れば公務執行妨害で現行犯逮捕だ。誤魔化されようがない罪だ。

拳を形作る。彼ものんびりしてるようで刑事だ、訓練を受けてる。上手く躲されて、またはぐらかされないように油断してるところを狙うしかない。

刑事が一人やってきた。立神をパトカーへ乗せた報告だ。森里さんが横へ向いた。

ここだ。一発でダメージが与えられるようパンチのスイングを大きくする。

発射しようとする直前に後ろ頭を叩かれた。

「馬鹿者、屁理屈にすらなっていないよ。私は捕まった、ただそれだけのことさ。君はいちいち大袈裟なのだ」

麗葉だった。

呆気にとられる。拍子抜けだ。悲観して絶望な心境にあるのかと思いきや、あっけらかんとして開き直ってる。

「いいのかよ。あんだだけ捕まるのを嫌がってたのはお前だろ」

「草加部、あれを持ってきてくれたかい」

「おい、無視か。俺はあんたを心配してだな」

草加部さんに手提げを渡される。なんだこれ、紙の束が入ってる。「私の新作だよ。感想はちゃんと伝えてくれたまえよ、今回は自信作なのだ」

「そんなことよりもっと重要なことがあんだろ」

おおそうだった、とぼんと手を打った麗葉が森里さんのスーツを引っ張る。

「面会や手紙ぐらいは許されるのかね。そこははっきりしておかないと何年もあとに感想を聞くことになるからね」

手紙なら自由に構わないよ、と彼は応えた。麗葉は心底ほっとしたようので、にんまりと表情を崩す。

彼女を睨まずにはいられない。

「ふざけてる場合か。逮捕だぞ、逮捕なんだぞ。事態が分かってんのか」

「分かっていないのは君の方さ。法律を破れば捕まるのは至極当然の成り行きではないかね」

なにを言っているのだね君はハハハ、とでも言いたげな目だ。ド直球な正論に返す言葉がなくなってしまった。

なにも言えないでいると麗葉は草加部さんへ身を預けて胸に顔を埋めた。

「世話になった、ありがとう」

「帰りを待っているよ」

二人の姿は妙にマッチしていた。それはまるで。  
すぐに離れる。

「連れていってくれたまえ、森里刑事。時間は有限、大切にしないではいけないのだ」

彼女にコートがかけられた。野次馬が携帯を構えて写メールを撮ってるんだ。小さな背を押して森里さんが連行する。

待てよ。呟くも、二人はどんどん離れていく。

目一杯に息を吸った。

「待てよ！ 理由を教える！ 納得いかねえよ！ 警察嫌ってたんじゃねえのかよ！ どうしていまさら簡単に捕まるんだよ！」  
上半身を捻ってこっちを見る麗葉。

戻ってきてくれるのかと思った。ここから大逆転するのかわかった。

違った。

「たまにはいいものさ。悪くない」

逃げる気が全然ない表情だった。むしろ憑き物が落ちた安らかなものになってる。そんな顔を見せられたら僕はどうしたらいいんだ。「ああそうかよ、もう勝手にしろ。さつさと警察でも地獄でも行っちゃまえ。小説だって読んでやらないからな」

応答はない。

背筋を丸めてパトカーに乗る。

「絶対読まねえからな！ 分かったか、お化け女！」

言った瞬間、破裂音が辺りの空気を震撼させる。だいぶ聞き慣れてしまった音だ。

異変があったのは立神のいるパトカーだった。野次馬の一人が車内へ銃を向ける。なんの不審さもない若者だ、誰も警戒してなかったんだ。窓ガラスに血の跡がべったり付着してる。

悠々と立神が出てきた。一拍遅れて周囲の刑事や私服警官が二人に銃を向ける。

立神荘士が笑う。

笑う。

盛大に笑う。

ポリウムがどんどん上げられる。狂喜の爆笑だった。僕と麗葉を一瞥して下を指差した。

「伏せる」

死ぬぞ、と聞こえる。

野次馬全員がさつきまで写メールしてた携帯を構えてなかった。代わりに突き出したのは拳銃だ。ぐるりと周りを囲み、警察の何倍



もの銃口を向ける。

僕が叫ぶ。しゃがめ。みんなに伝わったかは分からない。無数の銃声で埋め尽くされてた。刑事がどんどん倒れてく。悲鳴と呻きが連鎖を重ねて死体を増やしていった。

火薬の匂いが鼻孔を突く。

静けさが戻ったとき、残ったのは僕や麗葉、草加部さんに森里さんを含めた幾ばくかの刑事だった。他は、地獄絵図だ。

手錠を外した立神がパトカーのボンネットに座ってた。背後に横並ぶ者達が誰か、一人一人は知らなくて予想ができた。

これが、夢幻倶楽部。

「なかなか楽しめたぞ。ウルルンを仲間に入れ損ねはしたが、久しぶりにエキサイティングな日々だった」

「仲間は来てなかったんじゃないのか」  
声が震えた。

「あの屋敷にはいなかった、だろう？」

そういうことか。あそこにはいないから本当に誰も来てないと思いきんでしまった。道中を監視してたのも夢幻のメンバーだったんだ。隠密の尾行はお手の物ってことか。現にちよつと前までそれぞれ主婦や中高生、サラリーマンの服装が景色の一つになってて気づけなかった。

なんということを、と森里さんが倒れ伏す同僚を見渡す。どこから手をつけるべきか分からないかのようにあつちこつちを彷徨った。立神を視野に入れて声を張る。

「貴様は、どこまで非情なんだ！」

リボルバーを抜いて奴へ向ける。

夢幻倶楽部の照準が森里さんへ一点集中した。それらを立神が下ろさせる。

「撃たせればいい」

森里さんは怯えてた。人差し指に力が込められるも、金縛りにでもあつたように動けないでいる。

立神はボンネットの上で両腕を広げた。

「どうした森里刑事、撃つんだ。同僚を無差別に撃つたこんな奴を許してはいけない。そうだろう？ 犯罪者が相手だからといって躊躇しているのか？ 中途半端な正義感を抱くな、そんなものは偽善だ。諸悪の根源を撃て。いいんだ、撃つていい。殺せ、鉛玉を撃ちこんでやれ。できる、お前にはできる。俺を生かしておいたらまた同じようなことが全世界で起こるんだぞ。犠牲者を増やしているのか。チャンスはいまだ、撃て、撃つんだ！」

早口な激昂に森里さんが嗚咽を漏らす。小刻みに揺れて狙いが定まってない。あれじゃ命中は難しい、完全に吞まれてしまってる。

「撃てないよなあ、これだけの敵に囲まれてたら。自分が殺されると分かってるんだらう？ 賢明だ、実に実に。それが正解、お前は間違っていない。むしろ誇らしく思え。これから死にゆく幾百幾千幾万の他人より、たった一つの自分の命の方が誰でも大事だ。それが人間だ。いい、すごくいい。銃を向けただけでもよくやった方だ、そこまでやれば正義感も充足している。俺はお前を認める、立派な刑事としてな」

そんなんじゃない、と発する森里さんの声は酷く弱々しかった。

あごが震えてかちかち鳴ってる。

「僕は、僕は自分の命なんか。それより一人でも多く助けるんだ。こんなこと、あっちゃいけない。平和を守るのが僕の使命だ。撃たないのは、お前みたいな人間でも一つの命だからだ。そうだ、そうだよ」

上擦つて、より白々しくなった。

僕は彼側の人間で、いわば味方で、考え方も共感できる。でもいまの彼の本心が口を出たのと違うのは明白だった。建て前と本音。一理あつても、過半数以上が保身だ。そんな一理、嘘も同然。

見たくなかった姿だった。

「だから、その、僕はお前を、逮捕する」

覇気なく、一步を踏み出す。

立神の斜め後ろにいたサラリーマンがその脚を撃った。  
転がり叫ぶ。

「おめでとう、よくやった。そうしてほしかったんだろう？ 自分だけ無傷で助かったのでは警視庁のみんなに顔向けできないよな」  
違う違う違う、と連呼しながら脚を押さえてる。

滑稽だった。

「否定するな、受け入れろ。お前はその程度の男なんだ。普段どんなに美徳を持って立派に立ち振る舞っていても状況が状況なら逃げ

」

銃声が彼のしゃべりを遮った。

フロントガラスへ立神が倒れる。小さく爆ぜた右肩が出血してパトカーの白いボディを汚した。

弾道を追った視線の先には麗葉がいる。傍で倒れてる刑事からくすねた銃を構えてた。

「黙れ、外道。君より森里刑事の方が何倍も真つ当だ。偽善でなにが悪い。君に正義が貫けるのかね」

今度は彼女に銃口が集まった。

「私にはできない」

銃を捨てる。

「本当は心臓を狙っていたのだ。撃ち抜けば即死、私にも死の報復が待っている。ほんの少しの迷いが狙いを誤らせた。私には正義を貫けない、私も偽善。いや、犯罪者とされる私は偽善未満だ。森里刑事のような偽善は人間において最善なのだと思う。純度ある正義はあらゆる矛盾を生む、いくなれば神にしか扱えない代物なのだよ」

肩を抱えて起きる立神が一笑した。

「確かにできないな、俺にも。人間に、それほどわりに合わないものはない」

撤収の準備だ、と声をかける。近くの男は、ですが、と狼狽した。ボスを撃った小娘を生かしちゃおけない。胸の内で復讐の火が轟々

と燃え盛ってるに違いない。

どよめく連中を凜とした声が突き抜ける。

「立神様の命令が聞こえないの。だからあなた達はいつまで経ってもエミネントのままなのよ」

姿が見える前に上戸さんだと分かった。

「立神様、あちらにお車を待たせています。肩をお貸ししましょうか」

「いや、いい。俺はいま愉快なんだ。今日はいい日だった」

ボンネットを降りた立神が群衆に紛れて見えなくなる。ほぼ同時に夢幻倶楽部のメンバーがばらけて街へ溶けて消えていった。

彼はもういなかった。

残ったのは上戸さんだ。麗葉を鋭い目つきで見つめてる。

「いつか借りは返すわ」

「断る。それに、しばらく私は獄中暮らしなのだ」

「お似合いよ」

「ありがとう」

鼻で笑って向き直った上戸さん。

目が合った。

「生きて出てきたのね」

「ああ、約束を忘れないでくれよ」

彼女は、とぼけるふうにベ口を出して踵を返した。返事がなくても僕は信じてる、きっと自首してくれる。

街の真の住人が通報したんだろう、応援のパトカーが駆けつけた。脱力してアスファルトに膝をつける。

遅いつての。

あるいは遅くて良かったのかもしれぬ。これ以上の死人を見るのは敵でも味方でも、もう勘弁してほしかった。

## 完全包围網（後書き）

あと少しで完結です。

こんなところまで読んでくれている方がいるかどうか分かりませんが、

もうしばしお付き合いくださいm（ ）m

次話更新予定は来週頃です。

Next:」 近くて遠い、遠くて近い「&」 比佐香葉子の日記

## 近くて遠い、遠くて近い（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

x?ID=P47878715

## 近くて遠い、遠くて近い

警察官三十人余りが殺されたあの事件は漏れなく新聞の一面を飾った。幸か不幸か麗葉逮捕の記事は隅に追いやられ、誰も見てないに等しかった。おまけに未成年のおかげで名前も載ってない。読む人がいても、どこかの十代がまた逮捕されたとしか認識されない。彼女がいなくなったと自覚してるのは僕と草加部さんぐらいなもんだ。

高橋らの組は壊滅状態になった。報復もない。素人に殺されたとあっちゃ情けなさもあってか大元の組に切り離され、あっさり解散したという。立神の巻き添えを食うとは、運のない連中だ。ご愁傷様。

僕は最後の掃除をしに来てた。麗葉の事務所にはしばらく訪れてなかったんだ。念のために渡されてたスペアキーで入った。普段は誰かしらいて、使ったのは初めてだ。驚いたのは部屋が案外さっぱりしてたことだった。証拠品としてほとんど押収されたんだ。

張り切って早朝に顔を出したのに、片付けはあっさり済んで物足りなかった。

麗葉の年季の入ったイスに座る。部屋の雰囲気が変わってた。匂いもだ。近くにあった本を、読むでもなく開いてみる。あいつが猫背でいつもこうしてた、唇にしおりを挟んで。

急行電車がかたんことんと騒々しさを纏って通り過ぎた。

耳鳴りのする静けさ。

鍵穴に挿しこむ音がした。ノブが回る。

びっくりした顔。僕もびっくり。彼女かと思ったんだ。

草加部さんだった。

「来てたのかい。驚いたよ、てっきりあのコが帰ってきたのかとよぎってね」

すみません勝手に、と立とうとするのを、いいから、と座らされ

た。

「彼女の新作は読んだかね」

「まだです。なんか落ち着かなくて、活字を追うほどの集中力がな  
いってというか、意識が分散しちゃって一ページ目から進まないんで  
すよ」

「人も沢山死んだんだ、無理もない。酷いようなら医者にかかる  
いい、PTSDになつても不思議ではない事件だったからな」

安楽イスによっこらせと腰を下ろす草加部さん。

彼は寸前にあらゆる証拠を隠滅するのに成功していた。

ただ一つを除いて。

警察の車が階下に停まり、上がってくるまでの間じゃ形見の拳銃  
は探し出せなかった。部屋の散らかりが邪魔をしたんだ。

「君に来てもらわなかったのが災いしたよ。掃除は私も苦手だね、  
例の有様さ。おかげで彼女の筆がはかどったわけだがね」

ははは、と笑ってる。無理をしてるふうに見えた。

僕に電話で来なくていいと告げてきたあのあたりからずっと物書  
きに精を出してたんだ。それを僕は嫌ってるものと勘違いしてしま  
った。あいつらしいといえればあいつらしかった。いきなり完成品を  
出して驚かせようっていうんだ。まんま子供だ。

「草加部さんって、どうして麗葉のもとで働いてるんですか。普通  
なら退職を考える歳なのに」

彼が瞼をしばたたく。

「年寄りが働いちやまずいかね」

「そういうわけじゃないですけど、なんで麗葉のところなんだろう、  
て。草加部さんなら自立だってできるだろうし。その、十代の秘書  
なんて不自然かな、て」

「縁さ。TVで有名だった彼女が街中でうろついていたところをた  
またま声をかけた。きっかけは、それだけのことだよ。私も六十間  
近でね、仕事も色々あって辞めようかと思っていたんだ」

「なんの仕事ですか」



「薬品関係を少々ね」

薬品 自分で組み立ててた推測と符号が一致してくる。  
草加部薬品工業株式会社。

僕が物心つく前からあつた業界の最先端に行く大企業だ。三枚の草葉のマークで風邪薬を始めとした様々な商品が親しまれて使われている。幅広い世代に馴染みのある会社だ。

「もしかしてあの会社のトップなんですか」

「昔の話さ。草加部の名は残っても、いまや中で動いているのは血の繋がりのない若手だ。私には子供がいないもんでね」

「嘘だ」

「嘘なものか。ちょっと待っていたまえ、ネット回線は生きていたはずだ、会社のサイトに繋いでみせよう。創業者としての私の名がしっかり載っているよ」

鞆からノートパソコンを引っ張ろうとしてる。

「俺が嘘だつて言ったのは子供についてです。草加部さんには子供がいる。違いますか？」

パソコンを膝に乗せて彼は黙った。

「逮捕されたとき、麗葉と抱き合つてるところを見て感じたんです。麗葉と草加部さんは親子なんじゃないかって」

「私とは親子と言つても自然な年齢差で、かれこれ四年の付き合いで親しくもあるがね。親子は無理がある、根拠がない」

「もし親子と仮定するなら彼女のために力を尽くしてるのも辻褄が合つじゃないですか」

「やれやれ、と首を振つてそれに関してはなにも言つてくれなかった。代わりに鞆を探つて一冊の大学ノートを出す。

「これは君が持つていてくれないか。うん、その方が安全だ」

薄汚れてて表紙はよれよれだった。机に身を乗つけて受け取る。

「彼女の母親のもう一つの形見さ」

「比佐香葉子さん、ですよ。麗葉を生んで育てた」

油性マジックで「日記」と淡泊な筆跡で書かれてた。インクが落

ちて掠ねてる。どろどろなく麗葉の字と似通ってた。

## 比佐香葉子の日記（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.e>

X?ID= P47878715

## 比佐香葉子の日記

初めての模試で麗葉がトップの成績だった。私の教育方法が正しかったと証明された。まだ気は緩められない。あいつの子供には負けたくない。

毎度、我が子ながら驚かせられる。教えたことは忘れない。理解力も早い。明日は平方根と二次関数を教えよう。……麗葉が羨ましい。

小学校に入学した。名門中の名門だ。校内にはライバルになりそうな子供がいなかった。あいつの子供もいない。私の麗葉には誰も敵わない。

小学校中学年にもなったのに麗葉の噛み癖が治らない。枕や布団の端を嚙りながら寝ている。勉強の最中、消しゴムや鉛筆も噛んでしまう。些細なこと。期待以上に結果を出してくれる彼女を私は愛している。

至って順調。

十歳の天才少女としてテレビ番組に出演する。プロデューサーに年に一回はメインでやりたいと持ちかけられた。近所で有名になった。凡人が口を利けるのはいまのうちだ。あいつの子供も凡人、誰も名前を知らない。勝ちを確信する。

麗葉はもつとできる子だ。勉強量を多くしよう。誰もが足元にも及ばない人間に育ててあげよう。

物理を教えているとき、唐突に噛みついてきた。歯形がくつきり残って血が滲んだ。叩くとおとなしく勉強を再開した。彼女がなにを考えているのか理解に苦しむ。

私のケアレスマスを麗葉に指摘された。ときたま見せる彼女の笑顔が恐い。

あいつから電話があった。近くに引越してきたらしい。会社経営者である夫の自慢話を嫌味なほど聞かされた。私は子供について

遠回しにけなしてあげた。表面上は気にしていないようで、言葉の端々に悔しさがみなぎっていた。凡人。確かいまは上戸という姓だっけ。上戸？ どのどなたですか？ 笑ってしまう。

有名私立大学の入試問題をすらすら解く麗葉を見ると嬉しさと恐怖が相まった気分になる。私が教えられることがなくなってきた。明日はなにを教えよう。

麗葉が寝る時間以降、私も久しぶりに参考書を開いた。結構忘れていた。

麗葉に間違いを指摘される。私のミスは、きつと寝不足のせいだ。昨夜、私が解けなかった問題を目を離れた際に麗葉がやっていた。全問正解だった。

最近、見下されている気がする。目が怖い。貪欲に学習を求めてくる。私にはなにを教えていいのか分からない。適当な理由をつけて休日にした。

あの子の顔を見たくない。忙しさを装って部屋にこもる。今日もこもる。

しつこいので、あとは自分で学ぶように言った。入院させられた。

久しぶりの日記。あの日、食事の準備をする私を見て麗葉がこんなことを言った。

「ママは落ちこぼれなの？ 知らないおばさんが言ってたよ。あなたのママは私に負けた落ちこぼれなのよ、て。ねえ、本当？ ママって負け犬なんだ」

蔑みの目だった。溜まってた物が爆発した。彼女を何度も叩いてしまった。気がつく病院だった。手のひらが耳に当たって麗葉の鼓膜は破けてしまったらしい。医師に再生すると聞いて安心した。

麗葉がお見舞いに来てくれた。意外だった。あんなに見下しているように見えた瞳が恐くなくなっていた。

私の髪を櫛でといてくれた。くすぐったくて気持ち良かった。麗葉は私のように綺麗な髪にしたいと言った。ちよつと難しいかもし

れない。あの子は癖っ毛だ。私も彼女に櫛をかけてあげた。

私はなにをしていたのだろう、とふと思った。成長した麗葉は誰かを無能と罵って生きていく人生をするに決まっている。私がそういうふうに着てたのだ。一番嫌いだったあの女と同じに着てしまふ。そんなのは一度も望んでいない。私はなにをしていたのだろう。ずっと考えていた結論が出た。私は殺されるべきだと思う。死であの子に償いたい。麗葉に殺されたい。しかし素直に殺してくれるだろうか。なにか方法を探そう。

病院を抜け出してヤクザの親分さんに会いにいった。財産の半分を寄付して何度もお願いした。事情を聞いてくれた。隠し持つのにいい小さな銃を頂いた。オモチャとしてプレゼントするには最適だった。明日、麗葉に殺されようと思う。

失敗した。トリガーが彼女の手には重すぎた。親分さんに訊くとそういう銃だという。他の銃を入手するにはしばらくかかるらしい。そんなには待てない。このままだと私は罪の意識で狂ってしまう。握力を鍛えさせよう。

お見舞いに来ると彼女はずっと銃を離さなかった。ずっと遊んでいる。考えてみるとオモチャらしいオモチャを与えたのは初めてだった。早く引き金を引けるといい。

引き金が動きそうだった。そろそろかもしれない。今日はもう少しで撃てそうだった。待ち遠しい。

明日には殺されそうだ。彼女はなににも知らずに握力アップを喜んでいて。私も嬉しい。

失敗。あと一歩が足りない。もう我慢できない。明日も駄目なら手を貸そう。ちょうど小学校を卒業する明日に殺されよう。最後まで勝手なママでごめんなさい。私とは別の、いい人生を送ってくれることを願う。さようなら、私の麗葉。警察にだけは捕まらないでほしい。

比佐香葉子の日記（後書き）

次週の更新分で最終話となります。  
お楽しみに（？）

次話更新予定は来週頃です。

Next: 「犯罪者は世に戻る」 & 「刃中の羽虫」改稿部

## 犯罪者は世に戻る（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgen.ex?ID=P47878715>

尚、返事が必要な場合は1の手段か、3の手段でメールアドレスを記入してください。



## 犯罪者は世に戻る

ソファアに寄りかかって日記を広げる。何度読んでも麗葉が殺したんじゃないのは明白だった。

草加部さんが本棚の隙間に落ちてるのを昔見つけたんだという。これを警察に届け出ないのは彼女が希望してないからだ。直接口にしたわけじゃないが、麗葉ならこの日記の存在を覚えてるだろう。人生がこうなった原因。罪が軽くなるかもしれない物品があると知りながら訴えないのはそうしてほしくないからだ。

麗葉は賢いようで馬鹿だ。さんざんエゴで振り回してきた母親を庇ってなんになる。いっそのこと森里さんに届けてやろうかとも思った。この数ヶ月、何度も思った。できなかつた。

警察に逮捕されるかもしれないリスクを負ってまで銃を持ち続けたのはなぜだ。病院から日記を持ち帰ったのはなぜだ。母親の名字を捨てなかつたのはなぜだ。

そして

「警察にだけは捕まらないでほしい」

自殺を手伝わせておいて、こんな身勝手な願いを大事に守ってきたのはなぜだ。

考えるまでもなかつた。テーブルへ日記を放る。頭の後ろで腕を組み、天井を見上げた。

なにもする気がしなかつた。貯まったお金は家賃や光熱費、食費にあっさり消えた。このマンションは一人暮らしをするには大きすぎる。そろそろ引っ越して働かないと野垂れ死にだ。せつかく立神から逃れたつてのに、それじゃ意味がない。

日記にあつた上戸という女は、まさかあの上戸さんの母親なんだろうか。偶然の一致とは思えない。だとしたら、彼女が執拗に麗葉へ絡んだのは立神関係だけじゃないことになる。

血の因縁。本人に問えば、そんな陳腐なもの否定するだろう。しかし、もしこのことを知ってたとすれば、心の奥底にはなんらかのわだかまりがあるはずだ。立神はそれを計算に入れ、麗葉へけしかけた。闘争心を煽るためか精神的な成長のためか、意図は分からないけど、あり得なくはない。

見事に僕は二人に巻きこまれたってわけだ。それも、終わった。なにをするのも自由。いつからだって真つ当な生活を送れるんだ。よし、やるか。

体を起こす。冷蔵庫の作動音がぐおんぐおん聞こえてきた。部屋に永遠と鳴り響いている。他にはなにも聞こえなかった。

寝転がる。

まあ明日でいいか。

なんでも始められるのに、その言葉の無限性とは裏腹に不自由だった。前まではお金さえあればどうとでもなると思ってた。僕が求めてる物ってなんなんだろう。

インターホンが鳴った。

気のせいだと思って待つと、もう一回鳴る。経験上、家を訪ねてくるのは新聞屋が知り合いだ。新聞屋は昨日来た。

まさか帰ってきたのか、あいつが。めばしい小説がなくて脱獄してきたのだよ、とか言う姿を想像するのは容易かった。

ソファを転がり落ちて四つん這いになりつつリビングを駆け出る。

玄関を開けた。

途端、抱きついてくる。麗葉　じゃなかった。あいつはこんなことしない。こんなことをするのは一人だ。

「なんだ、綾木か」

ん？　綾木？

体を離してまじまじと見つめる。膨れっ面をしてるのはどっからどう見ても綾木麻由だった。

「なんだとはなんですかあゝ、久しぶりの麻由なのにいゝ」

「帰ってきたのか」

ブーツを脱いでどしどしと上がりこんでくる。

「そうですね、脱獄してきちゃいました」

「脱獄って、おい」

「家を、です。ずっと監視されてる感じで、先輩に電話も手紙もさせてくれないし、まるで牢屋でしたよ」。麻由は犯罪者かってえの。一発ぐらい殴ってくれば良かったです」

しゅっしゅっと小さなパンチを試してみせる彼女。

僕は笑った。

「綾木は相変わらずだな」

「そうですね？ 麻由、大人っぽくなってませんか？」

「全然」

「ふう」。せっかく先輩は格好良くなったって言おうとしてたのに」

不思議と心の隙間が埋まってくる。

手紙、か。そろそろ書いてみるのもいい。気分が乗らなくてずっと新作の感想を伝えてなかったんだ。どう書き出せばいいのかも思いつかなかった。

いまなら書けそうな気がする。自分に必要な物の片鱗が見えてきた。

一行目は、こうしよう。

こっちはなにも変わってないけどそっちはどうだ、と。

「俺は俺のままだよ、たぶん」

それでいいだろ、の問いに綾木が元気に返事をした。

どうか明日も変わらぬ日々でありますように。

## 「刃中の羽虫」改稿部（前書き）

お願い

少しでも上達したいので、なにか思うところがありましたらコメントをお願いします。

批評といった大層なものでも構いません。

「このシーンが面白かった」や「ここがつまらなかった」など言ってもらえればありがたいです。

一つでも多くのヒントが欲しい状況なので、素直で率直なコメントをお待ちしています。よろしくお願いします。

コメント送信手段

1：小説評価／感想欄

コメントを公開したくない場合は下記的手段

2：「作者紹介ページ」>「メッセージを送る」

3：メールフォーム

<http://www.formzu.net/fgene.x?ID=P47878715>

尚、返事が必要な場合は1の手段か、3の手段でメールアドレスを記入してください。

## 「刃中の羽虫」改稿部

腹が減っていた。照り焼きの甘くて美味そうな匂いで目が覚めると手足の自由が利かなくなっていた。背骨を通る神経が切断されたのだと医者の説明があった。剣に貫かれて命が助かっただけでも運がいいと言われた。首から下が自分の物ではなくなっているのに、運がいいものか。

途絶えたのだ、俺の求めていた人生は。

朝ご飯を若い看護師が運んできた。無言でテーブルに料理を移してベッドをリクライニングさせる。この女は世話係だ。粗雑な仕事をしない真面目な性格だったが、温度を一切感じなかった。仕事と割り切っている態度だ。

目を覚ました日から二、三週間が経つただろうか。食事を済ませたあと、されるがままに横たわるこちらを冷たい視線で見下ろしてきた。

「あの銀行強盗の首謀者なんですよね」

「そうだ、と返す。」

「銀行を出るとき、猫背のお年寄りを転ばせましたよね」

「ああ、あの邪魔なババアか。結局あいつの証言から計画が崩れたんだよね」

「それ、私のおばあちゃんなんです」

「女が伏し目がちになった。」

ああ、だからか。犯罪者を相手にしているという距離ある態度以外にも彼女にはなにか一つ他の感情が載っているみたいだったのだ。「一ヶ月に一回楽しみにしてる生け花教室へ行く途中だったんです。あなたに蹴られた拍子に腰の骨を折って、いまま寝たきりです。もう歳だから治りにくくて、生涯歩けないかもしれないって先生が言っていました」

「そりゃ悪かったな」

「悪かった、ですって？」

彼女の瞳が開かれる。隣のベッド脇に置かれた果物ナイフを手にした。真新しくよく切れそうな刃がぎらついている。

「一生よ、一生歩けないのよ。おばあちゃんがどれだけ生け花教室を楽しみにしてたと思うの」

「知るわけがないだろ。それに生け花なら家でもできるんじゃないのか」

切っ先が近づいてくる。俺を殺せる間合いにあった。

声を荒げる女。

「教室に集まった友達と一緒にの方が楽しいに決まってるでしょ！

余生の楽しみを奪う権利が、あなたにあるの！？」

「あー、つまりなんだ。殺すのか？ 刺したければ刺せばいい、気の済むまで。見ての通り俺は全身不随だ」

「できないと思ってるんでしょ」

「いいや」

「刺せば私もあなたと同じ犯罪者。目撃者の多いここじゃ、すぐに誰がやったかなんて分かる。だからあなたはできないと思ってるんだわ」

「頬を搔きたい気分だ。俺にどうしろってんだ。構わないからやれって言ってるんだ」

「読めたわ。あなた、そうやって自己犠牲になることで罪が償えると思ってるんでしょ。法律が許しても、私はそう簡単には許してやらないんだから」

「今度は頭を搔きたい気分だ」

「馬鹿にしないでよ。私、本気よ」

俺は溜め息する。

普通はこうなのだ。一線を越えるか越えないかは隣接していて容易いようで普通は踏みこめない領域。直前でブレーキがかかる。この女が犯罪者になるのは、よっぽどの事態が発生したときだろう。

「お前は一つ勘違いをしてる」

「なによ」

「関係ないんだ、法律もお前も。誰に罪を償おうと過去にしてしまった事实は拭えない」

彼女は戸惑ったようだった。

「じゃあ犯罪者は一生犯罪者のままだって言うの」

「それは俺を殺してからゆっくり考える」

「もったいぶらなくなつていいじゃない」

「脳みそあるのか、お前」

女がむっとする。

他にもぎゃーぎゃー喚いていたが聞こえない。そのうちどこかへ行ってしまった。目を閉じて外から届くツクツクボウシに耳を澄ます。

俺も考えているのだ、おそらくこれからもずっと。少なくとも分かっているのは、償うとか償わないとかそういう問題ではないという点と。

こうやって悩み考え続けるのが正解に最も近い気がした。

>了<

## 「刃中の羽虫」改稿部（後書き）

先週に引き続き、今回も2話同時更新でした。

まずは、ここまで読んでいただきありがとうございますm（ ）（

m

こんなに長いものを最初から最後まで読んでくれた方がいるかどうか分かりませんが。

なにはともあれ、これにて最終話となりました。

少しでも楽しんでもらえたなら幸いです。

ジャンルが「推理」となっているので、もしかしたら期待外れに感じた方も多いかと思われます。

この作品で目指したのは「サスペンス」であり、正確に言えば推理物ではありません。

しかし「サスペンス」というジャンルはないようなので、一番近い「推理」への投稿としました。

純粋な推理を期待した方には申し訳ないです。

ただし、広い範囲の方々へ楽しんでもらえるように意識して書きました。

作中で読者の方がハラハラドキドキの不安に駆られたなら、作品として大成功と言えます。

そして読後に心の奥へなにかが残ったなら、それもまた成功だと言えます。

いい意味でも悪い意味でも、もしなにか僕へ訴えたいことがあれば、ぜひぜひ感想・意見・評価などコメントをお寄せください。

一言でも大歓迎です。

当ページの前書き部分にもある通り、コメントする手段は問いませ

ん。  
矢文とかでなければ……。



返事が必要な場合は、こちらからコンタクトをとれる方法でお願いします。

次作をこちらへ投稿するかどうかは、いまのところ予定はありません。

しかし、機会があれば掲載させてもらおうかと思っています。

そのときは、よろしくお願いします。

それでは、また。

<とびるゑ>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4411f/>

---

僕の犯罪者記録

2010年11月26日15時40分発行